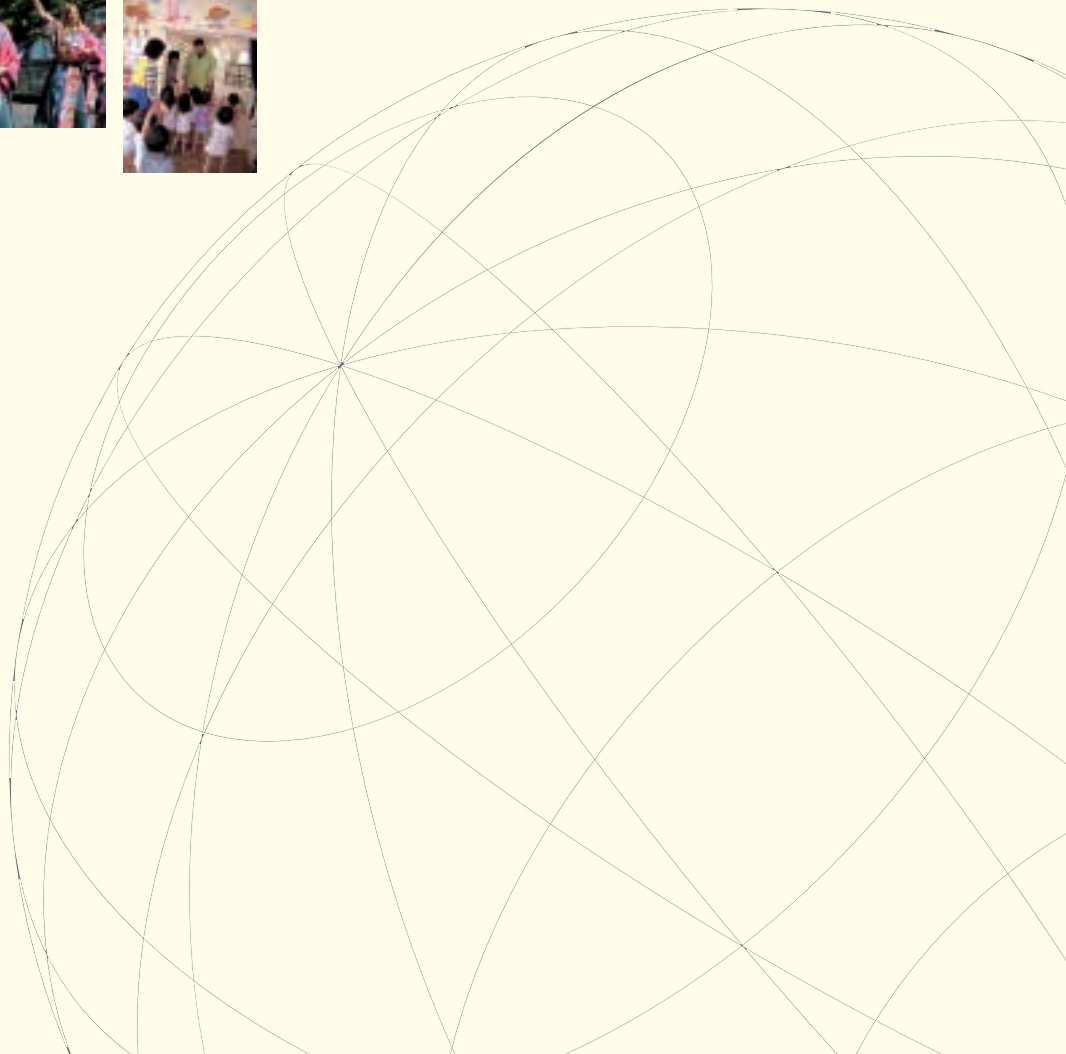




懸け橋 そして未来へと

～北海道の国際交流・国際協力事例集～



懸け橋そして未来へと

～北海道の国際交流・国際協力事例集～

はじめに



社団法人 北方圏センター
会長 南山 英雄

国際化時代、グローバル化時代の到来に伴って、国同士はもちろんのこと、国の垣根を越えて地域同士が直接結び付く国際交流・協力事業の展開の必要性が語られて久しいものがあります。現に道内の各自治体や民間の国際交流団体は、地域の持つ特性、歴史、経済、産業、人的つながりなどを生かしつつ、さまざまな工夫を凝らして国際交流・協力活動に取り組んでいます。

しかしながら、景気の停滞、地方自治体の財政難などから、国際交流関係の経費削減、関連事業の縮小といった“逆風”が吹いているのも事実です。

こういった状況の中で地域の国際交流・協力事業の現状がどうなっているかを知り、今後どうあるべきか—を考えることは、大きな意味があると思います。

(社)北方圏センターが(財)北海道市町村振興協会のご協力も得て、本書を発刊したのは、この問題意識の上に立ったものですし、ややもすれば横の情報不足に陥りがちな現状などを改善する一助になれば、との願いも込められています。

本書で取り上げた事例は道内45市町村で、海外と姉妹友好都市提携を結んでいる道内73市町村の6割強に相当します。時間的制約などからすべての事例をカバー出来なかったのは残念ですが、道内市町村の国際交流・協力事例を調査し出版するのは、(社)北方圏センターとしてもこれが初めてのことです。

本書では逆風を超えて地域からの国際交流の生き生きとした“発信”例や苦悩しながらも地域住民が支え続ける事例、さらには、経済、産業交流へと発展する事例など、さまざまな具体的な活動と課題を紹介しています。

単なる交流から積極的な協力へ—の時代の要請もあります。本書がそれぞれの地域の国際交流・協力の取り組みに、何らかの参考になれば幸いです。

2005年11月

CONTENTS



道 央

石狩管内

札幌市	魅力と活力が生み出す北方圏の拠点都市	4
江別市	「海を越えて、時を超えて、絆はますます強く」をモットーに	9
千歳市	民間が支える「世界に開かれたマチ」	12
北広島市	「青年よ大志を抱け」の交流文化都市に	15
石狩市	NPO法人が取り組む新グローバルシティー	18
当別町	“伊達の町”で共存する「スウェーデン」	23

後志管内

小樽市	転機迎えた姉妹都市交流	26
倶知安町	豪州につながった「東洋のサンモリッツ」	29
余市町	ロマンスが包み、育て、そして現在に	33

空知管内

岩見沢市	米中両国との心通う出会い	37
芦別市	「赤毛のアン」に託したマチ再生	40
滝川市	「社団法人」が主役で進める多彩な活動	43
深川市	「ひとは宝物」を官民一体で推進	47
奈井江町	「福祉」が懸けた「友好の橋」	50

胆振管内

室蘭市	民間が「核」になって広がる交流	53
苫小牧市	国際港湾都市の特性を生かして	56
登別市	「ふれあい交流都市」への多様な試み	59
壮瞥町	世界に“発信”された「YUKIGASSEN」	63
白老町	「企業」から「町ぐるみ」へ	66

日高管内

静内町	サラブレッドに乗せた「若者の夢」	69
-----	------------------	----

道 北

上川管内

旭川市	世界に向けた「交流拠点都市」に	72
士別市	サフォークで紡ぎ出した「まち再興」	76
名寄市	市民が誇る多彩なアイデア	79
上川町	アルバータ州との姉妹都市第1号	83
美深町	「壁画交流」が象徴する心の絆	86

留萌管内

留萌市	積極的に海外とのつながりを模索するマチ	89
遠別町	町民の願いは「子供たちのために」	92



■ 宗谷管内

稚内市	日口友好最先端都市への道	95
猿払村	大海難の悲劇が灯した友好の絆	98

道 東

■ 網走管内

北見市	民間が支え、育てる国際感覚	101
網走市	北方圏の歴史に根差し、広がる輪	104
紋別市	多彩な姉妹都市・学術交流、そしてキーワードは<流氷>	107
常呂町	「カーリング」—小さな町の大きな挑戦	110
遠軽町生田原 (旧生田原町)	「おもちゃ探し」が結んだ道内初の日仏姉妹都市	113

■ 十勝管内

帯広市	豊かな土壌に咲く活発な活動	116
鹿追町	花開いた「篤い親睦」の輪	120
広尾町	サンタランドのまちづくり	123
池田町	「出会い ふれあい 個性豊かなふるさと」に	126
陸別町	現在に生き続ける「チャレンジ精神」	129

■ 釧路管内

釧路市	釧路湿原が「国際化」に一段と拍車	132
厚岸町	よみがえった「150年前の海難」	136

■ 根室管内

根室市	北方圏国際交流交易拠点都市を目指して	139
-----	--------------------	-----

道 南

■ 渡島管内

函館市	「ひと、もの、情報の国際交流拠点都市」に	142
七飯町	「世界を結ぶ北緯42度の里」づくり	148

■ 檜山管内

せたな町瀬棚区 (旧瀬棚町)	親子二代がはぐくむ日米の絆	152
-------------------	---------------	-----

資 料

■ データ集	155
--------	-----

魅力と活力が生み出す 北方圏の拠点都市

グローバル・パートナーシップへの 幅広い取り組み

道内唯一の政令指定都市、文字通り“道都”として巨大な機能を持つ札幌市は、道内の他地域にはない国際交流の豊富な機会と場に恵まれ、それ故に、果たさねばならない大きな役割を担わされているといえる。

1869年（明治2年）開拓使の置かれた札幌は、米国の農務長官だったケプロン氏や札幌農学校教頭のクラーク博士らの名前を挙げるまでもなく、多くの外国人によってその開拓の礎が築かれた。その経緯から見てもそもそもが、理屈を超えた「国際交流都市」だったといっている。

現在では、米国、ロシア、韓国、中国、オーストラリアの5カ国の総領事館、領事館、ノルウェー、カナダなど15カ国の名誉領事館があり、在留外国人も8千人を超える。

さらに、社団法人北方圏センターといった全道的な国際交流団体に加え、民間の国際交流団体も道内全体の約3割に当たる200団体近くが札幌市に集中しているなど、望むと望ま

ざるとにかかわらず、北海道の国際交流の中心都市であることはいままでもない。

そういった自覚の基に札幌市が2002年（平成14年）10月にまとめた札幌市国際化推進プランは69ページにのぼり、内容は多岐にわたっている。

北方圏の拠点都市として、「グローバル・パートナーシップが魅力と活力を生み出す世界都市さっぽろ」がその基本理念で①グローバル化に対応するとともに、まちづくりの手段として国際化推進施策を進める②交流—創造—発信の循環を作るため、国内外の市民、企業、行政などが共通の目的に向かってグローバル・パートナーシップを築く③北方圏交流の実績を生かし、北方圏と東アジアを結ぶ交流拠点を目指す—といった7つの柱を据えている。

推進プランは国際化の具体的な施策ではなく、基本綱領的なものだが、グローバル時代の国際化、国際交流のあり方を考える、さまざまな視点を提供している。これがどう実行されていくか、は注目していいだろう。



ポートランドとの姉妹都市提携45周年を記念して開かれた両市民の交流風景。道内で第1号の姉妹都市だけに和やかな雰囲気だ＝2005年2月、札幌市のモエレ沼公園のガラスのピラミッドで

全国でも注目される札幌方式 —「札幌国際プラザ」

1972年（昭和47年）に冬季オリンピックが開催され、世界的にもその名を知られたSAPPOROだが80年代、政令指定都市を中心に全国の主要都市が経済活性化、国際化の波に乗って国際会議の誘致などを図る動きを本格化させた中で、札幌はむしろ出遅れ気味だった。

そこで札幌市が注目したのは87年（同62年）に任意団体として発足し、89年（平成元年）自治省から地域国際化協会の認定を受けて、国際交流事業を進めていた札幌国際交流プラザ。

行政と市民を結び、幅広い国際交流事業を市民サイドから組織的に運営するため91年（同3年）、北海道運輸局、北海道より財団法人設立の許可を受けて「財団法人札幌国際プラザ」として本格的な再スタートを切った。

常勤、非常勤職員合わせて70人近い規模で、大都市の自治体ならではの“実戦部隊”への衣替えとの言い方も出来るが、それだけではない。

同プラザの目的は、「札幌の有する歴史、文化、経済その他の地域的特性を生かし、札幌で開催されるコンベンション事業などを推進するとともに、国際交流の促進などを図り、もって地域経済の活性化及び文化の向上並びに国際相互理解の増進に資すること」とうたわれているが、この言葉の中に設立当時、「札幌方式」として全国でも注目された特徴が明確に示されている。

札幌市と同プラザの国際交流の基本理念は国際交流（Communication）、コンベンション（Convention—集会、会議など）、市民参加（Citizen）の頭文字を採った3C。

単に国際交流だけでなく、札幌天神山国際ハウス、札幌コンベンションセンターの運営などを通じ、コンベンション事業の推進、さらには東京、大阪に次いで全国に3つしかない世界貿易センター・サッポロによる経済交流事業など実に幅広く、「札幌方式」といわれるゆえんとなっている。

また、組織の名称を通常の「国際交流協会」ではなく、人々が大勢集う広場という意味の「プラザ」としたのは、市民（Citizen）へのこだわりがあったからだという。

その意気込みもあってか、札幌時計台の向かいにある同プラザには年間約7万人、うち外国人約2万人もが訪れる文字通りの「国際交流のプラザ」に成長した。

広範囲な活動

同プラザの活動、事業は多岐にわたっており、具体的に紹介するのは難しい。

大きく分けると、①外国語の会話を楽しむフリートークなどの市民交流プログラム②国際学術会議開催などのコンベンション事業③札幌を舞台にした映画、テレビ番組などへのさ



外国人と日本人が集い、語り合う国際都市ならではの交歓風景
＝2005年1月、札幌国際プラザの交流サロンで

まざまな撮影支援をするフィルムコミッション事業④世界貿易センター・サッポロ事業⑤市民団体が行うコンベンションなどへの助成、「プラザだより」発行などの各種広報・管理事業⑥外国人の調査、研究、会議などのための宿泊施設「札幌天神山国際ハウス」、札幌コンベンションセンターの管理運営—などとなっている。

札幌市と一体となって行うものも多いが、国際交流関連事業の主催、後援は年間300件を超えている。その市民交流事業をソフト面で支えているのが、ボランティア活動だ。

日本人の家庭、暮らしぶりを知ってもらうため、外国人を自宅に泊めるホームステイ制度は実は札幌市が1968年（昭和43年）に全国に先駆けて、「登録家庭制度」を採用することでスタートさせたという輝かしい歴史を持っている。

2004年（平成16年）3月までに135カ国、約6千人もの外国人が、この制度の恩恵を受けている。同プラザへの登録家庭数は約240家庭だが、「東京などから依頼が来るほど、アットホームでオープンと評判が高い」（同プラザ）という。

ボランティア活動のもう1つの柱が、外国語ボランティア制度。20カ国語、約1千人が登録しており、国際会議やイベントなどで活躍、ホームステイ制度と合わせ、国際都市・札幌の目に見える“顔”として、大きな下支えの役割を果たしている。

さらに特徴となっているのが、札幌姉妹都市協会、札幌圏大学国際交流フォーラムなどの事務局をも抱えていることだろう。

札幌圏の大学23会員校を数える大学国際交流フォーラムは大学間の国際交流に関する情報交換、研究の促進を図り、学術面での国際交流を目指す道都ならではの活動といえる。

「札幌方式」のもう1つの特色として挙げられるのが、世界貿易センター・サッポロ（WTC）の存在だ。中小企業の国際化と活性化を支援し、経済レベルでの都市交流を促進するのが目的で1996年（同8年）、東京、大阪に次ぐ国内3番目の世界貿易センターとして同プラザ内に開設された。



「美女と剣士」(?) - 若者の和気相合とした国際交流
=2004年冬、札幌天神山国際ハウス前で

①貿易情報の提供②WTCカレッジの開催③ビジネスイベントの紹介④業務サポート—などの事業を展開しているが、外国企業の道内進出、地場企業の海外への業務拡大など、北の国際ビジネス活動拠点作りを目指す具体的な活動として今後の成果が期待されている。

ユニークな姉妹都市協会

提携の理由はそれぞれだが、札幌市はポートランド(米国)、ミュンヘン(ドイツ)、瀋陽(中国)、ノボシビルスク(ロシア)の4市と姉妹都市提携を結んでいる。

5年を節目に公式使節団が相互訪問し、親善を確認し合うのは共通のイベントで、2004年(平成16年)にポートランド市と45周年、05年に瀋陽市、ノボシビルスク市とそれぞれ25周年と15周年、07年にはミュンヘン市と35周年—となっている。

札幌市の4つの姉妹都市との交流は周年事業だけでなく、さまざまな交流が札幌市、札幌国際プラザ、姉妹団体などによって役割分担されて行われている。しかし、姉妹団体(学校、学術交流団体を含む)だけでも、ポートランドとは98団体、ミュンヘンとは11団体、瀋陽、ノボシビルスクとは各16団体、合わせて141団体にもものぼる。

こういったことから、姉妹団体などから複層する姉妹都市提携事業や団体間の調整、総合情報の共有などの要望もあって、1986年(昭和61年)に札幌姉妹都市協会が誕生し、97年(平成9年)に同プラザに事務局を移した。

同協会は市民レベルでの交流推進を目的にし、①英語、中国語、ドイツ語、ロシア語による弁論、暗唱大会②市民への姉妹都市訪問助成③姉妹都市フェスティバルの開催など多彩

な活動に取り組んでおり、全国でもユニークな「札幌方式」となっている。

米・ロ・独・中の4カ国と姉妹都市提携

【ポートランド市(米オレゴン州)】

地勢、風土、歴史などの共通性から1959年(昭和34年)に調印された北海道では最も古い姉妹都市提携。札幌市だけでも姉妹団体は98団体(うち学校関係38団体)もあり、また、ポートランド側の受け入れが姉妹都市協会という完全な市民ボランティア団体。この交流スタイルが評価され、たびたび「世界姉妹都市コンテスト」で表彰されている。

2004年(平成16年)6月、提携45周年事業で84人の親善訪問団がポートランド市を訪れ、上田市長は「行政が中心になる分野もあるが、国際交流などの分野では市民こそが中心になる方が、おもてなしの心が直接伝わり、交流の実が上がると思う」とその感想を述べた。

その返礼として05年2月にはポートランド側から親善訪問団が来札。さらに04年の45周年を記念して、札幌市内の女子中学生がポートランドでソフトボールの親善試合を行ったことから、05年8月にはポートランドから女子高校生を中心にしたソフトボール・チームが来札、ホームステイをしながら5チームと親善試合をするなど、交流はさらに広がりを見せている。

【ミュンヘン市(ドイツ)】

歳末に札幌の大通公園に登場するイルミネーションで彩られた約4メートルのクリスマスツリー。提携30周年を記念して02年から始まった「ミュンヘン・クリスマス市 in Sapporo」はドイツのクリスマスの飾り、民芸品、ワインなどを売る多くのブースも特設され、すっかり札幌の冬の風物詩になった。

04年のクリスマス市には約38万人もの人々が「札幌のミュンヘン」を楽しみ、改めて姉妹都市の“温もり”を実感していた。

両市の縁結びはオリンピック。1965年(昭和40年)に両市が夏と冬のオリンピック開催都市と決まったことから交流が深まり、72年(同47年)のミュンヘン・オリンピックの際に姉妹都市提携の調印となった。芸術、文化、スポーツなどのほか環境分野での交流も活発化している。

【瀋陽市(中国・遼寧省)】

79年(同54年)「中日友好の船」による瀋陽市訪問団の来札がきっかけ。瀋陽側からの提案で翌80年に姉妹都市提携の運びになった。

98年(平成10年)には新千歳—瀋陽間で直行便が就航し、医療、上下水道、都市建設、防災などの分野で研修生の受け入れや技術者の派遣など交流は厚みを増してきている。



すっかり札幌の冬の風物詩となった「ミュンヘン・クリスマス市 in Sapporo」=2004年12月

【ノボシビルスク市（ロシア・ノボシビルスク州）】

74年（昭和49年）札幌で開催された「大シベリア博」にノボシビルスク市が参加したのが契機になり、芸術、スポーツ、青少年交流など市民レベルの相互訪問などの交流の拡大の結果、90年（平成2年）に姉妹都市関係が樹立された。

音楽、バレエ、演劇分野での交流に加え、「札幌市とノボシビルスク市との交流に関する覚書」に基づき、10団体が友好団体提携、6つの学術機関が学術交流協定を結んでいる。

着実な成果挙げる「世界冬の都市市長会」

海外から札幌市への姉妹都市提携希望は相当数に上るが、これとは別に利害の一致する各都市と実質的な交流を進めようとの方針から82年（昭和57年）、札幌市が提唱し実現したのが北方都市会議だ。

第1回会議は6カ国9都市が参加して札幌で開かれた。「冬は資源であり、財産である」をスローガンに、気候、風土が類似し共通の悩みを抱える北方都市が、快適な都市を創造するために知恵を絞り合おうというもの。

瀋陽、モントリオール（カナダ）、青森市などで2年に1度「暖かな冬の都市」「未来を求めて北へ」といったテーマを設けて定期開催している。

会議の名称は北方都市会議から北方都市市長会、「世界冬の都市市長会」へと変わってきたが、2004年（平成16年）のアンカレジ（米国）の会議が11回目、会員都市は11カ国18都市となった。

ただ単に、市長が顔を合わせるだけでなく、雪対策、観光促進などの小委員会を設けて、さまざまな課題について意見を交換。その結果、街路樹に常緑樹、省エネ対策としてナト

リウム灯の採用、公園に木製遊具の設置、ロードヒーティングの拡張などの具体策が街づくりに生かされてきている。

また、1988年（昭和63年）のエドモントン（カナダ）での第3回会議から、冬対策の機材、製品などを展示する「冬の見本市」や、さまざまな分野の専門家、学術研究者、市民が冬のライフスタイルや街づくりのアイデアを発表する「冬の都市フォーラム」も合わせて開催されている。

「冬」という共通の課題を持つ横断的な会議、実質的な国際交流として、世界的にも注目を集めている。

人が集う国際コンベンション都市を目指して

札幌市国際化推進プランの中で、①オープンで温かい市民のホスピタリティ②自然の豊かさと都市機能との両立③北方圏交流で培った寒冷地技術や生活文化の蓄積—の3点を国際化を推進していく上での札幌の長所、優位性としている。

加えて、札幌冬季オリンピック、雪まつり、世界冬の都市市長会の開催などで「サッポロ」の名は世界でも有名なものになった。

これを下地に「世界が集う魅力と活力ある創造都市さっぽろ」の基本目標が掲げられ、その核として国際コンベンション事業が重きを持つてきた。

温かい集い（コンベンション）を通して、国際的な経済交流や文化交流を促進するだけでなく、人々が魅力を感じる都市空間・環境を整備し、これらを通じて創出された札幌の魅力を世界に向けて発信する、という狙いだ。

合わせて会議への人々の参加が経済の活性化にもつながるという実利面での効果も期待できる。

その施設として①札幌天神山国際ハウス（1990年開設、地上3階建て延べ1千668平方メートル）②国際協力機構（JICA）札幌国際センターに隣接し、スポーツ施設もある札幌国際交流館（96年開設、地上3階建て延べ3千723平方



「世界冬の都市市長会」と合わせ開かれている国際冬の見本市=2004年2月、米アンカレジ市で

メートル) ③単身者用宿泊室80室、世帯用宿泊室20室を備えた札幌留学生交流センター(2000年開設、地下1階地上11階建て延べ5千23平方メートル) ④札幌コンベンションセンター(03年開設、地下1階地上3階建て延べ2万300平方メートル)などが、次々と建設された。

札幌天神山国際ハウスは国内外の研究者などに宿泊施設を提供するもので、オープンから04年度までの宿泊者数は約80カ国延べ約3万8千人にのぼっている。札幌国際プラザが管理運営に当たっていることもあって、各種講演会、着付け、茶道講習などを開催し文字通り国際交流のメッカになっているが、最近になって宿泊者数の減少もあって、施設のあり方の再検討も話題に上っている。

が、国際コンベンション都市の中核として大きな期待を掛けられているのが、札幌コンベンションセンターだ。

国内のコンベンション施設の草分けともいえる1989年オープンの幕張メッセ(千葉県)にこそ及ばないものの、2千500人収容の大ホール、6カ国の同時通訳が可能な700人収容の特別会議室などさまざまな施設を備え、国際会議開催にも十分な資格を持っている。

オープニング時の「国際測地学・地球物理学連合総会」には77カ国から約5千人が参加し、コンベンション都市として順調なスタートを切った。

札幌市はこのほか、国際スキーマラソン大会、宮様スキー国際競技大会、札幌ドームを使ったサッカーのワールドカップ大会、2007年(平成19年)開催予定の国際スキー連盟(FIS)ノルディックスキー世界選手権大会、毎年開催されている世界の若手音楽家の育成を図る国際教育音楽祭「パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)」—などスポーツ、文化、芸術面などでの国際交流の機会、場に事欠かない。道都に課せられた“宿命”とも言えるかもしれない。

同時に外国人の国際交流員だけで5人、外国語指導助手も12人—と道内他都市とは比較にならない予算規模、各種施設、催し、豊富なボランティア人材など札幌ならではの要素も多い。

しかし、その札幌にも財政難の波が押し寄せてきていることも確かだ。札幌国際プラザが1992年(同4年)に同プラザが入居しているビルの1階にオープンさせた「プラザi」は、

2005年3月末で閉鎖の憂き目に会った。

「プラザi」は職員とボランティアが協力で英語、中国語、韓国語などで訪れる外人観光客にさまざまな情報を提供するほか、札幌在住の外国人の生活相談にも応じるなど同プラザの基本理念を象徴するような「場」で、日本人も含め年間3万人もの利用があった。

だが、札幌市から同プラザへの補助金が05年度、前年度より約4千500万円少ない3億6千850万円に減額されたことから、1カ月の家賃だけでも100万円もかかる「プラザi」が立ち行かなくなった。同じビルにある3階の同プラザで業務を継続しているが、札幌でも財政難による影響は例外ではないことを物語っている。

こういったことから、他の市町村でも「札幌は特別だから…」と見るのではなく、可能な面を探り、あるいはすぐには実行できなくても、そのアイデアを参考にし、どこかで生かす材料にする努力は従来以上に求められているともいえる。

長年、国際交流事業を担当してきた札幌国際プラザの後藤道・市民交流部次長は「札幌には大きくなったことによるジレンマもある。国際交流は結局は人と人の交流、心の交流が基本だ。そのマチに合った国際交流がそれぞれにあるわけで、むしろ、結果が実感できる交流をうらやましく思うこともある」と話している。



札幌コンベンションセンターで開かれた第2回国連軍縮札幌会議＝2004年7月

札幌市

人口：約186万8千人 面積：1,121.1km²

<http://www.city.sapporo.jp/city/>

1869年(明治2年)の開拓使設置以来、札幌本府の建設が始まった。1972年(昭和47年)にアジア初の冬季オリンピック札幌大会を開催、同時に政令指定都市となった。現在10区制。政治、経済、文化など各分野で道都といわれるのに相応しい中心都市。

雪まつりに続いてよさこいソーラン祭りも世界的なイベントになってきた。

国際交流の問い合わせ先

財団法人札幌国際プラザ

札幌市総務局国際部交流課

TEL(011)211-3670

TEL(011)211-2032

「海を越えて、時を超えて、絆はますます強く」をモットーに

「国際交流の窓」開いた 米グレシャム市との姉妹都市提携

江別開基100周年を翌年に控えた1977年（昭和52年）、江別市とグレシャム市（米オレゴン州）は姉妹都市提携に調印した。提携に関する盟約書では「相互に産業、経済、文化の交流を図るとともに、両市の友好を深めることを念願し、…」とうたわれた。

結果的に100周年のプレ記念事業の形になったが、もともとこの提携話はグレシャム市側から持ち込まれたものだった。

札幌市の姉妹都市・ポートランドと隣接するグレシャム市在住の日系2世のヘンリー・加藤氏が75年、通訳として札幌市を訪れた際、グレシャム市から姉妹都市候補探しを依頼されていた。江別市をぶらりと見学した同氏は、共に札幌、ポートランドのベッドタウンで人口、風景も似ている江別市に白羽の矢を立てた。

その帰国報告を受けたグレシャム市長が3カ月後には江別市に姉妹都市提携の“プロポーズ”をするという、すばやさだった。

寝耳に水だったのが江別市側。当時、国際交流の経験もないし、心の準備もない。さまざまな経緯を経て、機が熟した2年後にようやく正式調印の運びとなった。

札幌とポートランドの姉妹都市提携が縁結びともいえるが、江別市にとっては世界に向けて直接窓を開く、予期せぬ

きっかけになったといえる。

市民ぐるみの国際化と新たな課題

江別市側では提携時に市、学校、企業、経済団体、社会団体など60を超える団体、企業などから成る「江別・グレシャム市提携委員会」を発足させ、高校生の派遣など姉妹都市交流の窓口となった。また、市民の中から自発的に「グレシャム会」も結成され、民間レベルの交流もスタートした。

市同士の相互訪問はいうまでもないがその後、中、高校生の相互派遣、姉妹校交流など親善の輪は確実に広がっていった。

小学校では中央小など4校、中学校では野幌中1校がそれぞれグレシャム市の学校と姉妹校提携を結び、作文、絵画の交換、インターネットを活用した情報交換、相互学校訪問などの交流を行ってきた。

提携の盟約書で「相互に産業、経済、文化の交流を図る」ことがうたわれたが、97年（平成9年）の提携20周年記念の際に両市長が相互訪問し経済交流を促進することで合意した。

その具体化の一つが、江別市が2002年（同14年）にオープンさせたグレシャム市のアンテナショップ。

江別市の仲介で2000年に、まず市内にある特定非営利活動法人（NPO法人）「やきもの21」とグレシャム市のボイドコーヒー社が商品販売契約で合意。さらに江別市が取得し、改修



小川江別市長を表敬訪問したグレシャム市の中学生たち
=2004年2月

したJR野幌駅近くの旧レンガ工場で02年、「やきもの21」の管理運営によって開店にこぎつけた。

アンテナショップ内では、グレシャム市のFM放送局KMHDの音楽を流し、特産のポイドコーヒー、ジャム、絵はがきなどの販売のほか、パソコンによるグレシャム市の情報提供なども行っている。

姉妹都市のアンテナショップを自治体が率先して設置するのは、道内では極めて珍しいケースといえる。

具体的な経済効果となると答えはまだまだ先のことだが、1990年(同2年)以来毎年開催され、今や江別市の名物となっている「えべつやきもの市」にはグレシャム市の陶芸家が毎回コーナーを設けるなど、文化交流の輪は市民生活の中にも広がってきているといえる。

が、多くの自治体同様、姉妹都市提携が一つの曲がり角を迎えているのも確かなようだ。グレシャム市では企業の撤退などで経済的に難しい局面を迎えているほか、江別市でも財政問題を抱え、国際交流関連の予算付けが年々厳しくなっているのも現実だ。

都市提携委員会が市の助成で実施している高校生各2人の派遣、受け入れ事業(旅費の3分の1を補助)は継続されているが、95年度からの中学生相互派遣事業は受け入れについては継続するものの、派遣に関しては財政上の理由で2003年(同15年)度から中止に追い込まれた。

市民交流としてグレシャム市への修学旅行でホームステイを行ってきた高校が英語科の廃止で行事自体が無くなるなどの事例も出てきている。

これには単に経済的な問題だけでなく、提携当時国際交流を支えてきた市民団体の会員の高齢化、交流内容のマンネリ化、グローバル化による姉妹都市提携の持つ意味合いの変化—などさまざまな要因が考えられる。

こういった問題をどう克服していくか—同市も「経済交流の維持、発展はもちろんだが、もう一度教育、文化面での交流を中心に原点に戻って再構築したい」としている。

もう一つの国際交流 —コロンビア研修生受け入れ

グレシャム市との姉妹都市提携とは別に、江別市の国際交流活動に新たなエネルギーを与えているのが、国際協力機構(JICA)との連携による南米コロンビア共和国からの研修生の受け入れだ。

2003年から07年までの5年間、地域開発や産業振興分野に携わっている国や地方自治体の公務員10人を毎年1カ月間受け入れ、行政の研修だけでなく、ホームステイなどで日本の生活、文化を実体験し、市内の小学校も訪れ交流を図る—といった中身の濃い内容だ。

しかも、市内には約40人の“ラテン”を愛する人々が作る



江別市最大の国際交流イベント「みんなおいでよ! 2004江別 世界市民の集い」のひとコマ=2004年10月

「Club Latino」があり、市民のバックアップ体制も十分。市内で最大の国際交流イベントである「みんなおいでよ! 江別 世界市民の集い」に研修員たちも参加した。5年間の研修結果を受けて、新たな国際交流として将来どういう花を咲かすか、が注目されるどころだ。

分厚い市民団体の活動が 新たなエネルギーに

1996年(同8年)同市は東野幌に江別国際センターを設置した。その管理運営を委託されているのが江別市国際交流推進協議会だ。市からの補助金320万円に加え、加盟している江別市民国際交流協会、江別日中友好の会、大学、高校など20数団体の会費、外国語教室の授業料収入などで自主運営に当たっている。

グレシャム市との姉妹提携時、国際交流に未体験の江別市だったが、その後の国際交流の広がりから市民団体が次々と誕生、その結果、各団体の意思疎通、共通する活動の場として同センター設置の強い希望によって実現したもので、当時、全道的にも珍しいものだった。

これを見ても分かるように、姉妹都市提携による国際交流がひとつのきっかけとなり、さまざまな民間団体がそれぞれに国際交流の根を広げ、さらに“連帯”することで新たな樹を育てている—のが江別の特徴といえる。



学校訪問して子供たちと交流を楽しむコロンビアの研修員たち=2003年

具体的には、同推進協議会は市民向け英会話、外国人と市民が交流する「おしゃべり広場」、「江別の冬を楽しもう（スノーカーニバル）」など多彩な事業、イベントに取り組んでいる。

中でも毎年10月に開く「みんなおいでよ！江別 世界市民の集い」はハロウィン、サルサダンス、韓国・南米料理などそれぞれのお国自慢を通して、市民と外国人の交流を図ろうという江別では最大の国際交流イベント。約300人の市内在住外国人も楽しみにしているという。

同推進協議会の中核となっているのが、120人以上の会員数を誇る市内最大のボランティアの国際交流団体「江別市民国際交流協会」だ。

93年（同5年）の発足以来、情報・広報、ホームステイ、通訳・翻訳、交流、支援の5つの部を持ち、各部がそれぞれ英語による中学生暗唱コンテスト・弁論大会、パーベキュー・パーティーなどの幅広い活動を行っている。

同じく93年に発足し、多彩な草の根の友好・親善活動を実施している「江別日中友好の会」は2003年（同15年）10月、日本語学科での教材不足に悩んでいた中国のハルビン師範大学に市民の寄付による辞典、文学全集など1万2千冊、CD千枚を寄贈、これらの活動が認められ(社)日本善行会より日本善行賞を受賞した。

また、グreshamのアンテナショップを管理運営しているNPO法人「やきもの21」は、国際交流を4つの活動のひとつに掲げているが、「えべつやきもの市」の運営も含め、そのユニークな活動に対して04年12月、北海道から04年度の「地域文化選奨」特別賞が贈られた。

このほか、文教都市を標ぼうする同市には4大学、2短大があり、酪農学園が14校、北海道浅井学園が7校、北海道情報大学が2校など海外の大学とそれぞれ姉妹校、友好交流を行っており、留学生の往来も含め国際交流のもうひとつの厚い基盤になっている。

姉妹都市交流などは確かにひとつの曲がり角に来ているかもしれない。高齢化などで活動を停滞しているケースもあるが、これら市民団体の新たな活躍は確実に江別の国際交流を下支えし、窓口を広げているといえる。

同市は通訳、ホームステイなどボランティア登録制度を設

けていないが、「英語なら江別市民国際交流協会、中国語なら江別日中友好の会、スペイン語ならClub Latinoがあり、可能な限り協力して頂け、大変心強い」（同市）と、根を広げてきた国際化の土壌の厚さに胸を張っている。

全小中学校に広がる「生の英語教育」

同市には国際交流員1人のほかに、英語指導助手（AET）が2人いる。3人ともたまたま米国のポートランド、グresham両市の出身だが、国際交流員は市民への「英語」の講習会、講演会、姉妹都市との交流のほか、在留外国人の生活相談にも乗っている。江別の特色は2人の英語指導助手が市内の全小中学校のほかに、2004年までに19小学校のうち13校で英語を教えている点。低学年は遊びやゲーム、中学年は挨拶や単語、高学年は物の名前や簡単な会話などを学ぶが、極めて上達が早いという。

同市では「中学に入った時に、小学校で英語の授業を受けている子とそうでない子との格差が大き過ぎて、問題になるほど」と指摘する。05年度には19小学校全部で実施に移され、他地域でもそう例のないケースといえる。

江別市勢要覧では「たゆまず続く交流と新たな友好活動。海を越えて時を超えて、絆はますます強く」が交流のキャッチフレーズになっている。単なる夢で終わらないような地道な努力が着実に続けられている、といいようだ。



小学校でも市内全校で英語指導助手による英語が授業に組み込まれている

江別市

人口：約12万4千人 面積：187.6km²

<http://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/>

1992年（平成4年）に初めて10万人の大台に乗った人口は、その後も札幌市のベッドタウンとして増加を続けている。石狩川、道立野幌森林公園を抱え、古くは野幌れんがで知られる「れんがのマチ」でもあった。戦後間もない1949年開学した酪農学園をは

じめ4つの大学、道立図書館、道立教育研究所のある文教都市に変ぼうしている。

国際交流の問い合わせ先
江別市企画政策部秘書課

TEL(011)382-4141

民間が支える 「世界に開かれたマチ」

国際交流協会に見る市民主導の活動

千歳国際交流協会は2004年（平成16年）11月にホームページを立ち上げた。冒頭あいさつで瀧澤順久会長は、「市民レベルでのさまざまな国際交流事業を、これからもみなさまとともに、大きく育ててまいりたい」と述べている。

このあいさつが、「もちろん行政主導もあるが、本来は市民主導のものを行政がサポートする形が望ましい」（千歳市企画部国際交流課）という千歳市の国際交流の特徴を端的に物語っている。

地方拠点空港として北海道の世界への玄関口となっている千歳市では、以前から民間レベルでの国際交流が盛んだったが、それを束ねるために1993年（同5年）、「ふるさと創生基金」を原資として設立されたのが同協会。事務所こそ市の国際交流課に置かれているが、千歳姉妹都市交流協会、日中交流市民会議、千歳ボランティア通訳クラブなど17の民間団体が参加し、幅広い活躍を続けている。

同協会が実施している助成事業だけでも①ボランティア活動②5人以上の語学研修団体③外国人との市民交流④教育活動⑤外国人による交流活動⑥留学生への研修助成⑦姉妹都市交流—など、対象は多様で、講師への謝礼、会場費、交流経費などさまざまな助成を行っている。

しかも活動は同協会設立に先立ち、国際交流をどうすべきか—について民間によってまとめられた答申内容が柱になっており、他では余り例のないきめ細かさを誇っている。

設立以来、ほぼ毎年実施している海外派遣事業もなかなかのものだ。普段、行くチャンスが少ない国を中心に1週間程度訪問して異文化に触れ、市民の国際理解を深めようというもので、同協会が旅費の7割を助成する仕組み。

過去の主な内容は、アンカレジ小学生姉妹都市派遣団、東アジア派遣団（マレーシア、シンガポール、中、高、大学生対象）、タイ・ベトナム研修（大学生、社会人対象）インドネシア研修（同）、中国研修（中学生対象）、中国長春市研修（高校生対象）など—。

2005年（同17年）1月の高校生インド研修には6人の募集に対して4倍の24人もの希望者があるなど、人気は相当なものだ。

もう1つ、同協会が主催する楽しいイベントに外国人との交流会がある。市内には約300人の在住外国人がいるが毎年

1回、もちつき、ソバ打ち、チーズ作りなどテーマを設けて会を開き、日本文化に触れながら市民との交流を図っている。

3つの姉妹、友好親善都市交流

【アンカレジ市（米アラスカ州）】

姉妹都市提携は36年前の1969年（昭和44年）にさかのぼる。アンカレジ市が国際親善都市連盟を通して姉妹都市相手を探しているとの情報がきっかけだが、当時、空路で欧米に行くにはほとんどがアンカレジ空港経由。同じ空港都市、軍隊・自衛隊の駐屯地があるなど共通点が多く、ある意味で姉妹都市になる必然性があったともいえる。

節目、節目に100人を超す友好使節団の相互訪問はもちろんだが、84年からはスポーツ交流野球使節団、その後は女子



千歳国際交流協会の招きで小学校訪問し、子供たちと給食を楽しむJICA研修員=2003年10月



アンカレジとの少年野球交流後、記念品を交換し合う子供たち



ちとせホルメンコーレン・マーチのスタート風景=2004年2月

ソフトボール、スケートスポーツ少年団などの相互訪問など交流の裾野は次第に市民参加型へと広がってきた。

野球交流をきっかけに92年（平成4年）には千歳小とサンドレイク小（アンカレジ市）が姉妹校提携をし、サンドレイク小では日本語で授業を受けるクラスすら出来たという。

空港まつりに、ミス・アンカレジが来日、笑顔を振りまくのも恒例になっているが、名実の伴った姉妹都市交流であることは間違いない。

【コングスベルグ市（ノルウェー）】

77年（昭和52年）、市内の国際交流団体「千歳国際クラブ」が歩くスキーを普及させる目的で「歩くスキーの集い」を開催、81年から本場ノルウェーでのクロスカントリースキー国際大会「ホルメンコーレン・マーチ」の名を借りて「ちとせホルメンコーレン・マーチ」と命名した。

以降、毎年駐日ノルウェー大使らが大会に参加、第10回大会を記念して86年（同61年）、ノルウェー側からの提案でコングスベルグ市との友好親善都市提携が実現した。スキーが取り持つ国際交流という点では、旭川市の「バーサーロペット・ジャパン」と類似している。

アンカレジ市との姉妹都市提携のきっかけが官主導型だったのと同じく、コングスベルグ市との友好親善都市提携は民間主導型が特徴といえる。

【長春市（中国東北部吉林省）】

2004年（平成16年）10月、長春市との間で結ばれた友好親善都市提携は、実に20年間に及ぶ民間交流の積み重ねによって産み出されたものだ。

旧満州国の首都で人口700万人を超える同市との関係は、

1980年（昭和55年）代の農業実習生の受け入れなどをきっかけに96年（平成8年）、農家の人が中心となって日中交流市民会議（藤本敬一会長）を発足させたことから始まる。

以来、97年の市民140人が参加した長春市への訪問団を含め、千歳市側から7回、長春市側から13回もの訪問団が相互に行き来し、親交が深まり、高校生のホームステイによる往来もスタートした。

こういった民間の熱意と実績に動かされ、山口・千歳市長も2004年（同16年）10月、千歳・長春市民交流事業「友好の翼」で100人を超す市民と共に訪中し、友好親善都市提携を調印した。

将来の観光、企業進出などの経済交流も視野に入れて長春市の方が熱心だったといわれるが、いずれにしても典型的な民間主導の都市交流。他都市にも大いに参考になるケースといえる。



民間交流が実を結んだ長春市との友好親善都市調印式。左側が山口・千歳市長=2004年10月、長春市で

空港が取り持つさまざまな“縁”

アンカレジとの姉妹都市提携も空港が取り持つ縁だが、この利点を生かし、さまざまな交流が広がっている。KLMオランダ航空の新千歳—アムステルダム線就航に伴って、スキポール空港のあるオランダのアムステルフェン市からエルムの木がプレゼントされたほか、不定期だが、関係者が相互に訪問することも始まっている。

学校間交流では「千歳小とサンドレイク小」の姉妹校交流はアンカレジとの姉妹都市交流の中で芽生えたもの。相互訪問によるキャンプや体験入学などのほほえましい関係が続いているが、PTAや町内会も加わった学校主体の交流だ。

1996年（同8年）に結んだ「桜木小とガラパン小（サイパン島）」の姉妹校提携は、日本航空の仲介で、ビデオレター、絵、民芸品などの交換が行われている。

千歳高は「米ジェイムズ・リバー高」のほかに、「大韓民国空港高」とも94年に姉妹校になった。同じ空港所在地の高校として、21世紀を担う国際人の育成が目的で、毎年相互訪問をするなど、活発な交流が展開されている。

臨空工業とコンベンション都市を目指して

「世界に開かれた国際交流都市」を目指す千歳市。その思考の中核となっているのは、いうまでもなく海外とつながる



同じ空港都市からやって来たミス・アンカレジと市内保育園児の交歓風景＝2003年10月

地方拠点空港を持つ空港都市としてのメリットだ。加えて、札幌、旭川と高速道路で結ばれ、国際コンテナ船が就航する苫小牧とも隣接、文字通り「空・陸・海」の交通ネットワークの要所となっている。

これを生かすために、広域的な国際ビジネスゾーン作りを目的とする北海道エアロポリス構想があり、空港周辺プロジェクトとして「千歳美々ワールド」や「千歳オフィス・アルカディア」などの高度な研究・ビジネス空間の整備が進められている。

また千歳科学技術大学を核にした産学官連携による光技術の国際研究拠点を目指す「ホトニクスバレープロジェクト」もスタートを切っている。外国企業、研究施設の誘致がどこまで実現するかは今後の課題だが、経済、産業、学術、研究面での具体的な国際交流を図るものとして注目されよう。

その空港都市のメリットをソフト面で生かそうというのが、「コンベンション都市・千歳」の考え方だ。交通の利便性に加え国立公園支笏湖などの自然の豊かさもあり、国際交流の場として最適—というわけだ。

最近では、97年（同9年）の国連アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）会合、99年の千歳光科学国際フォーラム、2000年（同12年）の光メモリー国際シンポ、02年の国際電気通信連合（ITU）の国際会議など隔年毎に大きな国際会議を招致している。

ITUの国際会議では期間中延べ約1万人が参加、国際交流、千歳のPRだけでなく、宿泊、食事、観光、ショッピングなどによる経済効果や地域の活性化といった具体的な成果にもつながっている。

これに関連して特筆されるのが通訳、ホストファミリーなどのボランティアの活躍だろう。通訳関係では10カ国以上、100人近くのボランティアが登録。千歳ボランティア通訳クラブなど通して、さまざまな国際会議や空港内での通訳や案内、さらには札幌市で開かれた障害者インターナショナル世界会議札幌大会、サッカー・ワールドカップ（W杯）などでも要請に応じて通訳として活躍している。

「世界に開かれた北の拠点」構想のソフト面を市民レベルで支える重要な機能を果たしているわけで、国際空港都市ならではの厚みすら感じる。

千歳市

人口：9万2千人 面積：595km²

<http://www.city.chitose.hokkaido.jp/>

新千歳空港、自衛隊などに加え、交通の要所にある臨空・内陸工業都市として道内でも成長が期待されている都市。また、支笏湖や樽前山など自然にも恵まれており、空港の年間乗降客は約2千万人。観光

都市としても、脚光を浴びている。

国際交流の問い合わせ先
千歳市企画部国際交流課 TEL(0123)24-3131

「青年よ大志を抱け」の 交流文化都市に

社団法人北方圏センターが仲介

『わたしたちは、「青年よ大志をいだけ」のころをうけつぐ北広島市の市民です』。

これは北広島市民憲章の前章の冒頭の一文である。米マサチューセッツ農科大学学長から札幌農学校（現北海道大学）の初代教頭として招かれたウィリアム・S・クラーク博士が1878年（明治11年）4月、学生との別れの際に贈った「青年よ大志を抱け」の名言はあまりにも有名だ。

が、その“舞台”が実は札幌市内ではなく、北広島市の旧島松駅通所の傍ら、現在のクラーク博士記念碑の場所だった一ことを知らない道民も決して少なくはないだろう。

この市民憲章の精神は北広島市長期総合計画に掲げられた3つの都市像の1つ『だれもが自由に学び、触れ合い、活動できる「交流文化都市」』に生かされ、その具体化として人材育成を目指す国際交流が実施に移されている。

1990年（平成2年）、当時の広島町（1996年から北広島市に）は国のふるさと創生基金を元に「ひろしま人材育成委員会」を発足させ、「豊かな国際感覚を持った人材の育成」を図るため、社団法人北方圏センターの紹介で国際交流の相手

先探しを始めた。

その1つが、いうまでもなくクラーク博士の出身地の米マサチューセッツ州アマースト市で、もう1つが同じ北方圏に位置するカナダ・サスカチュワン州サスカトゥーン市。

91年当時の広島町民6人の調査団がまず、熱い期待を胸にアマースト市を訪ねたが、クラーク博士の直系で生存しているのは5代を経た女性ただ1人だったため、その女性の負担の大きさなども考慮し、やむなく断念した。

一方、サスカトゥーン市は人口19万人でサスカチュワン大学、農産物、ハイテク産業もある緑豊かな都市。同じ北方圏という共通性に加え、同市在住で難民救済のボランティア活動で活躍している高谷尚子さんが、社団法人北方圏センター発行の季刊誌「Hoppoken」の海外レポートのレギュラー執筆者であり、しかも、高谷さんの妹が当時の広島町在住一という縁もあって、一気に国際交流の動きが具体化した。

サスカトゥーン市（カナダ）との 肩の凝らない交流

高谷尚子夫妻が橋渡し役となり、翌年の92年（同4年）に



サスカトゥーンの高校の授業で日本のことを紹介する北広島の高校生
=2004年5月



幼稚園児と交流するサスカトゥーンの高校生
=2005年4月、北広島市で

は早くも国際交流がスタートを切った。広島町側は人材育成委員会が、サスカトゥーン側は市とは独立した形の教育委員会が交流事業を担当。あえて自治体同士の姉妹都市提携は結ばず、交流内容を「肩の凝らない、長続きする中高校生の教育交流」と性格付けた。

91年の調査団派遣に続いて、92年にまずサスカトゥーン市から高校生ら12人が来日し、ホームステイをしながら、初めての交流の温もりと楽しさを実感した。以来、米同時多発テロ事件の2003年（同15年）を除く毎年、一年ごとの交互訪問を続けてきた。05年現在で北広島市からは7回109人を派遣、サスカトゥーン市からは8回128人が来訪し、堅実で実りある交流となっている。

1994年（同6年）には広島西高校とサスカトゥーン市のエーデン・ポーマン高校が姉妹校提携を結んだ。こういったこともあって北広島市も人材育成委員会が担当してきた交流事業を、2000年（同12年）から教育委員会に事務局を置く北広島国際交流協議会に移管し、教育交流の色彩を一段と鮮明にした。

派遣される高校生は1人10万円が自己負担だが、目的が教育交流と明確なためか、01年には12人の募集に対して3倍近

い30人が応募するなど、なかなかの人気。特に女生徒が積極的で応募者の8割を超える年もあるほどだ。

バンクーバーやサスカトゥーンの市内観光などのほか、団員1人ひとりがホームステイ先に宿し、ホストの高校生と一緒に授業を受ける。

ここまでは、他都市の姉妹都市交流と共通しているが、「何のためにやって来たのか、とはっきり問いかける。授業でも時間を割り当てられ、どうぞ自由に日本文化などを紹介していただいて結構—といった調子で、何となく仲良くの考えだけでは交流は難しい」（北広島市教育委員会）という自身の濃い内容なのだそう。

人材養成、教育交流を標ぼうするだけあって、面接で派遣団員に選ばれた生徒たちは、半年間で10回近く、英会話はもちろん、習字や折り紙、けん玉、盆踊りなどの日本文化を研修し直し、サスカトゥーン市との実のある交流に備えている。

一方、05年（同17年）4月に来日したサスカトゥーンの高校生16人と引率の先生2人も、ホームステイしながらさまざまな日本文化を体験し、日本の中、高校生60人と一緒に料理づくり、ゲームなどの交流も楽しんだ。

なかでも、同協議会主催の「歓迎パーティ」には約220人の市民が参加し、最後に参加者全員が日本語で「花」、英語で「カントリーロード」の歌を大合唱し、交流は大きく盛り上がった。

直後の5月1日の市のホームページで本禄哲英・北広島市長（当時）は「素晴らしい交流」とした上で、『振り返って「国際交流」について考えてみますと、異なる文化を持つ人と触れあうことで、文化の違いを体験して異文化への理解を育てながら、自分たちの文化に対しても理解を深めていくことが、本当の意味での「国際交流」につながるのではないかと考えます。国際交流も、かつての行政主体のものから、市民1人ひとりが主役になる時代に移行しており、このように市民の皆さんが自ら行うボランティアなどの活動に対してバックアップしていくことが、これからの行政に求められる



歓迎パーティで「花」「カントリーロード」を合唱する両国の高校生たち
=2005年4月

課題ではないかと感じたところですよ』との感想を述べている。

民間レベルの国際交流へ

市は04年度の国際交流推進事業に関する評価調書で「北広島国際交流協議会の事務局は教育委員会になっているが、今後は事業の見直しをし、協議会が主体的に活動しやすい環境を整えていく必要があると考える」と改善方を指摘された。

1996年（同8年）に町から市へ昇格し、急速に発展してきた同市だけに確かにまだ行政主導の色彩が残っているというわけだ。

ただ、同協議会がサスカトゥーンとの相互交流に市民参加のイベントを組んだり、2004年にはホームステイ家族や外国人向けに英語版市内マップ2千部を発行、さらに、参加者の感想文も含めた交流事業の報告書を希望者に無料配布したり、夏休みに市民国際交流セミナーを開催するなど、国際交流事業を市民の間に広げる努力も目立ってきた。

また、7人の市民が企画委員会を作り、1990年から始めた「きたひろしまエルフィン大学」も市民の国際理解に一役買っている。

妖精を意味するエルフィンはその市のシンボル・イメージだが、スポーツや文化関係の著名人による講演や音楽鑑賞などを市芸術文化センターで毎年開催しており、最近では出前講座方式で積極的に市民の中に入り込む試みも始めている。

2003年の出前講座には室蘭工大のネパール人の留学生を招いて、ネパールカレーの料理を学んだり、ネパールの生活や教育などについて話を聞いた。04年のエルフィン大学では同市の英語指導助手のマーク・マイヤーさんが講師になるなど、毎年外国人が講演し、市民レベルの貴重な国際交流となっている。

もう1つ注目されるのが、「ティーボール北の甲子園」（実行委員会主催）の05年（同17年）からの「国際交流大会」化。

「ティーボール北の甲子園」は北広島市の社会人野球チーム「ウイン北広島」の監督や選手が1995年（同7年）に知的障害者のスポーツ振興と健常者との友愛の輪を広げる目的で

スタートさせた。

オーストラリアで生まれた野球に似た球技で、ティー（棒）の上に乗せたボールを打ち、得点を競い合う。

当初は同市内の体育館で小規模に行っていたが、実行委とともに地元の中高生400人がボランティアとして支え、2002年（同14年）には道内外から過去最高の60チームが出場し、札幌ドームで知的障害者の、全国でも例のない「北の甲子園の夢」を実現させた。

05年11月には外国人のチームにも参加を呼びかけ「手をつなごう、心をつなごう」をスローガンに大会名称も「国際交流大会」を加えることになった。

実行委関係者は「今後、国際交流の輪を広げていきたい」としており、市民レベルによる知的障害者と健常者を結ぶみは、国際交流の新たな芽としても注目に値する。

このほか、同市内では東部小学校がオーストリアのサルバトーレ小学校、札幌日大高校がオーストラリアのナサリア高校と姉妹校などの交流を持っているほか、道都大学が29の海外の大学と姉妹校提携をしており、国際交流の土台は厚い。

国際交流協議会の事務局を持つ同市教育委員会は「これからは、関係団体、機関と連携を取りながら、さらに国際交流の幅広い展開を図りたい」と語っている。



きたひろしまエルフィン大学特別ゼミナールで講演する北広島市の英語指導助手のマーク・マイヤーさん＝2004年

北広島市

人口：約6万1千人 面積：118.5km²

<http://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/>

1871年（明治4年）兵庫県人の中山久蔵氏が西部の島松に入植して水稲栽培に成功した。その後、83年（同16年）広島県人が入植し開拓に当たった。以来、純農村として発展してきたが、1964年（昭和39年）に「道央新産業都市建設区域」に指定され、68年に町に移行した。その後、宅地造成が進むのに伴って

人口が急増、75年の国勢調査では人口2万2千人余で人口増加率は全国2位、全道1位を記録した。92年（平成4年）には人口は5万人を突破し、96年（同8年）に道内33番目の市となった。

国際交流の問い合わせ先

北広島市教育委員会

TEL(011)372-3311

NPO法人が取り組む 新グローバルシティー

NPO法人誕生で官民協働の交流事業

石狩市は「世界とつながるグローバルシティー」を国際交流の柱に据えている。同市の市勢要覧でも「経済を中心とした国際交流はもとより地域発展に貢献すべく文化・福祉などさまざまな分野での国際交流を市民の協力と理解を土台にして積極的に推進しています」と書かれている。

この中で強調されている「市民の協力と理解」の具体的な表れが、特定非営利活動法人（NPO法人）石狩国際交流協会の存在といえる。

1996年（平成8年）に市制を施行した石狩市は、前身の石狩町時代も含め3つの海外都市と姉妹都市提携を結んでいる。いずれも、国際交流を民間で推進する団体として、「石狩・キャンベルリバー友好協会」、「石狩・ワニノ友好協会」、「石狩・彭州友好協会」がそれぞれの姉妹都市提携時に設立され、活動を続けていた。

これとは別に、全般的な国際交流を促進するため、任意団体の石狩国際交流協会も2000年（同12年）に発足した。

これを機に「組織を一本化することで体制強化を図り、事業拡大を目指す」ことで4つの協会の意見が一致、翌年の01年に3協会はそれぞれ臨時総会を開いて発展的に解散し、石狩国際交流協会と統合した。

さらに翌02年（同14年）2月に特定非営利活動法人（NPO

法人）の認可を受けた。これによって、「世界につながる新グローバルシティー」づくりを推進する民間の“中核団体”がスタートを切った。

同協会の年会費は法人が2万円、個人が2千円だが、05年（同17年）6月現在で、各種団体、企業など86の法人、330人もの個人が会員になっている。

大ざっぱにいったら同協会の年約1千300万円の予算は、市からの補助金約800万円、残り約500万円が会費収入や翻訳、イベントなどの事業収入。事務所は市庁舎から道路ひとつ隔てた北ガスプラザ内にあり、同協会の専従職員は3人。

これをみてもわかるように1年後の03年1月、同じく国際交流団体としてNPO法人の認可を受けた「しらおい創造空間・蔵」（胆振管内白老町）と同様、「行政と民間が一体となり、民間主導の活動で国際交流事業を市民の中により根付かせ、同時に市の財政負担も軽減できる。国際交流は行政主導ではどうしても限界がある」（石狩市）という発想で、同協会も「独自の活動ができるよう市民の理解を得て、ぜひ会員増を図っていきたい」（橋本泰専務）としている。

海外との3つの姉妹都市提携

日本海に面した石狩は江戸、明治時代を通じて、サケの漁場、交通の要所として早くから着目されていた。港が持つ特



NPO法人石狩国際交流協会が主催してジャンボ太巻き作りにも挑戦したワールドフェスティバル
=2004年11月



1993年、姉妹都市提携10周年を記念して石狩町（当時）からキャンベルリバー市に寄贈した石狩ゲート（鳥居）

性から、旧ソ連（ロシア）、中国など対岸の大陸を意識した国際性に加え、最近では石狩湾新港によって国際化時代の物流拠点として新たな注目を浴びてきた。

加えて大規模な住宅団地造成の結果、札幌市のベッドタウン化による知識の蓄積が進んだこともあり、「世界につながるグローバルシティー石狩」は単にキャッチフレーズだけに止まらなくなった。

その具体的な例が、それぞれの特色を持つ3つの海外都市との姉妹都市提携といえる。

【キャンベルリバー市(カナダ)】—カムバックサーモンが縁

キャンベルリバー市はカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー島の中心部に位置し、サーモンフィッシングのメッカとして世界的に有名。

1981年（昭和56年）同市の関係者がカムバックサーモン運動の一環として札幌市内の豊平川へのサケ放流のために来道。サケに縁が深い当時の石狩町に「友好を深めたい」とのキャンベルリバー市長のメッセージが届けられた。

石狩町でも同年、さっそく石狩・キャンベルリバー都市交流委員会（後に同友好協会と改称）が発足して民間主体の交流基盤が出来、2年後の83年（同58年）には両都市の交流委員会が友好提携、両都市が姉妹都市提携—とそれぞれスピード調印した。

その後、建設関係者の訪問、文化交流使節団の派遣、職員の研修派遣などさまざまな交流が行われたが、中でも提携10周年の93年（平成5年）には記念式典出席のため108人がキャンベルリバー市を訪問して、同市のセコイア公園に石狩ゲート（鳥居）を寄贈、同市からは返礼として石狩町（当時）庁舎裏庭にトーテムポールが贈られ、交流が一段と深まった。

当初、期待された経済交流は88年（昭和63年）石狩湾新港にキャンベルリバー市から製材を積んだ「トライデントバルチック号」（1万6千トン）が入港し、機運は高まったものの、採算性などの点からまだ本格的な経済交流には結び付いていない。

姉妹都市交流の中心になっているのが、83年の提携時から始まった高校生の交換留学生事業と87年からのヤングアンバサダー（小、中学生訪問団）事業。



キャンベルリバー市から調印10周年記念として贈られてきたトーテムポール前で記念撮影する同市のヤングアンバサダーたち =2005年3月

高校生の交換留学事業は石狩にある2つ高校から各1人、キャンベルリバーからも2人が毎年約1年間ホームステイをしながら語学、文化などを学ぶという中身の濃いもの。

また、ヤングアンバサダーは小、中学校30人程度が隔年ごとに相互訪問するというもので、トータルするとすでに双方でそれぞれ約250人、計約500人が参加した。

ともに、相互理解に大きく役立っており、石狩市も同協会も市勢要覧や案内パンフレットで「今や姉妹都市交流のお手本とまでいわれるほどになった」と胸を張るほどの実のある交流となっている。

【ワニノ市（ロシア）】—北方圏の港町を結ぶ交流

ロシア・ハバロフスク地方のワニノ港からの木材船の入港を機に、同港と北方圏交流の拠点を標ぼうする石狩湾新港との間で経済交流を望む声が高まってきた。

その背景の中で89年（平成元年）、石狩町側からワニノ市長にその旨のメッセージを送ったのが、姉妹都市関係を築くそもそのきっかけだ。

旧ソ連邦の崩壊、独立国家共同体、ロシア連邦へとめまぐるしい政治情勢の変化にもかかわらず経済交流団の相互訪問、ワニノ市への衣料、学用品など総重量3.5トンの寄贈、同市からのエゾ松50本の返礼、友好のヨットの来港などのさまざまな交流が続けられ、93年（同5年）に同市で姉妹都市提携の正式調印の運びとなった。

提携1周年には石狩町からロシア船をチャーターして町長ら115人の町民が同市を訪問し、双方の伝統芸能文化の交歓などで親交を深め、翌年には同市から119人の市民訪問団が来町、学校訪問やホームステイなどを通じて姉妹都市関係を共に実感した。

その後、市職員の相互研修をはじめ、中学生の相互訪問によるサッカーやバレーボールの交流試合も行われた。

また、98年にもワニノ市長からの支援要請に基づいて医療、生活物資などコンテナ2個分をプレゼント、これに対して同市長から配布した際の写真と共に「2千人以上の年金生活者や障害者、低所得家庭の子供、幼稚園、病院などが受け取った」との礼状が届けられるなど、心温まる交流が展開されている。

72年（昭和47年）、国の基本計画で決定された石狩湾新港は国際化時代を拓く21世紀の物流拠点として、大きく成長してきた。

97年（平成9年）には世界でも有数のハブポートである韓国・釜山港との間で週1便の定期コンテナ航路が開設、2年後には週2便となり、しかも、釜山経由で対ロシア貿易（ワニノ、コルサコフ）との輸送ルートも確立された。

ワニノ市は第2シベリア鉄道（バム鉄道）の終着駅。コムソモリスクナアムーレを経由して、シベリア鉄道によってモスクワ、欧州ともつながっている。木材や金属製品の輸出港でもあるワニノ港はウラジオストク、ナホトカに次ぐロシア極東地域の第3の港で、将来は国際貿易港としての発展の可能性も秘めている。

サハリン石油・天然ガス開発プロジェクト石狩後方支援基地構想も含め、当初の狙い通り石狩湾新港とワニノ港を窓口にした経済交流はこれからが本番。心のこもった姉妹都市関係がその基盤になることだけは間違いないだろう。

【彭州（ほうしゅう）市（中国）】—きっかけは農業研修

石狩市の姉妹都市提携としては1番新しいが、彭州市との友好関係は結構古く84年（昭和59年）にさかのぼる。



民間の手で建てられた珍しい石狩彭州友好会館の落成式
=2004年10月、彭州市で

同年、彭州市が属する中国四川省農牧局から農業研修生の受け入れ要請を受けた北海道中国研究会の代表が、当時の石狩町に依頼、同町では「石狩町中国研修生受入対策協議会」を設立し、全額補助で受け入れを開始した。以来、毎年のように彭州市から2人ないし4人、10年間で合計29人の農業研修生を受け入れてきた。

これに加えて市民や行政、議会関係者の交流も進み、2000年（平成12年）10月、市長ら78人の石狩市訪問団が彭州市を訪れ姉妹都市提携に調印、合わせて(株)石狩開発と彭州中日企業ハイテク協力団地管理委員会との友好協力も正式調印された。

農業研修だけでなく、医療研修生の受け入れも行なわれたほか、同管理委員会が「いしかり未来フェスタ2000」への出展と経済関係者との友好関係維持のために来日、両市の小、中学校が絵画、書の交換をするなど、石狩第3の姉妹都市交流も他の2つとは異なる特色を持ちながら、順調に推移している。

姉妹都市が生んだ二つの市民交流

石狩市の3つの姉妹都市提携は行政だけでなく、一貫して民間が推進役を担って来ているのが大きな特徴だ。その中から、同市ならではの話題を持つ民間交流・活動もまた、生まれてきている。その2つを紹介してみると。

「石狩彭州友好会館」

彭州市は中国3大牡丹（ぼたん）の産地で同市の花は「牡丹」。それにちなんで同市との友好活動を推進している石狩市民の牡丹会（稲見研三会長＝NPO法人石狩国際交流協会会長、75人）が、彭州市に民間交流施設「石狩彭州友好会館」を建設し、04年（同16年）10月落成式を行った。

同会が前年7月に出資会員を募集して独力で実現させたもので、総工費は土地使用権も含め約800万円。鉄筋コンクリート2階建て約210平方メートルの同会館には、研修室や食堂などのほかに和室もあり、石狩市民なら1泊千円程度の格安な値段で宿泊できるという。

同会館建設は民間交流の具体的な拠点を作ることが目的だったこともあり、彭州市にある「彭州石狩友好都市促進会」に管理を委託し、日本語教室、日本、石狩の歴史、文化などを紹介する展示会場などとしても利用されている。

姉妹都市関係強化、友好交流促進のために、民間が自分たちの力で相手国にこのような施設を作るのは極めて珍しく、その活用内容や成果が他の自治体の国際交流にも大いに参考になりそうだ。

「元日本兵の墓地調査と出版」

1993年（同5年）に設立される「石狩・ワニノ友好協会」



ワニノ市に建立されている「鎮魂・平和友好の碑」に献花する石狩の訪問団＝2004年8月

の副会長になる越沢幸三さんは、その前年の92年秋、ワニノ市長の招待で同市を訪問した際、同市に日本人抑留者の墓地があることを初めて知った。

旧陸軍兵として戦死した仲間を埋葬した経験もある越沢さんは、単独で5度にわたる現地調査に取り組んだ。その結果、ワニノ市日本文化協会のナターリヤ会長の協力もあって、同市内に日本人墓地が10カ所、743人が埋葬されていたことを突き止めた。

調査の概要は96年6月に姉妹都市提携3周年記念としてワニノ市に建設された「鎮魂・平和友好の碑」の除幕式に間に合い、その後、さらに調査を進め、その結果を製本化した。

冊子はA4判で20ページ。調査の内容、経緯に加え、墓地ごとの埋葬者数、墓地の位置などを地図付き、写真付きで紹介し、貴重な資料となっている。

日本語のほかに、姉妹都市提携の時に中学生の一員として石狩に派遣され、その後札幌での留学経験があるワニノ市の若者がロシア語への翻訳を引き受け、ロシア語版は04年（同16年）7月に完成、翌月石狩市の訪問団がワニノ市長に手渡した。

戦争体験に基づいた越沢さんならではの貴重な歴史の掘り起こしだが、越沢さん個人だけでなく姉妹都市提携が支えた“国際協力事業”ともいえる。

石狩国際交流協会による多彩な事業

2000年（同12年）に設立された石狩国際交流協会が翌年、「石狩・ワニノ友好協会」、「石狩・彭州友好協会」、「石狩・キャンベルリバー友好協会」を統合して再スタートを切ったことでもわかるように、同協会はもともと石狩市が結んでいる3つの姉妹都市との友好親善交流を図ることを目的としていた。

それが、02年に特定非営利活動法人（NPO法人）の認可を受けたことで、より独立した民間の国際交流団体として姉妹都市交流に止まらず、各種の国際交流・国際理解事業に積

極的に取り組み始めている。

その活動ぶりは社団法人滝川国際交流協会と肩を並べつつあるほどの多彩なものとなってきている。

事業内容を項目別に見てみると、①高校生の交換留学、少年少女親善訪問団の派遣、受け入れなど姉妹都市交流に関するもの②国際交流パーティー、講演会・セミナー開催による国際交流・理解事業③英語、中国語、韓国語など1クラス10人程度の外国語教室や世界の料理作りを楽しむ料理教室④外国人の相談、各種案内。ロシア語・英語によるガイドマップ作成などによる外国人へのさまざまな情報の提供⑤通訳、翻訳の受託⑥協会広報誌「はーとふる」の年2回発行、ロシア語会話集（159ページ）の発刊—など多岐にわたっている。

市民との交流では、道内の英語指導助手（AET）の協力を得て、同協会が主催する中学生対象の「夏休みキャンプ—English Day」が好評だ。2日間石狩自然の家でキャンプを張り、遊びながら生きた英語を学ぼうというもの。

また、ワールドフェスティバルはそば打ち体験、ビー玉遊

びなどで市民と外国人が国際交流を図るイベント。いずれも今後、恒例行事として定着させたい考えだ。

03年（同15年）はカナダ・キャンベルリバー市とは姉妹都市提携20周年、ロシア・ワニノ市とは同10周年の節目の年で、さまざまな事業が企画されていたが、重症急性呼吸器症候群（SARS）の影響で次々と中止された。

代わって「せめても…」と同協会が中心になって開催したのが両市の小、中学生の380点の絵画を展示した「ぎやらりー2003 姉妹都市小中学生絵画展」。

さらに、中国・彭州市にはSARSの診察用に電子体温計500本（約30万円相当）を贈るなどNPO法人らしいアイデアを凝らした活動が軌道に乗り始めている。

石狩市は市民憲章の前章で「わたくしたちの石狩市は、北方圏交流の海の拠点として限りない発展が広く期待されるまちです」とうたっている。石狩湾新港を軸としたハード面とともに、このNPO法人によるソフト面が、石狩市の今後の国際交流をどう発展させていくか、注目したいところだ。



楽しく遊びながらの英語漬けの2日間。夏休みキャンプは生きた英語を学ぶ絶好のチャンスだ。
=2004年8月

石狩市

人口：約6万1千人 面積：722km²

<http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/>

慶長年間（1596～1615）に松前藩から交易のための石狩場所に指定されたのが発端。急成長したのは1965年（昭和40年）以降で、石狩湾新港とその後背地の開発に加え、札幌市のベッドタウンとして花川地区に住宅団地が造成されたこともあって、75年から5年間で人口が2倍以上も急増した。92年（平成

4年）に人口は5万人を突破し、96年（同8年）に「石狩町」から「石狩市」に昇格した。さらに、2005年（同17年）10月1日、旧厚田村、浜益村と合併した。国際交流の問い合わせ先
石狩市企画財政部秘書課 TEL(0133)72-3111
NPO法人石狩国際交流協会 TEL(0133)64-5931

石狩管内

当別町

“伊達の町”で共存する 「スウェーデン」

急速に具体化した友好親善の動き

1891年（明治4年）、仙台藩一門・岩出山の伊達邦直主従によって初めて開拓のクワが入れられた当別町。その苦難の歴史は同町出身の本庄睦男氏の小説「石狩川」で一躍全国に知られ、当別町は胆振管内伊達町と共に“伊達の町”のイメージが定着した。

が、その「伊達の町」が、「スウェーデンの町」という“もう1つの顔”を持ち合わせるようになったのが、「ストックホルム郊外の風景にそっくり」という都倉栄二・元駐スウェーデン大使の一言だったというから、面白い。

1978年（昭和53年）、同町獅子内のゴルフ場を訪れた都倉氏が最初に抱いた印象だが、実は都倉氏は日本に帰任の折、スウェーデン国王から「スウェーデンと日本の交流の足掛かりがほしい」との依頼を受けていたこともあり、「気候、風土の良く似たこの場所に交流拠点を建設してはどうか」の提案に結びついた。

翌79年2月に（株）北洋交易がスウェーデン風耐寒省エネ住宅による「スウェーデン村計画」を同町に提案、同町は同年11月道、社団法人北方圏センターなどが参加した「スウェーデン・

北海道産業文化提携会議」にスウェーデン村の誘致を正式表明した。

両国の友好親善を図るため翌80年に発起人会をスタートさせた財団法人スウェーデン交流センターは、83年に全道的な組織として本格発足、84年（同59年）には（株）北洋交易、（株）スウェーデンハウスらが同町太美地区で大規模なスウェーデンヒルズの共同開発に着手した。

86年には中心施設のスウェーデン交流センターも完成し、伊達の町でスウェーデンの町が共存する、という画期的な試みが一気に具体化した。

新たなまちづくりへの発想の転換

スウェーデンヒルズは開発主体が民間とはいえ、スウェーデンとの友好親善関係樹立を目指す全道的な取り組みと、当別町の将来を見据えた総合的なまちづくりの発想が一致したユニークな国際交流の姿といえる。

本庄氏が1905年（明治38年）に生まれた同町太美地区が100年後の現在、異国情緒たっぷりのスウェーデンヒルズに変ぼうしているのも歴史の皮肉かもしれない。



国際交流とまちづくりが一体となった形の当別町のスウェーデンヒルズ

スウェーデンヒルズはマスタープランの計画面積が約300ヘクタール。うちゴルフ場などを省くスウェーデンヒルズそのものも150ヘクタール、679区画にのぼる大規模宅地開発だ。2005年（平成17年）3月現在で209世帯、570人がすでに居住しているが、スウェーデン風の住宅と町並みは日本とは思えないほどのたたずまいだ。

1991年（同3年）、92年に2年連続して「北海道まちづくり100選」で「21世紀に向けた街づくり」の代表例として選ばれ、93年には「北海道街づくり功労者知事表彰」を受けた。

スウェーデンヒルズだけではない。その玄関口ともいえるJR石狩太美駅は90年、石狩太美郵便局も翌91年、共にスウェーデン風の駅舎、局舎を完成、同年「町道スウェーデン大通線」が建設省推薦の「マイロード事業」に認定された。

このほか、94年にJR石狩太美駅前広場がスウェーデンプラザに衣替えしたのをはじめ、町内会館やコンビニなども競うようにスウェーデン風の建物を建設しており、伊達の町の中に「スウェーデンの街」が新たな彩りを添えている。

伊達記念館、伊達邸別館など歴史をしのばせる町並みの残る当別地区と見事なまでの対比、共存を示しており、国際交流とまちづくりが結びついた好例といえる。

レクサンド市との篤い姉妹都市交流

スウェーデン風のまちづくりに平行して本来の友好親善を進める動きも急速に具体化した。

80年代にスウェーデンと姉妹都市提携を結んでいたのは、愛知県岡崎市とウッデバラ市だけ（現在では宗谷管内枝幸町がソレフテオ市と姉妹都市提携にあり、当別町と合わせ道内では2町で全国でも4自治体）。スウェーデンヒルズの開発の着手、財団法人スウェーデン交流センター設立などハード、ソフト両面の動きに呼応するように、83年（昭和58年）、スウェーデンの駐日大使が来町して町長、町議会議長らを同国に招待した。



姉妹都市提携3年後にレクサンド市の少年アイスホッケーチームと共に当別町を訪れたスウェーデン王国カール16世グスタフ国王＝1990年3月

その後、姉妹都市提携の流れが加速し、当初の候補だったコッパルベリイ県の首都ファールン市に代わって、森と湖に囲まれたダーラナ県のレクサンド市が浮上、87年（同62年）10月、町長ら15人が同市を訪れ、姉妹都市提携に正式調印した。

提携後3年目の90年（平成2年）には国際親善試合のために当別町にホームステイしていた同市少年アイスホッケーチーム25人と機を一にしてカール16世グスタフ国王が来町し、姉妹都市提携へのスウェーデン側の熱意を裏付ける形となった。

以来、両都市の相互訪問は95年の女性だけの訪問団も含め毎年のように続けられ、97年からは中学生や高校生の相互訪問も始まった。

また、2002年（同14年）に姉妹提携15周年を記念してレクサンド市が同市内に日本庭園を造成、当別町からは石灯ろうを寄贈し、04年8月の開園式には町議会議長が出席するなど、中身の濃い交流となっている。

これらの交流は町だけでなく、まちぐるみのものになっているのが大きな特徴だ。

姉妹都市提携の2カ月前に発足した当別・レクサンド都市交流協会は民間の任意団体で「両都市間の教育、文化、スポーツ、産業、経済などの交流を図る諸事業を推進する」のが目的。町内43の団体、法人と146人の個人が会員で文字通り町を挙げた国際交流団体といえる。

団体1口5千円、個人同2千円の会費や寄付で運営されており、訪問団の派遣、受け入れ、夏至祭など各種イベントの主催、支援など国際交流の中核となって活動してきた。

それと、全道的な広がりを持つ財団法人スウェーデン交流センター。スウェーデンヒルズ内にある同交流センターの施設で各種のイベントを開催しているほか、町、同都市交流協会と一体となって友好親善事業に取り組んでおり、この三者の連携が分厚い交流の実を結んでいる、といえる。

もうひとつ交流を支えているのが、ユニークな「国際交流連絡員制度」。姉妹都市提携時から世話になっていたレクサンド市在住の日本人女性に、1992年（同4年）に委嘱した。

①定期的な情報交換②訪問団の受け入れ事務、通訳③当別町のPRなどを依頼しており、交流がスムーズに運び、広がりが図れるなど、交流には不可欠な要素になっているという。

夏至祭

—「スウェーデンに一番近いまち・とうべつ」

木の葉や花のリングで飾られた約10メートルの柱「マイストング（夏至柱）」をスウェーデンの民族衣装をまとった町の男性らが左右から材木で支えながら、「エイ」「オー」の掛け声で立ち上げる。周りでは数百人の参加者がフォークダンスを楽しむ。毎年6月下旬に当別町のスウェーデン交流セン



スウェーデンとの友好親善の象徴になっている当別町の夏至祭。奥に見える建物がスウェーデン交流センター

ター周辺で行われる夏至祭のクライマックスシーンだ。

スウェーデンの伝統行事「ミドソンマル」を模倣した夏至祭はスウェーデンヒルズの開発が始まった84年（昭和59年）が第1回目。以来、町、同交流センター、同都市交流協会の三者共催で毎年開かれ、町内外から2千～5千の人々が見学に来るスウェーデンとの友好親善を象徴する一大イベントとして定着している。

2005年（平成17年）6月の第22回夏至祭には11年ぶりに同町を訪れたスウェーデン在住のケイコ・マクナマラさんと、バイオリニストのホーカン・ポリエソンさんがスウェーデン民謡などを披露、マイストングの立ち上げには札幌に留学している6人のスウェーデン大学生が飛び入り参加するなど、当別の人々はレクサンドとの友好都市交流を改めて肌で実感していた。

また、財団法人スウェーデン交流センターが同交流センター施設で行っているイベントもなかなかのものだ。施設にはスウェーデンのガラス工芸を学べる工房や民芸品を展示、音楽会も開けるセンターホールなどもあり、さながら同国の

「民間の大使館」といったところ。

ここでは、スウェーデン人によるスウェーデン語の会話講座、スウェーデンウール織物講習・展示会、料理教室、スウェーデンセミナーなどが開かれ、12月にはクリスマスフェアとしてスウェーデンの冬の伝統行事「ルシア祭」も催される。

さらに、同交流センターは、賛助会員向けに連絡誌「ビヨルク（白樺）」を年4回発行しており、「スウェーデン」は、さまざまな形で当別町のまちと日常生活に根付いている。

スウェーデンハウスそのものは、スウェーデンからの製材を持ち込み建設されているが、固定資産税などの税収増、住宅関連工事や給排水工事の受注増、観光客の入り込み増など当別町そのものへの経済効果も表れている。

なによりも、過疎化、人口減に悩んでいる道内各都市の中で、当別町はゆるやかな人口増カーブをすらすら描いてきた。

「北欧、スウェーデンに最も近いまち・とうべつ」を目指した当別・レクサンド都市交流協会の理念は、まちづくりとマッチしながら確実にその成果を挙げているといえる。



いながらにして冬のスウェーデンを実感できる「ルシア祭」
=2001年12月、同交流センターで

当別町

人口：約2万人 面積：422.7km²

<http://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/>

1891年（明治4年）に仙台藩岩出山領主の伊達邦直が家臣と共に移住、開拓に当たった。農業を基幹産業にしているが、1976年（昭和51年）には北海道医療大が開学、スウェーデン・レクサンド市との姉妹都市提携、札幌大橋開通などで、札幌近郊の国際都

市、田園都市として新たな発展をみせている。

国際交流の問い合わせ先
当別町企画課企画振興係 TEL(0133)23-2330
財スウェーデン交流センター TEL(0133)26-2360

転機迎えた姉妹都市交流

JR小樽駅を出るとすぐ左側の壁にナホトカー小樽の姉妹都市を記念したレリーフが描かれている。1976年(昭和51年)に小樽駅周辺を再開発する際、「友好の壁」として制作されたものだ。このほかにも市内には、手宮緑化植物園内に「ナホトカ・ダニーデン・小樽市姉妹都市友好の園」、小樽市役所前庭にダニーデン市との姉妹都市20周年記念植樹があり、同市と市民がいかに両市との姉妹都市交流に篤い気持ちを込めているか、を浮き彫りにしている。

2つの姉妹都市のきっかけ

【ロシア・ナホトカ市】

戦前、樺太や沿海地方をはじめ国内外に多くの航路を開設し、国際貿易港として発展を遂げた小樽市にとって、旧ソ連との経済・文化の交流促進は永年の念願だった。ナホトカ市は人口約19万人で、小樽市とは日本海を隔てて696kmの距離で向き合う貿易港。1966年(昭和41年)9月、当時の小樽市長がソ連(当時)を訪問した際、ナホトカ市を訪れ「共同声明書」に調印し姉妹都市提携をスタートさせた。

小樽市は、旧ソ連のロシア連邦極東地域(沿海地方、ハバロフスク地方、サハリン州)と姉妹都市提携を結んだ最初のまちとなった。2005年(平成17年)現在、北海道内の市町村とロシア連邦極東地域との姉妹都市提携は18組にもものぼっており、その先駆けとなった同市の先見性が分かるとういうものだ。



JR小樽駅周辺を再開発する際、製作された、ナホトカとの姉妹都市提携を記念したレリーフ「友好の壁」

【ニュージーランド・ダニーデン市】

小樽市は1966年(昭和41年)5月にラム、マトンの羊肉輸入港の指定を受けて以来、ニュージーランドと深い関わりがあった。こういったこともあって、人口、街並みなどが似ているニュージーランドの都市と姉妹都市提携を結び、相互の友好親善を深めようとの機運が盛り上がってきた。

そんな折り、在日ニュージーランド大使館からダニーデン市の紹介を受け、80年(同55年)7月、スケッグス市長来樽時に姉妹都市提携の調印となった。

ダニーデン市は小樽のはるか南方約1万km、ニュージーランド南島の南東岸オタゴ湾の最深部に位置し、人口は約11万人。ダニーデン市は、オクタゴンと呼ばれる八角形の広場を中心に整然とした街並みが特徴で、しかも、同市にあるオタゴ大学はニュージーランドでも最も古い伝統を誇る大学。起伏の多い地形、港や歴史などが小樽によく似ている。

ヨット、絵画―広がる民間交流

両市との提携のきっかけは異なっても、これまでナホトカ市とは39年間、ダニーデン市とは25年間の交流があり、市民の間に着実に姉妹都市ファンを増やしている。

【ナホトカ市】

「市民使節団交流」は66年(同41年)、当時の安達市長がナホトカを訪問して以来、小樽市から10回、ナホトカ市から8回の使節団の相互訪問があり、86年には提携20周年記念使節団によってナホトカ市へ「友情の鐘」が贈呈されている。

また、「小樽市民友好の船」によって77年、提携10周年記念で約200人、さらに82年、小樽市制施行60周年記念事業の一環として約200人がナホトカ市を訪問し、市民交流が深まった。

一方、ナホトカ市側からは79年に「ナホトカ市民の船」が来樽、以後2年ごとに7回、300人以上のナホトカ市民が小樽を訪れ、市内見学や市民交流の夕べなどで両市民の身近な交流が行われた。

「少年少女使節団交流」は、78年に第1回小樽市少年少女使節団をナホトカ市内のピオネールキャンプ場に派遣して以来17回、ナホトカからの少年少女使節団の来訪も8回を数えている。前述の「友情の鐘」は、両市の子供たちに「平和と友情の大切さを知ってほしい」との願いを込めて、ピオネー

ルキャンプ場に設置されており、次代を担う子供たちの相互理解の大切さを訴えている。

小樽は道内のポートセーリングのメッカとして知られているが78年（同53年）、小樽祝津マリーナ所属の4人のヨットマンが荒波の日本海を越えて、初めてヨットによるナホトカ訪問を実現した。このヨットマンを暖かく迎えてくれたのがアンタレス・ヨットクラブのメンバーで、翌年アンタレスのメンバーが同じくヨットで小樽を訪れた。

このヨットマン同士の交流は、これまで6回の訪問と8回の受け入れにのぼっている。日本海を結ぶ港町ならではのさわやかなヨット交流に対して、小樽祝津マリーナは86年（同61年）に両市の姉妹提携20周年を記念して、アンタレス・ヨットクラブの子供たちに小型ヨット「おたる号」を贈った。

また、85年「ナホトカ市民の船」が来樽した際、交流の夕べで小樽市内のダンスメンバーが特別出演し、イベントを大いに盛り上げた。偶然この船にはナホトカのダンス愛好会メンバーが参加していたことから、華麗なステップの競演が実現—この出会いがきっかけとなって、市内の小林ダンスアカデミーとナジェーダ・ダンスクラブとが相互訪問する交流に発展した。

旧ソ連体制下では日ソ間の市民交流を進める上で障害も多い中で、この海の男同士の友情やダンスを通しての市民交流は両市の絆を一層強いものにしたといえる。

【ダニーデン市】

これまで相互の市民使節団派遣は20回を数え、87年（同62年）からは少年少女使節団の相互派遣も始まった。使節団は各地を回って見聞を広めるが、その中でホームステイが少年少女にとっても、受け入れ側のホストファミリーにとっても一番印象に残るようだ。

2004年（平成16年）は、10人の小樽市少年少女使節団（中学生）がダニーデン市へ派遣された。待ち受けていたホストファミリーの10家族のうち5家族は、子供が小樽市訪問の経験のある家庭。思い出話と共に、双方の人のつながり、相互理解はさらに進んだという。

また、両市は教師交流にも力を入れており、小樽からは中学校教師10回（18人）、小学校教師3回（3人）派遣し、ダニーデンからは9回派遣されて来ている。これは両市が子供の交流を進める上からも教師同士が自ら国際交流を体験することの必要性に基づくプログラムだ。

小樽市が当初、ダニーデン市から英語指導助手（AET）を招請していたころは、教師だけでなく、家族ともども来樽してもらっていた。家族と一緒に生活することで、市民との交流機会が増え、幅広い交友関係が生まれる。これらの市民交流の中から、小樽市民が収集した図書をダニーデン図書館へ贈呈するなどの実質的な交流に発展している。

また、小樽市は海外2都市を含む3地域が合同で実施する

姉妹都市交流事業にも力を注いでおり、1992年（同4年）から99年までは、ナホトカ市、ダニーデン市、小樽市の3市民の作品による「姉妹都市絵画交流展」を毎年開催してきた。

その後も、3市合同の交流事業として、「姉妹都市児童絵画展」や「姉妹都市写真展」などを催している。複数の海外都市と姉妹提携している市町村にとっても参考になる事例といえる。

国際化へのいくつかの試み

姉妹都市提携以外にも国際交流を深める試み、イベントはさまざま行われているが、そのうち主な3つを紹介してみる。

- ①小樽市では、市民ボランティアの翻訳により、年6回程度、在樽外国人向けに市内の催しや制度などを知らせる情報紙「OASIS」を日、英、韓、露の4カ国語で発行している。特に日本語版には総ての漢字にルビをふるなどの工夫をしており、日本語を覚えてたての外国人にも好評だ。
- ②2004年（同16年）、小樽市文化団体協議会は市内に住んでいる外国人を対象に、日本文化体験会を開催し大変喜ばれた。今後も書道・茶道・花道など日本の伝統文化に触れる機会を提供したいとしている。
- ③構造改革特別区域制度「ビジネス人材育成特区」（札幌市との共同申請）は、夜間大学院への留学生の受け入れについて04年6月特別区域に認定された。これにより、小樽商科大学のビジネススクールでは留学生の受け入れが可能となったことで、今後、人材育成や地域との交流を通じて、市の活性化や国際化が期待されている。



日本文化体験会で生け花を学ぶダニーデンの人々
=2004年

のしかかる「財政難」

2004年1月、小樽市長を団長とする親善使節団はダニーデンを訪問し、マスターズ・ゲームズ（10日間にわたり約70種のスポーツ競技にニュージーランド全土から約7千人が参加するイベント）のオープニング・セレモニーに参加するなど親交を深めた。



ピーター・チン市長がマイクを持って、山田市長が口に手をあてて、声を合わせて潮まつりを盛り上げた=2005年7月、潮まつり会場ステージで

同年7月、今度はダニーデン市親善使節団が来樽、3度目の来樽となったターナー市長から、「05年秋に小樽と姉妹提携25周年の際に『ジャパン・フェスティバル』を開催し、日本とニュージーランド間の47の姉妹都市提携自治体に参加を呼びかけている」ことを紹介された。

25周年の節目の年を迎えた05年（平成17年）7月、ダニーデン市から新市長となったピーター・チン氏一行10人が来樽、ピーター・チン新市長もまた前市長と同様に潮まつりに参加するなど、小樽市との姉妹都市提携の継続発展の希望を表明。同市から25周年を記念して滑り台やつり橋など木製のアスレチック遊具が贈呈され、小樽市内の築港臨海公園に設置された。

同年9月末、返礼として小樽市から、市長を団長に市民を含む45人の訪問団がダニーデン市を訪問。ダニーデン市が企画していた「2005年ダニーデン日本祭」に参加するなど大いに親交を深め合った。

ダニーデン市との25周年に続き、06年（同18年）にはナホトカ市と40周年を迎える。長い歴史を誇る小樽市の姉妹都市交流は、極めて順当に推移しているように見えるが、実は大きな転機一曲がり角を迎えているのも事実だ。

その最大のものが、他都市同様、財政難から来る国際交流事業の縮小だ。

海外との姉妹都市交流を担当している小樽市姉妹都市提携委員会は全額市の交付金で運営しているが、以前は約2千万円もあった交付金が、05年度には10分の1の190万円にまで

激減した。交流事業の縮小だけでなく、04年度からは両市への少年少女使節団の参加者に出していた一部補助金を廃止し、全額自己負担とした。

負担増も手伝って、05年8月に4年ぶりに実施予定だったナホトカ市への少年少女使節団は応募者がゼロで、派遣断念に追い込まれた。

2003年重症急性呼吸器症候群（SARS）の影響で交流が停滞しており、小樽市では06年（平成18年）の40周年を節目の年をどう迎えるか頭を痛めている。

また、資金減によって、国際交流事業の縮小や受け入れ事業の人員削減なども避けられないのが実情のようだ。

ただ、小樽の場合は前述してきたように姉妹都市交流は、長く、厚く、しかも、市民の中に溶け込んでいるのが特徴といえる。

例えば、25周年を迎えたダニーデンの場合は、05年9月ダニーデン市で開かれた「2005ダニーデン日本祭」の着物展の出展に、小樽市博物館が市民に協力を求めたところ、目標を100点も上回る約300点の着物が寄贈された。また、25周年記念式に合わせ、民間団体の小樽ニュージーランド協会からも40人がダニーデンを訪れた。ナホトカ市との市民交流も歴史を持っている。

小樽市では「財政難で細く、長い付き合いにならざるをえない」とはしているものの、長い交流が産み出した民間レベルの高い意識が、どう2つの姉妹都市交流を支え、発展させていくかが改めて注目されるといえる。



熱心にお茶の点て方を体験するダニーデンの女性=2004年

小樽市

人口：約14万4千人 面積：243.1km²

<http://www.city.otaru.hokkaido.jp/>

小樽市は北海道西海岸のほぼ中央に位置し、海、山、坂道など変化に富み、天然の良港を有し、気候も北海道の中では寒暖の差が小さい海洋性だ。札幌・二セコ・積丹にも近く、自然環境に恵まれ、1880年（明治13年）手宮（小樽）—札幌間で鉄道開通、1911年

（同44年）小樽高等商業学校（現小樽商科大学）が開校し、早くから経済、貿易、学園都市としての歴史を刻んで来た。

国際交流の問い合わせ先
小樽市総務部秘書課

TEL(0134)32-4111

豪州につながった 「東洋のサンモリッツ」

80年前から生きる「新たな発想」

『「極東のサンモリッツに／最後の思出／霊泉に恵まれた好スロープ／御滞在は3日間」——これは昭和3年（1928年）3月1日、秩父宮様の冬のニセコ視察を報じた当時の小樽新聞（北海道新聞の前身）の見出しです』。

アルプスに囲まれた欧州の有数なリゾート地、スイスのサンモリッツとのそもそもの関係について、倶知安町企画振興課主事の竹中真寿美さんが2003年（平成15年）春、社団法人北方圏センターに寄せてくれた原稿の冒頭部分の骨子である。

タイミングを合わせるように同1928年、日本が初参加した第2回冬季オリンピックがサンモリッツで開かれていたこともあって、ニセコ連峰周辺を「東洋のサンモリッツ」と呼ぶ気運が急速に膨らんできた。

それを地域の枠を越えて具体化したのが、サンモリッツとの姉妹都市提携だ。64年（昭和39年）、当時の高橋清吉・倶知安町長がオーストリア・インスブルックでの冬季オリンピック視察の折、急ぎょサンモリッツ市長を訪ねて直談判し、意気を感じたサンモリッツ側の賛同を得、その場で姉妹都市提携が実現した。

海外の都市との姉妹都市提携は、道内では実に札幌と旭川の両市に次ぐ3番目の早さ。しかも、今から約80年前の「極東のサンモリッツ」の発想が“スタート台”となって、最近ではオーストラリア（豪州）からのスキー客の増加、豪州資本の進出—と予想以上に大きな花を咲かせてきた。

人口2万人にも満たない小さな町のこの大きな選択と、その後の着実な国際交流の取り組み、まちづくりへの新たな展開は、今後の国際交流のあり方を考える上で多くの示唆に富んでいる。

4つの交流事業

姉妹都市提携調印後、マラソンの相互参加など、さまざまな人的交流が行われたが、節目になったのが姉妹都市提携35周年の1999年（平成11年）、倶知安町を訪れたサンモリッツ市公式訪問団との間で合意した①スポーツ交流②学生交流③使節団派遣④通信員制度—の4つの交流事業だろう。

スポーツ交流事業の中心は、スキーのインストラクターの相互派遣。隔年ごとに2人ほど冬期間派遣し合っているが、子供たちや観光客を直接コーチすることで、目に見え、肌で



ラフティングで再会を喜び合う両都市の留学生たち
=2004年5月、倶知安町



サンモリッツのインストラクターからスキーを学ぶ子供たち
=2004年3月、倶知安町

感じる交流になっているだけでなく、スキー場の運営や外国人観光客誘致のノウハウなど学び合う点も多いという。

中、高校生の留学交流（1回2～3人）も定着しており、サンモリッツの留学生はホームステイをしながら餅つき、茶道などの日本の伝統文化を学んだり、留学交流をきっかけにドイツに留学を果たした倶知安の生徒が、両都市を結んだテレビ電話中継の際、同時通訳の役割を見事に果たすなど、着実にその成果が挙ってきている。

姉妹都市35周年の記念事業での来日をはじめ、公式訪問はそれぞれ3回を数える。遠距離に加え、財政上の制約もあって、回数に限られるのがネックだが、倶知安町ではスイスの民族楽器アルプホルンをサンモリッツからの寄贈分3本を含め10本を備えて89年（平成元年）に「アルプス音楽隊」を結成、またチーズフォンデュの料理講習会を開くなど、文化交流の根も着実に広がってきている。

また、サンモリッツのトレードマークを下水道のマンホールのふたにあしらったり、分譲団地をサンモリッツ団地と名付けるなど、街づくりにも生かしてきた。

よりユニークなのが他であまり例を見ない通信員制度だろう。それぞれの地に相互に通信員を置き、Eメールなどを活用して、役所では目の届かないような小回りの効く情報交換を行っている。

在サンモリッツの通信員は97年以降の50歳代のライハルト・ポーリンガーさん。倶知安からの来訪者を空港に出迎えるなどのきめ細かな対応が好評という。

活発化する民間の活動

国際交流は町主導の姉妹都市交流にとどまっていない。

2000年（同12年）には町内で通訳など交流活動をサポートする約50人のボランティア団体「倶知安国際支援協会」が発足。今年年間延べ5万人ともいわれる外国からの観光客の接待などのボランティア活動を行っている。

また、倶知安町国際交流協会は外国人を招いて英語教室を開いたり、ホームステイ活動に取り組むなど、同支援協会と相携えて国際交流事業を民間サイドから支えている。

民間による国際交流の好例が、1990年（同2年）同町のジャズ愛好家による「ウインター・ジャズフェスティバル」の開催をきっかけに翌91年、商店主らが発足させた「くっちゃんJAZZフェスティバル実行委員会」の活動。

全道からジャズファンが集まるフェスティバルは、年を追って人気を呼び、2005年（同17年）7月には第16回目の開催となった。本場の米カリフォルニア州高校生選抜バンドを招待したり、日・米・豪3カ国のクラリネットサミットを催すなど国際色も豊かだ。

音楽による町おこしを目指した同実行委員会の活躍は、1999年（同11年）に道の地域文化奨励特別賞に輝くなど、道内のジャズファンのみならず国際交流の面でもさまざまに注目を集めている。

さらにまた、町内の民間国際交流団体「ペルー共和国と交流する倶知安の会」の活動もユニークだ。

同町は「くっちゃんジャガイモ」を特産としているが、94年から「くっちゃん21雪ダルマの会」が、ジャガイモの原産地南米のペルーのタマル市と民間交流を続けてきた。

99年には「ペルー共和国と交流する倶知安の会」を立ち上げ、交流を本格化した。同年から倶知安農業高校とラ・ウニオン校（タマル市）が2週間程度の短期相互留学をスタートさせたほか、農業視察団の来町、羊蹄山登山リレーマラソンには在日ペルー大使館チームが毎年参加し、倶知安町民と親睦を深めるなどの民間交流が行われている。同会では「いずれはタマル市と姉妹都市提携を結ぶのが目標」としている。



スイスの郷土料理—チーズフォンデュ料理の講習会
=2003年7月、倶知安町



「国際交流は今や空気のように自然なものでは…」と語る伊藤・倶知安町長

国際化が育てるマチづくり

「東洋のサンモリッツ」をキャッチフレーズとした倶知安町の長い国際交流の歴史は、民間交流の活発化を生み、小さな町にもかかわらず、「国際都市」としてのマチづくりの土壌を築いてきたといえる。

伊藤弘・倶知安町長は「サンモリッツとの交流や日常的な外国人観光客との触れ合いもあり、今や町の人も外国人という特別な意識を持たなくなった。その意味で、国際交流、外国文化との触れ合いは空気のようなものになったといっても過言ではない」という。

そういった自然な意識の変革、心の中の国際化が、前述のボランティア活動や民間団体によるペルーとの留学生交流といったマチぐるみの国際交流につながってきた。「その根幹になったのが、サンモリッツとの姉妹都市提携」（同町）と言っても間違いはないだろう。

伊藤町長は「国際交流は子供たちに世界への目を開かせ、子供たちの成長が将来のマチの財産になると思う。しかし、財政の制約もあるし、ただ単に仲良くやりましょうだけでは実効が伴わない。経済面などの具体的なメリットを産み出す必要を痛感する」とも指摘する。

豪州ブームで一段と「国際のマチ」に

が、この心配が杞憂に終わりそうな新たな国際化の波がここ1、2年、急激な勢いで同町に押し寄せてきている。

豪州のスキー客が、豪州との時差がほとんどなく、空路8時間でヨーロッパやカナダより近く、しかも世界最高水準の「パウダースノー」が楽しめる「東洋のサンモリッツ」・倶知安の魅力を見つけた。

口コミだけでなく、豪州の旅行者、不動産業者も「東洋のサンモリッツ」のPRに乗り出した。豪州から2004年（同16年）度、スキー客を中心に前年度の2倍の延べ約5万人の観光客が訪れ、05年（同17年）1月には、グラン・ヒラフ（旧ニセコひらふ）スキー場で第1回の豪州豪雪祭が開かれるほどになった。

豪州からの観光客は05年度にはさらに倍増の10万人にのぼるという予測すらある。

スキー客だけではない。同町のスキー場などの買収に乗り出している豪州系企業「日本ハーモニー・リゾート」（東京）が05年7月、道に大規模リゾート施設建設の申請を出した。

計画では05年から15年間かけてニセコアンヌプリにある買収済みの花園スキー場のふもとと31ヘクタールに、スキー場を核に豪州人をターゲットとしたコンドミニウム、ショッピングセンター、宿泊施設など大規模なレジャー事業の展開を図



2000年のサンモリッツへの公式訪問で夢に見たアルプホルンの共演が実現した。

る。

すでに他の豪州不動産が豪州人向けのコンドミニアムを建設、ただちに完売するという“企業・資本進出”も目立ち、地価上昇現象すら起きているという。

こういったことから、倶知安観光協会ひらふ支部は初めて日本語と英語で飲食店パンフレット6万部を作成、町も英語表記のタウンマップ1万5千部を発行した。ペンション経営者が誘い合って英会話の勉強をしたり、ホテル、飲食店では英語のできるスタッフを採用、案内板やバス停の英語表示も増えてきた。

さらに、日本文化を知りたいとの豪州人スキー客らの希望にこたえて後志支庁などが2005年2月、地元高校生による和楽器演奏会などの交流の場を設けるなど、地域ぐるみの国際化の動きが一気に広がってきた。

これを受けて同町は05年6月、豪州人観光客受け入れ態勢を充実させるため、「外国人観光客誘致・受入促進協議会」を設立した。

豪州人経営者による地域づくり団体とも共同歩調を取り、さまざまな誘致PR、観光の環境整備などを図っていく方針で、同協議会では「外国からの観光客はこれからも増加する。さまざまな分野で交流が深まるよう協議会が各団体の橋渡し役になりたい」としている。

加えて日本人スキー客の入り込みも増え、地元観光業者も



オーストラリア人の来訪者の急増で実現を見た第1回豪州豪雪祭
=2005年1月、グラン・ヒラフ（旧ニセコひらふ）スキー場

豪州効果にさらに大きな期待をつないでおり、道も05年中にスキー客、住民の利便を高めるため、同町ひらふと国道5号を最短距離で結ぶ「サンモリッツ大橋」を開通させる。

外国人によるニセコ再発見といえるが、そこには「東洋のサンモリッツ」として早くから国際化を図り、姉妹都市提携の長い経験から地道に国際交流を続けてきた歴史と土壌がある。

具体的な経済活性化、地域おこしへ——「東洋のサンモリッツ」は新たな国際交流、国際理解の“場”として、新展開を見せようとしている。



倶知安のマチでオーストラリアの人々との語らいは、もう日常の風景になってきた
=2004年冬

倶知安町

人口：約1万6千人 面積：261.2km²

<http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/>

「鮮やかに人と自然が輝く“羊蹄中核都市”」一がキャッチフレーズ。スキー場、雪トピアフェスティバルなどを中心にした冬と緑と水の観光地。くっちゃんジャガイモ、倶知安ワインなどの特産物がある。

最近豪州からのスキー客が急増し、一躍脚光を浴びている。

国際交流の問い合わせ先

後志管内倶知安町企画振興課 TEL(0136)22-1121

ロマンスが包み、育て、 そして現在に

人々の心の中でなお生きる 竹鶴氏とリタ夫人

JR余市駅に程近く、スコットランド風の建物が周囲の景色に溶け込んでいるニッカウキスキー北海道工場（余市蒸溜所）。スコットランド民謡「ロッホローモンド」の曲が流れる復元された工場内の旧竹鶴邸と、そのすぐ近くにあるウイスキー博物館を訪ねると、映像とともに日英両国を結んだ二人の「愛の軌跡」が、なお、現在も余市町の人々の心の中に生き続けていることを実感する。

いうまでもなく竹鶴政孝氏はニッカウキスキーの創業者。1918年（大正7年）ウイスキー造りを学ぶため、単身英スコットランドに留学した竹鶴氏は、民謡のロッホローモンドで日本でも知られるスコットランドのストラスケルビン市出身の女性ジェシー・ロベルタ・カウン（愛称リタ）さんと知り合った。

周囲の反対を押し切って、二人は結婚。同社創業を含め、二人は生涯の伴侶として余市町の人々と共に生き抜いた。

リタ夫人は61年（昭和36年）、竹鶴氏は79年（同54年）に亡くなり、二人には名誉町民の称号が贈られたが、余市町国際交流推進協議会会長でもある平井同社取締役北海道工場長は「今なお、想い出以上のものがあるようだ。姉妹都市提携にも結び付いたし、まちづくりにも生かされた。そして、余市の人々に二人とニッカは本当に大切にしている。ありがたいことです」という。

夫人の故郷・ストラスケルビン市と 初の日英の姉妹都市提携

平井同工場長の言葉通り、87年（同62年）、リタ夫人の故郷・カーキンティロッホがその一部になっているストラスケルビン市（スコットランド南西部）のコイル市長から同社を通じて友好関係樹立の希望が余市町に伝えられ、両首長らの公式訪問などによって、翌88年（同63年）10月、同市で日英間で初、道内都市としては今でも唯一の姉妹都市提携のスピード調印となった。



リタ夫人の故郷の旧ストラスケルビン市を訪問した余市町の中学生使節団＝2000年10月

コイル市長が姉妹都市提携を思い付いたのが、竹鶴氏の家族がリタさんの肉親を訪ねた際に運転手がつぶやいた「少女のロマンスが姉妹都市に結びついたらいいね」という一言だったそう。まさに、二人のロマンスは姉妹都市提携という形で、現在によみがえったといえる。

調印翌年の89年（平成元年）に、同社をはじめ町内主要機関、団体、個人からなる民間の任意団体「余市町国際交流推進協議会」、さらに、翌90年10月には「通訳ボランティアの会」も設立され、町ぐるみで交流活動が動き出した。

同市への親善使節団派遣（16人、89年）、同市親善使節団の来町（市長など3人、91年）、「勤労青少年交流プロジェクト」の一環として92年に同市から11人、93年には同町から14人の勤労青少年が相互訪問、95年の同市親善使節団5人の来町などの多彩な人的交流が続けられた。

イースト・ダンバートンシャイア市との再調印

96年（同8年）4月、行政区再編のため、ストラスケルビン市はイースト・ダンバートンシャイア市と合併した。このため、翌97年11月、余市町とイースト・ダンバートンシャイア市はテレビ会議システムを利用して姉妹都市提携に再調印し、改めて友好関係の継続、発展を誓い合った。

2000年（同12年）余市町の中学生6名が同市を訪問、学校の授業に参加したり、茶道や浴衣の着付けなど日本文化を紹介しながら親交を深めた。

翌年には、同市の中学生が来町し、「北海ソーラン太鼓」を楽しむ一方、スコテッシュダンスを披露するなど、順調な再スタートを切った。

さらに、町と余市町国際交流推進協議会は姉妹都市提携5周年を記念して02年9月1日から1週間を「スコットランドWEEK（ウイーク）」とし、作家C・W・ニコルさんの講演会や同市を紹介する写真・絵画展を開催、また、インターネットによるTV会議も開いた。



姉妹都市提携5周年を記念してイースト・ダンバートンシャイア市とインターネットによるテレビ会議をする余市町の中高校生たち＝2002年9月

TV会議では双方の中高校生8人による対話、首長同士の今後の交流に関する意見交換のほか、余市町のバグパイプバンド「余市パイピングソサエティ」と同市の少年少女合唱団がスコットランド民謡「蛍の光」を合同演奏するなど、インターネット時代ならではの居ながらにしての交歓風景を繰り広げた。

財政難などの経済的なネックからその後の相互訪問は“一休止状態”だが、インターネットによるTV会談などの手法はこれからの国際交流の1つのあり方を示唆しているといえる。



余市名物の「北海ソーラン太鼓」に挑戦するダンバートンシャイア市からの中学生使節団＝2001年6月、余市町

姉妹都市交流から生まれた文化活動

姉妹都市交流、それに関連する国際交流事業を町と協調しつつ、民間の任意団体として主体的に取り組んでいるのが、姉妹都市提携翌年の1989年（平成元年）に設立された余市町国際交流推進協議会である。ニッカウヰスキーをはじめ町内の30団体、個人20人が加盟（2005年5月現在）し、国のふるさと創生基金の一部を基本財源に個人10千円、法人同2千円の会費で自主運営されている。

姉妹都市提携による訪問団の派遣、国際交流事業に関して個人3万円、団体10万円の奨励金助成、ホームステイなどによる訪問団の受け入れ、ボランティア通訳の派遣、さらに「よいち国際交流NEWS」を発行し、活動内容の理解を求める試みも行われている。

このほか、英国の英語指導助手による町内の小学生を対象にした年2回の英会話交流会開催も楽しい催しだが、前述した5周年記念事業のインターネットTV会議などアイデアを凝らしたさまざまな交流事業に取り組んでいる。

その中でユニークなのが5周年事業の一環として、02年9月の「スコットランドWEEK（ウイーク）」に行った英国産オークの記念植樹だ。

1902年（明治35年）の日英同盟100年を記念して国レベルの日英グリーン同盟が結成され、英国オークの植樹運動が始



2年前に植樹したオークの木を背に記念撮影する元リタ幼稚園の園児たち＝2004年9月

まったが、イースト・ダンバートンシャイア市と姉妹都市提携を結んでいる同町は、在日英国大使館に植樹運動への参加を申請した結果、同町でのオーク植樹祭実施が実現した。

リタ夫人が叔母の遺産を寄付したリタ幼稚園の近くで園児14人らが植樹したが、以来毎年10年間、植樹したオークの木と園児を写真撮影して「イングリッシュオークが見つめたコミュニティ」と題するアルバムを作成、お互いの成長と両国の友好を確認しようという独自の試みも行っており、他にはあまり例のない国際交流事業になっている。

道内唯一のバグパイプの会も健在

旧ストラスケルビン市との姉妹都市提携翌年の1989年（平成元年）、初めて同市を訪れた余市町の親善使節団一行は、スコットランドの民族楽器バグパイプの演奏を直に聴いて感動した。



姉妹都市提携5周年を記念して開かれた町民交流会「スコットランドのタベ」でバグパイプを演奏する余市パイピングソサエティの人々＝2002年9月

中でも現在も余市パイピングソサエティ会長を務める新谷邦夫・町助役は「言葉が分からなくても音楽は心を通じ合え、文化交流に最適」と考えた。

帰国後、有志を募って教材などを集め、北海道では初のバグパイプバンドとなる同ソサエティを立ち上げた。団員は27人。さらに91年（同3年）同推進協議会が100万円を助成してバグパイプ5台、スネアドラム2台を購入、賛助会員に交流奨励金を支給し、同市でホームステイしながら2カ月間バグパイプスクールで研修を受けさせるほどの熱の入れようだった。

町内の各種イベントでバグパイプの演奏、パレードは余市の名物ともいえるほどだ。

関東、関西のパイピングソサエティとの合同演奏や同じく姉妹都市提携の関係でバグパイプを入手した小樽市や十勝管内池田町との交流も一時行われた。

今は高齢化などもあって団員は6人に減少したが、町のイベントだけでなく、土日にはニッカウキスキーの工場見学に訪れる観光客にボランティアで演奏しており、町に根付いた姉妹都市交流の具体的な成果となっている。

まちづくりの中核「リタロード事業」

JR余市駅と町役所のほぼ中間にあるリタ夫人ゆかりのリタ幼稚園。そこから国道229号線を挟んで立てられている道路標識には次のような文章が書き込まれている。

「リタロード／ この道路は竹鶴リタ夫人にちなんで名づけられました。リタさんはスコットランド生まれで余市をこよなく愛した人でした。／ リタロードを守る会」

余市町河川改修事業に関連して町は、国、道の協力を得て、1991年（平成3年）からJR余市駅を起点にニッカウキスキー

北海道工場、宇宙記念館、リタ幼稚園、余市橋（通称リタブリッジ）を経て町役場までの道道、国道229号線1.3キロ間を「リタロード事業」として街路再生に着手した。

その名の通り「スコットランドの様式と大きな夢を実現した竹鶴氏と、それを支えたリタ夫人が共に愛し続けた余市の歴史と文化、風土を生かした個性的なまち並み」「スコットランドをイメージしたロマンを伝える散歩道」が基本テーマ。

姉妹都市との経済交流の一環として起点のJR駅舎に合築したエルザプラザにはスコットランド物産を展示。また、スコットランドレンガを輸入して、歩道、消防庁舎、宇宙記念館などの広場に使用しているほか、スコットランド風の街路灯の設置、スコットランドのヒースの植栽など、2003年（同15年）まで、精力的な街路改修が行われ、すっかり余市の“新しい顔”となった。

リタロードに関連して、「余市のまち並景観を考える会」に続いてボランティア組織の「リタロードを守る会」も発足、緑化や清掃活動に取り組み、03年度には国土交通省から「手づくり郷土賞（地域活動部門）」の大臣表彰を受けた。

リタロードは正に、ハード、ソフト両面で余市の町に息づいているといえる。

同町出身の日本人初の宇宙飛行士・毛利衛さんを記念し、



「国際交流」の夢をはぐくむ余市宇宙記念館

1996年（同8年）に総額27億円を投入して建設された余市宇宙記念館も壮大な国際交流の場といえなくもない。

そして、その隣にあるニッカウヰスキー北海道工場には年間26万人の観光客が訪れ、7千人程度が外国人だという。スコットランドにはなお、同社のベン・ネヴィス蒸溜所もある。

リタロードは二人のロマンが今に生きる「国際交流の場」といっても過言ではない。



スコットランド風の街路に改修されたリタロード＝JR余市駅前

余市町

人口：約2万3千人 面積：140.6km²

<http://www.town.yoichi.hokkaido.jp/>

札幌市から53.7キロ離れニセコ積丹小樽海岸公園の一部に位置する。古くから景観と漁場に恵まれ、フゴッペ洞窟など数多い遺跡の観光資源への活用も図られている。ニッカウヰスキー、宇宙飛行士・毛利さん、スキーの笠谷、舟木両選手の出身地に加え、

全道一のりんご生産地、北海道の文化遺産「正調ソーラン節」発祥の地として北海ソーラン祭りも有名。国際交流の問い合わせ先
余市町企画政策課（国際交流推進協議会）
TEL(0135)21-2111

米中両国との心通う出会い

岩見沢市の国際化と国際交流の取り組みには、姉妹都市交流、中国との友好関係を中心に、それを支える民間の国際交流団体の活動などがある。同市は、市民が主体となった国際交流や国際協力をサポートすることを主眼に置いている。

姉妹都市交流では、市民レベルでの友好親善を進め、青少年交流によって異文化の理解、自国文化の再認識を通して、国際感覚を持った人材を育てることを重視し、中国との交流では、教育交流、経済交流のほかに友好都市提携も模索中だ。

青少年育成を目指す姉妹都市 —米ポカテロ市

1983年（昭和58年）米アイダホ州ポカテロ市は、開基100年を記念して、戦後驚異的な復興を成し遂げた日本との交流を希望して、姉妹都市の紹介を北海道に求めてきた。これを受けて道はポカテロ市と共通点の多い岩見沢市に白羽の矢を立てた。

具体的には両市は同じ北緯43度に位置し、開基も岩見沢市は1882年、ポカテロ市が1883年と1年しか違わない。交通の拠点として発展し、主産業が農業であることも共通だ。

道の紹介にポカテロ市から1983年、直ちに姉妹都市提携の申し入れがあり、まずは相互理解を図るために両市間で市の広報や市勢要覧を交換し合い、ボーイスカウトを中心とする手紙のやりとりも始まった。

2年後の85年（同60年）の「国際青年年」を機会に、岩見



彩花まつりで観光おどりパレードに参加したポカテロ青少年訪問団=2004年7月、岩見沢市で

沢市長一行がポカテロ市を訪問した。青少年が国際性を身につけるためにも交流を進め、姉妹都市提携への布石にしたいとの考えからだった。温かい歓迎、交流の結果、「若者にとって姉妹都市提携が国際感覚を育てる上で最善の道」との認識で一致。同年5月ポカテロ市長一行が来日して岩見沢市で正式調印の運びとなった。

交流の中心は、毎年、岩見沢市の中、高校生10数人が夏休みを利用して約2週間ポカテロ市を訪問、同様に同市からも青少年訪問団が岩見沢市に来訪する。

多感な中、高校生には、海外でのホームステイは新鮮だ。その時の経験がきっかけで英語に興味を持ち、アイダホ州立大へ留学する子、全日本英語スピーチコンテストでは最高賞を受賞、自らポカテロ市を再訪する子も出てきている。

毎年、7月中旬の夏祭りの頃にポカテロ市の青少年訪問団がやって来るのは、岩見沢市ではもうすっかり夏の風物詩として定着している。市内の一般家庭がホストファミリーになり、学校訪問、文化祭参加などのほか、国際交流4団体が中心となった日本文化の体験、彩花まつりの観光おどりパレードに参加し、市民との交流を深めている。

また、5年おきに一般市民による相互訪問交流も行われている。2004年（平成16年）までの19年間で、295人の市民がポカテロ市を、同市からも270人が岩見沢市を訪問した。

05年7月には姉妹都市提携20周年を記念して、ポカテロ市から医師や大学教授など19人から成る親善訪問団が岩見沢市を訪れ、ホームステイをしながら、書道や生け花などの日本文化を体験、岩見沢市長らと懇談し、20周年を機に改めて親交を深め合った。



岩見沢市で彩花まつりに参加し、踊りを楽しむポカテロ市の高校生たち=2004年7月

これらの分厚い人々の往来で岩見沢市だけでも、200世帯以上の家庭がホストファミリーを経験したことになり、市民の国際感覚の深まりにも好影響を与えているという。

中国で稲作指導に半生を捧げた原さん

中国との交流は、1963年（昭和38年）に発足した民間団体「日中友好協会岩見沢支部」（現在は岩見沢日中友好協会に改名）の活動が中心だったが、同市出身の（故）原正市さんが行った国際協力がなければ、今の中国との交流はなかったといえる。

原さんは、北海道庁、北農中央会を64歳で退職後、2002年（平成14年）に85歳で亡くなる直前まで、中国の稲作指導にその生涯を捧げた人だ。

この原さんの生き方に感激したのが岩見沢市で原さんの筋向いに住んでいた島田ユリさん。「この事実をたくさんの人に知ってもらいたい」と覚えたてのワープロで1999年、400ページを超える「洋財神 原正市」の伝記を著した。

やや長いが引用してみると―。

「正市が初めて中国を訪れたのは1979年（昭和54年）6月。日中農業技術交流協会会長荒哲夫が団長で、大学教授、農協職員、農機具メーカーの役員など9名からなる農業視察団の副団長としての訪問だった。小雨のなか、視察団は中国の穀倉地帯といわれる遼寧省の広大な水田の一角を訪れた。案内役の現地の市幹部と視察団一行はあぜ道に立ち並んだ。周りには農民が老人や子供まで引き連れて興味深げに遠巻きしていた。と、そのとき、正市は靴を脱ぎ裸足になって田んぼに入り、身を屈めて土を手にくった。遠巻きに農民の間から、どよめきが湧き起こった。正市にしてみれば日本でいつもしているように、土壌を確かめたかっただけだったが、階級意識の強いこの国の農業技術者が決して農民に見せることのない姿だったから、農民の驚きは、たちまち素朴な感動に変わった。…水田の視察が終わり、事務所にもどると、正市は一人だけ別の部屋に通された。勧められるままに長椅子に腰をかけると、足元に湯を張った花模様の大きな洗面器が置かれ、四十代と思われる男が笑顔で正市の足を静かに洗いはじめた。正市は戸惑い、手で払うように断ったが、男は洗い続けた。洗い終わると、笑顔の婦人から真新しいタオルが手渡された。当時、中国の人々の生活はおしなべて貧しかった。目に見えるところに真新しいものなどなかった。そんな中でのタオルの白さは正市の目に痛いほど染みだ。今度は正市が感動した。（この人たちを幸せにしたい。ここで自分の技術を役立てよう）正市の胸にその思いが、たぎり始めた。…」

原さんは、畑苗移植栽培技術の専門家として中国に迎えられ、黒竜江省を皮切りに中国33省のうち30省を21年間で63回も訪問、水稻の栽培技術を教え続けた。中国に滞在した日数は、1千800日を超えている。その結果、中国各地における



1997年「荣誉公民」の称号を受け中国・承德市隆化県に建立された「原正市先生示範田」石碑を背に、記念写真を撮る岩見沢市訪中団＝2004年9月

米の収量は、飛躍的に伸びた。

黒竜江省を例にとると、水田面積が20万ヘクタールから7倍の140万ヘクタールに増え、面積当たり収量が2倍、総生産量は14倍になった。中国全土では、原さんの指導により、米が200万トン以上増産されたといわれている。

この実績と、自ら裸足で水田に入り指導する姿から、中国の人々から「洋財神（ヤンサイシェン）」（外国から来て懐を豊かにしてくれた神様）と呼ばれ、慕われた。

この功績に対して、中国国家政府や地方政府から数多くの表彰を受け、96年（平成8年）中国政府から外国の個人に初めて贈られた胸像が、母校である岩見沢農業高校に設置された。

このような原さんの稲作指導が縁となり、岩見沢日中友好協会が高校生派遣事業を実施するなど、中国各地との交流が行われている。

市内東山総合公園内にある「日中友好の並木道」は、97年北京毛白楊の接ぎ木40本が、原さんを通して、北京林業大学から寄贈されたのが始まりで、その後、市民の手で植樹を繰り返して現在の姿になった。

2004年（同16年）6月、中国国家外国専門家局副局長の陳陽進氏を団長とする訪問団が、原さんの胸像に献花するためわざわざ岩見沢農業高校を訪れたほどだ。

同年9月渡辺岩見沢市長は、中国国民に尊敬された原さんの築いた絆を継承するために、岩見沢日中友好協会とともに中国天津市津南区、河北省承德市、遼寧省瀋陽市を訪問し、各地で熱烈な歓迎を受けた。

これをきっかけにして今後、友好提携、教育交流、経済交流などさまざまな分野での国際交流が期待されている。

国際交流 4 団体のそれぞれの活動

岩見沢には大きく分けて4つの民間団体があり、互いに連

携を取りながら、国際交流を推進している。簡単に紹介してみると一。

「岩見沢国際交流市民の会」

外国人と市民レベルの国際交流を図る目的で、1992年（同4年）に設立された。活動は、同市を訪れる外国人のためにホストファミリーとしての受け入れや国際交流を進めるための講演会の開催、外国人を招いての茶道を楽しむ会、市内でのバーベキューパーティ、外国人対象の日本語教室などを行っている。ポカテロ市をはじめとする海外からの訪問客の通訳もしている。

「岩見沢日中友好協会」

63年（昭和38年）、「思想・信条を超え日中友好を原点」をモットーに、日中友好協会岩見沢支部として発足、97年（平成9年）現名称に改め、活動を継続している。

原さんが中国との懸け橋となったことで、中国を知るための市民開放講座、中国家庭料理講座の開催、「これからの日本と中国」をテーマとした中学生対象の作文募集、表彰のほか、中国人留学生の支援、高校生・農業指導者の中国派遣事業などを在札幌中国総領事館と連携をとりながら、取り組んでいる。

「国際ソロプチミスト岩見沢」

管理職、専門職に就いている女性の世界的組織で、人権と女性の地位を高める奉仕活動をしている。国際交流活動にも積極的に取り組んでおり、ポカテロ市からの訪問団との日本文化体験交流（華道、着付け、踊り、茶道など）を94年（同6年）から実施し、喜ばれている。

「姉妹都市岩見沢ポカテロ会」

姉妹都市提携5周年の際に、ポカテロを訪問した人々が中

心となり、92年（同4年）に設立された。主な活動は、同会のホストファミリー委員会によるホストファミリー未経験者への情報提供や協力が中心だ。

同市のアンケート調査によると、一度受け入れを行ったホストファミリーの9割を超える家族が再度引き受け希望を持っているといい、同会の活動成果がはっきりと出ているといえる。

また、テレビ会議システムによるポカテロとの交流会、日本文化体験の催しを行っている。さらに活動はポカテロ市だけにとどまらず、国際交流の輪を広げるための講演会開催など広範囲な事業に取り組んでいる。

ただ、ポカテロ市では民間団体「ポカテロ姉妹都市協会」が青少年訪問団交流の窓口になっているが、岩見沢市では行政主導で、国際交流4団体が協力している形。同市は、いずれ、民間団体が窓口となり民間レベルの交流を進める体制に持って行きたい、としている。



「国際ソロプチミスト岩見沢」が開催したポカテロ青少年訪問団との日本文化交流（きもの着付け教室）＝2004年7月、岩見沢市で

岩見沢市

人口：約8万3千人 面積：204.7km²

<http://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp/>

岩見沢市は、札幌から約40分、新千歳空港から約1時間の距離にあり、幹線道路が交差する交通・流通の要所として発展。基幹産業は農業であり、こだわりの「情熱米」をはじめ玉ねぎ、ゆり根、じゃがいもなど多くの特産品が生産されている。2006年3月

までに隣接する空知管内の北村（面積96.4km²、人口約3千600人）、栗沢町（面積179.8km²、人口約7千人）と合併する予定。

国際交流の問い合わせ先

岩見沢市役所総務部市長室国際交流係 TEL(0126)23-4111

「赤毛のアン」に託した マチ再生

「アンの故郷」と「星の降る里」との出会い

1955年（昭和30年）のピーク時には市内に5山の炭鉱を数え、炭都とも呼ばれた芦別市。だが、その後の国のエネルギー政策の転換に伴って、92年（平成4年）の三井芦別炭鉱の閉山を最後に約95年にのぼる炭鉱の歴史に終止符が打たれた。

炭鉱に変わる“町の顔”として市が着目したのが、全市の9割が深い森、澄んだ大気、降り注ぐような星空—という炭鉱とは対照的な豊かな自然だった。

84年（昭和59年）に同市は「星の降る里」を宣言、3年後の87年には環境庁が全国の市町村を対象に行った「スターウォッチング・星空の街コンテスト」で「星空のきれいなまち108」の1つに選ばれた。

2年後の89年（平成元年）、「星空のきれいなまち108」の市町村が実施母体となり、第1回「星空の街・あおぞらの街」全国大会が芦別市で開かれるまでになった。

その「星の降る里構想」の中で、露頭炭鉱跡地と周囲の森を生かしたテーマパークとして浮上したのが、90年（同2年）7月にオープンした第三セクター「星の降る里芦別」経営のカナディアンワールド。

石炭に代わるまちづくりの中核—観光の目玉として気候、風土の似ている、「赤毛のアン」の作者ルーシー・M・モンゴメリの故郷（カナダ）と小説「赤毛のアン」に白羽の矢を

立てた。

具体的には、芦別市に本場カナダ・プリンス・エドワード・アイランド州シャーロットタウン市の国立公園にある、グリーンゲイブルズ（アンの家）と寸分変わらない建物や19世紀のカナダの田園風景と街並みを再現した。文字通りメルヘンチックな“アンの世界”を日本で初めて演出したテーマパークだ。

開園に伴って、シャーロットタウン市の小学校から絵が提供されたり、芦別市民吹奏楽団がシャーロットタウン市で演奏会を開くなどの交流が始まった。こういった3年間の交流実績と芦別市からの要望が実を結び、93年（同5年）7月、両市の間で正式な姉妹都市提携に至った。

テーマパーク造成による新たなまちづくりと、その小説の舞台が現実の姉妹都市提携に具体化したもので、その経緯は道内の国際交流でも極めてユニークなケースといえる。

シャーロットタウン（カナダ）との 姉妹都市交流

芦別市は90年、国のふるさと創生基金を元に「まちづくり人材育成事業」と「国際交流促進事業」をスタートさせた。例えば、中学生の海外派遣の場合、自己負担5万円以外の費用を助成するシステムで、同年発足した民間の芦別市国際交



「赤毛のアン」との出会いを作ったカナディアンワールド。今でも市民公園として人気が高い



シャーロットタウン市を訪れすっかり仲良くなった芦別市の中学生たち=2004年10月



芦別市で豆腐の作り方を体験するシャーロットタウン市からのジュニア使節団の中学生=2004年6月

流協会の積極的な活動とも相まって、姉妹都市関係は順調な滑り出しをみせた。

主な交流内容は①中学生のカナダ派遣とシャーロットタウン市からのジュニア使節団の受け入れ②国際友好ジャンボかぼちゃ大会の開催③カナダ・デーの記念植樹——など。

中学生のカナダ派遣事業は同国際交流協会が主催して、2001年（同13年）の米同時多発テロ事件時を除く毎年、中学生5人、引率者1人の6人が2週間程度シャーロットタウン市を訪問。ホームステイしながら授業に参加し、本物の「アンの家」を見学する一方、日本文化紹介のプレゼンテーションなどを行っている。

05年（同17年）で派遣された中学生は計55人に上っているが、充実した訪問になるよう英会話、マナーなど8回程度の事前研修を行う周知ぶりで、生徒の国際理解、姉妹都市交流に大きく貢献しているという。

シャーロットタウン市からのジュニア使節団は姉妹都市提携時の来訪以来途絶えていたが04年6月、久々に中学生5人、引率者1人が2度目の来芦を果たした。同じくホームステイで日本の家庭を肌身で感じ、カナディアンワールド公園の見学、豆腐づくり、華道などの日本文化体験や滝里湖オートキャンプ場での宿泊交流会を楽しんだ。

ただ、両市は経済、財政問題なども考慮し、「無理をせず、息長く交流を続けるため、05年から隔年で交互訪問することになった」（芦別市）という。

手づくり交流のジャンボかぼちゃ大会

今では全道的に知られるようになった同国際交流協会主催の国際友好ジャンボかぼちゃ大会は「両市共通の農産物を生かした市民参加の交流を」という市民の提案で、姉妹都市提携時の1993年から毎年10月に行われている、文字通りの“手づくり交流”だ。

一般市民の参加はやや低調気味だが、かぼちゃランタン作り、かぼちゃ重量当てクイズなどの催しの中でハイライトは両市のジャンボかぼちゃ重量コンテスト。双方の実物を並べるわけではないが、正式に計った記録を公表して優劣を決める。

04年10月はシャーロットタウン市のジャンボかぼちゃが430キロだったのに対して、芦別市のそれは410キロと20キロの差でシャーロットタウン市の勝ち。

12年間の星勘定は7勝5敗とシャーロットタウン市が勝ち越しているが、なんともほほえましい国際交流といえる。



まち自慢で姉妹都市交流を実感し合う友好かぼちゃ大会=2004年10月

記念植樹でつなぐ心の絆

「炭鉱から観光へ」の市民の期待を担い、姉妹都市提携をも生み出した第三セクターのカナディアンワールドだが、バブル経済の崩壊も逆風となって経営が破たん、1999年（同11年）に入場無料の市営公園として再スタートを切った。

しかし、施設は残り、同公園のテナント会が中心となって運営しているが、同公園への入場者数はなお年間6万人以上を数えている。

市民公園化したとはいえ、そのきっかけとなった姉妹都市提携そのものへの具体的な影響はないという。

毎年7月1日のカナダ・デーには姉妹都市提携を記念してカエドとナラを公園内の「アンの家」の前の小道に植樹し、同時に両市がメッセージを交換するのが慣わしだが、05年（同17年）7月にはシャーロットタウン市長のメッセージに加え、カナダ出身の国際交流員アニータ・リエンさんも参加し、姉妹都市を結ぶ“きずな”を再確認し合った。

まちぐるみの活動圏国際交流協会

姉妹都市提携の3年前に設立された芦別市国際交流協会は、まちぐるみの国際交流を推進する中核的な組織だ。

05年（同17年）3月末現在の会員数は正会員（個人）101人、賛助会員（企業など）42団体。個人は1口2千円、企業は1口1万円の会費で、市役所が事務局を受け持っているが、市も1会員として同国際交流協会に加盟しており、運営費は会費や寄付金。その会員数から見ても分かるように、地域を挙げての民間団体といえる。

すでに触れたように、中学生の派遣事業やシャーロットタウン市からのジュニア使節団の受け入れ、ジャンボかぼちゃ大会の開催、姉妹都市提携記念植樹などは同国際交流協会が主催しているほか、毎年、総会終了後には在芦外国人との交流会（04年には外国人60人が出席）を開催。

さらに年2回程度市民を対象にした中国講座やロシアクリスマス料理講座、カナダ・バンクーバー市内の歩き方講座、外国人による国際理解講座などのさまざまな国際理解の催し、イベントを行うなど、活動の幅は広い。

中でも注目されるのが、芦別国際バスケットボール親善大会だろう。同市では姉妹都市提携前年の1992年（同4年）から国際交流員、翌年の93年から英語指導助手を配置しているが、同国際交流協会は地域に根ざした国際交流を一層広げるため、芦別市との共催で全道約240人の国際交流員、外国語



バスケットボールで親善を深め合った全道各地の国際交流員たち
=2005年4月

指導助手を対象とした芦別国際バスケットボール親善大会を毎年開催している。

05年（同17年）4月の第10回大会には外国語指導助手ら外国青年23人、市内の中高校生65人、ホストファミリー10家族、一般市民13人が参加したが、日本でのホームステイ経験の少ない国際交流員らに期間中ホストファミリーを紹介するなどの配慮も。

同国際交流協会は会報誌「Out Reach」、広報誌「フレンズ」、カナダ派遣事業報告書「O'CANADA」もそれぞれ年1回発行しており、これらきめ細かな活動が人口減、財政難に悩む同市の国際交流をしっかりと下支えしている。

「草の根」の日中友好活動

芦別市の国際交流は「赤毛のアン」に託したカナダとの姉妹都市提携だけではない。1982年（昭和57年）11月、駐札幌中国総領事の同市での講演をきっかけに、民間の芦別日中友好クラブ（現在の会員数は38人、森沢勲・会長）が発足した。

15人前後の会員が自費で2年に1回訪中し、03年（平成15年）には甘肅省蘭州市立敬老院を訪問した際に10万円を寄付したほか、中国各地を訪問して市民レベルの草の根交流を続けている。

これらの地道な友好活動に應えるように同年9月、陳永昌・中日友好協会副会長が外国の元首クラスをもてなす中国釣魚台国賓館で訪問団を招いて歓迎夕食会を開くといった、異例ともいえる“歓待”を示したほどだ。

同クラブは毎年11月の定期総会に駐札幌中国総領事を招いて講演をしてもらっているだけでなく、毎年8月に芦別市主催の中国人殉難者慰霊祭に同総領事を招き、会員と共に献花する活動も行っている。

芦別の炭鉱などで過去に約460人の中国人が殉難したという暗い歴史が、同クラブの活動の根っこもなっており、森沢勲同クラブ会長は「草の根交流はもちろんだが、慰霊祭の意味が忘れられないよう今後も活動を継続していきたい」と語っている。

かつての炭都ならではの地に着いた国際交流といえよう。

芦別市

人口：約2万人 面積：865.1km²

<http://www.city.ashibetsu.hokkaido.jp/>

1893年（明治26年）開拓のクワが入れられて以来、農業、林業、石炭産業を中心に発展してきた。1950年代には炭鉱5山を抱え炭都ともいわれ、人口は一時、7万5千人を数えた。閉山後「星の降る里構想」で再生を図り、1998年（平成10年）から全日本バレーボー

ル女子チームのホームタウン契約、04年（同16年）には全日本女子バスケットボールチームの合宿が行われるなど「合宿の里」としても知名度を上げている。国際交流の問い合わせ先 芦別市総務部企画課秘書係 TEL(0124)22-2111

「社団法人」が主役で進める 多彩な活動

米スプリングフィールド市との 姉妹都市交流

スプリングフィールド市（米マサチューセッツ州）との交流は、北海道とマサチューセッツ州の友好交流（1990年に姉妹提携）をきっかけに、当時の横路孝弘北海道知事の橋渡しによって最初は友好都市としてスタートした。

その後、双方の市民が相互訪問を重ねた結果、93年（平成5年）8月に滝川市で姉妹都市提携の調印となった。

スプリングフィールド市は、州都ボストンの西140キロに位置する人口約16万人、周辺を含めると60万人という州西部の中心都市。滝川市とほぼ同緯度で冬は雪が積もる。

18世紀後半、農業から工業に産業をシフトしたが、とりわけ南北戦争（1861～63年）の兵器として主要な役割を果たした「スプリングフィールド銃」の製造基地となったことは忘れがたい。

また、バスケットボール発祥の地としても有名なほか、現在は近郊を含めて16の大学や美術館、図書館、歴史館などが

あり、学術・文化都市の雰囲気とともに市民の文化意識も極めて高い。

滝川市は1990年（同2年）の開基100年を記念して中高校生による「ジュニア大使」の海外派遣事業を創設し、98年度から社団法人滝川国際交流協会が単独事業として継続実施している。中でもスプリングフィールド市への派遣回数是最も多く、2005年（同17年）3月までに11回、派遣人数も100人を超えている。

この間、02年に滝川西高とスプリングフィールド工科高による姉妹校提携が実現し、03年12月からほぼ1カ月間、滝川西高から2人の生徒が同工科高校に派遣されたのに続いて、04年6月、男女各1人の同工科高校生と随行の教師が2週間、滝川西高に「入学」。生徒は西高の制服を着てホームステイも経験するなど、滝川生活をエンジョイした。

さらに、インターネット時代を反映して姉妹都市提携10周年の03年12月、両校はインターネット会議でお互いの近況を報告し合った。「スペイン語、ラテン語など外国語の選択肢が広い」という同工科高側に対して、滝川西高側が「わが校



姉妹都市提携10周年を記念してスプリングフィールド市を訪れ、「よさこい」の踊りを披露する滝川市のジュニア大使訪問団＝2003年10月



和太鼓の演奏で歓迎を受けるスプリングフィールド工科高の短期留学生=2004年6月

の野球は結構強い」と応じるなど、国境を超えた若々しい教育交流となっている。

マラウイ、ブータンからの農業研修員の受け入れ

滝川市の国際交流の幅の広さを示す一面として、同市と社団法人滝川国際交流協会が国際協力機構（JICA）の委託で実施している、途上国からの研修員の受け入れが挙げられる。

市内には道立の花・野菜技術センターや植物遺伝資源センター、ホクレン種苗センター、さらに農家の主婦らが営む農産物加工施設などが集積しており、農業研修には打って付けの環境。

それを生かして西アフリカのマラウイ共和国からの研修員受け入れが2000年（同12年）度に始まり、04年度で当初予定していた5年間を経過したが、05年度も継続している。毎年2、3人が4カ月間、畑作技術や農業組織、果樹栽培、加工技術などの研修を行い、併せて日本文化も体験してもらおう



マラウイ共和国で日本での研修の成果をフォローアップする滝川市の農業技術専門家派遣団=2004年1月

という内容だ。

同共和国は面積12万平方キロで北海道と九州を合わせた広さ。人口は1千100万人。国民の80%以上が農業に従事する農業国で、滝川市への研修員は祖国では農業普及員などの指導的な立場の人がほとんどだ。

この研修をフォローアップする試みとして04年1月には、JICAの委託で同市の農業技術専門家4人をマラウイに派遣した。4人は前年の同市での研修員の故郷を訪問、約1カ月間にわたって、果樹・畑作などの技術指導を再度行い、また現地の農業事情なども調査した。05年1月にも第4回目の派遣団が同国を再訪している。

04年の研修にはマラウイのほかに新たに南アジアのブータン王国からの研修員（1人）が加わった。農業研究所の研究者で主に野菜栽培が研修の中心だが、05年3月には同協会の招きで同王国の知事ら3人が農業視察で来滝し、交流の輪はさらに広がりを見せている。

市民に母国をアピールするモンゴルからの留学生

滝川市にある國學院短大にはモンゴル国から5人の留学生が在籍している。東京の國學院大に研究員として招かれたモンゴル国立人文大の教授の働きかけで、同人文大の学生受け入れが02年度から始まった。

留学生は同短大の大学祭でモンゴル特有の移動式住居ゲルを造って公開、郷土料理を披露したり、市内の小学校でモンゴルの子供たちの風景画を紹介するなど、モンゴル文化を滝川市民にも知ってもらおうと懸命―。新たな国際交流の芽も膨らみ始めている。

全道的にも稀な社団法人滝川国際交流協会の活躍

姉妹都市との交流、JICA委託の研修員の受け入れなど多彩な国際交流、国際理解活動を具体的に推進しているのが、社団法人滝川国際交流協会（前田康吉会長）だ。

1990年（同2年）民間の任意団体として発足したが、97年（同9年）地方の国際交流団体としては全道的にもそう例のない社団法人として本格的なスタートを切った。

「滝川市民だけでなく周辺地域の住民が主体となって国際交流を推進し、諸外国の人々との相互理解と友好親善を図り、国際的な文化の創造とまちづくりに寄与する」ことを目的にうたっている。

会員の年会費は団体が1口1万円、個人は3千円だが、2004年3月末で101団体、個人は406人にのぼり、文字通りのまちぐるみの組織に成長した。

道内の他地域では会員数の減少がほぼ例外なく大きな悩み



滝川納涼盆踊り大会を楽しむ同市内外の英語指導助手たち
=2004年8月

になっているが、同協会だけは別。もちろん毎年退会者が出るものの、新規入会がそれを上回り、この5年間で会員数は4割も増加、同協会の活動がいかに地域住民の理解と支持を得ているかを浮き彫りにしている。

道内の多くの自治体で任意団体の国際交流協会はあるが、1991年に許可された財団法人札幌国際プラザは規模、予算などから別格としても、社団法人滝川国際交流協会は組織のあり方、多彩な活動などから、84年（昭和59年）に財団法人化し、幅広い活動を続けている北海道国際交流センター（函館市）と並んで全道的にも特筆すべき存在といえる。

社団法人の性格上、滝川市からの補助金と会費収入などが活動財源で、職員数は5人。同協会の職員1人、外国人の国際交流員1人のほかに事務局長、事務局次長ら3人は同市職

員で、実質的に専従ともいえる分厚い態勢となっている。

行政、民間双方の国際交流事業を推進する“中核的な実働部隊”の性格を持っているわけで、同市は職員の人件費を負担する一方、さまざまな民間団体、市民の力と知恵を借り、“官民協働”で地域の国際交流を発展させていこうというユニークな試みを実践に移している、といえる。

活動内容は大きく分けて、①国際交流・協力のための行事、研修、人的交流などの実施②国際交流理解を深めるための各種行事の開催③国際交流・協力に関する調査・研究及び資料の収集・提供④地域の国際交流関係団体との協力、連携及び活動の振興⑤姉妹友好都市との交流の推進⑥その他、法人としての目的を達成するための必要な事業の実施—の6分野。

前述したように、姉妹都市のスプリングフィールド市へのジュニア大使派遣は、社団法人化とともに同協会の単独事業として取り組んでいるし、JICAの委託でマラウイ共和国からの農業研修員を受け入れ、合わせて同共和国への研修結果のフォローアップのための専門家の派遣などもすべて市と同協会の共同作業。

さらに、同協会は音楽などのチャリティーライブの収益金を同共和国へ寄付したり、帰国した同共和国の研修員の農場を訪ねる一般人対象の「スタディ・ツアー」も実施するなど、その積極的な活動は全道的にも高く評価されている。

このほか、同協会は国際交流事業として在住外国人と市民が親睦を図る「国際交流の夕べ」、モンゴル人留学生も参加し、遊びながら国際交流を楽しむ国際交流員企画の「サマーファンデー」や「ファミリークリスマスパーティー」、国際協力事業としてはさまざまなマラウイ関連のイベント、国際理解事業では英語、韓国語、スペイン語、フランス語、中国



国際交流員企画の「サマーファンデー」で水風船ゲームを楽しむ在住外国人と滝川市の人々=2003年8月



楽しみながらスペイン語講座で学ぶ子供たち
=2004年8月

語など各国の語学・会話講座（前、後期の2期で1講座50分、1期18回）などに加え、国際理解茶話会、フィリピン、マラウイ、メキシコなどの「世界の料理教室」も主催している。

さらに国際理解教育支援事業では国際交流員の教育現場への派遣はもちろん、同市内の丸加高原での中高校生のための英語キャンプの主催、ボランティア通訳の登録、派遣——など、活動の幅広さは相当なものだ。

また、同協会が関係したイベントや事業は実施団体に報告書の提出が義務付けられており、年6回発行の協会ニュース



スプリングフィールド市を訪れ、堂々とあいさつする滝川市のジュニア大使訪問団=2003年10月

「TIEA'S ROOM」でもその活動ぶりがPRされる。

社団法人形式による地域の国際交流、協力事業は、独立した組織の財団法人北海道国際交流センター（函館市）とはまた一味違う“滝川方式”として、注目されよう。

ボリビアに手を差し伸べる「イリマニの会」

「イリマニの会」は長崎県出身で、地元や留萌の保育園で保育士を勤めた北浦久美子さんが、1992年（平成4年）から2年間、南米ボリビアで青年海外協力隊員として活動、その経験を基に94年に発足させた。

北浦さんが同会の現地代表を務め、保育園運営などでボリビアの貧困地域の救済を図ろうという非政府組織（NGO）だ。

滝川市に事務局、札幌、北見、関東、九州の4カ所に支部を置き、100人余りの会員の会費、バザーなどでの現地の民芸品、絵はがき販売による収益金、寄付などを資金に現地で数カ所の保育園を運営し、支援に当たってきた。

その活動は滝川高校生徒会が2000年（同12年）に地域貢献委員会を発足させ、空き缶回収、学校周辺のゴミ拾いなどの活動を通して「イリマニの会」に協力をするという広がりを見せた。

こういった活動が評価され、「イリマニの会」は02年に胆振管内壮瞥町・昭和新山国際雪合戦実行委員会と共に「世界に開かれたまち（民間国際交流団体部門）」として地域づくり総務大臣表彰を受けた。さらに、翌年の03年には毎日新聞社から第15回毎日国際交流賞も受賞した。

「イリマニの会」の滝川市の事務局を預かる代表者は名寄市に転居したが、滝川市、社団法人滝川国際交流協会、國學院大學、「イリマニの会」、滝川高校などさまざまなレベル、団体などの複合的な国際交流活動とその相互作用による活動の活発化は、他都市ではあまり例を見ないほどの膨らみと厚みを感じる。

滝川市のありようは、財政難などで国際交流事業の停滞を余儀なくされている他自治体にとって、“励み”になる何かを持っているといえよう。

滝川市

人口：約4万6千人 面積：115.8km²

<http://www.city.takikawa.hokkaido.jp/>

北海道のほぼ中央部、石狩川と空知川に挟まれた平野部に位置している。1890年（明治23年）に北海道庁令第1号で滝川村戸長役場が置かれ、入植した屯田兵によって開拓された。昭和に入って赤平、芦別などの石炭輸送が発展の基礎になったが、その後の

石炭産業の衰退によって打撃を受けた。現在は農業、商工業を主体に恵まれた自然環境の中で、都市機能の整備を進め中空知の中核都市となっている。

国際交流の問い合わせ先
社団法人滝川国際交流協会 TEL(0125)23-1234

「ひとは宝物」を 官民一体で推進

草の根交流から生まれた姉妹都市 —アボツフォード市(カナダ)

1998年(平成10年)9月24日、深川市で行われたアボツフォード市(カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州)との姉妹都市提携調印を特集した「広報・ふかがわ」は、「誓い合う友好親善の絆」と共に、「積み重ねた市民レベルの交流が実を結ぶ」「草の根交流の大切さ実感」という見出しを付けた。

その言葉通り、同市にある拓殖大学北海道短期大が90年、アボツフォード市のフレーザー・バレー大と大学間交流を始めたのが、そもそものきっかけで、両大学の関係は94年、その後の職員や学生の相互訪問などによって姉妹校提携にまで進んだ。

大学の姉妹校提携が、姉妹都市に発展するケースはそう珍しいものではないが、深川市の場合は、市民交流がそれを包み込むような形になったのが、特徴といえる。

「地域と共にある大学」という同短大の姿勢もあるものの、派遣されてきたフレーザー・バレー大の職員、教授の人たちもさまざまな市民講座や英語教室に出向き、一方、市民も積極的に留学生のホームステイを引き受けるなど、交流は大学キャンパスを越えて市民の中に広がっていった。

95年には官民一体で国際化推進懇話会を開催、翌年には「市民同士の交流のきっかけになれば…」と市民交流調査団がカナダを訪問、そして、97年には民間による深川国際交流協会も設立された。

さっそく、同年にアボツフォード市に第1回青少年交流訪問団、親善交流訪問団を派遣、さまざまな市民レベルでの友好を深め、その積み重ねを通じて98年(同10年)の姉妹都市提携の調印に至った。

調印式にはアボツフォードから市長以下16人が深川市を訪れ、同協会主催の「市民による歓迎広場」には500人以上の市民が出迎える、という熱い交歓風景が繰り広げられ、草の根交流の成果を浮き彫りにした。



姉妹都市の盟約書を取り交わした深川、アボツフォード両市の市長
=1998年9月、深川市で



アボツフォード市を訪れた深川市の公式訪問団の一行
=2000年8月

さまざまな夢はぐくむ出会い

交流は色々なレベルで行われている。公式訪問は「急がずに息の長い交流」をモットーに2年間隔で交互に実施する方式が採られた。

2004年(同16年)7月の河野市長以下10人による公式訪問団はアボツフォード市との交流だけでなく、農場やカンントリーマーケット、ブドウ園、ワイン工場などを視察、さらに、身体障害者なども参加するブリティッシュ・コロンビア州のサマー・ゲームで、レクリエーション・スポーツのイベントのあり方などを見学し、今後のまちづくり、行政に生かすスケジュールが組まれている。

一方、1997年(同9年)から毎年行われてきた中、高校生による青少年カナダ交流訪問団は、2001年から高校生を対象にした8週間の交換留学事業を分離し、実施されてきている。

2004年夏の深川国際交流協会による青少年カナダ交流訪問団には5人の中学生が参加した。その報告書は、半月間のホームステイや乗馬、ハイキングなど子供たちが肌で感じた貴重な体験の喜びであふれている。

「将来は海外の人とかかわる仕事が本気でしたい。今まで本気でやりたいものなんてなかったけど、なりたいことが見つかった」(3年生女子)、「今度は誰の力を借りることなく自分の力でカナダの地をふみ、みんなにまた会いに行きたい」(2年生男子)。

2年前、交換留学生として深川市を訪れたアボツフォードの高校生が「書道の授業は不思議な体験だった。卒業したらまた、深川に来たい」「温泉、刺身などがすばらしかった。帰国したら深川を一生懸命応援するよ」と語った感想と軌を一にしている。

「子供たちの友好、相互理解は10年、20年後に実を結ぶはず」という同協会の願いの“種”が確実にまかれつつあるといえる。

民間が“中核”の活動

すでに触れてきているように、深川市の国際交流の中核になっているのが、民間の深川国際交流協会だ。一般会員94人、賛助会員45団体、学生会員10人で、海外派遣交流部会、受入交流部会、国際理解部会、会員交流部会、広報部会の各部会単位で活発な活動を続けている。

海外派遣交流、受入交流部会は文字通り、姉妹都市交流に関係したホストファミリーなどの民間レベルでの活動だが、国際理解部会はフレーザー・バレー大学教授や英語指導助手などとの交流を図る「外国人とのふれあい事業」、外国人を講師に招いた「国際交流市民の集い」なども開催し、国際理解事業にも力を入れている。

さらに、広報誌「わくわく国際交流」を年2回発行しており、その活動は幅広い。

こういった民間レベルでの国際交流の広がりの中で、さまざまな活動が生まれてきている。例えば、深川市の混声合唱団「コール・メム」のメンバーが中心となった「深川市・アボツフォード市合唱交流団」30人が03年(同15年)12月、アボツフォード市を訪れ、同市の合唱団と初めての合同演奏会を開いた。

米同時多発テロの影響で延期となった試みが2年越しに実現したもので、あいにくの雨にもかかわらず、400人収容の会場は満員になり、初の文化交流は姉妹都市関係に新たな1ページを開いた形となった。

このほか、深川市職員がアボツフォード市で数回にわたって2週間程度の海外研修を行うなど、大学から始まった交流は、さまざまな分野でその枝を広げ始めている。

国際感覚持つ人材育成

深川市の市勢要覧のタイトルは「glocal」である。その理由について、同要覧は『「グローバル」(国境を越えて地球全体にかかわるさま)と「ローカル」(ある地方に限定されていること)の造語。大きな視野を持ち、地域住民が自主的に行動する深川の「協働のまちづくり」が、地域を越えて、より大きな広がりを持つことに期待を込めて表題に用いた』と説明している。

そして、「実りは宝物」「笑顔は宝物」「健康は宝物」「ひとは宝物」「地球は宝物」の5つをまちづくりの柱に据えている。

姉妹都市提携のほかに、その「glocal」の具体例として面白いのが、04年度までの3カ年間、市、北空知森林組合、深川国際交流協会などが共催で取り組んだ「地球の森プロジェクト」だろう。

もともと、開拓以来の米の歴史をまちづくりに生かすため、「ライスランド構想」を持っている同市は、2000年に「2000地球環境米米フォーラム in ふかがわ」を開いた。

在日大使館関係者や市民が共に米作りを体験することで地球環境、食糧問題、国際協力への理解を深めようというもので、この種のイベントは全国で2番目の開催。5月の田植えフェスティバルには53カ国の大使館から96人、9月の稲刈りフェスティバルには45カ国88人が一堂に会した。

この成功を受けて02年度から行われたのが、「地球の森プロジェクト」。同市内にある彩りの丘(旧三瓶山)にシラカバやイチヨウの苗木などをみんなで植樹するもので、28カ国56人の大使館員が植樹祭や歓迎レセプションに参加した。

同市では「外国の大使館関係者との交流を通じて、国際感覚の育成など人づくりにも効果を挙げた。今後も交流の継続を図り、地域の国際化、活性化につなげていきたい」と自信を深めている。

「ひとは宝物」を具体化する施策として同市は、1989年(平

成年)に人材育成基金条例を制定した。

活力と魅力あるまちづくりを推進するため、必要な財源措置を図るというもので、大きく分けると①国内外の調査研修事業②国内外との交流事業③講演会などの開催事業④国際交流事業⑤地域づくり担い手育成事業一の5事業が対象だ。

交換留学生の旅費の3分の2を助成、青少年カナダ交流訪問団への参加費用の一部負担などのほかに、一般向けの海外研修事業でも地域づくり、農業後継者研修など数多くの分野で助成措置をとっている。

これとは別にユニークなのが、北空知圏振興協議会(深川市、妹背牛町、秩父別町、北竜町、沼田町、幌加内町の1市5町で構成)による「北育ち元気村まちづくり海外研修派遣事業」だ。

「環境と福祉にやさしいまちづくり」(2004年度)などその都度、統一テーマを設け、商業、農業関係者など各方面の人々が海外視察をし、その成果を実際のまちづくりに生かしてもらおうという狙い。

この事業は2004年度で一段落したが、旅費、研修経費は無料といった思い切った内容で、6年間で100人以上が参加した。

「国際感覚を持った人材育成」一さまざまな形で、地域から世界への発信を目指す深川市、市民の試みは、今後も注目していく価値がありそうだ。



すっかりくつろいだ雰囲気になった両市の交歓風景=2004年7月、アボツフォード市で

深川市	
人口：約2万6千人 面積：529.3km ²	
http://www.city.fukagawa.hokkaido.jp/	
市の北部から南に雨竜川、南部は石狩川が流れ、両河川に囲まれた地域は開拓以来、農業を基幹産業とした。「ほしのゆめ」「きらら397」など道内有数の稲作地帯。米、稲、田園を利用、展開する「ライス	ランド構想」をテーマにまちづくりを推進している。 国際交流の問い合わせ先 深川市企画総務部企画課 TEL(0164)26-2228

「福祉」が懸けた 「友好の橋」

世界と結ぶ「健康と福祉のまち」宣言

『本格的な高齢化時代を迎えました。高齢者の保健・医療・福祉は、町政の取り組むべき最重要課題であります。本年度開町50周年を契機に「福祉元年」と位置づけ、「おもいやり明日へ」をテーマとして、町民参加による健康や医療、福祉の実践活動を推進してまいります。—(略)—「町民の誓い」を理念として、町民参加のもと、共に助け合い、心も体も健やかで明るく豊かな住みよいまちづくりに前進するため、ここに「健康と福祉のまち」を宣言します』

これは奈井江町が開町50周年の節目に当たる1994年（平成6年）に制定した「健康と福祉のまち宣言」の一部である。

もともと、同町は地味肥沃な農地を持つ農業地帯だったが、住友奈井江鉱などの石炭産業の進出で農商鉱の町に変ぼうした。ところが、エネルギー需要構造の変革で14山もあった炭鉱が73年（昭和48年）には皆無となり、その後の人口流出で過疎化と高齢化が一気に進んだ。

こういった情勢に対応するため町は79年に奈井江町健康づくり推進協議会、89年（平成元年）には地域医療懇話会を発

足させ、町を挙げて地域ぐるみの福祉対策に乗り出した。

この中で、高齢者福祉先進都市と交流し、共に学び合う必要があるとの認識から、町は93年に「高齢者、障害者にやさしいまちづくりのための国際交流計画」を策定、厚生省のアドバイスでフィンランドのハウスマルビ町が友好都市の候補に挙がってきた。

これを受けて、94年を「福祉元年」と位置づけ、「おもいやり明日へ」をテーマに掲げた町は、町内の医療福祉関係者8人による「福祉にかかわる国際交流調査団」をハウスマルビ町に派遣し、具体的な協議を開始した。

同年8月、「健康と福祉のまち宣言」をうたった開町50周年記念式典にハウスマルビ町のアンナ・カーリナ・ヤーコラ議長を招待、同議長は「ハウスマルビ町の福祉政策」と題して記念講演する一方、北・奈井江町長との間で、友好都市提携を結ぶことで基本合意した。

翌95年（同7年）4月、北町長らがハウスマルビ町を訪問し、正式に友好都市提携に調印したが、周到な準備と町ぐるみの運動に加え、「福祉を目的にした国際友好都市交流は全国でもまれ」（同町）であり、注目されるケースとなった。



奈井江町立国民健康保険病院を視察するハウスマルビの訪問団
=2004年6月



奈井江、ハウスマルビの両町長も出席して開かれた開町60周年記念・国際交流10周年記念シンポジウム
=2005年6月、奈井江町

ハウスマルビ町（フィンランド） 福祉のまちづくりへの国際パートナー

ハウスマルビ町はフィンランドの首都ヘルシンキの北約85キロに位置し、人口は奈井江町とほぼ同じ約8千人、総合福祉施設の「レヒティマヤ」を中心に福祉のモデル都市に指定されている。

両町の友好都市提携盟約書では①社会や価値観を知る②若者、学生、衛生・社会の担当者の交流を通じ、友好関係を築く③家族、学校、衛生・社会ケア、文化機関やさまざまな組織の間に関係を築く—の3点が柱になっており、他の都市の姉妹都市提携の盟約書とは違って、当初の目的に沿って「福祉」が前面に打ち出されている。

友好都市提携に前後して、奈井江町からは福祉にかかわる国際調査団、さらに、96年から3年連続して町職員計8人をそれぞれ約1カ月間ハウスマルビ町に派遣し、本場の福祉、医療、保健を研修した。

その成果は、町内の老人総合施設「やすらぎの家」、高齢者生活福祉センター「ひだまり」、老人保健施設「健寿苑」、町立国保病院、訪問看護ステーションなどの建設、運営に具体的に生かされてきた。

一方、ハウスマルビ町の方も負けず劣らず積極的。提携直前に総合福祉施設「レヒティマヤ」からラマ看護師が2週間、奈井江町で研修したのをはじめ、96年の老人総合福祉施設「やすらぎの家」落成記念式典にはマケラ町長夫妻、ラマ看護師が来町した。

毎年奈井江町が実施している「健康と福祉のフェスティバル」への参加、2002年（平成14年）には二人の看護学生が8日間奈井江町の医療施設、福祉施設で研修するなど、中身の

濃い福祉交流が続けられている。

こういった関係者の頻繁な交流によって町では「具体的に何がというより、福祉の考え方、施設運営のあり方など、双方でさまざまな面に生かし合い、参考にしている」といい、福祉のまちづくりの国際パートナーとして他ではあまり例を見ない実りある成果を強調している。

硬軟織り交ぜた交流とまちづくり

奈井江町が目指す「包括的総合地域ケアシステム」を目的とする福祉交流だけでなく、盟約にもあるように、相互理解と友好関係の増進を図る硬軟合わせた交流も行われている。

国際交流視察団は隔年ごとに相互訪問を実施している。「福祉の心」を学ぶ狙いで、町議会議員、町職員、農業・商工関係者などのほか、町が旅費の大半を助成して1996年（同8年）から中学生、翌97年から高校生もメンバーに入れ、幅広い交



各界の代表者からなる国際交流視察団とハウスマルビの人々との交歓風景=2003年8月、ハウスマルビ町

流を目指している。

ハウスヤルビ町の方も同様で、教育長、障害者施設長のほかレヒティマヤ施設の看護学生、さらに、友好都市提携10周年記念の2004年（同16年）には、町長らとともに中学校教師と中学生6人が来町した。

奈井江町からの国際交流視察団は総合福祉施設「レヒティマヤ」や障害者のグループホーム「イエウピア」、図書館、ガラス工芸館などを見学、意見交換をしたり、ホームステイをしながら親交を深めている。

帰国後の各人の報告を、広報「ないえ」が掲載、町全体で体験を共有するという方法も採っており、視察団経験者はスオミ・クラブ（スオミはフィンランドの意味）を作り、ハウスヤルビ町からのお客さんの歓迎にさまざまな形で参画している。

2003年の奈井江町の国際交流視察団は、北町長や学識経験者を含む各界の代表者が、フィンランドの関係者と市町村合併問題や地方自治をテーマに意見交換を行った。

さらに、04年6月の奈井江町での10周年記念式典では記念

植樹のほかに、山田真知子・道浅井学園大教授の「フィンランドの自治体サービス」の講演や、両町長らによる「ハウスヤルビ町と奈井江町のまちづくり」をテーマにしたパネルディスカッションも催されるなど、交流内容はかなり“真面目なもの”となっている。

福祉関係でのまちづくりだけでなく、1995年（同7年）の友好都市提携の年に建設した道の駅はハウスヤルビ町との永い友好を願ったフィンランド風の木造建築で、その名も「ハウスヤルビ奈井江」。

町勢要覧も日本語、英語のほかにフィンランド語で書かれており、国際交流の具体的な姿が町に息吹き始めている。

町は2005年4月から町の憲法ともいえる「奈井江町まちづくり自治基本条例」をスタートさせた。その中の連帯・交流をうたった条項で「町民、町議会、町は、さまざまな活動や交流を通じて、他市町村や他国の人たちの、知恵や意見をまちづくりに活かすように努めます」とした。

だから、町は「ハウスヤルビとの友好関係は当然ながら今後も続けていきたい」と胸を張っている。



交流10周年で奈井江町入りし、日本料理の実習をするハウスヤルビの中学生たち
=2004年6月

奈井江町

人口：約7千人 面積：88km²

<http://www.town.naie.hokkaido.jp/>

道央空知の中心部に位置し、地味肥沃な農地と全体の55%が豊かな森林。炭鉱の相次ぐ閉山で人口流出、過疎化が進んだが、町の振興策により企業が進出、農商工のまちに変ぼうしている。奈井江はアイヌ語

の「ナエ」が語源で「砂多き川」の意味。

国際交流の問い合わせ先
奈井江町まちづくり課

TEL(0125)65-2111

民間が「核」になって 広がる交流

室蘭港には、1796年（寛政8年）英国船プロビデンス号が入港、1854年（安政元年）にも米国船サザンプトン号（ペリー艦隊）が寄港するなど、早くから天然の良港として海外から注目されていた。

明治以降、北海道の輸出入の拠点として多くの外国船が利用、道央地域を支える産業基盤の海陸交通の要所として、北海道の発展に重要な役割を果たしてきている。

古くから立地的にも国際性を持つ同市は、在住の外国人登録者数が定住者のほか、室蘭工業大学の留学生や日本製鋼所室蘭製作所の技術研修生も含めると217人にもものぼっている（2005年1月現在）。

同市はこのような“国際都市”という状況を生かすべく、さらに一歩進めて国際交流のさまざまな活動や情報提供の場として、1995年（平成7年）「国際コミュニティーセンター」を開設し、日常生活の中で市民の国際感覚を養うことに力を注いでいる

「室蘭市国際交流推進協議会」 —民間団体との連携を密に

国際交流に対応した地域づくりを進めるため、全市的視野から市、教育関係機関と民間団体が中心となり、87年（昭和62年）11月、「室蘭市国際交流推進協議会」が設立された。

大きな特徴は、同協議会自らが国際交流に係わる情報の収集・提供を行い、各種親善交流会の開催や留学生・研修生へ



米国出身のティム・クラークさんを講師として開催した「ミニ講話会」=2004年6月

の支援など、国際交流推進活動の中核的な役割を果たしていることである。

発足時から会長は室蘭工業大学学長、市が事務局を担当、室蘭市内の国際交流に関連している52の民間、公共、公益の団体、機関のほとんどが加盟しており、年1回開かれる総会では、同協議会の前年度活動実績報告と当年度の事業計画の決議に続いて、各団体の活動が報告される。

同協議会の主な事業活動としては、市民を対象にした「外国の生活事情と文化について」といったミニ講話会、世界料理教室、「はじめての英会話」教室の開催、室蘭工業大学留学生のホームステイ受け入れなどがある。

特に、ミニ講話会は、98年（平成10年）から7年間で14カ国の外国人が講師となって19回も開かれている。参加者も延べ365人にのぼり、市民の国際理解に大きく役立っている。

また、同協議会事業ではないものの、協議会メンバーと連携し、同市の小学校校長と室蘭工業大学との間で国際理解教育の実践が行われている。

具体的には同校長会が、直接室蘭工業大学に留学生の小学校への派遣を依頼、文部科学省が「総合的な学習の時間」を導入した2002年（同14年）から、「国際理解教室」をスタートさせた。

03年は、同大学から10カ国の留学生が小学校13校に20回も出向いており、子供たちの国際理解へのユニークな試みとして注目されている。

教育、文化そして経済 —2つの「姉妹・友好都市」

【姉妹都市—ノックスビル市（米テネシー州）】

日米両国間の貿易摩擦改善を図るためのキャンペーンとして、(財)日本交通文化協会が、1988年（昭和63年）7月から「アメリカン・トレイン」（アメリカの文化や情報を満載したイベント列車）を企画、米国人を招いて1年間に日本国内の駅約50カ所を回ってもらった。

その企画に参加していたノックスビル市の2人（経済開発担当部長のアレン・ボーデンさん、商工会議所幹部職員のダレル・エイキンスさん）が姉妹都市を捜していたところ、同協会から海外との都市交流の希望を持ち、人口規模などが似ている室蘭市を紹介された。



ノックスビル市のシダーブラフ中学校を訪問し、歓迎会で日本の歌を披露する生徒たち＝2004年10月

同年8月、「アメリカン・トレイン」の企画で2人が室蘭市を来訪し、直ちに姉妹都市提携を希望するほどの熱心さだった。この最初の訪問時、ノックスビル市から室蘭市の高校生2人を招待する往復航空券2枚がプレゼントされた。

室蘭市は、相手の熱意に打たれ、翌89年（平成元年）4月2人の高校生を派遣、同年7月には、室蘭市がお返しにノックスビル市の高校生2人を招き、人的交流が始まった。

同年10月ビクター・アッシュ同市長夫妻一行が室蘭市を訪れ、公式に姉妹都市締結の希望を表明した。90年4月室蘭市長を团长とした市議会議員ら一行40人、同年10月には17人の市民訪問団がノックスビル市を訪れ、温かい歓迎を受けた。

同年12月市民訪問団参加者が、室蘭市において「ノックスビルの会」を結成して、室蘭市国際交流推進協議会に加盟した。

こういった経緯を受けて、91年（同3年）1月室蘭市で姉妹都市提携の調印式が行われ、92年ノックスビル市でもボランティア組織の「ムロラン・クラブ」が発足した。

室蘭市は、提携を前に90年、友好親善と次代を担う子供の育成を目的として中、高校生を対象としたノックスビルへの派遣事業をスタートさせた。

97年から中学生海外派遣事業に内容を変更して2004年（同16年）まで米国同時多発テロ事件の年を除いて毎年生徒を派遣し、その総数は170人にのぼる。

この派遣事業は、当初、国のふるさと創生基金を原資に、まちづくりのイメージアップを図る目的で1989年（平成元年）に設立された「むろらんハイイメージ基金」から支出されていた。その後、この基金は地方交付税の見直しに伴い99年姉妹都市への子供の海外派遣に限定した「室蘭市こども海外交流基金」を分離独立、さらに、2004年には「室蘭こども姉妹都市等交流基金」に名称を改定し、国内外の姉妹都市の

派遣、受け入れを行っている。

その他の交流としては、1992年に室蘭市の日鋼記念病院とノックスビル市のフォートサンダース病院が姉妹提携を結び、医療機器の購入や、研修のための派遣などがある。

ージャズを通じた市民音楽交流ー

2005年（同17年）は姉妹都市提携15周年の年。8月室蘭港中央埠頭（ふとう）倉庫で開かれたジャズイベント「室蘭ジャズクルーズ2005」はノックスビル市との姉妹都市交流がメインイベントとなった。

市民中心の実行委員会主催による「室蘭ジャズクルーズ2005」は05年で5回目だが、「道内4大ジャズフェスティバル」のひとつに挙げられるほどに成長、会場には過去最高の約1千800人が詰め掛けた。

このフェスティバルの目玉になったのがノックスビル市のジャズトリオ「ジョッシュ・トリオ」の出演―。

実は室蘭ジャズクルーズは02年からノックスビル市のアマチュアジャズ演奏家を招待してきたが、室蘭・鶴ヶ崎中ジャズバンドが05年3月にノックスビル市を訪問し、小中学校などでジャズ演奏を披露、両市の市民による音楽交流が一気に花開いた経緯がある。

「ジョッシュ・トリオ」は再会した鶴ヶ崎中ジャズバンドと合同演奏も行ない、会場から大きな拍手を浴びた。

さらに、中学生派遣など姉妹都市交流で活躍し、同年5月に室蘭市の「ふるさと親善大使」になったテネシー州立大名誉教授のポール・ワトキンスさんも親善のために同行、市民団体「ノックスビルの会」が開いた送別会では、「ジョッシュ・トリオ」の演奏に合わせ「テネシーワルツ」を熱唱するなど、和やかな市民交流となった。

「ノックスビルの会」は、同年6月に総会を開き、「これか

らも息の長い国際交流を続けていく」ことを確認しており、両市の姉妹都市交流は音楽交流も加わり、今後も心のこもった関係に発展していきそうだ。

「不幸な出来事」を乗り越えて

【友好都市—日照市（中国山東省）】

1996年（同8年）2月に中日友好協会の組織である中国対外友好合作服務センター顧問3人が室蘭市を訪問し、日照市を紹介したことから交流が始まった。

同年10月に、日照市から副市长ら一行6人が行政視察のため来訪し、滞在中は港、企業、医療・福祉施設などを視察。翌年6月、今度は室蘭市から同市助役を団長とする経済視察団11人が、日照市を訪れ、文字通り“熱烈歓迎”を受けた。

同市には二つの港があり、中国第二の石炭の積み出し港で、室蘭市と産業形態の類似性も多い。

友好都市提携以前にも、技術交流として、98年（同10年）から水道、造園、医療の分野で合せて6人の研修生を受け入れている。文化交流としては、同年から友好都市締結の年までの4年間、室蘭市から小、中学生の絵画や書道252作品、同じく日照市から257作品を相互に交換し展示した。

また、経済懇談会の開催や企業視察などを通じ経済交流の芽も膨らみ、2000年（同12年）から室蘭市内の縫製会社が、実習生を受け入れることとなった。

この機運に乗って、同年7月、日照市人民代表大会常任委員会主任一行が室蘭市を来訪、同年10月室蘭市助役一行15人が日照市を訪問し、双方が友好都市締結の意向を確認した。

そして、室蘭港開港130年・室蘭市制施行80周年記念に合わせ、02年（同14年）7月、室蘭市において、道内104組目の一番新しい友好都市提携の調印式が行われた。

前年の01年に発足した市民団体「日照市と友好の会」は、友好都市締結翌年の03年に予定していた日照市訪問が、重症急性呼吸器症候群（SARS）の影響などで中止となり、04年（同16年）6月に改めて年度内の訪問を決めた。また、室蘭市や室蘭市商工会議所も中国との交流事業の拡大を計画していた。

その矢先の同年8月、室蘭市の外国人研修・技能実習制度



友好都市締結調印式会場前で両市関係者が記念撮影
＝2002年7月、室蘭文化センター前で

によって市内の縫製会社で働いていた日照市出身の中国人実習生11人が、2カ月以上にわたる貸金未払いなどを理由に勤務を拒否、在札幌中国総領事館が実態調査に乗り出していることが明らかになった。

実習生が帰国を希望しているとの報に、市民が自発的に「室蘭中国人実習生を支援する会」を作り、実習生への支援と募金活動を行った。

同年10月に実習生は国の「貸金立て替え制度」による未払い貸金80%と市民からの募金を受け、帰国することとなったが、帰国会見の中で、室蘭や日本について「嫌な思いもしたが、優しく、とてもいい人たちもたくさんいる」と語り、関係者をホッとさせた。

友好都市締結直後の余り例のない事件だったが、同年10月新宮室蘭市長は自ら市民団体「日照市と友好の会」の訪問団に同行し、日照市の干建成市長らと会談した。席上、新宮室蘭市長は事件の事実関係を説明し、改めて友好都市交流を発展させるため、中学生の相互訪問をスタートさせるなど具体的な文化交流について合意した。

これに基づいて05年10月には、日照市への第1回中学生派遣事業が実施され、友好都市の新たな絆を作り直すこととなった。

また、室蘭市は今後も経済交流などを活発化させる方針で、事件を起こした会社以外の縫製工場で日照市の技能実習生の受け入れを継続して実施している。

室蘭市

人口：約10万人 面積：80.6km²

<http://www.city.muroran.hokkaido.jp/>

室蘭市は北海道の南西部に位置し、周囲を海に囲まれた自然の豊かなまちである。1872年（明治5年）の開港以来、港を中心に製鉄、鉄鋼、造船など北海道の工業都市として発展してきた。室蘭港は、1965年（昭和40年）に特定重要港湾に指

定されており、2002年（平成14年）には開港130年、市制施行80年を迎えている。

国際交流の問い合わせ先

室蘭市総務部総務課国際交流担当

TEL(0143)22-1111

国際港湾都市の 特性を生かして

8つの外国航路が結ぶ活動

苫小牧港は8つの外国航路によって約30カ国と結ばれ、年間1千200隻以上の外航船が入港、外国人船員も約2万人が上陸している。そういう意味では国際港湾都市として、その生い立ちから臨海での国際交流を目指す生き方が必然的に求められて来た。

そのせいもあって、外国人との日常的な出会いの中で、民間団体の活動が苫小牧市の国際交流の大きな特徴といえ、国際交流を担当する同市企画調整部は、「各団体の活動を援助し、チームワークを図るのが私たちの役目。国際交流は心です」という。

同市の国際交流は国際港湾都市の特性を生かす方向で進められており、大きく分けると姉妹都市交流、こども国際交流、同市内での在住外国人交流、国際ボランティア登録の4つの事業が挙げられる。

【姉妹都市—ネーピア市（ニュージーランド）】

姉妹都市となったニュージーランド・ネーピア市との交流は、1971年（昭和46年）同市にある木材会社に王子製紙・日本製紙が出資してパンパック社を設立、ここで生産するパルプを苫小牧港に輸出するために定期航路が開設されたことから始まる。

このことが縁となって78年（同53年）、苫小牧港とネーピア港が姉妹港提携を結んだことで、苫小牧市とネーピア市との間で交換留学生派遣や国際姉妹青年会議所締結などの交流が広がり、80年（同55年）姉妹都市の締結まで発展した。

その後、多くの交流があったが、2000年（平成12年）には姉妹都市締結20周年とネーピア市制施行50周年を記念して、苫小牧市から82人の市民訪問団がネーピア市を訪れた。特にこの訪問では、30人以上もの個人参加者があり、姉妹都市への関心の高さを物語った。

01年にニュージーランド・ニュープリマ市で開催された日本との姉妹都市関係をテーマにした「2001年会議」において、最も活発で友好的な姉妹都市活動を行ったとしてネーピア市が最高賞を受賞した。このことはパートナーの苫小牧市にとっても朗報で、友好団体などによる組織的な交流だけでなく、留学やホームステイなどを通じた市民レベルの交流が高く評価されたことを意味していると受け取られている。

また、姉妹都市締結25周年を迎えた05年10月、桜井・苫小牧市長ら64人の訪問団がネーピア市を訪問、両市小学生による絵画約200点の初めての合同展示会をネーピア市で開催するなど、さらに交流を深めようとの両市の意気込みが感じられる。

【友好都市—秦皇（しんのう）島市（中国）】

友好都市の中国・秦皇島市とは、1983年（昭和58年）、苫小牧市の経済・行政関係者を中心とした北海道経済訪問団が秦皇港を訪問した際、苫小牧港が我が国の中核国際物流港湾として整備が進んでいることを伝えた。

この結果、秦皇港からの木材チップや石炭の受け入れ港湾としてクローズアップされ、85年（同60年）中国の交通部などの全面的支援を受けて、友好都市締結となった。

さらに、この経済的な交流が基礎となり、98年（平成10年）、苫小牧市の市制施行50周年に秦皇市長が来日し、友好都市提携に交流が広がった。

世界に目を開く「こども国際交流事業」

この事業は90年国のふるさと創生基金を国際交流に生かそうと設けられた。小、中、高校生を対象に海外派遣を行い、見聞を広めてもらうのが狙いだ。

これまでの派遣先は姉妹都市や友好都市に限らず、韓国、カナダ、シンガポール、オーストラリア、アメリカなど多様だったが、2003年（同15年）は重症急性呼吸器症候群（SARS）の影響で、派遣が中止された。

その後は子供たちの安全面を考慮して、連携を密にできる姉妹都市・友好都市を中心に交流を継続することになり、04年は、中学生14人が中国の秦皇市や北京市を訪問した。

秦皇市では中学校を訪ね、交流したほか、言葉の違いに戸惑いながらも、ホームビジット（宿泊を伴わず、家庭に招いて外国人と交流）先で中国の生の家庭の味を体験した。

また、05年7月末から8月初めに、高校生10人が姉妹都市のニュージーランド・ネーピア市を訪問したが、5倍の50人が応募するなど人気は上々だった。

これとは別に苫小牧ニュージーランド協会が実施している高校生海外短期研修事業も05年で23回目を数え、同年4月には2人の女子高生がネーピア市でホームステイをしながら地



舞踊で歓迎してくれた秦皇市の中学生たち
=2004年8月



「ぐるーりWORLD交流会」ミニ運動会風景
=2004年10月

元の女子高と親睦を図るなど、子供たちを通じた国際交流は着実な深まりをみせている。

実のある在苦外国人との触れ合い

ひとつは「ぐるーりWORLD交流会」の開催。この交流会は、市民と外国人とが相互理解と友好を深めるため1992年からスタートした。

最近では、2002年（同14年）10カ国40人、03年44人の外国人が市民まつりに参加、04年10月は初めてミニ運動会も実施した。11カ国34人の外国人を含む88人が紅白に分かれて、大玉運び、玉入れなどで和気あいの雰囲気。ゲームを楽しみながら交際の輪が広がり、国際交流を実感できるイベントに

なっている。

もうひとつが1991年（同3年）から実施している留学生支援事業だ。外国人留学生及び外国人就学生に対し苫小牧市営バスの乗車券または乗車証を無料で交付することで、通学はもとより公共施設を利用する際の負担を軽減しようというもの。

地域における国際交流の促進にもプラスとして継続されており、他都市ではそう例のない試みといえる。

草の根のボランティア

苫小牧市には、市内在住の外国人や来苫する外国人とのコミュニケーションを図り、国際協力や交流を進めるためのボランティア登録制度がある。

ボランティアは、ホームビジット、ホームステイ、通訳や翻訳、日本文化の紹介（書道、茶道、華道、日本舞踊、着付けなどに協力）、外国人のための日本語指導などを行っている。

登録者数は約160人にもなっており、外国人が多い国際港湾都市・苫小牧を支える草の根のボランティア活動となっている。

自主的な活躍目立つ民間団体

国際交流関係団体連絡協議会は91年、市が中心となり、個々の団体の自主的な活動を尊重しながら、市内の国際交流活動関係団体相互の連絡と交流を図る目的で発足した。

加盟メンバーは、苫小牧ユネスコ協会、国際ソロプチミスト苫小牧、とまこまい国際交流センター、日本ユーラシア協

会苦小牧支部、苦小牧ニュージーランド協会、苦小牧キリスト教船員奉仕会、苦小牧市日中友好促進協会、苦小牧外交協会、苦小牧ロータリークラブ、苦小牧北ロータリークラブ、苦小牧東ロータリークラブ、苦小牧ネパール協会の12団体。

中でも、外国人船員が年間約2万人以上訪れる港町ならではの活動をしているのが「苦小牧キリスト教船員奉仕会」だ。

この団体には、市民ボランティア約70人も参加しており、外国人船員向けの市内地図作成、配布や図書雑誌の提供などさまざまな活動をしているが、最も力を入れている事業が、「シー・フェアラーズ・センター」である。

同センターは、港との間に送迎バスを週6日間運行し、初めて来苦した外国人にとって、苦小牧市の情報を身近に手にする重要な場となっているだけでなく、国際交流イベントへの参加など、市民との交流を深める窓口にもなっている。

この団体の中心となったのが米国人のジョイス・マギーさん。

ジョイスさんは86年（昭和61年）11月、外国人船員のための憩いと心の支えとなるようシーメンズクラブ（現シー・フェアラーズ・センター）の設立・運営に携わり、その後、自ら事務局長として活躍した。

また、公民館や婦人ホームなどの公共施設をはじめ市内各所で英会話の講師を務めたほか、女性の社会参加のための「苦小牧女性活動計画」策定の基礎づくりに市民代表として積極的に参加した。加えて、里親の会での福祉活動なども評価され、苦小牧文化奨励賞・ソロプチミスト苦小牧社会貢献賞などを受賞。

さらに、2004年（平成16年）には北海道で初めて全国高等学校野球選手権大会で優勝した駒大苦小牧高校野球部と共に苦小牧市郷土貢献者として表彰された。

ジョイスさんは、1963年（昭和38年）に宣教師であるご主人のジョージ・マギーさんとともに来日、42年間を苦小牧で過ごし、ご主人が任期を終えた2005年（平成17年）4月に帰国した。

同センターの利用者は統計を取り始めた1987年（同62年）から、94カ国延べ10万6千400人、2004年だけでも28カ国延べ5千891人にもものぼっている。

苦小牧市でまいたボランティア活動の種は確実に広がりつつあり、布教活動を超えた精力的な国際交流として注目している。

任意団体の「とまこまい国際交流センター」は、海外派遣研修に参加した人々が中心になって国際交流に力を注いでいるボランティア団体だ。当初は10人のメンバーを核に活動を始めたが、現在約70人の会員で、国際協力機構（JICA）の青年招へい事業や一般家庭へのホームステイ受け入れなどを行っている。

ホームステイでは、1日前に急ぎょ依頼が来るなど、戸惑うこともあるそうだが、日本に来て困っている人のために可能な限りの協力を惜しまないという。

苦小牧市はこういった民間の活動を支援するため、2002年「夢・まち推進事業」をスタートさせた。地域の経済、文化の振興、国際交流、福祉ボランティア、平和運動といったまちの活性化につながる分野で活動する15歳から30歳未満の市民グループに、最高20万円の助成をしようというもので、その成果がどう芽を膨らませていくかも注目されよう。



苦小牧市郷土貢献者表彰受賞のジョイス・マギーさん（右）とご主人ジョージ・マギーさん＝2004年11月

苦小牧市

人口：約17万4千人 面積：561km²

<http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/>

ウトナイ湖、樽前山など自然に恵まれ、積雪寒冷の北海道にあって太平洋に臨み、気候は温暖で積雪も少ない。苦小牧港は、日本初の内陸掘込港であり、臨海工業地帯を形成している。駒大苦小牧高校が全国高等学校野球選手権大会で57年ぶりに04、05年の

2年連続して夏の甲子園大会で優勝し、苦小牧の名は全国的に一層知られるところとなった。

国際交流の問い合わせ先
苦小牧市役所企画調整部

TEL(0144)32-6111

「ふれあい交流都市」への 多様な試み

進む市総合計画の具体化

登別市総合計画では「人が耀き／まちがときめく／ふれあい交流都市／のぼりべつ」をまちづくりのキャッチフレーズとし、その理念を「自然と調和のとれた住空間、躍動する産業、観光客をあたたく迎え入れるホスピタリティ、個性あふれる文化、豊かな人間性。市民一人ひとりの価値観とライフスタイルが尊重され、豊かさと充実した生活が実現されるまち。ここには世界の各地から人が集い、世界の情報が集まる。そして、人が、モノが、情報が行き交い、活発な交流が生み出すエネルギーがまちにみなぎり、人々のぬくもりとふれあいを育てる」と表現している。

登別市は日本でも有数の温泉地というメリットを生かすべく、1986年（昭和61年）に「国際観光レクリエーション都市宣言」を出した。92年（平成4年）には同市総務部に国際交流担当を置き、97年に国際交流室に昇格させた。

同宣言にふさわしい地域国際化の推進策として同市は①国際交流の推進②国際協力の推進③国際性豊かな人材の育成④外国人が住みやすく、訪れやすいまちづくりの4つを主要

施策に置き、総合計画を単に言葉だけで終わらせず、具体的な活動に生かしてきているのが特徴だ。

その国際交流の多彩な内容には学ぶべき点が多いといえる。

海外2都市との友好交流

「国際交流の推進」として同市が力を入れているのがデンマークのリングゲ市・ウイスリングゲ市と中国広東省広州市との2つの友好都市関係だ。

登別市では「財政上の問題もあるが、行政主導になりがちな姉妹都市提携ではなく、民間主導の交流を支援していくことで、より温もりのある交流内容になり、民間交流団体の活動、育成にもプラス」の考えで、実情に応じて、それぞれの友好都市関係の推進を図っている。

【リングゲ市・ウイスリングゲ市（デンマーク）】

JR登別駅近くにあるヨーロッパ中世の古城をほうふつさせる「登別マリンパークニクス」。中国庭園のテーマパーク「天華園」は休園となったが、「登別マリンパークニクス」は



ヨーロッパの古城を思わせる登別マリンパークニクスの中心施設「海洋美術館ニクス城」

デンマークとの太いつながりを象徴するように、その威容を誇っている。

1989年（平成元年）同市の北欧商店街町並み形成視察団がデンマーク、スウェーデンを訪問し、翌90年には、デンマーク中央部のフン島・ウイスリンゲ市近郊に実在する中世のルネッサンス様式の「イーエスコウ城」をモデルに建設された。

内部が水族館の「海洋美術館ニクス城」をランドマークとして、北欧の街並みを再現した「登別マリパークニクス」の開園式にはイーエスコウ城主夫妻、リンゲ市にあるミットフュンズ高の合唱団52人も参加して、全員がホームステイ。同園のオープンを機に一気に友好関係が花開いた。



鬼の面を囲み話が弾む登別、リンゲ両市の中学生たち＝2004年8月、リンゲ市で



登別の保育所を訪れたデンマークのコア・リネビアーさんに大喜びの園児たち＝2005年6月

同年、市立幌別中とリンゲ市のノーアエア校が早々と姉妹校提携したのをはじめ、デンマークからの青年受け入れ事業なども開始され、交流は自然と深まりをみせてきた。

このため、97年（同9年）4月、登別市長らが公式訪問し、リンゲ市と隣接するウイスリンゲ市（両市は2007年に合併の予定）の3市で、市民レベルによる交流活動の積極支援を誓う「友情の絆（Bond of Friendship）」の覚書を取り交わした。

交流内容は大きく分けて、中学生海外派遣事業とデンマーク青年の受け入れ事業の2つ。

92年（同4年）度からスタートした中学生の派遣事業は、中学生が引率の先生と共に毎年デンマークとその周辺国に10日間程度滞在し、見聞を広め、交流を図るといったもの。

同市総合計画にある国際性豊かな人材育成の具体化として、市は旅費の8割を助成、2004年（同16年）度までに派遣者総数は生徒86人、引率者40人の計126人で、帰国後はその都度、派遣研修報告書を作成してフォローアップしている。

デンマークからの青年受け入れは90年（同2年）の開園以来登別マリパークニクスが行ってきたが、財政上の理由などで中止せざるを得なくなり、94年から民間の「のぼりべつ国際交流会」が市の補助で継続、同じく民間の登別デンマーク協会の発足に伴って、97年から同デンマーク協会が事業を引き継いだ。

毎年、1カ月から2カ月間同デンマーク協会の会員宅にホームステイをし、地域住民との親睦と交流、研修による相互理解を図っている。

2005年（同17年）6～8月の2カ月間登別を訪れたコア・リネビアーさんの日程をしてみると、市内小中学校での英会話教室、授業参観、料理教室、国際理解講座への出席など期間中の日程はびっしり。

すでに、同年度まで17人のデンマーク青年を受け入れており、これらの人々が帰国後リンゲ・ウイスリンゲ・登別友好協会で活躍するなど民間交流に大きく貢献しているという。

【観光で結び付いた広州市（中国）】

2000年（同12年）3月君島会長ら登別観光協会の一団16人が、中国広東省広州市で開かれた「国際旅遊展」に参加した。北海道観光ブースで登別温泉を売り込むなど独自のプロモーション活動を行ない、ビザの解禁地域拡大間近の中国へ本格的な観光誘致に乗り出した。

2カ月後には広州市副市長ら7人が登別市を表敬訪問、01年2月には上野市長ら16人の登別観光プロモーション訪問団が上海市、広州市を訪れ、観光客誘致活動を一段と活発化させた。

広州市側もこれに応じて政府代表団が再度登別市を訪問し、これを受けて02年（同14年）5月には市長を団長とする登別市の公式訪問団22人が広州市に赴き、友好交流促進都市の盟約書にスピード調印した。



中国・広州市から観光、文化研修で登別市を訪れ、着物の着付けを学んだ自治体協力交流研修員の伍 毅敏さん＝2004年、登別伊達時代村で

その後、行政、市民の相互訪問、登別観光プロモーション、中国の旅行エージェントの来訪などの交流が続けられている。登別、広州両市の観光客誘致という共通の利害に基づいた友好関係は具体的な経済交流として、今後の成果が目ざされる。

相互理解から協力へ—自治体職員研修

総務省は1996年（同8年）度からスタートさせた自治体職員協力交流事業について、自治体の国際化施策が交流から協力を深化する傾向があり、その中心として自治体が持っているさまざまなノウハウ、技術などを活かした「ひとづくり」への協力が求められている—との趣旨を述べている。

すでに登別デンマーク協会の協力でデンマーク青年受け入れ支援事業を行っている登別市は、この自治体職員協力交流事業への取り組みにも積極的に手を挙げた。

初年度は対象が札幌市などの政令指定都市だけに限定されたため、97年度に受け入れが決まった登別市は札幌市を除き道内の一般の自治体としては第1号ということになる。

協力交流研修員は約半年間ホームステイをしながら、さまざまな行政の研修、日本文化の学習、市民、学生との交流、語学講座の開催などみっちり勉強し、国際交流を実践する。

登別市が観光都市ということもあって、2005年（同17年）

度までの協力交流研修員8人の研修分野は6人が観光、2人が一般行政。国別では中国4人、韓国2人、デンマーク、モンゴル各1人となっており、登別市の国際交流のあり方とも符合している。

例えば、02年度観光研修目的で来日した中国・広東省韶関市からの協力交流研修員、鄧志強さんは登別市に中国本土や台湾などから多くの観光客が来ているにもかかわらず、本格的な中国語の案内書がないことに気づき、3カ月間かけて「登別まるごとガイドブック」（74ページ）を中国語に翻訳した。

研修報告書で鄧さんは「下手な訳文かもしれないが、中国からの観光客に役立てば何より。また、市民の親しみ、優しさに何回も感動した。民間交流を通じて、友達をつくって、互いの心が通じるようになることは言葉に尽くせない貴重な体験です」と書いている。

交流による相互理解から相互協力へ—その関係は将来に向けて広がる可能性を持っている。

国際観光レクリエーション都市づくり

『美しい自然と、無限の温泉に恵まれた登別市は、北海道の宝です。生活を楽しみ、心身を健やかに、明日への活力を求め、世界の人々が相集う街、理想郷登別市を目指して、ここに「国際観光レクリエーション都市」を宣言します』

約20年前の1986年（昭和61年）に出された宣言文である。2001年（平成13年）度に環境省の「かおり風景100選」、04年度に北海道遺産にそれぞれ選定された登別温泉は、北海道で最初の国民保養温泉地指定の同市内のカルス温泉も含め、全国的にも有数の温泉観光地だ。

有珠山噴火で観光客はやや落ち込み04年度の宿泊者は前年度より13万人少ない134万人になったものの、外国人宿泊者は約1割の13万2千人でアジアを中心に前年度を4万9千人も上回った。その利点を生かして同市が国際観光レクリエーション都市に取り組むのは当然といえる。

同市や登別観光協会がアジア諸国への観光PRを本格化させた1994年（同6年）から、同協会事務所に英語、中国語、ハングルによるパンフレットが用意され、同市も日、中、英、ハングルの4カ国対応の観光ホームページのほかに、A4判236ページの接遇マニュアルを作成、案内標識の作製などと合わせ、ソフト面での国際観光レクリエーション都市づくりに力を入れている。

前述したように広州市との友好交流促進都市提携も登別市の官民を挙げた観光プロモーションの成果の延長線上にあるし、登別、室蘭、伊達など西いぶり戦略的観光推進協議会や札幌市、道経連などとの連携による共同行動など国際観光戦略も多彩。2004年度から、隣の胆振管内白老町、白老観光協会とタイアップして、中国に2人の長期観光研修生の派遣も開始した。

観光地登別ならではの具体的な地域国際化の試みは、今後がさらに楽しみといえる。

市民に根づく「ふれあい交流」

「行政主導より、民間主導の交流を支援・拡大する国際交流」という同市の方針は、市民レベルの活動への信頼と国際観光都市という恵まれた地域の国際化、そこから育ち、育てていく土壌への自信に支えられているからかもしれない。

デンマークとの友好関係の基礎を築いたのは官民共同の北欧商店街町並み形成視察団だし、その後韓国、米国、ニュージーランドなどへの視察団派遣も一時活発だった。

これとは別に国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊にも1980年（昭和55年）以降、さまざまな職種から17人もの市民が参加、同市の通訳ボランティアにも、英語、中国語、ロシア語など20人を超える人が登録しており、登別市民の国際化の意識は相当高いといえる。

こういったことを裏付けるように、同市にはのぼりべつ国際交流会、登別デンマーク協会、登別日中友好協会の3つの国際交流団体があり、それぞれが民間レベルでの国際交流事業を推進している。

同交流会は留学生受け入れ、難民衣料送付事業などに取り組んでいるが、デンマークからの青年受け入れ事業も当初、同交流会が担当した。

同事業は96年（平成8年）に設立された同デンマーク協会（会員は個人77人、法人11団体）に引き継がれ現在に至っているが、同デンマーク協会は受け入れ事業以外にも英会話教室、デンマーク講座、デンマーク料理教室などさまざまな活動を行っている。

また、同交流会が中心となって、同日中友好協会や青年会議所など市内の10団体が2004年（同16年）3月、「国際交流の街づくり広場」（事務局・同交流会）を設立した。

登別市出身の海外居住者、同市内に住んでいる外国人について、本人の了承の下に活動実績などをデータベース化し、国際関係の情報、活動に役立ててもらおうというもので、地方の都市では珍しい試みといえる。

同市自体も国際性豊かな人材育成の一環として、海外派遣

事業、姉妹校交流などに加え、毎年1回市民対象の国際理解講座を開いている。

2000年度には市制施行30周年、西暦2000年記念イベント協賛事業として「外国人とのふれあい事業～外国の遊び知ってる？」のタイトルで、英国、韓国、中国、ネパール、モンゴル、ペルーの6カ国の人々がそれぞれ自分の国の遊びを実際に披露したり、01年度は英語指導助手のステーブン・アスキューさんが2日間「英国教室」の講座、さらに別の2日間料理教室を開催するなどの楽しい趣向となっている。

前述したようにデンマーク青年の受け入れ、海外からの自治体職員協力交流事業などでも市民との交流・協力が進められているが、国の「語学指導などを行う外国青年招致事業」（JETプログラム）による英語指導助手（AET）も1990年（同2年）から途絶えず採用しており、中、高校の英語授業だけでなく、国際理解講座の講師や市民対象の英語教室を年3回（1回5シリーズ）開催するなど地域に密着した活動が目立っている。

例えば、初代の英語指導員として2年間登別市にいた米国の高校の日本語教師ピーター・ヘンティさんは登別市の女性と結婚し、2004年には米国の教え子10人とその家族を引率して来訪、同市で日本語研修、茶道や書道などの日本文化体験を行うなど、登別との国際交流になお深く関わっている。

ヘンティさんだけではない。同市は英語指導員、受け入れ事業のデンマーク青年など約20人に「登別ふるさと大使」、いわゆる“鬼大使”として国際交流促進に一役買ってもらっており、「国際交流を進める上で鬼大使の存在はとても大きい」（中川原学・同市総務部企画グループ国際担当主査）という。

同市総合計画のまちづくりの理念「ふれあい交流都市」への試みは官民が歩調を合わせ、多彩で生き生きとした深みすら感じる。

同市が地域国際化の施策として掲げる「地域が直接世界に貢献する時代が訪れている。市民一人ひとりが、世界に貢献するという意識の醸成を図るとともに、登別市が培ってきた特色ある文化や技術、人材を世界の発展に役立てる環境づくりを進める」という基本方向は着実に実行されつつあるといえる。

登別市

人口：約5万4千人 面積：212.1km²

<http://www.city.noboribetsu.hokkaido.jp/>

登別温泉、カルルス温泉が湧出する日本でも有数の温泉地。地獄谷など優れた自然景観もあり、支笏洞爺国立公園の一角を占める。温泉だけでなく、登別地獄まつり、のぼりべつクマ牧場、登別マリナーパークニクスなど観光が大きな産業になっているが、酪

農、畜産を中心にした農業、3つの漁港を持つ水産業も盛んだ。

国際交流の問い合わせ先

登別市総務部企画グループ国際交流担当

TEL(0143)85-2111

世界に“発信”された 「YUKIGASSEN」

ケミヤルヴィ市（フィンランド）と 友好都市に

フィンランドという遠い国との国際交流は、壮瞥町の民間事業者が「サンタ村」建設の構想を打ち出し、サンタクローズ発祥の地であるフィンランドの公認を得るためサンタクローズフィンランド協会、フィンランド観光局と協議した際、公認と一緒にフィンランドとの地域間交流について要望を受けたことがきっかけだ。

壮瞥町は、この“提案”について前向きに検討、フィンランド政府の協力を受けて、北部ラップランド地方のケミヤルヴィ市を交流候補と決めた。

1993年（平成5年）5月民間事業者のサンタクローズ村認定契約調印に合わせて、ケミヤルヴィ市側から市長ら代表者が来町し、同町との友好都市宣言の調印が行われた。

友好都市締結後、交流はそれぞれのイベントに相互に参加し、理解を深めることから始まった。「サンタ村」構想は、2000年（同12年）民間事業者が建設を断念し、完成するには至らなかったが、その間の1992年から99年まで、フィンランド公認のサンタクローズが毎年同町を訪れるなど“サンタ交流”は町民の心に友好都市関係の土壌を作ったといえる。

2005年（同17年）春現在、同市との交流は、2つの事業が柱となっている。その1つは雪合戦が生んだ“絆”。1994年に行われた第6回「昭和新山国際雪合戦」に同市から選手が派遣されてきたことが始まりだ。

参加した選手は、この冬のスポーツ大会「雪合戦」に新鮮な魅力を感じ、翌年に、同市で日本国外では初の「YUKIGASSEN」大会を開催した。同町は、「雪合戦」普及を目的に雪合戦実行委員会のスタッフ5名を技術、運営指導



初めてフィンランドへの派遣事業で海外に向かった壮瞥町中学生一行33人＝1995年8月

のため同市へ派遣して、これを支援、その後も継続して交流を続けている。

もう1つは、「小さなまちの大きなプロジェクト」をキャッチフレーズに、子どもたちが主役の交流として95年からスタートした「フィンランド国派遣事業」である。

子供たちの国際感覚養成が目的で、費用のほぼ全額を町が負担し、毎年、町内中学3年生全員をフィンランドに派遣している。

96年からは、学生訪問団としてフィンランドの中学生と高校生が隔年で来町する相互交流となった。

この交流を契機にケミヤルヴィ市では「友達クラブ」が、壮瞥町においては「キーツ・クラブ（キーツはフィンランド語で“ありがとう”の意味）」が任意団体として設立され、民間同士でホームステイの受け入れなどを行っている。

同町の国際交流は「雪合戦」を通じた交流事業と中学生の派遣、そして、同市からの学生訪問団の受け入れが主な内容だが、2005年4月までの通算で、壮瞥町からの訪問が23回延べ462人、ケミヤルヴィ市からの訪問が15回127人、合計589人にのぼる分厚い交流になっている。

ユニークなアイデア「雪合戦」で 町おこしと国際交流

「北海道の冬」から抱くイメージはどのようなものだろうか。最近でこそ、さっぽろ雪まつり、東南アジアからの冬のツアー、さらには後志管内倶知安町でのオーストラリアからのスキー客ブームなど「北海道の冬」が再発見されているが、「雪合戦」を始める前は「寒い・暗い・遠い・広い」のイメージが一般的。同町にとって冬の観光振興は大きな課題であり、その冬季対策が地域経済活性化への起爆剤として期待が寄せられていた。

1987年（昭和62年）8月、アイデア検討会が結成され、地域の若い人が中心となって冬季イベントについてのアイデアを出し合った。

当時を振り返って、昭和新山国際雪合戦実行委員会の堀口一夫委員長は、「最初は冬＝雪像というアイデアしか思い浮かばなかった。それではさっぽろ雪まつりの二番煎じになってしまう。オリジナリティのあるスポーツイベントを開催したい。それが最終的に雪合戦という結論を導き出した」と述



国際色豊かな国旗がたなびく中、すっかり国際大会として定着した雪合戦大会がスタート＝2005年2月、壮瞥町の昭和新山山麓で

懐する。

同年12月、「雪合戦」を正式イベントにすることを決めた後、ルール制定委員会、そして、現在の昭和新山国際雪合戦実行委員会の前身となる昭和新山国際雪フェスティバル実行委員会が結成され、競技ルールや雪球製造器、ヘルメットな

ど急ピッチで準備が進められた。

みんなの熱意で、89年（平成元年）第1回昭和新山国際雪合戦大会の開催にこぎつけた。第1回目にもかかわらず、70チームの公募に対して、その倍の150チームが参加を申し込むほどの人気。

ただ、1セット5分で3セット勝負。最終的に持ち玉が多いチームが勝利するというルールだったことから、消極的な試合展開になりがち—という反省点も残った。

このため、その後のルール改正で、選手9人（試合出場選手は7人）、監督1人のチーム編成とし、競技時間は3分3セットマッチ。1チームが1セットで90個の雪球を使い、時間内に雪球により相手チーム全員を倒した時点、または相手チームのフラッグを抜いた時点で勝ちとなる現在のルールが確立した。

2005年（平成17年）2月26、27の両日、昭和新山山麓で開催された第17回大会は、約2千チームの応募から各地区予選を勝ち抜いてきた道内155チームと15県から31チーム、そして在日外国人4チーム（15カ国）の合わせて190チームが出場し、熱戦を繰り広げた。

手探りで始めたこのイベントが今では、人口約3千200人



「YUKIGASSEN」大会でトロフィーをかけた、シャンパンで喜び合う優勝チーム＝2005年、ケミヤルヴィ市

のまちに、その約9倍の2万7千人が集まる一大イベントとして成長を遂げている。

これまで、海外からは香港、フィンランド、ノルウェーから単独チームが参加しているほか、日本国内でも在日外国ビジネスマンや英語指導助手など外国人チームが第1回大会から出場しており、合わせるとカナダ、アメリカ、メキシコ、ブラジル、ニュージーランド、オーストラリアなど40カ国以上の外国人が雪合戦を楽しんだことになる。

名実共に「国際雪合戦大会」として、予想を超えた成長を示し、雪の利点を活かした冬期間の国際交流、観光にも大きく貢献してきた。

雪合戦大会成功の秘訣は、大会を支える地域のボランティアにある。壮瞥町の人口は約3千200人だが、おおざっぱに言って大人の4人に1人に当たる約400人がボランティアとして活躍。当然ながら、壮瞥町役場も雪合戦専属の担当者を置いて、大会のバックアップに力を入れ、文字通りまちを挙げてのイベントとなっている。

官民一体のこの取り組みが、大きなイベントを成功させる上で重要な役割を果たしていることはいうまでもない。

さらに、特徴的なことは、雪合戦参加者にリピーターが多いという点。ユニフォーム、チーム名などできるだけ制約を設けず、各チームが自由に選択できること、参加者の意見を入れてルールを変えていくといった柔軟な姿勢が、常にフレッシュな大会を創り出してきているといえる。

「壮瞥発」が世界のスポーツに

壮瞥町の雪合戦は、国内ばかりではなく、海外でも大会が開催されるまでに発展した。フィンランドのケミヤルヴィ市では2005年で11回目、ノルウェーのヴァルドー市では9回目を数え、ルールなどすべて昭和新山雪合戦のものがそのまま使用され、壮瞥方式が“国際ルール”として早くも認知された形になっている。

壮瞥町の昭和新山国際雪合戦大会は、1989年（平成元年）の第1回大会から2005年（同17年）で17回目となる。これまでに、このイベントそしてまちづくりが多くの関係機関に評

価され、01年（同13年）には昭和新山国際雪合戦大会が北海道から北海道遺産（生活分野）に選定されたのをはじめ、02年には昭和新山国際雪合戦実行委員会そのものが「世界に開かれたまち（民間交流団体部門）」として、地域づくり総務大臣表彰も受けた。

堀口実行委員長は、「年々、競技レベルが上がり、“遊び”の要素が少なくなっていることから、観光客が気軽に参加できるようなプログラムを提供していきたい。雪合戦大会の継続には、事務局組織の新陳代謝が重要であり、新しい発想がないとイベントがマンネリ化し、参加者の低下につながる。また、雪合戦を学校の体育授業の一環として取り入れることによって、更なる普及を図りたい。雪のないアジアの国々の人にも、ぜひ体験してもらい世界に雪合戦を広めていきたい」と今後の課題と抱負を語る。

05年（同17年）1月、同町で開催された「第1回東アジア・スポーツ雪合戦大会」には、中国、香港、韓国の留学生70人、9チームが参加、雪合戦をアジアへ広げる上で、大きな一歩をしるす大会となった。

壮瞥町発信の「昭和新山国際雪合戦大会」は、世界の「YUKIGASSEN」として国際交流の輪を広げている。冬のスポーツを生かした、この町ぐるみの試みは、地域発信の国際交流として特筆してもいいだろう。



アジアの人々を対象に初めて開かれた「第1回東アジア・スポーツ雪合戦大会」であいさつする堀口実行委員長（左）＝2005年1月、壮瞥町

壮 瞥 町

人口：約3千200人 面積：205km²

<http://www.town.sobetsu.hokkaido.jp/>

北海道の南西部、「支笏洞爺国立公園」内に位置し、横綱「北の湖」の故郷としても知られている。江戸時代初期の1663年以来、少なくとも8回の噴火が記録されている有珠山のほか、昭和新山、洞爺湖とい

た豊富な観光資源に恵まれ、北海道を代表する観光地になっている。

国際交流の問い合わせ先

壮瞥町役場 総務課企画調整係 TEL(0142)66-2121

「企業」から「町ぐるみ」へ

【姉妹都市交流—ケネル市 (カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州)】

1969年(昭和44年)12月、胆振管内白老町に工場を持つ大昭和製紙(現日本製紙グループ)が、カナダのケネル市にチップの合弁会社を設立した。これを契機に、大昭和関連会社の人々とケネル市民との交流が活発化し、その中に同社白老工場の関係者も多くいたことから友好の輪は、白老町とケネル市住民の中に広がっていった。

一面で旧大昭和製紙の城下町といえる同町は、王子製紙、日本製紙の城下町ともいわれるお隣の苫小牧市同様、道外の大手企業が切り開いた国際交流という道内他都市にはない特徴を持っている。

苫小牧市の王子製紙、日本製紙が71年(同46年)にニュージーランドのネーピア市にパンパック社を設立、これを機に同市と姉妹港、姉妹都市提携(1980年)に発展した経緯と極めて類似している。

具体的にみると、当時大昭和製紙がパイプ役となり、ライオンズクラブやロータリークラブ同士の交流も順調に進み、町民から姉妹都市提携を望む声が強くなってきた。

一方、ケネル市も人口や自然環境などが似ている白老町との交流を望み、79年(同54年)同市長は同町に姉妹都市提携を申し込んだ。翌年同町長の同市訪問を経て、81年(同56年)7月13日、同町で正式に姉妹都市に関する盟約書を取り交わした。



「ジュニア英会話教室」で交流を図っている英語指導助手の奥さんのアンドレアさん=2004年12月

提携のきっかけは企業の海外進出だったが、その後さまざまに交流が広がり2004年(平成16年)までの23年間で、同町からは11回の代表団派遣のほか、ライオンズクラブ、ロータリークラブのメンバーや子供たちなど延べ約700人の町民が同市を訪問。一方、同市からは12回の代表団など400人を超える市民が来町し、合わせると千人を優に超える往来となっている。

この間、姉妹都市提携の翌年に緑丘小学校とレークビュー小学校を皮切りに、05年(同17年)春現在、小学校が4校、中学校が2校、高校1校が姉妹校となっているほか、白老ライオンズクラブ、白老ロータリークラブ、白老町商工会などが同市のパートナー団体と姉妹提携を結んでいる。

また、同市との交流により町内の英語熱が高まったことに伴って、1996年(同8年)から町は英語指導助手(AET)をカナダから招致、すでに6人にのぼる英語指導助手が、小学校の英語クラブ、中学校の英語授業、一般町民のための英会話講座などで活躍した。

英会話はもちろんのこと、カナダの生活や文化などを直接学べることで町内でもなかなか好評だ。

歴代の英語指導助手の中には家族連れで来町、祭りやイベントにも積極的に参加し、町民との触れ合いを図った人もいる。6代目となるケビン・スタートさんは、奥さんのアンドレアさんとともに04年来町、奥さんも民間の「ジュニア英会話教室」で教壇に立つなど交流に前向きだ。

さらに、町では、98年(同10年)から次世代を担う青少年交流を積極的に推進するため、「青少年海外交流事業」をスタートさせた。参加者は、ホームステイやロッキー山脈でのキャンプ生活を体験、また、姉妹校に通うことで文化や生活習慣、ものの考え方の違いなどを肌で感じ、町民の国際理解にも一役買っている。

最近の大きなイベントとしては、2001年(同13年)、双方でそれぞれ行われた姉妹都市盟約20周年記念式典がある。

同年7月ケネル市の代表団総勢29人が来町。オープニングセレモニーでは、萩の里自然公園に同市のカナダ産丸太55本で建設された「ケネルハウス」が“友好のあかし”として披露された。

そして、落成式で白老町長は「人と心の結びつきを大切に、友好親善をさらに深めたい」とあいさつ、ケネル市長は「これまでの20年に感謝し、今後もより良い20年を築きましょ

う」と語った。「ケネルハウス」は、その後も記念品や写真を展示するなど、交流の輪を広げる場として活用されている。

同年9月、今度は白老町長ほか33人の代表団がケネル市を訪問し、同市内のラボディアス公園内に建設する「シラオイハウス」の起工式などの記念式典に出席した。同ハウスはケネル市民の寄付や白老町からの資金で建設に至ったもので、式典には約300人も市民が参加し、20年間の交流の厚みを物語る形となった。

04年（同16年）に完成した“友好のシンボル”「シラオイハウス」のオープニングセレモニーには、町から教育長、姉



20周年を記念し寄贈されたカナダ産丸太の「ケネルハウス」
=2001年7月、白老町



ラボディアス公園内に建設された「シラオイハウス」
=2004年9月、ケネル市



日本文化交流会では、同町に03年まで英語指導助手をしていたコリーン・ゲーテンビーさん（右）が日本舞踊を披露 =2004年9月

妹都市協会長、副議長をはじめ、公募による文化団体関係者など32人が出席した。

建物外観は日本風で、交流スペースとなるホールのほか、日本文化を体験できる和室、キッチンなどが備わっており、テープカットの後に行われた日本文化体験交流では、03年まで白老町で英語指導助手をしていたコリーン・ゲーテンビーさんが在日中に習得した日本舞踊を披露したほか、書道や詩吟、茶道の催しが行われ、交流の新たな1ページを開いた。

国際交流の主役はNPO法人「蔵」へ

町内には、2つの国際交流団体がある。1つは、1981年（昭和56年）姉妹都市提携に向けて、国際交流活動の推進などを目的に設立された「白老町姉妹都市協会」（会員数は法人45団体、個人108人）。もう1つは98年（平成10年）1月、町の海外派遣研修事業でケネル市を訪問した人や海外生活体験者を中心に発足した白老町国際交流グループ「SINCE '98」である。

当初は会社員、自営業、公務員など20代から40代までの若手10人のメンバーだったが、その後増え続け2005年（同17年）には約70人にもなった。グループ名は、“Shiraoi International Committee for Empathy”（情熱を持って国際交流を行う白老町の団体）を略して「SINCE」と命名、「98年、これから始まる」という意味を込めた。

「SINCE '98」は、ジュニア英会話教室、外国人との文通・交流斡旋、留学生・英語指導助手を囲んでの交流会など市民レベルの活動が中心。住民ニーズに応えられる各種事業を積極的に展開し、次代を担う青少年が国際社会で活躍できるような人材育成を目指している。

1988年（昭和63年）町は「歴史と文化のまち」を宣言し、特色ある独自の生活文化と地域文化を創造するため、官民一体で各種の取り組みを行ってきたが、町内から「国際交流や芸術文化など生涯学習に関する情報センター的な場所がほしい」などの声が高まってきた。

そんな中でたまたま注目されたのが、農協の倉庫として利用されてきた「石蔵」。大正時代の石造りの酒蔵で、その後、マッチ軸の工場、戦中・戦後は中学校の代替校舎として利用され、町は歴史的建造物として保存・利用することを検討していた。

さまざまな経緯を経て、「石蔵」は「地域創造アトリエ整備事業」として北海道の補助金と白老町の予算などにより改修工事の目途が立った。

単に歴史的建造物として残すだけでなく、住民自らの管理運営と創造性のある自主事業の企画・展開によって、「新たな文化創造」の拠点にしようとの声が高まったことから地域の活性化を目的に、国際交流グループ「SINCE '98」や文化団体などの若者たちが中心になって、白老町文化推進ネット

ワーク協議会を設立。2000年（平成12年）11月、名称を『しらおい創造空間「蔵」』とし、改造された「石蔵」にオープンさせた。

03年（同15年）1月には、特定非営利活動法人（NPO法人）の認定を受け、『NPO法人しらおい創造空間「蔵」』に改称して再スタートを切った。「蔵」運営の中心的な役割を担っているのは「SINCE '98」のメンバーで、国際交流団体、町内の文化団体などの多くが入会しており、自主運営組織として多彩な活動を展開している。

法人化は組織の安定化と強化が狙いであり、その結果、社会的な信用が高まり、民間や町からの事業依頼が受けやすくなった—という。

町は、「白老町姉妹都市協会」の発足以来、その事務局を担当してきたが、町の財政再建の必要性に加え、姉妹都市からの翻訳などを「SINCE '98」メンバーに依頼していた経緯などから、04年民間レベルによるまちぐるみの国際交流を一段と高める意味を込めて、その業務を同協会経由してNPO法人「蔵」に委託した。

自治体が姉妹都市交流などの国際交流事業をNPO法人に全面委託するケースは珍しい。今のところ、町費用は半減した上、国際交流に関する情報・活動の窓口が1つになったことで、海外との対応が以前より迅速になった—と町は評価している。



「町制施行50周年記念事業」でホームステイ先の人々と別れを惜しむ参加者=2004年9月、ケネル市

具体的には、町が「町制施行50周年記念事業」として04年に実施したケネル市との姉妹都市交流事業は、NPO法人「蔵」が中心になったことで、一般参加募集を含め、先方との連絡・調整やスケジュールなどの運営がスムーズになり、事業や催しの幅が広がるなどの効果が出た。

NPO法人「蔵」への事業委託とその活動が今後どういう成果を生み出していくかは、道内の国際交流のあり方を探る上でも注目していただろう。

北海道で初めて、 ワールドラーニング事業を受託

白老町では、ケネル市との交流以外にも、国際交流事業に積極的に関わっており、05年（同17年）7月、米国のワールドラーニング体験型国際交流事業をNPO法人「蔵」が受託し、高校生ら14人の外国人を受け入れ、滞在期間中の全体的なコーディネート、ホストファミリーの調整など、町と連携を取りながら実施した。

来町した高校生たちは、アイヌ民族の文化や歴史を学び、日本文化の茶道や着付け、和紙の人形づくり、そば打ちなど多様な体験をした。また、町内高校の学園祭に参加し、同世代の町民との交流を楽しんだ。

米国のワールドラーニング（WORLD LEARNING）は世界各国でさまざまな現地体験を得られる機関として1932年（昭和7年）に設立された、世界で最も歴史のある非営利の民間の国際組織である。

国際生活体験事業は、設立時からこれまで青少年を対象に27カ国、約6万5千人を派遣しており、日本でも30年ほど前から受け入れを行っている。道内では受け入れの実績はなく、同町が初の実施ケース。

同町が選ばれた理由については「アイヌ民族文化をはじめとした歴史や文化を体験できる学習メニューを備えている」「ポルト湖周辺を拠点に自然体験が可能なこと」だけでなく、ケネル市との分厚い姉妹都市交流の実績に加え、NPO法人「蔵」の民間レベルでの新たな活動が評価されたためとみられている。

白老町

人口：約2万1千人 面積：425.6km²

<http://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/>

胆振管内のほぼ中央に位置し、日本製紙グループ白老工場（1960年旧大昭和製紙白老工場が操業を開始）の城下町的な性格を持つ半面、農畜水産業、観光などさまざまな産業も有している。特に畜産では、道内で最初に黒毛和牛を導入し、「白老牛」として高い評価を受けている。「北海道にある、元気まち」

をキャッチフレーズに元気まち運動を展開、町民との“協働”のまちづくりを進めている。

国際交流の問い合わせ先
胆振管内白老町経営企画課 TEL(0144)82-2121
NPO法人しらおい創造空間「蔵」 TEL(0144)85-3101

サラブレッドに乗せた 「若者の夢」

現在に生き続ける「北の零年」

1871年（明治4年）、前年の版籍奉還を巡る徳島藩での庚午事変の結果、新政府のけんか両成敗ともいえる処分であつた洲本城代家老・稲田邦植氏とその旧家臣546人が静内の地への移住、開拓を命じられた。

その開拓の苦勞を描いた2005年（平成17年）1月封切りの映画「北の零年」は、北海道開拓を考える上でも大きな感銘を与えた。その映画の中で吉永小百合さんが演じる主人公の小松原志乃が、吹雪の中でアメリカ人技術者エドウィン・ダン氏と出会うシーンがある。

おおげさといえば、このシーンが静内町の歴史を象徴し、現在の米国ケンタッキー州レキシントン市との姉妹都市提携につながったといえなくもない。

静内町といえば、「アイヌ民族の英雄シャクシャインの戦い」、「競走馬のふるさと」、1990年（同2年）財団法人日本さくら会の会によるさくら名所百選に指定され、2004年（同16年）には北海道遺産に認定された「二十間道路桜並木」、映画「北の零年」の題材になった「静内開拓の稲田家臣団」一が、ま

ず脳裏に浮かぶ。

1669年（寛文9年）のシャクシャインの戦いそのものは説明するまでもないが、その戦いの時に和人が松前の守備のために大量に移入した南部馬が、日高地方に残され野生化して道産子の原型になったといわれる。

稲田家臣団入植翌年の1872年（明治5年）、当時の黒田清隆開拓使次官（同7年から長官）が、日高地方に散在していた野生馬2千262頭を静内、新冠、沙流の3郡にまたがる約7万ヘクタールの牧場（後の宮内省所管の新冠御料牧場）を開設して、移牧した。

この牧場を設計し、南部馬との配合で大型化、さらには米国产のサラブレッド、アラブ馬を輸入し品種改良に力を注いだのがエドウィン・ダン氏。いってみれば、「競走馬のふるさと・静内」の“生みの親”ともいえる。

稲田家臣団は当然牧場運営の主力となり、御料牧場を訪れる皇族のために作られた行啓道路が現在の「二十間道路桜並木」の礎というから、「北の零年」は正に静内の濃密な歴史を物語っているといえる。



静内町の乗馬施設を見学するレキシントン市の訪問団＝2004年9月



レキシントン市からの青少年友好親善訪問団の歓迎パーティー。町ぐるみの熱気が伝わってくるようだ
=2004年6月

若者の熱意が結んだ姉妹都市 —米ケンタッキー州レキシントン市—

日本を代表するサラブレッドの生産地・静内町と世界的なサラブレッド生産地・レキシントン市とは以前から馬を通じた商取引があり、また、エドウィン・ダン氏の例を出すまでもなく、静内町からサラブレッド先進地・レキシントン市に生産・育成技術を学びに行く人々も少なくなかった。

そんな中で、レキシントン市の牧場で勉強してきた若者2人が「生産・育成技術を伝えるためにもレキシントンと姉妹都市提携を結ぶことは絶対にプラス」と熱心に仲間に語りかけ、その趣旨に賛成した若者たちが中心になって「静内町姉妹都市実行委員会」を結成、さらに、若者たちの熱意を支援しようと、牧場主らが「静内・レキシントン姉妹都市提携協力促進会」を発足させた。

この2つの団体がわずか2カ月間で800人の署名を集めるなど、運動は急速に町ぐるみに拡大していった。これを受けて静内町長が1987年に姉妹都市提携の希望をレキシントン市長に手紙で伝え、翌88年（同63年）7月21日、同市で正式調印の運びとなった。

「サラブレッドに乗せた若者の夢」が、競走馬並みのスピードで日の目を見たわけだ。

その10周年を特集した98年（平成10年）7月の「広報・しずない」は、「ともすれば、姉妹都市提携などは、その性格上、行政主導で進められるケースが多い中で、若者たちが中心となりゼロからスタートさせた活動を実現させたその熱意と行動力は、住民運動が町を動かした最も顕著な事例として

称賛すべき活動といえます」（原文のまま）と改めて高い評価を町民に伝えた。

定着し、継続する相互交流

住民運動の母体となった「静内町姉妹都市実行委員会」と「静内・レキシントン姉妹都市提携協力促進会」はその後、「静内—レキシントンを結ぶ会」に統合され、さらに93年（同5年）、「静内インターナショナルクラブ（SIC）」に名称を変更し、国際交流の推進団体として活動を継続している。

また、徳島県脇町など国内外4つの姉妹都市を持つ静内町は町と民間団体が合同で静内町姉妹都市交流委員会も設置し、合わせて交流事業の推進に当たっている。

レキシントン市との交流事業の中心になっているのが、青少年友好親善訪問団の相互派遣。静内町からは中学生、高校生各3人、合計6人が毎年3月、レキシントン市からは10人前後が毎年6月に定期的に相互訪問を続け、ホームステイをしながらスポーツ、異文化交流を続けており、その頻度、継続性は道内でも珍しいといえる。

2005年（同17年）3月から4月にかけて、静内インターナショナルクラブが創立10周年記念事業として引率者も含め、高校生14人を9日間の日程でレキシントン市に派遣した。

その時のスケジュールを見てみると、ホストファミリーの子供の学校での授業参観、州議事堂見学、子供博物館見学、レキシントン市長への表敬訪問、キーンランド競馬場、世界の馬博物館、ケンタッキーホースパーク、ケンタッキー大学バスケットボール記念館への訪問など盛りだくさんだ。

2004年から高校の教諭に団長になってもらい、交流経験を学校で生かし、町ぐるみの広がりを持たせるなどの工夫も実践に移されている。

「国際化」への人材を生む成果も

青少年の交流のほかに市民同士の訪問、バンジヨー奏者のティム・レイク氏が静内の幼稚園を訪問するなどの文化交流も行われたが、これらの経験を通して、国際交流の懸け橋になる人々が育ちつつあるのも、嬉しい特徴となっている。

例えば、1998年（同10年）の姉妹都市提携10周年の節目の交流事業の際、活躍したのは、当時ケンタッキー大学（レキシントン市）に留学し、生物学を学んでいたTさん。Tさんは中学3年生の時、静内町の第1回青少年交流派遣団の一員としてレキシントン市を訪れた“第1期生”。その時の感動が留学にまで結びついた。

「なんとか恩返ししたい」とTさんは自ら日米両国を行き来して交流事業の連絡調整などに当たり、今でも双方の子供たちから“頼りになる兄貴”と慕われているという。

このほかにも、姉妹都市交流の経験が契機となって静内町から数人の町民が米国に滞在しており、静内インターナショナルクラブの谷岡毅会長も「友だち＝信頼関係が国際交流の



静内町の幼稚園を訪れ、園児たちに本場のバンジヨーを演奏するティム・レイクさん



アイザック・レキシントン市長（左から2人目）自ら茶道で日本文化を体験＝2004年9月、静内町で

原点であり第1歩だが、Tさんのような人が国際交流の懸け橋になってくれるのは、やはり、交流の具体的な成果ではないか」と語る。

静内町はレキシントン市への青少年友好親善訪問団に参加する子供たちに、旅費の3分の2を助成してきた。しかし、財政難の影響もあり2005年度から2分の1助成に減額したが、前述したように高校の教諭を団長にするなど、内容にさらに実を持たせながら、今後も派遣事業を継続していく方針という。

「北の零年」で描かれたように、エドウィン・ダン氏の技術指導、サラブレッド輸入など開拓当初から米国との関係を中心に国際性をはらんでいた静内。

「競走馬のふるさと」への発展に伴って、日高管内の在住外国人は1986年（昭和61年）の200人から20年後の2005年（平成17年）には2倍の400人を超え、「外国人がいる風景」は、日高では日常のものになってきた。

静内町では「そういった歴史と風土を生かし、子供たちに“海外”という選択肢を広げるためにも、国際交流はこれからも重要だ。かつて若者が始めた姉妹都市提携だったが、やはり中心になっていた方々の高齢化などもあって活動も転機に来ている。もう一度、初心に帰って官民が両輪となった国際交流の展開を目指したい」（町総務部企画課）としている。

静内町

人口：約2万3千人 面積：801.5km²

<http://www.hidaka.pref.hokkaido.jp/kanko/sizunai/>

アイヌの人々が自然とともに生きてきた静内に、松前藩士の知行地として静内場所が置かれたのが360年以上前のこと。1669年のシャクシャインの戦いなどの歴史を経て、明治に入って徳島藩洲本城代家老稲田邦植氏の旧家臣団が開拓のため入植した。その

後、「競走馬の里」として全国的にも有名になった。2006年3月に隣接する三石町（面積346.2km²、人口約5千人）と合併し、「新ひだか町」になる予定。国際交流の問い合わせ先 日高管内静内町総務部企画課 TEL(0146)43-2111

世界に向けた 「交流拠点都市」に

成果挙げた北方圏視察

長く寒い冬、その中で家屋、衣料などの生活の知恵、北国ならではの文化を享受する取り組み—など北方圏諸国の共通性、抱える課題の類似性は多い。

旭川市はスウェーデン、デンマーク、フィンランド、カナダ、北米などの北方圏視察団（当初は北欧視察団だったが、北米を加えたため、北方圏視察団に名称を変更）を実に1980年（昭和55年）から20年間にわたって実施してきた。

友好親善はもちろんだが、寒冷地での長い歴史と伝統を誇る北方圏諸国の生活、文化、産業などを学び合い、共に北国のハンディを克服し、利点を生かした快適で豊かなまちづくりを目指そうという目的だ。

2000年（平成12年）から同市が参加者に旅費や宿泊費の6割、24万円を上限として助成する市民海外視察団に衣替えし

たが、これらの交流が見事に花開いたケースとして同市が誇るのが、スキースキーのバーサーロペット大会だ。

バーサーロペット・ジャパン —スキーが取り持つ国際交流

スウェーデンでは、国家の創始者、グスタフ・バーサー王の偉業を記念して、1922年（大正11年）からクロスカントリースキー大会「バーサーロペット」を開催、現在では20カ国から約1万人が参加するほどの世界的な人気を博している。

「同じ北方圏の国として、なんとか旭川でも…」とクロスカントリースキー、歩くスキー関係者らが働きかけ第1回旭川国際バーサー大会開催にこぎつけたのが、北方圏視察団スタート翌年の81年（昭和56年）のこと。

第2回大会から国際スキー連盟（FIS）の公認を受けて国



北方圏視察の大きな成果といえるバーサーロペット・ジャパン。2005年の第25回大会には4千人を超える参加者で盛り上がった＝2005年3月

際大会に昇格、第4回大会では早くも参加者は本場スウェーデンのバーサーロペット並みの1万人に達した。

その後の北方圏交流も土台になり、90年（平成2年）の第10回大会には同国のカール16世グスタフ国王が自ら参加、また、バーサーロペットを開催している同国のモーラ、同名のミネソタ州モーラの両市の市長も出席した。

これを機に旭川を加えた3市での大会参加者にそれぞれ国際バーサー賞を授与することなどが決まり、目に見える具体的な国際交流スポーツに大きく成長した。

さらに、2002年（同14年）旭川で開いた第4回バーサーロペット・ジャパン3国交流会議で、第6回大会から「旭川国際バーサースキー大会」になっていた名称を「バーサーロペット・ジャパン」に変更することで合意、文字通り3カ国が一体化した全道でも誇れる冬のスポーツの国際交流事業となった。

05年（同17年）3月は25回目の“記念大会”で4千171人が参加、衣装のユニークさを競う「パフォーマンスコンテスト」も行われ、冬のスポーツだけでなく、冬を楽しむフェスティバルとして定着していることを裏付ける形となった。

同時にバーサーロペット・ジャパン3国交流会議で04年から旭川市、スウェーデンと米国にある両モーラ市の3市で高校生を中心とした青少年スポーツ・文化交流事業を毎年、3市持ち回りで開催しており、バーサーロペットを共通項とした新たな国際交流への発展としても注目される。

4カ国5都市との幅広い姉妹、友好都市関係

旭川市が目下進めている第6次市総合計画では3つの都市像を描いている。交流拠点都市、環境調和都市、生涯充実都市だが、交流拠点都市の柱の1つに掲げられているのが、国際理解を深める交流の推進、世界に開かれた都市づくりをうたう「国際交流を進めるまちづくり」である。

単にうたい文句ではなく、現実には4カ国5都市と幅広い姉妹友好都市交流を繰り広げているのが、旭川市の大きな特徴といえる。

【ブルーミントン・ノーマル市（米イリノイ州）】

ブルーミントン市（イリノイ州）との姉妹都市提携調印は、実に43年前の1962年（昭和37年）のこと。道内市町村の海外の都市との姉妹提携としては、59年の札幌市—ポートランド市に次いで2番目の早さだ。

農業、商業、工業の中心地、ニューヨーク、シカゴ、セントルイスから鉄道が入り込む交通の要所で、しかも、2つの大学がある内陸の文教都市。その類似性から旭川市の第1号の姉妹都市提携となり、次いで隣接するノーマル市とも87年（同62年）同様に姉妹都市となった。

少年野球チームの相互訪問や親善野球試合など交流はバラエティーに富んでいるが、67年から実施されている高校生1、2人の1年間の長期間の相互派遣は「全国でも余り例のない交流プログラム」（同市）という。

また、85年から約20人の中学生が2週間ほど相互に訪問する交流事業も続けられている。

だが、他の自治体同様、交流事業には財政難の影響は免れず、2002年（平成14年）の米国への40周年記念公式訪問時には、市長はビジネスクラス、他はエコノミークラスに格下げし、市職員以外は自費参加する—といった涙ぐましい経費削減策を採りつつ交流の継続を図っている。



旭川市で放水訓練の体験を楽しむブルーミントン、ノーマル両市の中学生たち=2004年7月

【ユジノ・サハリンスク市（ロシア・サハリン州）】

ユジノ・サハリンスク市との友好都市提携は旧ソ連時代の1967年（昭和42年）にさかのぼる。旧ソ連との友好、姉妹都市提携は全国では5番目、道内では1年前の66年の小樽市—ナホトカ市に次いで2番目、サハリン州の都市との提携は全国では初めてという記録だ。

ユジノ・サハリンスク市長からのソ連邦革命50周年記念祝



医療交流で旭川市内の病院を視察するユジノ・サハリンスク市の医師たち=2002年11月

典への招待がきっかけだが、提携25周年の92年（平成4年）には両市でチャーター便を飛ばして多くの市民が心のこもった交歓を図った。

その後、音楽、文化、芸術、スポーツなどでの市民、子供のさまざまな交流のほか、ユジノ・サハリンスク市立病院の医師などが旭川を訪れる医療交流や大学生交流も行っている。

【水原（スウウォン）市（韓国）】

水原（スウウォン）市との姉妹都市提携は89年（平成元年）。提携の6年前に設立された旭川日韓友好親善協会が、韓国との姉妹都市提携を推進するために、積極的な市民交流に取り組んだのが提携の土台となった。

新千歳空港とソウル間の直行便による利便の良さもあり、少年サッカー、ボーイスカウト、囲碁、写真、合唱などの交流が盛ん。姉妹都市提携5周年を契機に市職員1人を1年間相互派遣する事業も10年間行われ、15周年の2004年からは技術職員の相互研修も始まった。今後、経済交流などに結実していくことが期待されている。



旭川、水原両市の姉妹都市提携15周年で水原市伝統公演団が記念公演した＝2004年1月、旭川市で

【哈爾濱（ハルビン）市（中国・黒竜江省）】

一番新しい友好都市は1995年（同7年）に提携した黒竜江省の省都である哈爾濱（ハルビン）市。84年（昭和59年）の旭川日中友好都市促進協議会友好親善使節団によるハルビン市訪問や氷彫刻での交流、高校の姉妹校提携、94年（平成6年）の旭川ハルビン友好協会の設立などによる活発な市民交流が、友好都市締結のエネルギーとなった。

同協会が隔年でチャーター便「旭川市民友好訪中の翼」を企画して、毎回150人も市民をハルビン市に送り、同市からは教育、産業などさまざまな分野の90人も大型訪問団が来旭している。

また、97年には北海道教育大旭川校と哈爾濱師範大学が学生相互派遣などを内容とした姉妹校提携をし、さらに、まだ

1企業だが、ハム、ソーセージの合弁会社も設立された。

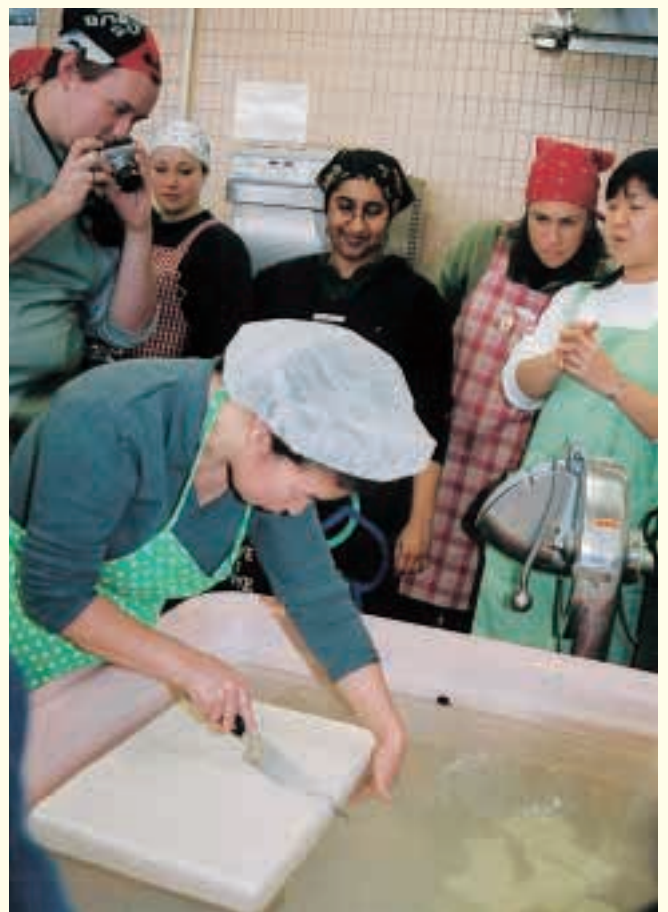
2005年（同17年）は友好提携10周年の年。旭川市では同年5月、4つの海外友好・姉妹都市としては初めて「友好週間」を設け、中国伝統楽器のコンサートや「ハルビン市紹介・物産即売展」などのイベントを催した。

旭川市と旭川ハルビン友好協会などによる実行委員会主催の提携10周年記念事業「旭川・ハルビン市民交流の夕べ」には、ハルビン市からの訪問団約120人と旭川市民約400人が篤い交流を繰り広げた。

同時に旭川市はギネス級の大雪像が会場を飾る「旭川冬まつり」、「世界一氷彫刻世界大会」でも有名。両市の間で、06年（同18年）1、2月に2カ月間にわたって開かれるハルビン市の「冰雪祭」で、旭川市が雪像製作などに協力することをうたった覚書も交換され、両市の友好交流は新たな進展をみせている。

“主役”は市民

「国際交流を進めるまちづくり」を標ぼうし、多彩な国際交流事業を実施している旭川市。それには、旭川医大、旭川大学など4つの大学による知識の集積や民間レベルでの活発



旭川市国際交流委員会主催の日本文化体験で「豆腐作り」に挑戦する旭川市内在住の外国人＝2003年12月

な国際化への活動が下支えとなり、それに自治体が呼応するという分厚い風土があるといっている。

ユジノ・サハリンスクとの道内初の友好都市提携や韓国、中国との都市交流などは前述したようにそれぞれ旭川にある民間の親善協会が、主導的な役割を果たしてきた。

1990年（同2年）に設立された旭川市国際交流委員会はそのいい例だ。国のふるさと創生基金を元に「地域性を生かした身近な国際交流の輪を広げる」ことを目的に旗揚げし、合わせて誕生した同市の国際交流課とともに官民協調の推進体制を担って来た。

同委員会は在住外国人と市民がゲームなどで交流するフレンドシップ・パーティー、ハッピー・ハロウィン・パーティー、市民と留学生の交流会、地場産品での国際交流・料理教室の開催など多様な活動をしており、ハングル、中国語、ロシア語の語学講座も人気だ。

毎年、各講座を20回開催し、多いときには受講生が1講座延べ400人を超すこともある。2005年（同17年）6月、同委

員会は「英語のシャワーを浴びよう！」と題して外国人と1泊2日で英語漬けになる「英会話合宿セミナー」も新たに催した。

市と共催で実施している地球市民講座もユニークなイベントだ。韓国、中国、米国、ロシアなどそれぞれの生活文化を学び、異文化理解、多文化共生の意識を高めようというもの。

例えば、04年の北欧講座では、第1回が「椅子から見えるデンマーク」、2回目が「北欧発！旭川を元気にするヒント～スウェーデンを中心に」、3回目は「フィンランドの暮らしと文化」がテーマといった趣向だ。

また、ホームステイ、ガイド、企画交流などの国際交流ボランティアの登録数も200人近くに上っており、語学研修も実はボランティア養成の狙いもあるという。

いずれにしても、「あくまでも民間レベルの交流が中心で、市はそのお手伝い役」（旭川市生活交流部国際交流課）という旭川市の地に着いた「国際交流のまちづくり」は、経済交流というメリットも含め、多くの示唆に富んでいるといえる。



旭川市民と外国人が楽しく交流するフレンドシップ・パーティー
=2004年6月

旭川市

人口：約36万人 面積：747.6km²

<http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/>

1891年（明治24年）の屯田兵の入植以来、上川地方の中心として開拓が進められ、産業、経済、文化、政治の中核都市。札幌に次ぐ道内第2の都市で、道北、道東地域の商業、流通の拠点都市となっている。

最近では、動物たちの生態を身近に観察できる旭山動物園が、全国的な話題を呼んでいる。

国際交流の問い合わせ先

旭川市生活交流部国際交流課 TEL(0166)26-1111

サフォークで紡ぎ出した 「まち再興」

米出荷日本一からサフォークランドへの “大変身”

道内では海外との姉妹友好都市提携は104組（2005年11月現在）を数えるが、士別市がオーストラリアのゴールバーン市（ニューサウスウェールズ州）と姉妹都市提携したのは、95番目。1999年（平成11年）7月と比較的最近のことだ。

しかし、そこに至るには、地域住民と行政が一体となったまちおこし、地域再生への取り組みの歴史があり、その土壌の上に、サフォークが懸け橋となった国際交流の結実がある。

士別市は明治の開拓以来、客土など泥炭地の水田改良によって米作りに力を入れ、61年（昭和36年）には人口4万1千人、米の出荷高も日本一を記録するなど「農業都市・士別」は全国的にも知られる存在となった。

だが、減反率60%という国の稲作政策、それに伴う離農、転出増などで一転して全国2位の過疎化地域になり、人口も79年（同54年）には3万人を割り込んだ。

危機感を抱いた同市内の商業、農業、工業など各界、官庁

の若手が、「まちづくり市民集会」などを開催、討論を重ねた結果、「活力あるまちづくり」の“エース”として着目したのが、「パンダめん羊」の愛称を持つ英国原産のサフォーク種。以来、ゴールバーン市との姉妹都市提携に結びつくサフォークランド構想が、スタートを切ることとなる。

地域再生への新たな発想

もともと66年（同41年）に創設された士別市営めん羊牧場にオーストラリアから輸入したサフォークが200頭ほどいた。多くの市民が、顔が黒くパンダに似た愛くるしいサフォークにマチの再生を託すシンボルを見た、といえる。

その具体化への第一歩が82年（同57年）、士別青年会議所（JC）が創立25周年記念事業として発足させた「士別サフォーク研究会」。同会議所メンバーだけでなく各層から市民約200人の参加をみた。

その結果、めん羊関連地域の視察、羊肉料理の試食会を兼ねた「市民の夕べ」の開催、勉強会、講演会など「めん羊の



サフォークランド・士別の象徴になっている「羊と雲の丘」、現在、世界の30種の羊が飼育されている

まち」へのさまざまな取り組みが始まった。

83年には市の中央公民館と共催で開いた、原毛の洗い、染色、紡ぎまでの一連の技術講習「暮らしの紡ぎセミナー」が好評で、講習後、20数人の主婦が手紡ぎサークル「くるるん会」を結成したことから運動は市民レベルに拡大、主婦の内職熱も相まって第1回ニットフェアの開催にまで至った。

84年、東京の伊勢丹デパートの「大英国展」に出展されていためん羊12種、12頭、翌年には同様に牧羊犬2頭が英国羊毛公社からプレゼントされ、「世界のめん羊牧場—サフォークランド」構想は具体化への新局面に入った。

同年、これらの活動に対して、サフォーク研究会が総務長官賞、士別青年会議所が「まちづくり全国優秀賞」を受賞、羊関連商品の販売のために、市民有志による「株式会社サフォーク」も設立された。

同時に市も「開発振興室」を新設して、同研究会を積極支援、ニットフェアのほかに88年から「サフォーク祭り」もスタートを切った。

95年（平成7年）には市民250人が参加して、サフォークランド・士別の象徴ともなる「羊と雲の丘」の牧柵づくりも始まり、地域再生は単なる構想を超え、具体的な姿となって発展の道を歩み始めた。



重さ200トン、高さ15メートル、全長18メートルの巨大な羊のレプリカ「ビッグ・メリノ」の前でオーストラリアの高校生と記念写真を撮る士別の高校生たち＝2004年8月、ゴールバーン市で

ゴールバーン市（豪州）と姉妹都市提携

これらの活動の中で、オーストラリアのゴールバーン市との姉妹都市提携の動きが自然に付いて来る形となった。

1994、95の両年、同研究会は観光牧場の運営、飼育、羊肉料理など「羊の国オーストラリア」でのノウハウを学ぶため、市の人材育成事業の補助を活用して、10人からなる「オーストラリア・スタディ・ツアー」を実施した。

これが縁になって96年、士別市で開かれたサフォーク・フェスティバルにゴールバーン市からマーガレット市長ら8人がはるばる来日、翌年の士別市長らのゴールバーン市訪問で友好親善交流の合意書が交わされた。

もともとゴールバーン市側が姉妹都市を希望していたこともあって、士別市も99年（同11年）に開基100年記念事業として改めて姉妹都市提携に調印し直した。

同研究会を中心にしたまちおこし—羊が懸け橋となった、珍しい姉妹都市提携といえる。



ゴールバーン市からの訪問団の歓迎レセプション風景
＝2003年6月、士別市で

官民“協働”の国際交流

節目ごとの両市の親善訪問に加え、市民訪問団、高校生の短期留学が1年置きに交互に行われている。ホームステイをしながらの各種交流、学校訪問などだが、姉妹都市提携の成り立ちからも分かるように民間団体が重要な役割を果たしている。

2回にわたる「さっぽろ市士別ふるさと会」によるゴールバーン市訪問は士別国際交流協会、同研究会など民間団体が中心になったほか、3回の小学生絵画交換事業は同交流協会と市の共催事業。また、市民訪問団や国際交流講演会は同交流協会が主催、士別青年会議所も2002年（同14年）に創立45周年記念の海外交流研修事業として、5人の高校生をゴールバーン市に派遣した——といった調子だ。

以前から士別北方圏交流協会がカナダ、フィンランドなどの北方圏諸国との友好関係を模索したことに加え、青年会議所などの民間団体によるまちおこし活動が活発化、国際交流に関しては士別国際交流協会が民間団体を束ねる役割が定着した。

これに市が1990年国のふるさと創生基金を運用して人材育成・交流事業を創設、小、中学、高校生を対象にした事業に4分の3、市民対象の事業に2分の1を補助し、民間の活動を支援している。

市は「まちづくりのためにも人材育成が重要であり、国際交流も高校生の短期留学を中心に、今までのように官民が一体となる協働の考えでやっていきたい」（総務部企画振興課）という。

「緑ゆたかで活動力あふれるまち」を第4次総合計画の基本に掲げる士別市は「サフォークランド士別」と共に「寒冷

地試験研究のまち」もまちづくりの核に据え、トヨタ自動車、ダイハツ工業、ヤマハ発動機、ブリジストン、交通科学総合研究所が同市で寒冷地の走行テストなどを行っている。

ゴールバーン市との姉妹都市提携の翌年の2000年（同12年）、士別市はトヨタ自動車の城下町である愛知県三好市と友好都市提携を結んだ。まちづくりの活力を国内外のネットワークで広げていこうという狙いだ。

もちろん、ゴールバーン市との姉妹都市提携と同一視するわけにはいかないだろう。しかし、まちづくりの延長線で姉妹、友好都市が誕生したという点では、共通の一面もあるといえる。

地域住民が自ら地域再生に取り組み、行政の協働を呼び込んだ—このサフォークランドのまちづくりで、おのずから姉妹都市提携を紡ぎ出した士別のケースは、今後の国際交流を考える上で学ぶべき多くの点を持っているといえよう。



士別市内でみこし担ぎの初体験を楽しむゴールバーンの高校生たち
=2003年8月

士別市

人口：約2万4千人 面積：1千119km²

<http://www.city.shibetsu.lg.jp/>

以前は米出荷高日本一を記録したこともある稲作、畑作などの農業都市。最近ではサフォークをマチのシンボルとしたサフォークランドや寒冷地の特性を生かした試験研究のまちとしても全国的に注目を集め

ている。2005年9月1日に上川管内朝日町(面積522km²、人口約1千800人)と合併した。

国際交流の問い合わせ先
士別市総務部企画振興室企画課 TEL(01652)3-3121

市民が誇る 多彩なアイデア

「公開と参加のまちづくり」の主要テーマ

名寄市の市勢要覧のトップにある「公開と参加でつくるまちづくり」の3本柱の1つに、「国際化や地域間交流を進めるため、近隣諸国都市との異文化交流を通して国際交流を深める」ことが掲げられている。

厳寒期には幻想的な空間を演出する「サンピラー」細氷現象が見られ、かつては水稲の北限地域だった名寄市で、単に、キャッチフレーズだけでなく、国際交流の具体的な輪が広がりをみせているのは、予想を超えた驚きすら感じる。

北方圏センター発行の季刊誌「Hoppoken」の1996年春季号で「わがマチの国際交流—名寄市」を執筆した当時の同市の国際交流担当者は、「名寄市には、国際交流を推進しようとする団体が数多くあります。それらの団体の活動、情報発信と親善交流が大きな力となって、名寄市の国際交流を支えています。人口3万人に満たない町でのこうした交流事業は他に類を見ないものと自負しています」（原文のまま）とその“秘訣”の一端を、こう表現している。

36年間もの歴史を持つリンゼイ市（カナダ・オンタリオ州）との姉妹都市提携から、最近の国際雪像彫刻大会開催まで—名寄市の国際交流には、確かにさまざまな形で市民の活動が色濃く投影された、広がりや深みがあるといえる。

2つの姉妹・友好都市提携

【宣教師夫妻と市民との親交が生んだ篤い交流（カナダ・リンゼイ市）】

北見市とエリザベス市（米ニュージャージー州）との姉妹都市提携は開拓時代の北見に居を構えた米国人宣教師、ピアソン夫妻の社会活動を偲んでのものだが、名寄市とリンゼイ市（2001年1月の合併で現在の市名はカワーサレイクス市リンゼイ地区。以下、旧名のリンゼイ市で表記）との姉妹都市関係は、名寄市に住んでいたカナダの宣教師、ハウレット夫妻と市民とのごく最近までの長い交流が生み出したものである。

ハウレット夫妻は1953年（昭和28年）から81年（同56年）



姉妹都市の橋渡し役だったハウレット夫妻の墓参をする名寄市民訪問団の人々
=2004年7月、カワーサレイクス市リンゼイ地区

までの28年間も名寄市に居住、未舗装、除雪のない時代に布教活動のみならず、中高校生向けの英語キャンプの実施や農村青年の研修、交流の支援活動など、あらゆる機会を通して市民との篤い親交を重ねた。

帰国時には同夫妻に名寄市から国際親善名誉市民の称号が贈られたほどだった。

この夫妻と名寄市民との心の触れ合いの結果、リンゼイ市を故郷にするドリーン夫人が橋渡し役となって、同市との姉妹都市提携がすんなりと決まった。

調印は69年（同44年）。道内での海外との姉妹都市提携としては12番目、カナダとの姉妹都市提携は65年の釧路バーナビ市に次いで2番目という早さだった。

夫妻は名寄在住中はもちろん、帰国後も市民交流、高校生交流などに力を注いだ。

81年の帰国時の送別会で夫妻は「私たちの大きな仕事の1つは、カナダと日本の間に平和の懸け橋をかけることだったが、これは、名寄市とリンゼイ市が姉妹都市になり、市民の交流、文化の交流ができ、私たちにとって生涯忘れられない思い出となりましょう」と語ったが、ドリーン夫人は1992年（平成4年）、夫のハウレットさんは2003年（同15年）に惜しまれつつこの世を去った。

継続する心温まる触れ合い

リンゼイ市との姉妹都市交流は提携5年ごとの周年に市民訪問団が相互に訪問、また、1973年（昭和48年）から始めた高校生の隔年ごとの相互交換留学（2カ月間のホームステイで2004年までに名寄からリンゼイに26人、リンゼイから名寄に27人を派遣）、1983年にスタートさせた名寄短大生のリンゼイでの短期研修（2004年まで計32人派遣）、3回にわたる高校生、名寄短大生を対象にしたカナダ文化体験と英語研修の旅の実施——などが主なものだ。

両市の都市公園内にそれぞれ「リンゼイ公園」、「リンゼイ通り」、「ナヨロパーク」などが設けられ、日常的に姉妹都市の絆を確認し合っているほか、提携の経緯からもわかるように、市民レベルでの心のこもった交流が大きな特徴となっている。

例えば、元教師のマーガレット・コッシュさんは、83年（同58年）友好親善訪問団の一員として初めて名寄市を訪れて以来、すっかり名寄ファンになった。

翌年には名寄短大でボランティアで英語を教え、85年から5年間、名寄の中学校で短期のボランティア英語教師をするなど、計11回も同市を訪問、同市から国際交流名誉市民の称号も受けたほどだ。

リンゼイ市にあるマーガレットさんの自宅は、半地下の2部屋がジャパニーズ・ルーム。名寄市で贈呈された日本の着物、民芸品などを展示して、同市からの訪問団や教え子をい

つも笑顔で歓待してくれるという。

マーク・ハミルトンさんの場合も姉妹都市ならではの心温まるケースだ。

ハミルトンさんは87年（同62年）に交換高校生として来訪した。楽しい思い出を胸に再来日を決意、93年（平成5年）から95年の2年間、名寄市で英語指導助手（AET）を務め、日本との教育、文化交流への関心を一層深めた。

その後、北大教育学部に入学、名寄市に隣接する上川管内美深町出身の女性との国際結婚にまで発展した。

2000年（同12年）8月、名寄市開拓100年記念式典に出席したリンゼイ市民訪問団には、ハミルトンさんのお父さんも参加し、名寄、リンゼイ両市民でマーク・ハミルトンさんと日本女性との国際結婚を祝ったという。

この2つのエピソードが物語るように、両市の36年間に及ぶ姉妹都市関係は、その懸け橋となったハウレット夫妻と名寄市民との心の触れ合いと同様に、市民レベルの温かい交流が中心になっている。

その意味で、国際交流の1つの在るべき姿を示しているといっている。



国際交流名寄名誉市民のマーガレット・コッシュさん（右から3番目）の自宅を訪れた名寄の人々＝2004年7月

【ドリンスク市（ロシア・サハリン州）】

1988年（昭和63年）、日ソ間の友好親善を図る目的で名寄日ソ親善協会が発足し、同年の第4回サハリン平和交流の船に同協会から4人が参加した。さらに、北海道日ソ親善協会の紹介で農業を中心に産業構造、人口などが類似しているドリンスク市との民間レベルの交流が始まった。

ドリンスク市はかつての「落合」で、名寄市に住む落合出身者が中心となって90年（平成2年）「なよろ地区樺太会」を旗揚げた。これをきっかけに友好都市への要請が強まり、翌年の91年3月、シドレンコ・ドリンスク市長の名寄訪問を機に、友好都市提携が正式に調印された。

2004年（同16年）の訪問団に同樺太会会長の松田十四一（とよかず）さん（79）も参加、ドリンスク（落合）への実に59年ぶりの里帰りが実現した。



ドリンスク市開拓120周年式典での両市の交歓風景＝2004年9月

交流は語学留学生、サッカー少年団、青少年訪問団の相互派遣、教育・福祉交流団、医療訪問団の受け入れなど市民、青少年を対象としたものが主だが、友好提携事業の一環として名寄市がドリンスクに市民の募金で注射針6万本、注射器1万9千個、ベビーベッド10台を贈呈したり、消防車なども寄贈、友好の気持ちを形に表しているのも特徴だ。

さらに、2004年9月、ドリンスク市の開拓120周年記念式に出席した名寄市民訪問団は、名寄消防署の救急車「そよかぜ」をプレゼントした。「そよかぜ」は1992年に配属された排気量2千800ccの救急車だが、新型救急車の導入を機に、ドリンスク市での活用を打診したところ、「大歓迎」の返事で実現をみた。

名寄市では今後の課題として、①草の根交流を継続するが、両市の懸け橋になる新たな青少年交流を開拓する②意思疎通

を円滑にするため、語学留学などの研修を充実させる③通信手段の充実を図る—の3点を挙げている。

また、長谷川良雄・名寄ドリンスク友好委員会委員長は「お互いの文化と歴史を知り、多くの市民が交流を持ち、理解することが大切だ。先輩の名寄・リンゼイ姉妹都市友好委員会の活動に学び、息の長い交流を続けていきたい」と今後の抱負を語っている。

北方圏交流から花開いた国際雪像彫刻大会

名寄市には名寄日中友好協会があり、名寄市立総合病院と中国・秦皇島市にある秦皇島中医医院との医療交流などさまざまな友好事業が行われているほか、名寄日韓友好親善協会が韓国の鐵原郡と交流を深めるなど、市民レベルでの国際交流は他都市では余り例を見ないほど多彩だ。

この中でも厳寒の名寄ならではの特徴として、北方圏交流から花開いた国際雪像彫刻大会が挙げられよう。

その発端は91年（同3年）、名寄青年会議所が創立35周年記念事業として10年ぶりに実施した北方圏名寄市民ジェット。当時、北海道教育大教授だった伊藤隆一さん（故人）をコーディネーター、坂田仁・同会議所直前理事長を団長に29人がフィンランド、スウェーデンなどの北方圏諸国を視察した。

その中で参加者に大きな影響を与えたのが、サンタの里として知られるフィンランドのロバニエミ市。この訪問を機にフィンランド野球のペサパッコを通じたスポーツ、文化交流の依頼を受け、それを実現するために坂田さんらは急ぎよ、北海道フィンランド協会名寄支部を立ち上げた。

ペサパッコ・チームの受け入れをはじめ、子供とサンタクロースとのクリスマスカード交換やシベリウス生誕130年を



ドリンスク市に贈呈された名寄市の救急車「そよかぜ」
＝2004年9月、ドリンスク市で

記念した「若き日のシベリウス」演奏会の開催など、フィンランドとの交流を具体化させた。

その流れとともに深まってきたのが、雪像競技を通じた交流。

もともと、名寄市では市民による雪像作りが盛んで、ロバニエミ市の国際雪像競技会会長のユハニ・リルベリさんも何度も名寄市を訪れていた。その縁もあって、故・伊藤隆一教授をコーディネーターとする北方圏名寄市民ジェットが再度、ロバニエミ市の国際雪像コンテストを見学、雪像競技への関心が急速に強まっていった。

「従来の名寄での市民雪像づくりの土壌に加え、新たな装いを凝らす活動の転換時期とがうまく重なった」と坂田さんは分析する。

94年（同6年）から名寄の雪像競技会の優勝チームをフィンランドの大会に派遣する一方、芸術性の高い雪像彫刻大会を名寄市で開催する動きが高まった。

北方圏名寄市民ジェットに参加した長谷川・名寄ドリンスク友好委員会委員長（なよろ雪質日本一フェスティバル実行委国際雪像部長）らが中心になり2001年、名寄市に国際雪像彫刻日本協会を設立、フェスティバルの目玉行事として、国際ルールに基づいた国際雪像彫刻大会ジャパンカップをスタートさせた。

北方圏名寄市民ジェット以来10年越しで実現した市民有志の夢だった。

05年（同17年）2月の第5回大会には7カ国11チームが参加、カナダチームが優勝したが、毎年世界中から50組を超す応募があり、国際的にも「NAYORO」の知名度は向上しているという。

こうみてくると、10年ほど前「国際交流を推進する市民団体は数多くあり…こうした交流事業は他に類を見ないものと自負している」とした名寄市の担当者の思いは、改めてうなずける内容を持っているといえる。



幻想的な光景ですっかり名寄名物になった国際雪像彫刻大会
=2005年2月

名寄市

人口：約2万7千人 面積：314.6km²

<http://www.city.nayoro.hokkaido.jp/>

天塩川の恵みを受けた名寄盆地中央に位置する田園都市。明治の開拓以来、交通の要衝地として広い生活圏域を形成。他都市との結びつきによって医療福祉・教育・スポーツなど生活密着型機能の高いまちに発展することが期待されている。北限地域といわれた稲作のほか、グリーンアスパラ、カボチャなど

農業や森林が基幹産業。隣接する上川管内風連町(面積220.6km²、人口約5千人)と2006年3月に合併の予定。

国際交流の問い合わせ先
名寄市総務部企画調整課

TEL(01654)3-2111

アルバータ州との 姉妹都市第1号

双方びっくりの奇縁

—ロッキーマウンテン・ハウス町

カナダ・アルバータ州にあるロッキーマウンテン・ハウス町との姉妹都市提携の経緯は、そう珍しいものではない。

上川町が1984年（昭和59年）の開基90年を控え、その記念の事業として同町出身の元道教育長の植村敏氏から「道と姉妹関係にあるアルバータ州の自治体を紹介するので国際交流を進めたらどうか」との話が寄せられてきた。

アルバータ州も4年前の80年に道と姉妹提携を結んだばかりだったこともあって、同州広報接遇部長のサローム女史が2度にわたって上川町を訪れるなど積極的な対応を示した。その結果、開基90周年の84年、共に北方圏に位置し、人口、気候風土、産業形態が似ているロッキーマウンテン・ハウス町（以下ロ町）との姉妹都市提携のスピード調印が実現した。

アルバータ州と道内の自治体との姉妹都市提携は現在9自治体に増えたが、上川町とロ町の提携は、2番目の十勝管内鹿追町とストニブレイン町より1年以上も早く、文字通りトップバッターとなった。

しかも、その“初打席”の場面がなかなか劇的—。

同年6月、提携調印のためロ町に向かった町長以下の初の上川町訪問団が、ロ町から200キロも離れたバンフのレストランで食事を取った。その後ろの席にいたカナダ人のグループが突然、「皆さんは日本からのお客さん…」と話しかけてきた。その中の1人が、写真でしか見たことのなかったソピット・ロ町長その人。

バンフには偶然、会議出席のために来ていたのだが、ソピット町長も「カナダはとても広い国。まさかこんな形でお会いできるとは…」とびっくり。

思いもかけず固い握手を交わした河本・上川町長（当時）も「本当に奇縁。2つの町は結ばれる宿命にあったのでしょうか」と感無量だったという。

アルバータ州との姉妹都市提携をしている道内9自治体が一堂に会する道・アルバータ州姉妹都市連絡会議は94年（平成6年）度の第2回会合から自治体の持ち回りで開催されているが、上川町が“先輩”としてトップバッターの任を果たした。



姉妹都市提携20周年記念でロッキーマウンテン・ハウス町から立派な馬具が上川町に贈られた
=2004年9月、上川町で



口町から来町した中学生
を歓迎する鈴木上川町長
=2004年7月

「出会いのすばらしさ」を実感

「結ばれる宿命…」という両町長の劇的な出会いが象徴するように、その後姉妹都市交流は順調な歩みを続けている。

その大きな柱になっているのが中、高校生の派遣事業だ。90年（同2年）の国のふるさと創生基金を原資に町が人材育成事業として実施している。

中学生の場合は1年おきの相互訪問で、それぞれ引率の先生2人に15人前後を派遣。すでに派遣人員は両町で各100人、合計約200人に上っている。

上川町からの派遣の場合は町が全額助成し、その代わり口町からの中学生のホームステイを引き受けることが条件になる。10日間程度の滞在だが、過ごし方はそれぞれのホームステイ先の自主性にまかされており、口町ではキャンプ、カヌー、野球など大自然の中で遊びながら英語や異文化を学ぶという趣向が主だ。

町で唯一の上川中は96年から口町のパイオニア中と姉妹校提携を結んでいるが、上川中のカナダ交流委員会は2003年（同15年）のカナダ訪問報告集の編集後記で「心のつながりに広がりが見られ、そこから発展することは想像を越えるものです。生徒たちが11日間で体験したものは計り知れなく、一人ひとりの生徒たちが自らの生き方の中でどのように反映していくのでしょうか。私たちは期待します。人と人との出会いのすばらしさを実感させていただきました」とその意義を強調している。

海外研修で生かされる上川高の水質調査

1990年度から毎年、平均5人の上川高校生徒をカナダに派遣する事業も中学生同様、町の人材育成事業の一環で全額町

の助成。口町のウィル・シンクレア高での授業体験のほか、上川町での「ロッキーマウンテン・ハウス通り」同様、口町での散策で「KAMIKAWA通り」を発見して大喜びをするなど、他自治体の高校生派遣事業と似たような光景が繰り返されている。

が、ひとつだけ違うのが、高校生が訪問期間中、自ら水質調査を実施している点だ。

北海道第1の河川・石狩川は同町南部の石狩岳を源にしているが、その水質調査に本格的に取り組んでいるのが上川高。

2003年（同15年）6月、23カ国53グループが参加した環境観測に取り組む学校の国際組織「GLOBE（グローブ）」の世界大会がクロアチアで開催されたが、日本から初めて同高の生徒4人が出席し、過去2年間石狩川で調査した水質検査の結果を英語で堂々と発表した。

これに加えて、高校生ネイチャーガイドのボランティア活



カナダで氷河の水質検査をする上川高校の生徒たち
=2004年9月



口町のウィル・シンクレア高を訪れ、友好を深める上川高校の生徒たち=2004年9月、口町で

動も認められ、翌04年6月には自然環境功労者として環境大臣表彰に輝いた。

この活動を口町訪問に合わせロッキー山脈の氷河の水質調査に広げよう、という新しい発想が生徒たちの間で生まれ、授業の一環として実施に移された。同じ箇所では氷河から溶け出した水を採取し、石狩川水系の調査と比較研究しようというもので、高校生らしい実のある派遣研修として注目を集めている。

官民一体の国際交流

町の人材育成事業は中高校生の派遣に止まらず、町民も対象としている。希望者は国内、海外などテーマを設けて申請、認可を得るものだが、内容は地域づくり海外交流セミナー(スイス、フランス、ドイツ)、山地寒冷型ライフスタイル研修(北米、カナダ)など多彩だ。

同事業が本格スタートした1992年(同4年)度以降2005年度まで、町が派遣事業に交付した金額は、中学生に約2千650万円、高校生に約3千300万円、一般派遣事業に約2千730万円で、総額は約8千680万円にもものぼっており、苦しい財政事情にもかかわらず、「郷土をつくることは、豊かな人間性と素直な感性をはぐくむこと」とうたった町勢要覧を文字通り実践している形だ。

こういった行政の積極姿勢に呼応して、姉妹都市提携の翌年の95年(同7年)には民間の上川町姉妹友好協会(事務局・上川町商工会)が設立された。2005年(同17年)で会員は152人。

1991年の北海道・アルバータ州姉妹提携10周年記念式典には、会員20人の民間訪問団を口町に派遣したり、2004年の口町との姉妹都市提携20周年には上川町の受け入れ主体として活躍、さらに、口町からの隔年ごとの中学生の来町には歓迎パーティを実施するなど姉妹都市交流を民間サイドから支え続けている。

国際観光の町宣言

日本最大の面積を有する大雪山国立公園、層雲峡温泉を中心に、その山岳観光の玄関口に位置する上川町への観光客入り込み数は年間250万人を越す。

「自然を愛し、旅行者を温かく迎えましょう」が町民憲章にうたわれているほどで、外国人観光客を含め、気持ちよく滞在してもらうために、1988年(昭和63年)に「国際観光の町宣言」を行った。

外国人観光客の宿泊人数は台湾、香港、韓国などアジアからの観光客の急増もあって、最近10年間で約5倍増の約10万人にも達している。

こういったことから以前から外国語の出来る町民の人材バンクへの登録、公民館による英会話講座の開催などの対策を採って来たが、2005年(平成17年)度の同町の層雲峡パッケージ事業をみても、各種の山岳ツアー、観光対策などと並んで、外国人観光客に対するホスピタリティ研修も大きな柱の1つになっている。

前年に引き続いて英語、中国語、韓国語などの語学研修や、外国人観光客への接客待遇、礼儀作法などを一層身につけようというもの。こういった不断の努力が、人口約5千人のマチに国際性を根付かせる土壌になっていることは間違いない。

姉妹都市交流、国際観光事業などによる町ぐるみの人材育成は、財政難を超えて同町の今後の国際交流にさらに厚い土台を造りつつあるといえる。

上川町

人口：約4千900人 面積：1千54km²

<http://www.town.kamikawa.hokkaido.jp/>

明治の開拓期を経て1922年(大正11年)塩谷温泉を譲り受けた荒井初一氏が層雲峡温泉の開発に当たり、また、林業のまち・上川の基礎も築かれた。町の約95%が貴重な資源となる緑の森林。54年(昭和29年)の台風15号による膨大な風倒木処理で、自動車幹線

道の整備、商工業が発展し、60年には人口は1万5千人を超えた。その後、人口減に転じているが、林産工業ともに観光業が基幹産業になってきている。国際交流の問い合わせ先 上川町企画観光課企画調整係 TEL(01658)2-1211

「壁画交流」が 象徴する心の絆

【友好都市—アシュクラフト村(カナダ)】

美深町が、カナダのブリティッシュ・コロンビア州アシュクラフト村（人口約2千人）との友好都市交流を始めたきっかけは、1992年（平成4年）9月にさかのぼる。当時、同町で木材業を営む山口克紘さんが、カナダで開催された木材機械の研修会に出席した際、通訳のアシュクラフト村在住の金丸顕男さんと知り合った。

金丸さんから同村が日本との友好提携と高校生の交換留学を希望しているとの話を聞き、帰国後同町にその話を伝えたのが、そもそもの発端だ。

その後、双方が事前視察や資料を交換したりした結果94年（同6年）7月、美深町で友好都市提携の運びとなった。

交流はさまざまだが、高校生の交換留学は、2003年（同15年）まで実施され、合わせて、同村からの受け入れが29人、美深高校生の派遣が40人を数えた。

しかし、04年重症急性呼吸器症候群（SARS）の影響で中止に追い込まれ、05年もなお休止中だ。

また、町村相互の公式訪問は、3年に1度、10～15人規模で行われている。同村からサッカーコーチも招請しているが、中でも特色のあるのが絵画による文化・芸術交流。

1997年（同9年）に同村から2人が来町、町民体育館横の第三コミュニティーセンターに、タイトル「四季」の壁画を制作し、2000年（同12年）に今度は同町から2人がアシュ



完成したタイトル「四季」の壁画の前で製作者と来町していたアシュクラフト村高校の交換留学生たち
=1997年、美深町第三コミュニティーセンター前で

クラフト村を訪れ、同村ミレニアムパーク内の壁画専用の日本風板塀に友好シンボルとしてタイトル「松山湿原」の壁画を描いた。

壁画制作のための相互訪問という交流は、珍しいといえる。

「びふか国際交流の会」の活動は 活発だったが…

美深町の国際交流団体「びふか国際交流の会」は、アシュクラフト村との友好都市提携前年の1993年（同5年）8月に設立された。

主な事業として、町の補助金を元に、北大留学生の美深町体験プログラム（ホームステイ受け入れ事業）、カナダ・アシュクラフト村との交流、海外研修報告会の開催、会報の発行、視察研修などの活動に取り組んできた。

同会の設立当時から事務局長として中心的な役割を果たし、その後長く会長を務めた成毛久則さんは、「びふか国際交流の会が実施した事業は、地域における子どもたちの教育という観点から、主として子どもたちが対象。親も子供たちを応援する形で参加するようになってきた」と会の趣旨を振り返る。

その1つの例として、子供たちの交流パーティや懇談会などの際には、女性会員が中心となり、手作り料理で相手をもてなすことで雰囲気は和やかになるだけでなく、親子共々の



友好シンボルとして制作されたタイトル「松山湿原」の壁画の前で製作者と美深町高校の交換留学生たち
=2000年、アシュクラフト村ミレニアムパーク内で



「英語であそぼ」で子供たちは外国語指導助手と一緒にそれぞれの国の料理を作り、料理を通して各国の文化に触れた
=2005年2月

参加という幅の広がりを見せた。

2003年（同15年）同会は、近隣市町村の外国語指導助手（ALT）と地域の子どもたちとの交流を目的とした「英語であそぼ」を始めた。初めての試みにもかかわらず、地域の子どもたちが約70人も参加し、スポーツ、文化交流などが行われた。

この事業は、外国語指導助手や学校関係者と連携を図りながら、継続されている。

また、人と人との交流を大切にしたいという同会は町と協力し、同会設立・国際友好都市提携10周年記念事業として03年10月、壁画制作相互訪問交流で来町したアシュクラフト村の女性画家ジョー・ペティさんを招いて、絵画指導交流事業を実施した。ペティさんの絵画作品は、アシュクラフト村ではもちろんのこと、美深町や札幌市でも個展が開かれたほどの人気だった。

ペティさんは、2週間の滞在中、美深町内の保育所、幼稚園、小中高校などを精力的に訪問し、約400人に絵画指導を行った。多くの子どもたちは「うれしかった。楽しかった。また参加したい…」と目を輝かせていた、という。

だが、民間の国際交流の中心的存在だった「びふか国際交流の会」は、05年（同17年）4月、予想外の解散に追い込まれた。町が財政難に加え、地域住民の国際化を広げる目的はある程度達成できたとの判断から、補助金のストップを打

ち出さざるを得なくなったからだ。

解散時点の会員数は、なお124人もいたが、会運営を担う人材が不足し、経費面でも会費だけでは従来の事業を継続できないという“苦渋の決断”だったという。

解散後、成毛前会長は、「今まで培ってきた人と人との触れ合いを大切に、国際交流を堅苦しいものではなく、日常生活の中での気軽な交流として取り組みたい」として、同じ考えの仲間と財源に左右されない新しい会の発足を模索している。

ただ、外国語指導助手と子どもたちとの交流を目的とした「英語であそぼ」については、今後も継続させていきたいとしている。

また、ペティさんのファンでもある成毛さんは、会解散後の翌月の5月、ペティさんを招いて美深町文化センターで絵画展を開催した。会場には、カナダの夜空を彩るオーロラ、03年訪れた際に描かれた美深の森や川を題材にした油絵約八十点が展示された。

解散したとはいえ、同会の活動は、今までの蓄積を原動力としながら、町の中に根付いているといえる。

「国際樹液サミット」と町おこし

シラカバの樹液は、もともと世界各国で飲料されていた。



10周年記念事業で来町したアシュクラフト村の女性画家ジョー・ベティさんの歓迎パーティー＝2003年10月、美深町で

日本ではアイヌの人々が健康飲料や調理用として利用しており、フィンランドでは飲料のほか、サウナ用の枝、樹皮のバックなどで国民に広く親しまれている。ロシアでも雪解け時に森に出かけ、樹液を飲む習慣が残っている。

美深町は1985年（昭和60年）から、寺沢実北大教授と共同でミネラル豊富なシラカバ樹液の飲用研究を開始、89年（平成元年）シラカバ樹液100%の天然ドリンクとして、同町の特産品「森の雫」を誕生させた。

樹液は、シラカバの幹に穴を開けると無色透明な樹液があふれ（溢れ）出てくるが、これが「溢出樹液」と呼ばれ、1年に1カ月しか採取ができないという。「森の雫」は、その貴重なシラカバ樹液の採れたてを、ろ過し殺菌するだけの天然ドリンクである。

樹液のボトリング化に成功した「森の雫」発祥の地である同町で95年（同7年）4月、「第1回国際樹液サミット」が開催され、北方圏8カ国の研究者を含む320人が参加した。

このサミットを機に樹液利用の動きが活発化し、5年後の2000年樹液の持つ新たな可能性を探ろうと、同じく同町で「第2回国際樹液サミット」が開かれた。

さらに、05年4月15日から17日まで、シラカバ樹液の効能

と活用法を考える第3回「国際樹液サミット・美深2005」が開催された。アジア、北米、欧州の海外8カ国の研究者が参加し、シラカバをはじめ、カバノキ科樹木活用の最新の成果も発表され、森林や樹木の持つさまざまな効用や潜在価値、重要性などについて情報を交換した。

シラカバの樹液活用という珍しいこの会議は、町の特性を生かした“国際学術交流”であると同時に、シラカバという共通項による国際交流としても注目される。

また、同町は、「第1回国際樹液サミット」の翌年の96年から毎年、まちおこしの1つとして、「びふか白樺樹液春まつり」を開催している。

当初は実行委員会による主催だったが、その後、有志が集まり「美深樹液を楽しむ会」を結成、同町の商工観光担当職員も加わり、官民一体となったまちづくりのイベントに成長した。

05年4月のまつりは、第10回記念でもあり、第3回国際樹液サミットの日程に合わせ、樹液試飲コーナー、かんじき残雪森林浴、スノーモービル試乗体験などの催しを行い、町外からも多くの人々が参加、ユニークな国際会議が具体的なまちづくりと地域活性化に結びつく成果も生んできている。



美深町で開かれた第3回「国際樹液サミット・美深2005」記念式典＝2005年4月

美 深 町

人口：約5千600人 面積：672.1km²

<http://www.town.bifuka.hokkaido.jp/>

農業、林業の町として栄えている美深町は、自然豊かな町で教育にも力を注いでいる。美深町文化会館「COM100」は、町民や天塩川流域市町村の生涯学習拠点施設として活用されている。美深市街から北へ8キロの地点にある森林公園「びふかあいらん

ど」には、びふか温泉、道の駅びふか、双子座館、チョウザメ館、キャンプ場などの施設がある。

国際交流の問い合わせ先
上川管内美深町総務課

TEL(01656)2-1611

積極的に海外との つながりを模索するマチ

海外3都市との交流から対岸貿易へ

留萌市は、3都市と国際交流を行っている。姉妹都市提携のロシア・ブリヤート共和国の首都ウラン・ウデ市、友好港湾提携の中国遼寧省の営口（えいこう）港務集团有限公司、そして将来は友好関係を樹立したいと考えている交流合意都市カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州コートニー市の3都市である。

【姉妹都市（ロシア・ウラン・ウデ市）】

留萌市は、留萌港が1936年（昭和11年）国際貿易港に、52年（同27年）に重要港湾に指定されていることもあり、同市が国際都市へと成長し、対外貿易の強化を図るためにもロシア極東地域の都市との姉妹提携を早くから希望していた。

だが、極東沿岸の港湾都市は社会主義体制下での軍港のため実現出来ず、代わって旧ソ連領事館を通じて72年（同47年）、ウラン・ウデ市との姉妹都市提携にこぎつけた。

72年～82年までほぼ毎年ウラン・ウデ市を訪問、91年（平成3年）同市の開基325周年記念式典に留萌市代表団が出席し、総額200万円相当の医薬品を病院に寄贈するなど、旧ソ連体制下でも友好関係が深まっていた。

最近では2002年（同14年）姉妹都市提携30周年記念式典のため3人のウラン・ウデ代表団が留萌市を訪れ、市内視察、市民のお茶会、歓迎夕食会などで改めて友好を確認し合った。

しかし、ウラン・ウデ市は内陸に位置し、交通手段が不便なため、過去30年間では、どうしても代表団の交流が主。今後、市民レベルの交流にどう拡大していくかが課題になっている。

【友好港湾（中国・営口市）】

留萌市と営口市（遼寧省）との関係は、1984年（昭和59年）日中友好留萌市民会議の講演会の講師として留萌市を訪れた駐札幌中国総領事から、留萌市と同様の港湾都市として営口市が紹介され、友好都市提携の気運が盛り上がった。

しかし、友好都市の提携を申し入れるため留萌市長が営口市を訪れたところ、すでに群馬県の太田市と姉妹提携を締結していることがわかった。

当時の中国では、姉妹都市は1市のみとしていたことから港を中心とした友好関係に方針を変え、90年（平成2年）中

国遼寧省の営口港務局と友好港湾議定書を締結し、技術研修生・職員の相互交流を主に行なっている。2003年（同15年）「営口港務局」は、「営口港務集团有限公司」に名称変更し、民間企業に衣替えした。

2000年の友好港湾10周年には21人の代表団、03年には同有
限公司から局長ほか9人の代表団が相次いで来留、港湾視察、市内企業を訪問した。

次いで、同15周年の05年（同17年）6月には再び同有
限公司の李松副総裁ら13人が来訪し、李団長は営口港関連施設への資金協力を要請した。一方、留萌市側は「留萌港の整備も進んだので、営口港との航路開設を目標としたい」との考えを伝え、同有
限公司が民間企業になったことも手伝い、ようやく経済交流に向けた具体的な動きの芽が出てきている。



留萌市役所を訪れた営口港務集团有限公司の局長ほか9人の代表団
＝2003年10月

【友好交流都市（カナダ・コートニー市）】

留萌市では基幹産業である水産加工業の経営安定と原料の確保、また、市民からの英語圏との交流要望などで、以前からカナダとの提携を希望していた。

このため、カナダで加工原料確保事業を営んでいた地元企業とブリティッシュ・コロンビア州東京事務所を通じ都市の紹介を依頼したところ、コートニー市の名が挙がってきた。

1993年（同5年）に留萌市の視察団が、コートニー市を訪問した。同市は、林業と水産業が主な産業で、ニシン刺網漁のメッカ。多くのカズノコを日本に輸出している水産加工都市でもあり、塩カズノコの生産が日本一の留萌市にとって経済交流の将来性も含め絶好のパートナーと映った。



コートニー市のホームステイ宅でホスト家族と交換留学生が歓談＝2005年

同年の留萌高校創立70周年記念式典にはさっそくヴァニア高校校長夫妻・生徒会長が来訪し、友好校の締結が行われた。

95年には、コートニー市長が初めて留萌市を訪れ、直ちに姉妹都市提携をするのではなく、交流が両市にとって大きな負担とならないように、まずは緩やかな条件で親善を深める「交流合意都市」関係を提案、両市の合意で、珍しい「交流合意都市」がスタートを切った。

その後も、留萌サッカースポーツ少年団や経済界を中心とした留萌市民訪問団が同市を訪れたのをはじめ、継続交流事業として、96年からは留萌高校とヴァニア高校の相互交換留学事業が始まった。毎年実施されており、2005年（同17年）もコートニー市へ2人の留学生が派遣された。

新たな広がりチャレンジ

3都市との交流は継続しているが、課題もあり、留萌市は02年、対岸貿易促進中期行動計画を策定し、対岸貿易・港湾活用の促進及び地場産業振興のため、地域一体となった国際交流を目指して、新たな友好交流都市について模索している。

まず、当初から姉妹都市要望を持っていた中国營口市との交流である。04年5月には留萌日中友好協会の設立20周年記念事業として、訪中団（13人）が營口市や北京市など中国各地を視察した。

中国營口市人民政府（營口市役所）を訪問した際、国際交流を担当する外事弁公室から、留萌市との友好都市締結と小学校相互の交流に意欲があることが示された。以前と違い、中国では一都市一姉妹都市の制限がなくなっており、「友好港湾」から「姉妹都市」への昇格も期待される。

その他に、新たな都市として、ロシア・サハリン州のコルサコフ市とホルムスク市との交流も検討している。コルサコフ港は03年の留萌港への輸出量が北洋材など約1万9千トン。サハリン州の商業港の中では最も多い輸出量を誇る。

ホルムスク市は04年10月、ホルムスクー小樽間を航行するロシア客船が留萌港に初めて試験寄港し、留萌市内での買い物ツアーが好評を博した。同年11月には、山本助役がコルサコフ市役所を訪れ港湾を通じた友好関係樹立の希望を伝え、ホルムスク市長にも表敬訪問した。

05年（同17年）10月には官民一体で商談会も兼ねた初めての「サハリンるもい展」をユジノサハリンスクで開催、旭川の企業も参加して、大いに盛り上がった。また、同年9月には、留萌港を拠点にしたサハリンクルーズで、約270人が豪華客船「飛鳥」に乗り、コルサコフやユジノサハリンスクで観光を楽しんだ。

留萌市では「サハリンるもい展」、サハリンクルーズなどを通して、新たに経済交流を含めた友好港湾・友好都市関係を模索していく方針で、ロシア客船の留萌港への恒常的な寄港実現も合わせ、積極的に国際交流を図って行きたいとしている。

行政主導から民間活動へ

3都市との国際交流は当初、行政主導の「留萌市国際親善交流委員会」が進めていたが、市民レベルの国際交流団体に衣替えるため1997年（同9年）に同委員会を発展的に解消し、趣旨に賛同する企業9団体と個人56人によって民間の「留萌市国際交流協会」が設立された。

活動内容は、海外交流都市との市民交流、市民の国際交流活動に対する協力と支援、国際交流ボランティアの育成、国際交流関係団体のネットワーク化の推進など。

これまでの主な事業は、99年（同11年）ウラン・ウデ市在住のファッションデザイナーのダンビエバ・ゾーヤさんによる「ロシアン・ファッションショー」の開催。同年、北方四島交流事業として4島に住むロシア人25人との日本文化体験を中心とした市民交流。2000年（同12年）には世界14カ国から35人の空手家を招き、「留萌市国際親善空手道フェスティバル」を催した。

01年には在住外国人を招いて、「国際交流クリスマスパーティ」を開催するなどさまざまな活動を展開している。

留萌市には、この留萌市国際交流協会のほかに「日本ユーラシア協会留萌支部」や「留萌日中友好協会」などがある。大きな事業はほとんどこの3団体が一体となって取り組んでおり、02年から中国、ロシアの駐札幌総領事やカナダ通商代表などを招いて「国際交流新年交礼会」を合同で開催してい

るのがそのいい例だ。

ごく最近の事業としては、04年（平成16年）留萌市国際交流協会が主催、他2団体が協力して、コルサコフ市民との人的交流を図るために、「バプシキナ・ベスニ児童民謡舞踊団」を招請する交流事業を行った。

この事業は、01年同舞踊団が留萌市を訪問した際、3団体で協力して行ったホームステイや留萌高校との交流が大変好評だったこと、また、03年留萌市経済視察団がコルサコフを訪問した際に、すばらしい歌と踊りで歓迎してもらったこと一などがきっかけとなっている。

コルサコフを拠点に活動しているこの舞踊団は、国際的な評価も高く、これまで海外各都市で多くの公演をし、コンクールやフェスティバルなどで数々の表彰を受けている。

内容は、市民コンサート（留萌市・増毛町・小平町）、市民歓迎会、東光小学校児童との交歓などさまざまだが、民間ベースによる国際交流が次第に大きく花開いていくケースとしても注目していようだ。



留萌市で行われた「バプシキナ・ベスニ児童民謡舞踊団」公演
=2004年7月

留萌市

人口：約2万7千人 面積：297.3km²

<http://www1.sphere.ne.jp/rumoi/>

留萌市は、北海道の西北部に位置し、留萌支庁管内の中心都市である。留萌港は国の重要港湾。水産加工が基幹産業で、特に塩カズノコの生産は日本である。西には日本海、南北には暑寒別天売焼尻国定

公園が連なり、風光明媚なまちである。

国際交流の問い合わせ先

留萌市企画財政部企画調整グループ

TEL(0164)42-1801

町民の願いは 「子供たちのために」

町出身の学校経営者が生んだ姉妹都市 —キャッスルガー市(カナダ)

遠別町出身の鹿野光雄氏が経営する青山製図専門学校（東京都）が、1986年（昭和61年）から夏期研修として故郷の遠別町で「遠別サマースクール」を開設、同町の恵まれた自然環境の中で、毎年約350人の学生が同町を訪れ、町民との触れ合いを持った。

このサマースクールの中に、同校の姉妹校になるカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州立セルカーク短期大学（キャッスルガー市）の学生が参加していた。

姉妹都市提携の経緯は、同年に東京で行われた同専門学校と同短期大学の姉妹校提携調印式に、研修所がある遠別町から当時の佐々木町長が来賓として出席したのがきっかけだ。

鹿野光雄校長は姉妹校だけではなく、町と市の交流に発展させてはどうかと提案、自ら遠別町とキャッスルガー市との橋渡し役を買って出た。

さっそく、キャッスルガー市から姉妹提携を希望する文書が遠別町に届けられ、これを受けて、88年（同63年）佐々木町長、町議会議長ら一行が同市を訪問した。

同市は、林業を中心に観光レジャーが四季を通じて楽しみ、遠別町と同じ自然豊かな都市だったこともあって、同町としても提携を歓迎する気運が高まった。89年（平成元年）にはキャッスルガー市長ら6人が来町し、遠別町役場で姉妹都市提携の調印が行われ、双方の永遠の発展と協力を誓い合った。



訪問団員一人ひとりにプレゼントを渡す姉妹都市の“生みの親”の鹿野光雄・国際交流協会名誉会長＝2004年7月、遠別町で



キャッスルガー市からクリスマスカードと共に贈られてきたポインセチアの花＝2004年12月

以来、毎年クリスマスには、カードの交換や折に触れ贈り物のやり取りも行われている。中でも2004年（同16年）同町にクリスマスカードと共に贈られてきたクリスマスのシンボリックな花である「ポインセチア」は、町民を大いに感激させた。

民間団体が交流の中心に

当初は、行政が中心になって、町民、中学生、議員による相互交流が行われていた。しかし、行政主導より町民交流を柱にしようと、97年（同9年）9月に民間団体の「遠別・キャッスルガー国際交流協会」が発足した。また、同年12月には、キャッスルガー市においても「キャッスルガー・遠別教育交換委員会」が設立され、民間同士の交流が開始されることとなった。

人口約3千400人の同町で、町民有志の民間団体が活動を継続することは、通常資金面などでかなりの負担を伴うが、姉妹都市の生みの親でもある鹿野氏が遠別町とキャッスルガー市双方に基金を提供し、さらにその後も、名誉会長として同協会の運営に協力が続いている。

全員が個人会員だが、キャッスルガー市を訪れた会員の思いは熱い。90年の相互交流で訪問した会員の1人は、飛行機のタラップから赤じゅうたんが敷かれ、トランペット演奏をバックに出迎えを受け、その時の同市での熱烈な歓迎ぶりは今でも忘れられないという。



歓迎レセプションでキャッスルガーの子供たちが歌を披露
=2004年7月

インターネットで“中継”

「遠別・キャッスルガー国際交流協会」発足後、98年（同10年）から、相互でホームステイを経験し、文化や風習を肌で感じてもらうことを目的に中学生対象の青少年相互交流がスタートした。

訪問団の受け入れ、派遣を1年ごとに交互に行っているが、町内で外国人に出会うチャンスも余りなかったため、最初は戸惑うことばかりだった、という。

しかし、派遣、受け入れを重ねることで、外国人に対する抵抗感は薄れ、むしろ寝食を共にするホームステイなどによって家族ぐるみの親交が深まってきた。

2004年（同16年）7月15日、キャッスルガー市から中学生8人を含む10人の訪問団が来町し、7日間の滞在期間中、ホームステイで「遠別の家庭」を味わった。

また、町内施設の見学、中学校での“1日入学”、日本文化を理解してもらうため茶道やお寺での座禅の体験などのほか、休日には受け入れ家族が稚内や旭川方面を案内するなど



遠別小学校を訪問し、子供たちと親睦を図るキャッスルガーの訪問団=2004年7月

親交を深め、家族によっては剣道の見学、体験などアイデアを凝らした歓待もー。

歓迎レセプションでは、プレゼント交換や歌の披露などもあり、町民の手作りによる心のこもった交歓が繰り広げられた。

いつもの光景とはいえ、初日は子供たちも緊張した表情だったが、帰国近くなるとそこは子供同士。片言の言葉と身振り、手振りなどで何とか意思が通じ合い、言葉の壁を越えて国際交流は和気あいあいの雰囲気となった。

また、このキャッスルガー訪問団の遠別町での活動は、高橋豊同協会会長が写真に撮って、その日のうちにホームページに掲載した。

これによりインターネットを通じて遠別の関係者はもちろん、キャッスルガーの留守家族でもほとんどリアルタイムで子供たちの元気な様子を観ることができ、心配していた家族からも大変感謝された。

このようなインターネットを活用した国際交流の手法は、経費をかけずにより大きな成果につながることも可能なことから、他地域でも参考になるといえよう。

行政の協力も不可欠

青少年相互交流による中学生の訪問者数は、1998年（同10

年）から2004年（同16年）までにキャッスルガーから4回30人、遠別からは4回33人にのぼる。05年は遠別町が訪問する年で、8月に中学生7人がキャッスルガー市に派遣された。

高橋同協会会長は、「最初の頃はすべて難問だったが、なかでもホームステイが一番大変だった」という。町民にとって、ホームステイの経験がなかったからだ。

同会長は、「町民に集まってもらい説明会を開き、何とか受け入れ家庭を決めてもらった。しかし、文化や風習の違いなど、分からないことばかりだったため、協会は受け入れ家庭と何度も懇談し、勉強会も開いた」とその苦勞を語る。

その後、町と相談、ホームステイは小、中学校を通じて募集し、受け入れをした家庭の生徒を自動的に次のキャッスルガー市訪問団のメンバーとすることにした。

同協会は、個人会員のみで運営されているため、資金面の手当てが大変だが、同会長は「子供たちが異文化に触れることは素晴らしい体験だし、日本の文化を見直すきっかけにもなる。苦勞は多いができる限り継続したい」と語る。

また、姉妹都市の生みの親の鹿野同協会名誉会長は、「行政が協力できる環境を作ることが大切だ。協力がなければ、交流は難しかった。遠別の子供たちと同じくキャッスルガーの子供たちもこの交流を喜んでいる。日本に来たキャッスルガーの子供たち全員からいつもお礼の手紙をもらい、やはり、姉妹都市提携をしてよかったと改めて思う」と話している。



「国際交流は子供たちのためだ」と語る国際交流協会の2代目会長高橋豊さん＝2005年1月

遠別町

人口：約3千400人 面積：591.5km²

<http://www.town.embetsu.hokkaido.jp/>

遠別町は、北海道の北部に位置する。東部にピッシリ岳を主峰とする天塩山地が連なり、町の約88%が森林で、西に向かって幾つかの河川が日本海に注いでいる。日本における水稲北限の地として、農業を

中心として発展し、林業・酪農・漁業も営んでいる。

国際交流の問い合わせ先
遠別町役場総務課企画振興係 TEL(01632)7-2111

日ロ友好最先端都市への道

新たな切り札になるか「国際交流特区」

地域限定で規制緩和を図る国の構造改革特区。ロシア・サハリン州からの水産物輸入、機械類の輸出、サハリン沖での本格的な石油、天然ガスなどの大陸棚資源開発の支援基地、サハリンとの定期航路運航—など人と物の拠点港としての機能強化を目指して、稚内市は2003年（平成15年）、国に「国際交流特区」を申請し認可を受けた。

当初は人と物が自由に行き来する自由貿易地域（フリートレードゾーン）実現のため①査証（ビザ）なし渡航の特例②税関、入国審査、検疫の窓口の24時間オープン化—などを国に要請したものの、認められたのは税関の執務時間延長と貨物の輸出入時にかかる手数料の半減だけ。

しかし、04年には、同市のサハリン事務所に登録し、一定の条件を満たせば1社3人まで稚内市長の身元保証で、「数次短期滞在ビザ」の発給を簡素化出来る特例も実施された。

まだ、十分ではないものの「開かれた国際交流特区」への第一歩が着実に踏み出されたことは間違いない。



「国際交流特区」として今後の飛躍を期待される稚内港
=2004年7月

経済交流による共栄の模索

いうまでもなく稚内市は、宗谷海峡をはさんでサハリン州とは僅か43キロしか離れていない日本最北端の国境のまちだ。しかも1999年（同11年）稚内—コルサコフ（大泊）間を

5時間半で結ぶ定期フェリー航路が開設された。

同市の今後の発展のためにもその絶好の位置を生かさないと手はない。同市が自ら「日ロ友好最先端都市」と位置づけ、国際交流特区に期待をかけるのは、当然のことといえる。

特に経済交流の点では「サハリンとは、歴史的にも隣接地域として共に発展する一つの経済圏を構築することを目指す」（稚内市）と考え方は明確だ。

数字はやや古いが、稚内港の外国貿易総額はロシアとの水産物輸入を中心に、2003年（同15年）には1948年（昭和23年）の戦後の開港以来最高の総額約215億円を記録した。

水産物だけでなく、サハリン沖の石油、天然ガス開発の大規模プロジェクトに伴って、稚内—コルサコフ間の定期フェリー航路によるブルドーザー、大型トラックなど社会資本整備関連の重機類の輸出が前年比3倍強の4千710トンに達し、ロシア貿易の経済効果も前年の約1.5倍の350億円に大きく伸びてきた。

定期フェリー航路による2003年度の旅客数は4千894人だが、主に水産物を中心にしたロシアの貨物船の入港は毎年3千隻、上陸する乗組員も延べ4万から5万人にもものぼっている。

滞在日数が少ないのが難だが、海を隔てた“一つの経済圏”は単に夢ではなく、現実の形を取りつつあるといえる。

加速つくサハリンとの商談

一体化への具体策として稚内市は02年（同14年）5月、日本の地方自治体としては初めてユジノサハリンスク市にサハリン事務所を開設し、市役所内にサハリン課を設けた。

そして、04年7月にユジノサハリンスク市で初めて「トレードフェア IN サハリン」を開催した。

これは稚内日ロ経済交流協会と稚内商工会議所が合同で道内の地域経済団体として初めて、ロシア企業向けに開いた画期的な商談会だ。

稚内市内に本社や支店を持つ11社が参加、介護用品、暖房機器、事務機器などを展示したが、2日間で約4千人ものロシア人が詰めかけ、個人が一戸建て住宅用の外壁材を買ったり、2億円以上の石油燃料の商談を持ち込まれたケースもあったという。

実行委は今後も最低でも3回はサハリン商談会を開く方針



大盛況だった「トレードフェアINサハリン」
=2004年7月

で「商談の具体化はこれからだが、日用雑貨など日本製品への関心は高く、稚内とサハリンとの経済交流、商圏の一体化への期待が持てる」としている。

こういった目に見える経済交流への動きもあって、社団法人ロシア東欧貿易会は国庫補助事業として05年（同17年）9月、道、社団法人北方圏センターに委託し、稚内市で「北海道・ロシア間の日用品、生活関連分野などでのビジネスマッチング事業」を行った。

稚内市も間に入り、サハリン州から水産、病院・薬品関係など6社の経営者、幹部12人が同市内の関連企業と具体的な商談を持った。

商談の結果は別にしても、独自のサハリン事務所を持つ稚内市が、サハリンとの経済交流と経済圏を形成する動きをさらに一步、前進させたことは間違いなく、今後どう具体的な成果を生んでいくかに関心が集まっている。

5つの都市・港と「友好・姉妹関係」

「日ロ友好最先端都市」としてのありようは、ロシアに向けた港による、ある意味では自然な経済交流だけではなく、古くからの歴史を背景にした文化友好交流の顔もまた持っている。

戦前の樺太時代を振り返ってみると、1923年（大正12年）から45年（昭和20年）まで樺太大泊（現サハリン州コルサコフ）との稚泊航路、本斗（現ネベリスク）との連絡船の就航—などがあり、稚内市と樺太が一体化した生活圏であったことはいうまでもない。

こういった歴史に加えサハリン航路の再開を目指して、まず72年（同47年）にネベリスク市と、次いで91年（平成3年）にコルサコフ市と、そして、2001年（同13年）には、それまでの交流の実績を踏まえてユジノサハリンスク市とそれぞれ友好都市提携を結んだ。

このほか、1973年（昭和48年）にフィリピンのバギオ市と姉妹都市提携、82年（同57年）に米国のアンカレジ港と姉妹港湾提携もし、世界に広がる港湾都市らしい国際交流の実績を積んできている。

とりわけサハリン3都市との交流は濃厚だ。自治体同士の相互視察、友好訪問はもちろんだが、稚内国際文化交流協議会が中心になっている少年少女サミットは、毎年交互に約20人の子供たちが訪問し合い、心温まる親睦を重ねている。

同じく、同協議会が取り組んでいるスポーツ交流の受け入れ、派遣事業もユニークだ。

これまで毎年コルサコフ市への野球指導者、剣道・居合い指導者などを派遣しているほか、ネベリスク市の選抜少年サッカーチーム、コルサコフ市の選抜野球チーム、卓球少年



ユジノサハリンスク市のアンサンブルが稚内フラウエンコール定期演奏会で歌の共演
=2004年11月、稚内市で

団なども受け入れ、親善試合も恒例化している。

稚内市の場合、サハリンとの地理的な近さ、定期フェリー航路による利便性もあって民間の交流も盛んだ。

稚内商工高とコルサコフ第6番高との相互生徒交流、稚内北星学園大学とサハリン国立総合大学との交換留学事業、稚内商工会議所によるロシア人研修生受け入れなど多彩だ。

毎年実施してきた市民サハリン視察団でもすでに300人もの人々が海を渡っており、他の地方とはひと味違う国境のマチならではの人的交流の“日常化”は、書き切れないほどの多様さを誇っている。

同市では「一つの経済圏、生活圏を目指すためにも、相互理解が欠かせない。現在の交流に参加した人々の次の世代がさらに交流を重ねることで、サハリンの人々との理解を共に一層深めていきたい」としている。



相互訪問で親睦を図り合う子供サミット。サハリン州のピオネールキャンプ場で=2004年8月

都市再生への期待

かつて6万人近かった同市の人口も今では4万人強に落ちてきた。しかし、従来の水産に加え、サハリンとの定期フェリー航路開設による往来の定着、大陸棚資源開発に代表されるロシアとの貿易の拡大など、同市を取り巻くプラスの新情勢が出てきた。

同市が自ら日ロ友好最先端都市を標ぼうするのも、単にサハリンとの友好関係促進だけでなく、経済交流、一体化した経済圏の構築などを通して、稚内の都市再生を図っていこうという狙いがある。

稚内港を核とした「稚内マリンタウンプロジェクト2期計画」のまちづくりのほか、新たな交流拠点を整備する「稚内シーランド計画（第一副港再開発計画）」やJR稚内駅周辺再開発など、総合的な都市再生計画を推進中だ。

国も05年（平成17年）度の地域の独創的な都市再生の取り組みを支援する「全国都市再生モデル調査」として、稚内市の「日ロ交流による都市再生活力推進協議会」が実施する「国際交流活力によるにぎわい文化創出調査」に助成した。

日ロ友好最先端都市の稚内市の将来は、まさにサハリンを中心にした国際交流と経済圏の一体化によるマチ再生が、そのカギを握っているといえる。



サハリンとのサッカーなどのスポーツ交流も盛んだ

稚内市

人口：約4万2千人 面積：760.8km²

<http://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/>

日本最北端の都市で古くから海産物の交易地として栄え、第2次世界大戦前からは樺太航路で賑わった。1999年サハリンとの定期フェリー航路の再開で、改めて経済交流の利点が脚光を浴びている。水産、酪

農、観光が産業の柱で2003年に「国際交流特区」の認定を受け、今後のロシアとの交易が注目されている。国際交流の問い合わせ先 稚内市企画調整部政策推進課 TEL(0162)23-6161

大海難の悲劇が灯した 友好の絆

“政治”を超えた救助活動。 が、720人の犠牲者…

『漆黒に閉ざされる吹雪の午前2時30分ころ、浜鬼志別の浜辺に建っている漁業神源一郎宅の雨戸をけたたましく叩く者がいた。しかも妙な叫び声も聞こえる。荒れ狂う潮鳴りの中で源一郎はそれを聞き、急いで雨戸を開けた。／戸を開けて彼は、さらに仰天した。／激しく雪の舞う戸外に、見上げるような大男、ずぶ濡れになって寒さにガタガタ震えている異国人5人が立っているではないか。そして、彼らは泣くような哀願するような声で何か喚きながら、手真似で沖を指さし示した。／海の男の源一郎は、すぐ船が難破したことを知った。』

戦前の1939年(昭和14年)12月12日、カムチャツカ近海で、約1千100人の漁夫と家族を乗せたソ連の貨客船インディギルカ号が、ウラジオストクへの帰路、暴風雨に遭遇し、猿払村浜鬼志別の沖合約800メートルのトド岩付近の浅瀬に乗り上げて転覆、720人が死亡する歴史的な大惨事となった。

冒頭の一文はその海難を伝える猿払村史の臨場感溢れる記述だが、作家の司馬遼太郎氏も「街道をゆく38-オホーツク街道」であえて「大海難」の項を立て、村史同様インディギ

ルカ号の惨事に触れている。

約400人の生存者を救出し、700人を超える遺体を収容した地元の人々の奮闘は大変なものだったらしい。が、この海難事故がその後の歴史に残るのは惨事の大きさの故だけではない。

日ソが激しく戦ったノモハン事件の停戦協定発効後3カ月も経たない時期で、日ソ関係が最悪の状態だったにもかかわらず、人々が人間としての無私の救助活動に当たったというヒューマンイズムの発露があったためでもある。

2年後には第2次世界大戦が始まり、この事故はやがて忘れられた。が、猿払村の人々だけはこの悲劇を心に留め続け、事故の翌年から戦中、戦後を通して毎年、犠牲者の霊を弔う法要を営んできた。

同村の浜猿払地区に「電話通信ゆかりの碑」がある。34年(同9年)、同地区と樺太女麗(サハリン・プリゴロドノエ)間約163キロに海底ケーブルが敷設された。

終戦直後の45年(同20年)8月22日、ソ連軍の侵攻によって、真岡(ホルムスク)郵便局の9人の女性電話交換手が「さようなら、さようなら、これが最後です」の声と共に集団自決した悲劇は、あまりにも有名だが、この最後の交信を海底ケーブル経由で直接聞いたのが猿払電話中継所。戦争の悲劇を後世に伝えるため、記念碑を建て、実物のケーブルを保存



インディギルカ号の慰霊碑で記念撮影するのは、オジヨールスキイ村訪問団の恒例の行事になっている。
=2003年7月、猿払村浜鬼志別で

している。

「日本最北端の村・猿払」はその苦渋の歴史を秘めながら、海を隔てて向かい合うロシア（旧ソ連）と良くも悪しくも“共存”せざるを得ない運命にあったといえる。

歴史が生んだ「日本最北の村」の“新たな歴史” オジョールスキイ村（ロシア）と姉妹都市に

56年（同31年）の日ソ国交回復に伴って、同村でインディギルカ号の遭難者を弔う慰霊碑建設の機運が起こり、全国から約1千200万円の寄付、また、ソ連から慰霊碑用にシベリア産花崗岩とソ連漁民の約800万円にのぼるカンパが寄せられた。

71年（同46年）10月、遭難したトド岩が遠望できる同村浜鬼志別の猿払公園に慰霊碑が完成、ソ連漁民のカンパは近くの日ソ友好記念館の建設に充てられた。記念館には遭難の惨事と救出作業を生々しく伝える写真や資料が今も展示されている。

慰霊碑の序幕式には、ソ連側からもトレグボフ海運船舶省次官らが出席したが、同次官は「ソ連の兄弟を救助するために尽くして下さった偉業を私たちは永遠に思い起こすでしょう」と語った。

この言葉にもあるように猿払村の“善意”をソ連側は高く評価、実現はしなかったものの、海産物の増殖のための合弁企業設立の申し入れとともに、姉妹都市提携の希望もソ連側から寄せられてきた。2年間の相互訪問を経て91年（平成3年）12月、猿払村でサハリンのアニワ湾にあるオジョールスキイ村（旧長浜、人口約2千600人）との友好姉妹都市提携が正式調印された。

日本最北端の村とサハリンの漁村の「村同士」の珍しい姉妹都市が実現したわけだが、何よりも、過去のヒューマンイズムあふれた救助活動の歴史が、半世紀の時を経て姉妹都市提携として花開き、新たな国際交流の歴史を紡ぎ出すという稀有なケースとなった。



インディギルカ号の慰霊碑に献花するサハリン・オジョールスキイ村の人々＝2003年7月、猿払村浜鬼志別で



言葉の垣根を越えすっかり仲良くなった両村の中学生たち
＝2004年7月、オジョールスキイ村で

中学生だけでも合計1千400人もの 分厚い交流

猿払村ではこれを機に同年から「いきいき北方圏交流の郷土（さと）」づくりを提唱、以来、随時相互訪問しながら交流内容を打ち合わせ、93年民間の国際交流団体として設立された猿払村国際交流協会とともに、姉妹都市交流の充実に取り組んできた。

当初、入国査証（ビザ）取得に時間がかかったり、往来のための漁船などのチャーター、連絡の手違いなどさまざまな難問を抱えながらも、交流は年を追って定着してきた。

自治体同士の交流打ち合わせ会議のほかに提携直後は、オジョールスキイ村から水産加工研修生を受け入れ、同村の要望に応じて92年には猿払村村民の募金で注射器、粉ミルクなどの医薬品を寄付した。

さらに村民による一般交流事業も猿払村からは7回78人が訪問、オジョールスキイ村からは6回68人が来村した。

これだけでも結構な交流実績だが、何といても両村の姉妹都市関係の中核となっているのが、中学生を対象にした交流事業だ。

「次代を担う子供たちの交流で友好と国際感覚を育てる」という当初からの方針で、提携時の91年から毎年欠かさず相互訪問を続けてきた。

同村の中学校は拓心中1校のため、平等に派遣交流を体験できるように同中3年生全員を対象に、同協会を通して旅費全額が村から助成される仕組みだ。十勝管内陸別町の中学生の海外研修事業同様、余程の事情がない限り全員が海外経験を積むことになる。

2004年（同16年）までに拓心中生徒の訪問は14回754人、オジョールスキイ村の中学生の来村は13回618人で、合わせるとこの14年間で実に約1千400人もの相互派遣数。道内の他都市でもそう例をみない分厚い教育交流となっている。



ロシアの伝統的な踊りを披露するオジョールスキイ村の中学生たち
=2003年7月、猿払村で

再び人命救助にも一役

01年1月オジョールスキイ村の11歳のジェーニヤ・ポベンコ少年が家庭用天然ガスボンベの爆発で全身の73%を火傷する事故に遭った。サハリンでの治療が難しいため、姉妹都市関係にある猿払村などを通して援助の要請が寄せられ、同村が身元引受人となりポベンコ少年は札幌医大で治療を受けることになった。

その治療費の不足分を補うために猿払村国際交流協会などが中心になって募金活動を展開、同村だけでも360万円の募金が集まり、猿払—オジョールスキイ両村の姉妹都市交流はさらに深まる結果となった。

財政難で交流は一時休止に

しかしながら、約半世紀前の海難による大惨事と献身的な救助活動、それに感謝する姉妹都市提携の実現、その後の大規模な中学生による交流など、道内の国際交流の事例としては極めてユニークで実のある内容を持つ両村の姉妹都市提携だが、ひとつの大きな曲がり角に遭遇している。

その最大のものが従来通りの方法で提携を続ける上での財政上の問題。

猿払村は国のふるさと創生基金を人材育成基金として活用し、1991年の姉妹都市提携以来毎年、50人前後の中学3年生全員を全額助成で派遣してきたが、財政難から2004年に条例を改正し、6千100万円を一般会計の財政調整基金に繰り入れざるを得なくなった。

同様に、オジョールスキイ村側も中核となる漁業コルホーズの水揚げ不振で苦しい台所事情にある。

こういったことから、04年（同16年）8月、両村は村長ら幹部が猿払村で交流打ち合わせ会議を開き、緊迫した財政状況などを考慮して、05年から涙をのんで当面の交流事業を休止する覚書を交わした。

猿払村では「姉妹都市提携そのものが変わるわけではない。ただ、従来のような毎年の交流は残念ながら、当面は見直さざるを得ないということ。何らかの知恵を出し合って、姉妹都市提携は今後も続けていく気持ちに変わりはない」という。

小さな財政規模の地方自治体にとって、理想は別にしても“財政難”という現実が、国際交流を継続する上で大きな難問としてのしかかってきていることは間違いない。

猿 払 村

人口：約3千人 面積：590km²

<http://www.vill.sarufutsu.hokkaido.jp/>

オホーツク海に面した日本最北端の村で、村としては道内では一番広く、総面積の約8割が山林や原野で、手づかずの自然に恵まれている。猿払はアイヌ語の「サラブツ」（葦原の河口）が語源といわれる。ホタテ、牛乳など漁業、酪農が中心。1955年（昭和

30年）頃は人口は約9千人を数えたが、その後人口減が続いている。

国際交流の問い合わせ先
宗谷管内猿払村総務課

TEL(01635)2-3131

民間が支え、育てる 国際感覚

それぞれの特徴を持つ3つの 姉妹・友好都市提携

北見市は古くから3つの都市と姉妹・友好都市提携を結んでいる。提携の経緯は違うが、それぞれが外に開かれた風土と歴史、それを支える市民レベルの活発な活動—という同市ならではの共通の特徴がうかがえる。が、経緯と同様、提携の内容、現状もさまざま、姉妹都市のありようを比較検討出来るユニークな側面をも合わせ持っているといえる。

ピアソン牧師夫妻への想いも新たに

【エリザベス市（米ニュージャージー州）】

1914年（大正3年）、当時野付牛村だった北見（北見市になったのは1942年＝昭和17年）にエリザベス市出身のピアソン牧師夫妻が宣教師として滞在、以来1928年（同3年）までの14年間、北見を拠点に道東・道北の伝道活動を続けた。

ピアソン夫妻は1888年（明治21年）に来日、北見に来る前も函館、室蘭、小樽、札幌、旭川の各地で伝道に当たり、北海道での活動は実に35年間もの長きにわたった。遊郭設置阻止など布教を超えた社会活動もあって、人々の篤い信頼を集めた。

離道後もピアソン夫妻の私邸は「ピアソン記念館」として残り、同記念館に面した道は現在でも「ピアソン通り」と呼

ばれ続けている。いかに夫妻が人々に慕われていたかを端的に物語っているといえる。

こういった経緯から、北見市はピアソン夫妻の離道後41年経った1969年（昭和44年）、ピアソン氏の故郷であるエリザベス市に姉妹都市の提携を申し入れ、快諾を得た。

開拓時代の歴史の重みを今日でも呼び起こすユニークな提携といえる。

それ以降、公式訪問団の相互訪問、青年ジェット研修団の派遣、76年には83人の北見交響吹奏楽団の親善訪問・演奏をはじめ、91年（平成3年）の開基95年・北見市制施行50周年記念式典にはエリザベス市の姉妹都市副委員長夫妻らが来北し、エリザベス市が「北見市の日」を制定するなどの心のこもった交流が続いた。

同時にエリザベス市を訪れた人々がエリザベス会を発足させ、北見商工会議所も北米経済視察団を派遣するなど、民間交流の芽も膨らんできた。

しかし、96年（同8年）の北見市開基100年記念式典にエリザベス市長代理として姉妹都市委員長夫妻が出席して以降、残念ながらエリザベス市からの来訪は途絶えている。

その一方で北見市では、旧ピアソン邸（現在のピアソン記念館）の保存とピアソン夫妻の思想、業績の記録を残すことなどを目的に98年にピアソン会が発足し、2002年（同14年）には特定非営利活動法人（NPO法人）の認可を受けた。

会員数は125人。ピアソン便りの発行のほか、毎夏ピアソ



ピアソン牧師夫妻を偲んでピアソン記念館前で毎年開かれているグリーンコンサート＝2004年夏

ン記念館の緑の樹木に囲まれた前庭で同会主催によるピアソン夫妻を偲ぶグリーンコンサートが開かれる。ピアソン夫人が愛用していたオルガンの伴奏による独唱や小中学生、女性コーラスの合唱、ブラスバンドの演奏など、市民の楽しみの1つになっている。

また、同会はピアソン邸を設計した米国の有名な建築家メレル・ヴォーリズ氏のさまざまな資料を収集して、エリザベス市との姉妹提携の盟約書などの資料を展示しているピアソン記念館2階に04年、ヴォーリズ記念室を新設し、着実に国際交流の幅を広げている。

こういった活動が評価され同年、北海道新聞社が実施している「もっと北海道」運動の一環として「第3回北のみらい奨励賞」を受賞した。

NPO法人認可に合わせ、ピアソン牧師夫妻の資料収集、調査のためエリザベス市を訪れた同会理事の長尾宗一さんは、エリザベス市長から「姉妹都市交流といっても市長が税金を使って日本に行くことが許されない。申しわけありません」と謝られたという。

しかし、各種のレセプションに招待され、調査には人々から心温まる協力を受けた。

長尾さんは「やはり、姉妹都市交流の実績は生きている。エリザベス市にはピアソンさんの遺族もおらず、ピアソンさん自体が人々の記憶から遠ざかっているが、もう一度その業績を掘り起こすことで、姉妹都市交流も取り戻せれば…」と語る。

歴史が生み出した姉妹都市交流が、新たな歴史の扉を開くか、注目していいようだ。

【ポロナイスク市（ロシア・サハリン州）】

旧ソ連時代の1972年（昭和47年）、サハリン州からの要請を受けた形で友好都市提携を結んだ。旧ソ連との姉妹・友好都市提携は66年の小樽—ナホトカ、67年の旭川—ユジノサハリンスクに次いで3番目、サハリン州の自治体とは旭川市に次ぐ2番目の古い歴史を持つ。

「同じ北方圏に住む隣人同士として親善を」と翌年の73年には北見日ソ親善協会（92年に日ソ親善協会に名称変更）が設立され、隔年毎の相互公式訪問団の派遣と共に民間ベースでの交流がスタートを切った。

97年（平成9年）の提携25周年には、ポロナイスク市で北見市の小、中、高校生が林間学校を体験、民間の劇団「河童」が「鶴の恩返し」の特別公演をし、翌年には北見市でロシアの北方少数民族のアンサンブル「メグンメ・イルガ」と北見盆地風雪太鼓が共演するなど交流は多岐にわたっている。

さらに、同協会とポロナイスク北見友好協会は訪問の度毎にシンポジウムを開き、向こう2年間の友好親善推進のための行動方針を協議する、という他に余り例を見ない活動をしているのも特徴だ。



ポロナイスク市を訪れ意見を交換する北見市の訪問団

例えば、2004年（同16年）ポロナイスク市で開いた第9回平和に関するシンポジウムでは、①民族の相互理解のため、伝統芸能の交流を深める②観光交流の拡大のため、ポロナイスクでの釣り、登山などの実施③柔道などのスポーツ交流—など8項目の具体策が合意された。

これに基づいて05年7月には、ポロナイスク市で柔道を習っている青年5人が北見北斗高校で初めて“柔道交流”を行うなど「親善の輪」はさらに深まりを見せている。

金子泰憲・同協会会長は「両国の相互理解と友好親善だけでなく、子供たちの国際感覚を育てるためにも、今後も意義ある活動を続けていきたい」と語っている。

【晋州市（韓国）】

ポロナイスク市との関係以上に晋州市との姉妹都市提携は民間主導だったといえる。

民間の有志によって北見地区日韓親善協会が設立されたのが、1978年（昭和53年）のこと。その後、同協会による韓国訪問は84年までに実に11回を数え、両国のアマ・レスリング大会開催なども開かれるようになった。

また、両市のロータリークラブも79年に姉妹クラブ提携を結ぶなど、民間交流は次第に大きな広がりを見せてきた。この動きに合わせるように市民から姉妹都市提携の要望が強まり、85年に北見市はついに提携の正式調印に踏み切った。

以来、ポロナイスク市と同様、隔年毎の相互訪問のほかに、小中学生の美術交流、合唱団、交響吹奏楽団の文化交流、北



民間の活動が姉妹都市提携に結実した晋州市との交流風景

見工大と晋州にある慶尚大工科大学との学術交流など、相互の絆のありようは多彩だ。

北見市は2003年（平成15年）、晋州ロータリークラブ会長として当初から両市の交流に尽力してきた金一さんに「特別名誉市民」の称号を贈った。その金さんは04年10月、北見日韓親善協会主催の第6回コリアンフェアへの出席を兼ねて再度来北、民間主導らしいなごやかな交流が続いている。

広がる多様な国際交流の根

ピアソン会、日口、日韓親善協会などでもうかがえるように北見市には40近い国際交流に関係する団体があり、それぞれが独自の活動を繰り広げている。また、同市でも年間20人、1人当たり20万円の外国人留学生修学支援金制度などの支援事業に取り組んでいるが、北見の場合、民間の幅広い活動とともに、北見工大、北海学園北見大学などとの連携による国際交流が大きな特徴になっている。

そのひとつが1997年（同9年）に設立された「北見国際技術協力推進会議」だろう。

同市が国の「国際協力推進モデル地域」に指定されたのを受けて、産官学の連携による国際協力を推進する組織として発足したもので、市、商工会議所、北見工大、日本赤十字北海道看護大学、農協など22団体が加盟している。

この同推進会議と国際協力機構（JICA）がタイアップして取り組んできた「草の根技術協力事業」は、寒冷地の地域特性を生かした北見ならではの国際協力事業として、全国的にも注目されている。

具体的には、北見工大が積雪寒冷地の土木工学研究をしている関係で、99年に気候条件の似ている中央アジアのカザフスタン、キルギスから研修員を受け入れ、寒冷地での地盤工学、道路整備の研修を実施したほか、同大の教授もキルギスを訪れ、研修のフォローアップにも当たった。

このほか、2004年（同16年）まで「寒冷地における地域医療と保健衛生」、「産業の変遷と地域振興」の研修事業も行い、独自の国際協力を展開している。

これらを研修のハード面としたら、同推進会議がJICAの協力で2003年からスタートさせた「オホーツク国際フェスタ」はソフト面での国際交流事業といえる。これは網走管内に住む外国人と地域住民が一堂に会して交流、相互理解を深めようという狙いだ。

03年の参加者は60人だったが、04年には200人と急増。ちなみに04年の場合は、JICA海外ボランティアの説明会、少人数による国際交流ウォークラリー、エジプト・ジンバブエ・日本の楽器演奏、スポーツ交流などの内容で「交流の広がりだけでなく各自、団体のネットワークの強化にも役だった」（同推進会議）という。

これとは別に純粋にボランティアとして行われている「北見国際交流の集い」もユニークだ。これは東京で日本語を勉強している留学生を北見に招こうというもので、1989年（平成元年）に受け入れ家族らが実行委員会を作り、自発的に活動を始めた。

毎年、夏と冬の2回、東京で学ぶ留学生数人が2週間程度北見とその周辺町村でホームステイを楽しみ、餅つきや着付けなどの日本文化を体験しており、同会も「ほかでも余り例のない試みでは…」という。ホームステイ先を探す苦労もあるようだが、ボランティアによる心温まる国際交流として他地域でも大いに参考になりそうだ。



網走管内の外国人、地域住民が思い思いに歓談する「オホーツク国際フェスタ2004」=2004年10月

北見市

人口：約11万人 面積：421km²

<http://www.city.kitami.lg.jp/>

明治時代後半からハッカ栽培が始まり、世界有数の生産地としてハッカ景気に沸いた。1942年（昭和17年）に市制を施行し、第2次世界大戦後も精糖工場、国立大学を誘致し、経済、教育、芸術、文化などオホーツク圏の中核都市の役割を果たしている。坂本龍馬の姉千鶴の次男である坂本直寛氏を指導者とする

高知の民間移民団「北光社」が開拓に当たったことも知られている。2006年3月に網走管内端野町、常呂町、留辺蘂町と合併し、面積千428km²、人口約13万人になる予定。

国際交流の問い合わせ先
北見市企画部

TEL(0157)23-7111

北方圏の歴史に根差し、 広がる輪

網走市内には国指定史跡が2つある。1つは縄文式文化晩期、続縄文、擦文、オホーツクなどの各文化期にわたる住居跡、墓、土器、人骨などが出土した最寄（モヨロ）貝塚遺跡であり、もう1つは、大小2つのアイヌ民族のチャシ（砦）からなる桂ヶ岡砦跡である。

いずれも網走が遠い昔からオホーツク海を挟んで、広域交流の歴史を持っていたことを物語っている。

同市にある道立北方民族博物館での2004年10月から2005年2月までの行事をみても、第19回北方民族文化シンポジウム（3日間）、博物館クラブ「イヌイト・ヨーヨーづくり」、「アラスカ遠征とパイオニア・明治大学アラスカコレクション」の企画展と「北の地／ALASKA／過去／現在」の講演会などの北方圏関係の催し物が目白押しだ。

また、北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニではウイльта、ニブフ、樺太アイヌなど北方少数民族の文化を常時紹介している。

過去の文化交流の歴史、現在の北方圏諸国との関係などを考える上で、網走ならではの地理的、文化的な特性は今なお生き続けており、それが、現在の国際交流の底流にもなっているとみえる。

小学生の相互訪問から姉妹都市に —ポートアルバーニ市（カナダ）

網走市は1986年（昭和61年）2月、同じ北方圏のカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州にあるポートアルバーニ市と姉妹都市提携を結んだ。

その前年から始まった網走小と同州にあるノースバンクーバー市の小学校との相互訪問がきっかけとなり、当時の石狩町（現石狩市）と姉妹都市だった同じバンクーバー島のキャンベルリバー市長の紹介で一気に姉妹都市の調印の運びとなった。

同市はバンクーバー市の西に位置し、人口は約2万人。林業、漁業、観光が主な産業で、釣り愛好家には“サケの王国”としても知られ、こういった網走市との類似性も、提携を加速させる要因となった。

89年（平成元年）の提携3周年記念には、網走市中央公園にポートアルバーニ市から贈られた原木で高さ15メートルのトーテムポールが建立され、翌年にはその返礼としてポート



ポートアルバーニ市からの寄贈で友好のシンボルになっている網走市中央公園の高さ15メートルのトーテムポール

アルバーニ市に日本庭園を出張造成し、姉妹都市の目に見えるシンボルとして、今でも両市民の誇りとなっている。

親善訪問団の相互交流も途絶えることなく続いている。提携10周年の96年（同8年）には網走市長ら40人の市民訪問団がポートアルバーニ市を訪れ、翌97年の網走市市制施行50周年記念式典にはポートアルバーニ市長ら30人が来網、カナダの警察官、民族衣装を着た18人のバグパイプ・バンドが市中パレードし、網走っ子を感動させた。

また、提携15周年の2001年（同13年）にはポートアルバーニ市の「ソングスミス少年少女合唱団」が網走市で「オホーツクKIDコール」とジョイント・コンサートを開催、同じ年に今度は網走市長ら48人がポートアルバーニ市を訪れ、合唱や日本文化を披露する「あばしりナイト」を開くなど、中身の濃い姉妹都市交流が繰り返されている。



ポータルバーニ市に造られた日本庭園

子供から大人までの3つの交流

この公式訪問団の相互派遣のほかに、少年少女、高校生、市民レベルでの3つの交流が行われているのも、大きな特徴といえる。

【教育交流—少年少女訪問団】

両市は小、中学生の少年少女訪問団を1年置きに相互派遣している。今まで網走から11回540人、ポータルバーニから7回200人が参加した。

05年（同17年）1月の網走からの第11回訪問団の場合は、9日間の日程でホームステイをしながら、ポータルバーニの子供たちと友だちになった。一緒に参加した網走市の国際交流推進員の角田真子さんは、「ボランティアの人々による手作りの温かい歓迎で、本当に感激した。この交流を大切にしたいと改めて思った」と語る。

【高校留学生交流】

姉妹都市提携翌年の1987年（昭和62年）から毎年、両市で2人の高校生を10カ月間相互に留学派遣してきた。次代を担う高校生を長期留学させることで両市の交流、理解を深めようという試みで、お互いにホームステイをしながら学校に通い、柔道や剣道などの課外活動、日本では経験できない教会活動など、さまざまな体験を味わっている。

97年（平成9年）からポータルバーニ市側の事情で期間



ポータルバーニ市を訪れた網走市の少年少女訪問団。片言の英語でもあつという間に、友だちに＝2005年1月

は3カ月間に短縮されたものの、今まで双方で留学した高校生は50人にのぼっており、姉妹都市関係を将来に向けて、さらに大きく、太く育てていく力になると期待されている。

【市民留学生交流】

少年少女訪問団、高校生相互留学と並んで、もう1つの交流事業が市民による留学生交流。姉妹都市提携直後の87年から、市民レベルの交流に実態を持たせるためにスタートを切った。10カ月間の長期留学でお互いの市民生活に入り込み、友情と相互理解を深めようというもの。

例えば、ポータルバーニ市から来た人は、網走市内の中、高校での英語授業を補佐する一方で、合気道、華道などの日本文化、オホーツク流氷まつりでの雪像づくりなどを体験、各種イベントにも積極参加し、市民との交流を楽しんでもらう、といった趣向だ。

また、2000年（平成12年）には短期スポーツ交流として、アイスホッケー・コーチのマイクさんを1カ月間招請、市内の少年団の指導のほかに、市役所のアイスホッケー部のメンバーとして、各種の大会に出場するなど、市民交流ならではのなごやかな成果を挙げてきた。

最近になって、この交流は一時中断し、英語指導助手（AET）の採用などに衣替えしているが、両市民の間では、肌で感じる国際交流・理解だけでなく、帰国した経験者がホームステイを受け入れるなど、さまざまな姉妹都市交流に積極的に貢献する結果を生んでいる。



餅つきを体験するポータルバーニの人々＝2004年4月、網走市で

人々の熱い想いが息づく日中友好親善

05年（同17年）1月、中国の程永華・駐日公使が網走市日中友好促進協議会（阿部一ニ会長）の招きで講演に訪れた。

実は、程公使は日中国交正常化間もない1979年（昭和54年）、網走市で日中友好活動が活発に行われていた関係から、駐日中国大使と共に初めて来網したことがある。

その時の人々の温かい歓迎ぶりもあって、久しぶりの再会と網走市のその後を見たいという程公使の希望から、26年ぶ

りの来訪が実現した。

この経緯が象徴しているように、同協議会の日中友好活動は心のこもった手作りの民間交流が大きな特色となっている。

会員数は約90人。商業、漁業、教育関係者など職業はさまざま、阿部会長をはじめかつて中国に滞在したり、中国人の知己を持つ人が多く、72年（同47年）の日中国交正常化とともに、友好交流の動きはいわば、自然の成り行きのように発展していったという。

75年（同50年）に第1回産業・経済訪中団23人が北京、上海、広州を訪れたのを皮切りに、小中学生、漁業関係者訪中団、数次にわたる瀋陽市友好訪問団などが、毎年のように中国を訪れ、友好親善を温めた。

これに応えるように中国側からも85年の中国武術団の来網に始まり、瀋陽市人民対外友好協会代表団も交互に網走に足を運ぶなど内容の伴う交流が続けられてきた。

同協議会は会員の会費で運用され、活動もすべて自賄い。会員の高齢化がひとつの悩みだが、最近はそういった実情に合わせて、中国関係者の講演会の開催や水産加工場などでの中国人研修生の受け入れ、年間約150人も中国人研修生に日本語を教えるなどのボランティア活動を行っている。

同協会の会員の1人は「今まで7組の日中両国のカップルが誕生し、網走に住んでいる。民間ならではの草の根交流の深さを物語っているといえるのではないかと話している。

歩くスキーで北方圏交流

毎年2月、オホーツク海の流氷を見下ろす天都山の道立オホーツク公園「てんとらんど」で「インターナショナル・フェスティバル・オホーツク歩くスキー大会」が開かれる。2005年（平成17年）2月が26回目の大会だった。

26年前の1979年（昭和54年）北海道で一番早く網走北方圏交流協会と網走歩くスキークラブが発足した。前年同市で催された北・北海道フィンランド協会主催のフィンランドセミナーで、気候、風土の似た同国への関心が高まったのがきっかけだ。

80年（同55年）2月には社団法人北方圏センター主催の冬季オホーツク圏振興北欧調査団に同交流協会、網走青年会議

所などから25人が参加、半月にわたってフィンランドなどの北欧諸国を視察してきた。

そこで目にしたのが本場の歩くスキー。「庭からスキーでそのまま出かけられる。フィンランドとの交流にもなるし、冬場のスポーツが少ない網走にはこれだ、と思った」——同歩くスキークラブ副会長で、同オホーツク歩くスキー大会副実行委員長の斧山繁夫さんは、当時をそう振り返る。

帰国後、三笠宮寛仁殿下をお招きして、直ちに第1回歩くスキー大会を開催、以来在日フィンランド大使館とも連携をとるなどさまざまな工夫を凝らしながら、今日に至っている。

大会はレベルに応じて7キロ、10キロ、20キロの3コースに分かれているが、フィンランド大使館員や道内の外国人留学生からも招待し、夜にはフィンランディアナイトも開き、立食パーティーで交流を楽しむ。

網走の冬を彩るスポーツイベントと同時に、北方圏交流の場としてしっかりと定着した催しといえる。

端野町のフィンランドとの友好にも飛び火

網走のこのイベントが実は、網走管内端野町とフィンランドのオウルンサロ町との友好交流のきっかけになった、という“おまけ”までついている。

以前、フィンランド航空が同国への招待航空券を同大会に景品として提供したところ、たまたま大会に参加していた端野町職員の竹内博己さんがそれを射止めた。さっそく同国を訪れた竹内さんは素晴らしい景観と人々の親切にすっかりフィンランド・ファンになり、知人も出来た。

92年（平成4年）、国のふるさと創生基金を利用した「まちづくり海外研修団」でオウルンサロ町を訪問、これを契機に両町間で人々の相互訪問、小学生の絵や留学生の交換、音楽交流など篤い友好関係が展開されている。

その中心になっているのが、その後端野オウルンサロ町友好交流協会事務局長になった竹内さん。「オウルンサロ町との友好交流とは直接の関係はなかったとはいえ、網走市でのフィンランドとの出会いが、間違いなく、そのきっかけになっている」という。

国際交流のひとつの芽が自然と根を広げたケースとして、改めて話題を呼びそうだ。

網走市

人口：約4万1千人 面積：470.9km²

<http://www.city.abashiri.hokkaido.jp/>

網走支庁もあり、北見市と並んで網走管内の中核都市。オホーツク海に面し、農業、水産業が中心だが、網走国定公園、さらには、世界遺産に登録された知床半島を抱える知床国立公園の玄関口。冬季は流氷

が接岸する地域特性も生かした観光が更に脚光を浴びそうだ。

国際交流の問い合わせ先
網走市企画総務部企画調整課 TEL(0152)44-6111

多彩な姉妹都市・学術交流、 そしてキーワードは＜流氷＞

きずなを深める米国、ロシアの 3都市との交流

「国際性豊かな人づくり」「外国人が親しみやすいまちづくり」をキャッチフレーズに掲げる紋別市で、姉妹提携の1番手は米国オレゴン州ニューポート市で1966年（昭和41年）4月にさかのぼる。ニューポート市は太平洋に面し、もともとは漁業で栄えた港町。紋別市とほぼ同緯度に位置し、風光明媚で水産や観光を主産業とし、木材の積み出し港としても知られる。

このほか91年（平成3年）にはロシア・サハリン州最大の漁業基地であるコルサコフ市（大泊）、さらに同年、米アラスカ州のフェアバンクス市と相次いで姉妹友好都市提携を行った。フェアバンクス市とは紋別市で毎年開催している北方圏国際シンポジウム（後述）による学術交流がきっかけとなった。

2001年（同13年）には、ニューポート市との提携35周年、コルサコフ市との提携10周年を記念して特別な交流も行われた。ニューポート市へは、紋別市から中学生を含む総勢24人の訪問団が訪れ、ホームステイなどで温かいもてなしを受けた。コルサコフ市には市長、市議会議員らの行政関係者と水産関係者、旧樺太大泊会の会員ら8人が訪問した。

同時に8月の観光シーズンにはニューポート市から11人、コルサコフ市から6人の訪問団が紋別市を訪れ、港まつり飲



コルサコフ地区ヨットクラブ9名が来訪し、紋別ヨット協会会員との再会を楽しんだ＝2004年8月



市制50周年で仲良く紋別市を訪れ、記念植樹したコルサコフ市とフェアバンクス市の親善訪問団＝2004年8月

迎パレードや茶会に参加するなど市民レベルでの交流が繰り広げられた。

コルサコフ市との交流のなかでも特にユニークなのは、ヨットによる相互訪問。

1998年（同10年）に紋別ヨット協会の会員がヨットでコルサコフ市を親善訪問したのがきっかけだった。オホーツク海を隔てた両市間の距離は約250キロ、順調に帆走すると22時間ほどで到達できるという。

翌年にはその返礼として、マカリエツ副市長ら9人がヨットで来航した。市民同士が自ら海を往来する交流は、関係者の熱い思いの発露ともいえ、同副市長も紋別ヨット協会の歓迎会で「往来する度に、両市の距離が縮まってきている」とヨット来訪に込めた気持ちを語っている。

最近の大きな動きは、紋別市の市制施行50周年に当たる2004年（同16年）に姉妹都市3市を同時招待したこと。

うちニューポート市は2006年の提携40周年を控えて訪問団派遣を見送ったが、コルサコフとフェアバンクスの両市は招待に応じ、コルサコフからは市長ら6人の行政関係者、フェアバンクスからはアラスカ大学の教授、学生ら5人が紋別市を訪れ、ホームステイを体験しながら、合同で歓迎パーティーや記念植樹などを楽しみ、姉妹都市交流に新たな1ページを書き加えた。

また、1998年から3年ごとに実施している中学生のニューポート市への親善訪問も3回目の2004年8月には10人が訪れ、1週間にわたってホームステイをしながら親睦を図ってきた。



ニューポート市を訪れ親交を深める紋別の中学生親善訪問団
=2004年8月

「流氷研究国際都市構想」の取り組み

紋別市の国際交流を考える際、忘れてはならないのが「流氷」であり、それを中心に据えた同市ならではの「流氷研究国際都市構想」だ。

オホーツク海沿岸のほぼ中央に位置する同市は「世界でも低緯度で凍る海」、「日本で唯一の氷海域」を持つ都市として知られる。

このため、65年（昭和40年）、「北海道大学低温科学研究所附属流氷研究施設」（2004年4月に同環オホーツク観測研究センターに衣替え）が同市に設置され、流氷が地球環境や海洋生物に及ぼす影響などをテーマに地道だが、本格的な研究が始まった。

こういったことから、「招かれざる客」と見なされ続けてきた流氷が、実はオホーツク海に自然の恵みをもたらし、北方圏の文化の礎となり、かつ流氷研究のメッカになりうる一



流氷研究国際都市のシンボル「ガリンコ号Ⅱ」と氷海展望塔「オホーツクタワー」

との発想の転換に結び付いてきた。

同市は82年（同57年）、躍進する紋別市建設のため「オホーツク流氷都市紋別」を宣言、さらに、同市は第3次紋別市総合計画（1989～98年度）、第4次同計画（99～2008年度）で都市の将来像を「流氷を開発し、心豊かで活力あるオホーツク圏の中核都市」と規定し、流氷研究とその応用技術開発を地域活性化の最大の柱とする「流氷研究国際都市構想」をスタートさせた。

同都市構想の主要な事業として①氷海海洋情報の集積・発信基地化の推進②オホーツク海の環境保全の推進③自然環境の保護・保全と生活環境保全運動の展開④広域交流の促進—の4項目が挙げられている。

これを推進する目的で91年（平成3年）、第三セクターの（株）オホーツク流氷科学研究所が設立された。

その中心施設が96年沖合1キロに建設された氷海展望塔「オホーツクタワー」。海面下7・5メートルの海底階で海中、流氷を目の当たりにできる海中展望観測室、海洋展示室などがあり、世界初の氷海域の観測施設であると同時に観光客にも開放されている。

話は前後するが87年（昭和62年）、米アラスカ油田開発で活躍した砕氷船を改造した流氷砕氷観光船「ガリンコ号」が就航。

これを機に、オホーツクタワーのほかに流氷博物館「北海道立オホーツク流氷科学センター」、国内唯一のアザラシの保護施設「とっかりセンター」も建設され、国際的な流氷研究拠点と流氷観光を柱にした「流氷研究国際都市構想」が大きなスケールで具体化されてきた。

就航以来10年間活躍したガリンコ号は97年（平成9年）に「ガリンコ号Ⅱ」にその役割を譲ったが、そのユニークな流

氷観光に「ガリンコ号Ⅱと流氷」は2004年（同16年）10月、北海道遺産に選定された。

20回の歴史を重ねる 北方圏国際シンポジウム

「流氷を科学するまち」「流氷研究国際都市構想」のもう1つの特徴が、氷海情報の集積・発信、オホーツク海の環境保全、広域交流の促進—といった同構想の狙いを、見事に実行している「北方圏国際シンポジウム」だといえる。

言葉通り共通した気候風土を持つ北方圏諸国の専門家が一堂に会して、海洋、氷海工学、環境保全、水産など多岐にわたる分野でシンポジウムを行おうというものだ。

1985年（昭和60年）度、北海道大学低温科学研究所附属流氷研究施設の設定20周年を記念して、各界関係者や市民が参集、官民一体で「流氷を科学する国際拠点都市」を具体化する北方圏国際シンポジウム実行委員会を立ち上げ、社団法人北方圏センターも協力体制を取った。

第1回の開催は翌86年2月。海外も含め190人が参加し、発表された論文は55本にのぼった。以来、毎年開かれ、2回目からは特別ゲストによる講演もプログラムに加わり、これまでに登山家の今井通子さん、女優の和泉雅子さん、宇宙飛行士の毛利衛さんらが名を連ねている。



子供たちからプレゼントを受け取る海外の科学者たち
=2005年2月、紋別市での第20回北方圏国際シンポジウム

また、海外参加者も着実に増え、2002年（平成14年）の第17回では11カ国、40人と参加国数では最高を「記録」した。

「流氷」を主役にオホーツクの都市ならではの北方圏諸国の学術交流であるばかりか、300人余のボランティアが支える市民による珍しい国際交流事業。

独立行政法人国際交流基金は04年2月、同実行委員会に第19回国際交流基金地域交流振興賞を贈り、その活動を讃えた。

05年2月には20回目の節目の開催となり、米国やロシアなど海外5カ国20人を含む国内外100人の研究者が参加した。

NHKアナウンサーの森田美由紀さんが、「北国の暮らし」と題して特別講演したほか、3日間にわたって「生物、水産、オホーツク海」、「海氷、オホーツク海、海氷工学」など5つの分科会で、専門的な発表、分析、意見交換が行われた。

中でも「油汚染について」のフォーラムではサハリン沖での石油、天然ガス開発による海洋汚染の可能性も想定されることから、参加者の関心が高く、民間の対応を検討する「サハリン石油天然ガス対策市民研究会」の設立準備会の発足をみた。

北方圏の学術・文化交流だけでなく、オホーツク海の環境問題などを考える上でも、その役割はさらに大きくなってきているといえる。

活躍する紋別市国際交流委員会

紋別市の国際交流、国際協力活動の中核を担っているのが紋別市国際交流委員会。1991年（同3年）に発足し、2004年（同16年）5月現在の会員は団体、個人合わせて154。

すでに触れたように姉妹都市交流の推進母体としての活動や北方圏国際シンポジウムへの協力を行っているほか、04年度事業でも、外国人船員を招いての意見交換・交流会、ロシア語講座開催、会報の発行などさまざまな活動に取り組んだ。

昼と夜の2回の基礎コース、特別コースに分かれたロシア語講座では受講生が自主的にロシア語サークルを作り、ロシア語だけでなく料理作りも勉強し合うなど、市民の中に広がりを見せしており、同委員会の活動は国際交流の厚い土壌を築いているといえる。

紋別市

人口：約2万6千800人 面積：830.4km²

<http://www.mombetsu.jp/>

オホーツク海沿岸のほぼ中央に位置し、1680年代（貞享年間）に天然の良港として松前藩が宗谷場所から斜里場所に至る寄港地として利用したのが始まり。最近では農・水・林業に加え、流氷砕氷船ガリンコ号に代表される観光都市としての顔も持ち、2004年夏

には近隣町村とタイアップした体験型観光の「オホーツクDoいなか博」を成功させた。

国際交流の問い合わせ先
紋別市企画調整課国際交流係 TEL(01582)4-2111

「カーリング」 —小さな町の大きな挑戦

なぜカーリングの町に!?

常呂町の国際交流の歴史を語るとき、氷上のスポーツ競技として急速に市民権を得て来たカーリングを抜きにしては、話は進められない。

1998年(平成10年)に長野冬季五輪で正式種目になったカーリングに、網走管内常呂町から男女5人が代表選手として出場、さらに2002年(同14年)の米ソルトレークシティー冬季五輪にも女子選手4人が同町から参加し、常呂町は今や「カーリングの町」として国内外に知られるようになってきた。

では、なぜ、かつて日本でもマイナーなスポーツだったカーリングが同町に導入されたのだろうか。

発端は1980年(昭和55年)、北海道とカナダ・アルバータ州の姉妹提携によるスポーツ交流の一環として道内各地で開かれたカーリングの講習会。社団法人北方圏センターが主催、アルバータ州から元世界チャンピオンを講師に迎えてカーリングの魅力をアピールした。

同町でも開催し、参加者はその後早速、町内のスケートリンクの片隅で、ビールのミニ樽やプロパンのガスボンベを改造した手づくりのストーンや竹ぼうきを使ってゲームを始め

た。

翌年には本物のストーンをカナダから購入、町独自で指導者養成のための講習会の開催などの動きに呼応する形で、NHK杯カーリング選手権大会が同町で開かれた。ローカルながらテレビ中継も行われ、地域でのブームが沸き上がった。

冬、大地が雪に覆われ、オホーツク海も流氷に閉ざされるこの町では、人口の4割を占める農業や漁業で働く人たちは仕事がほとんどない。

カーリングはそんな町民にはうってつけのスポーツだったのかもしれない。

それにしても、その後の「発展」に大きな力となったのは、在日カナダ大使館と同町との交流だった。

同大使館のB・L・バーネット一等書記官(当時、後に参事官)が83年(同58年)に来町、その協力で本場カナダのチームの招請に成功した。

以後、同一書記官が再三来町、毎年の大会にもカナダ大使館チームが参加しており、同一書記官は同町のカーリング振興のキーマンといえる。

カーリングは「89はまなす国体」で同町を開催地とするデモンストレーション競技の採用が決まり、前年の88年にはア



「カーリングの町」の異名も付き、国際大会も開かれる常呂町
=2005年1月、NHK杯カーリング選手権大会

ジアで初の屋内専用カーリング場が同町で完成をみた。

曲折を経ながらも、オリンピック選手の輩出を夢見る大きな「挑戦」が始まり、町民の競技レベルは一気に向上。また、体育の授業に取り入れられたことで海外での国際大会に出場する子供たちも出、自然な形で地域の国際化につながる結果となった。

加えて、カーリングが冬季五輪の正式種目となったことで中国や韓国のチームが合宿のため来町、さらに、2005年（平成17年）1月には、世界ジュニア選手権大会の初の太平洋地区予選を兼ねた北海道新聞社杯第1回パシフィックジュニア選手権大会が開かれた。同大会にはオーストラリア、中国など5カ国が出場し、カーリングがはぐくんだ国際交流の輪が一段と大きな広がりを見せてきた。

こういったことが認められ、その中心になっていた常呂カーリング協会は2003年（同15年）度全国過疎地域自立促進連盟会長賞を授与された。受賞のテーマとなった「小さなまちの大きな挑戦—2大会連続、オリンピック出場」が全国的に評価された結果といえる。

和気あいの姉妹提携 —バーヘッド町（カナダ）

カーリングを軸に町民の国際交流への関心が高まる中、1984年（昭和59年）にカーリングの指導者研修のためカナダ、アメリカに派遣された2人の町民が、カナダ・アルバータ州政府に、常呂町と同じ規模でどこか共通点を持つ町の紹介を

打診した。その後、北海道を通じて紹介されたのが同州のバーヘッド町だった。

カルガリー冬季五輪を見学した常呂町民が、バーヘッド町を訪問するなどの“助走期間”を経て、91年（平成3年）7月に姉妹都市提携の盟約書調印にこぎつけた。

これまでに常呂町からバーヘッド町への訪問は高校生をはじめ青年、一般町民など延べ200人を超えたが、特に94年から毎年実施している児童・生徒の派遣は、バーヘッド町の滞在期間のすべてをホームステイで過ごし、習慣の違いなどを肌身で感じる貴重な体験になっている。

また、高校生の訪問の際にはカーリングの親睦大会も開かれ、体育の授業で鍛えられている常呂高校の生徒たちは、本場の地元高校生にも劣らない好試合を展開しているという。

さらに、高校の留学生も随時相互派遣されているほか、それぞれ町民の友好訪問も行われてきた。

姉妹都市提携10周年の2001年（同13年）8月には、常呂町での記念式典にバーヘッド町からシド・ガーヴィッチ町長ら13人が出席し親交を深めたが、同町長は式典で「過去10年の姉妹都市交流では、ただ単に物珍しさだけでなく、お互いの文化の違いを認識することができた。バーヘッド町は、この姉妹提携を大変誇りに思い、さらにこれからの交流の発展を期待している」と語った。

その後も、2004年3月、阿部周司町助役に率いられた高校生8人がバーヘッド町を訪ね、今後は双方のチームによる交流試合を継続して行おう、といった話題も出るなど和気あいの交流が続けられている。



来町し常呂町民と共に姉妹都市提携10周年を祝うバーヘッドの人々
=2001年8月



バーヘッド町を訪問し、親睦を深める常呂町の高校生たち=2003年1月

サロマ湖が救ったインド・チリカ湖

『スペイン・バレンシアの授賞式会場で、辻井達一・道環境財団理事長の姿を見つけると、こぼれんばかりの笑顔で握手を求めた。インド東部にあり、ベンガル湾の海水に淡水が混じり合うチリカ湖の再生に向けた2人の思いは、アジア初の湿地保全賞に輝いた。』

これは、アジアで第1号のラムサール湿地保全賞に輝いたチリカ開発公社のA・K・パトナイク代表の受賞の模様を報じた02年（同14年）12月13日の北海道新聞の記事である。

この記事で同代表は「背中を押してくれたのは、サロマ湖というお手本だった」とも語っている。

チリカ湖はインド東部にある同国最大の汽水湖で面積は琵琶湖の約2倍。水鳥の越冬地、イラワジカワイルカの生息地として知られ、1981年（昭和56年）にラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）の登録湿地になった。

しかし、上流部の森林伐採による土砂流入で湖口が狭くなって淡水化が進み、漁獲減によって周辺15万人の住民の生活苦が深刻化した。これを聞いた辻井理事長が99年（平成11

年）常呂町や佐呂間町の地元漁業者の協力を得て、同代表を同じ問題に苦しみ湖口を広げることで水質保全と漁獲高を増やしたサロマ湖に招待した。

同代表はサロマ湖をモデルに翌年、チリカ湖の湖口拡大工事に踏み切った。

2003年（同15年）8月、佐呂間漁協で行った「チリカ湖環境保全講演会」で同代表は、「海水の流入量を回復させた結果、塩分レベルも正常値を取り戻し、漁獲高も99年の1.5倍になった」と関係者に喜びの報告を行った。

チリカ湖のビジターセンターには感謝を込めて「サロマ湖コーナー」も設けられた。

また、05年2月、チリカ湖での「アジア湿地シンポジウム2005」に合わせ開かれたサロマ、チリカ、タレイノ（タイ）の3つ汽水湖の子供湿地交流会には、常呂町・錦水小6年の外村拓海君と千谷冬磨君の2人が出席した。2人の父親はともにホタテやカキ漁などを営んでおり、主催の非政府組織（NGO）ラムサールセンター（東京）の招待。

同じ環境にある各国の子供たちとの楽しい交歓ぶりは、常呂町の広報紙「ところ通信」でも紹介され、汽水湖の環境保全が生んだ珍しい国際交流となっている。

常呂町

人口：約4千900人 面積：278.3km²

<http://www.town.tokoro.hokkaido.jp/>

北はオホーツク海に面し、南東は丘陵性の山岳と肥沃な農耕地、西はサロマ湖の大半も町域に入っている。主産業は漁業、農業だが、サロマ湖観光も人気上昇中。2006年3月に北見市（面積421km²、人口約11万人）、端野町（163.5km²、約5千500人）、留辺蘂

町（564.7km²、約8千700人）と合併し、新「北見市」になる予定。

国際交流の問い合わせ先
常呂町総務課総務係

TEL(0152)54-2111

「おもちゃ探し」が結んだ 道内初の日仏姉妹都市

地域活性化と「木のおもちゃの温もり」 の共通性—モアラン町（仏）

『道内自治体では、フランスの「都市」と姉妹都市提携を行うのは本町が初めてということで各方面から注目されてきましたが、5月22日モアラン町長をはじめとする一行10人が来町し、めでたく調印を締結しました。モアラン町のビュルデロン町長からは、今回の調印において「将来には青少年を中心に交流をはかることが両町間で計画されており、これから両町民が互いの文化の豊かさを学んでいくことを願ってやみません」というメッセージに、林町長も姉妹都市提携にあたって「おもちゃのぬくもりと優しさを理解することができる両町は、互いを良きパートナーと認めつつ、より深い交流が実現するものと確信しています。今年中にも町内に「モアラン友好記念館」を建設し、この両町のきずなを永遠のものにしたい」と伝え、これから始まる様々な交流に向けて大きな期待をかけている様子でした。』

やや長い引用だが、その前月の「木のおもちゃワールド館—ちゃちゃワールド」のオープンと合わせ、フランスのモア

ラン・アン・モンターニュ町との道内では初、現在でも唯一の日仏姉妹都市提携調印を特集した1998年（平成10年）6月の「広報・いくたはら」に掲載された熱のこもった文章（原文のまま）である。

その、おもちゃのマチ同士が「木の温もり」で結びついたところに、全国でも例をみないユニークな交流がみえる。

「ちゃちゃワールド」で「町おこし」

当時、林業が基幹産業の旧生田原町（以下、旧町名で記載）では、その特性を生かし世界の木のおもちゃを一堂に展示する、第三セクターの「ちゃちゃワールド」建設を計画していた。いってみれば、木のおもちゃによる町おこし、地域活性化である。

最初のきっかけは、ちゃちゃワールドに展示するおもちゃ探しのため96年10月、フランスを訪れた林町長（以下当時）とモアラン町にあるおもちゃ会社「ビラック社」のエルベ・アルガン社長との出会い。同社長から「モアラン町にもおもちゃ博物館がある。博物館を主役にした姉妹都市提携はどう



姉妹都市提携の“主役”となった旧生田原町の「ちゃちゃワールド」



世界の木のおもちゃを展示し、子供にも大人にも夢いっぱいの「ちゃちゃワールド」の館内

か」といったアイデアが出された。

フランスとスイス国境にまたがるジュラ山脈に位置する同町はフランスのおもちゃの55%を生産する文字通りの「おもちゃの町」。ジュラ山脈の森林を生かした木のおもちゃ製造の伝統を厳格に守る一方、新製品の開発や輸出、国際的なコンクールに出展するなど積極的な事業展開を行っていた。

一方、生田原町にはおもちゃ工場こそないものの85年（昭和60年）、当時、町内の安国中学に勤務していた伊藤英二教諭の指導で安国木考研究会が発足した。

これを機に町民の間に広まった木のおもちゃづくりへの熱意は翌年から毎年1、7月の2回、親子で参加する木のおもちゃづくり「木のおもちゃ王国」のイベント開催まで高まり、町も木工房付きの多目的の「ふれあいと木芸の館—ピノキオハウス」を建設するまでになった。

この延長線上に「ちゃちゃワールド」誕生と国際交流の夢実現の動きがあったわけで、両町が大切に「木の温もり」と、それを生かした地域おこし—の共通の価値観が姉妹都市提携を生み出す原動力になったといえる。

林町長がモアラン町を訪れた翌月の96年（平成8年）11月、シラク仏大統領に同行し、経済視察団の一員として来日したアルガン社長が、交流を望むモアラン町長の親書を携帯して生田原町を来訪、これを受けて翌年6月にはモアラン町で開かれた「おもちゃと子供に関するヨーロッパ会議」に林町長が出席し、「日本におけるおもちゃ事情」を説明した。

日仏の政府間で97年を「フランスにおける日本年」、98年を「日本におけるフランス年」と決定していたこともあって、道内では第1号となる日仏間の姉妹都市提携の話は一気に進

み、ちゃちゃワールドの開館のタイミングに合わせ98年、生田原町でのスピード調印となった。

姉妹都市関係は目下、“一休み”だが…

調印式にはモアラン町から町長夫妻、博物館館長夫妻、アルガン社長、4人の中学生などが来町、さっそく姉妹都市交流が順調にスタートを切った。逆に翌99年には生田原町から18人の町民視察団がモアラン町を訪問、ビラック社やモアラン町おもちゃ博物館などを見学し、なごやかな町民交流を楽しんだ。

2000年（同12年）7月、生田原の中学生の一行30人がモアランに飛び、ホームステイをしながら、老人ホームでよさこ



姉妹都市のきっかけを作ったモアラン町のビラック社を訪れた生田原町の中学生たち=2000年7月

いソーラン踊りを披露するなど、改めて親睦を深め合った。

日本から持参したこいのぼりも空に舞い、モアランの人々を喜ばせた。

その後、Eメールやクリスマスカードの交換などは続けられているが、町同士の交流は最近では“一休止”の状態になっていた。「理由はやはり財政上の問題。それに、フランス語の出来る職員がいなくなり、スムーズに連絡が取れなくなっていたから」という小さなマチならではの悩みだが、05年(同17年)10月の遠軽町との合併以降、どう展開していくか一に関心が持たれる。

民間交流は、より活発化

それとは別に、おもちゃが結ぶ交流の方は活発化している。町が出資し建設した第三セクターのちゃちゃワールドは、鉄筋コンクリート2階建て延べ2千389平方メートル。

世界的な影絵の巨匠・藤城清治氏の30点もの幻想的な作品を収めた「コロポックル影絵美術館」と併設した形で、夢いっばいの世界の木のおもちゃ1万点が展示され、各地から年間約5万人が訪れる。

2000年4月、生田原町でモアラン町おもちゃ博物館とちゃちゃワールドによる姉妹館提携が調印された。

盟約書では提携内容について①作品の交換展示②「おもちゃと子供に関する国際会議」関連事業に関すること③青少年の交流④両館に関係するおもちゃ、子供、サンタクロース事業に関すること—の4項目がうたわれている。

ちゃちゃワールドには世界40カ国のおもちゃが、その時々々の企画に応じて交換展示されているほか、03年には著名な江戸ゴマ(独楽)職人の広井政昭さん=神奈川県在住=をモアラン町に派遣し、江戸ゴマの展示と創作作業を公開した。

また、モアラン町にサンタクロースのモデルとなったといわれる聖ニコライ神父建設の「聖ニコライ教会」があることから、交流は盟約書通りサンタクロース事業にも広がっている。

ちゃちゃワールドが姉妹館提携を記念して出版した「ほんとうのサンタ・クロースのお話」はモアラン町民の創作によ

る挿絵付きのファンタジーあふれる物語を日本語訳した、文字通りの“国際協力”で出来上がった絵本だ。

さらに、この事業の関連から、「サンタの里」として知られるフィンランドのロバニエミ市との交流につながり、クリスマスに同市のサンタクロースが生田原町に“出張”して来たり、04年3月には来町したフィンランドのクリスマス財団とちゃちゃワールドがパートナーシップ提携を結ぶまでになった。

その提携も同財団の人々がちゃちゃワールドに展示されている広井さんの見事な江戸ゴマに魅せられたのがきっかけ。

パートナーシップ提携の際、同財団は2005年夏開館を予定している世界のクリスマスグッズを集めたクリスマステーマ館に広井作品の寄贈を申し入れた。ちゃちゃワールドはこれを受けて、広川さんに作品の制作を依頼、さらに、これに賛同したコレクターから合わせて約100点の寄贈を受け、サンタの里にプレゼントされた。

「子供たちの夢を広げるのはもちろんだが、地域おこしのためにも、今後もおもちゃによる交流を広げていきたい」とちゃちゃワールド・チーフの久野幸江さんはいう。

地区の86%が山林の生田原。「木の温もり」を肌で感じている人々が木のおもちゃづくりで地域の活性化、国際交流を図る道内でもユニークなこの試みは、多くの示唆に富んでいるといえる。



ちゃちゃワールドを視察に来たモアラン町おもちゃ博物館の人々

遠軽町生田原

人口：約2万4千800人 面積：1千332.3km²

<http://engaru.jp/>

2005年10月1日、網走管内生田原町、遠軽町、丸瀬布町、白滝村の4町村が合併し、遠軽町となった。旧生田原町は面積約269.4km²、人口約2千700人で農業と林業が主要産業。ちゃちゃワールドだけでなく、オホーツクゆかりの文学作品の石碑を配置した「オホーツク文学碑公園」、JR生田原駅とタイアップした

「オホーツク文学館」、第三セクターの生田原温泉・「ノースキング」などさまざまな地域おこしが行われている。

国際交流の問い合わせ先

遠軽町生田原総合支所総務課 TEL(01584)5-2011
ちゃちゃワールド TEL(01584)9-4022

豊かな土壌に咲く 活発な活動

ユニークな「世界の絵本読み語り」

『「ある日の夜、ノミが犬の耳をかみました…」』。市国際交流員で米国出身のクリストン・レインさんが自国の絵本を英語で読み聞かせる。同じ交流員でブラジル出身の早籐・クリスチアナ・恵さんが、今度は日本語で子供たちに優しく語りかけた。』——これは帯広市の50回目の「世界の絵本の読み語り」風景を伝えた2004年（平成16年）5月の北海道新聞の記事の一部である。

このユニークな試みは2000年4月、同市のインドネシア出身の国際交流員らが、子供たちの国際理解と外国人との身近な交流を目指して始めたもの。

毎月1回小学校低学年以下の子供とその保護者を対象に開催し、毎回30人前後が参加。在住外国人、留学生、国際協力機構（JICA）の研修員らが、それぞれ交代で“語り部”になり、自国の絵本を子供たちに読み聞かせる。

来日するJICAの研修員に絵本の持参を依頼するなど絵本集めには結構苦労するが、早籐・クリスチアナ・恵さん（05年3月にブラジルに帰国）は「絵本にはその国の民族性、考



「欧米以外の国の人々との交流も大切」と語るブラジル出身のクリスチアナさん（左）とタイのスバワディさん（右）の二人の国際交流員＝2004年10月

え方などが詰まっている。しかも、欧米諸国だけでなく、アジア、アフリカの国々を理解する上で大きな意味がある」という。

今までマレーシア、スリランカ、パキスタン、ノルウェーなど、普段滅多に目に触れるチャンスのない40カ国もの絵本



親子が楽しみにしている「世界の絵本の読み語り」＝2004年

が紹介されたが、それらの絵本は「森の交流館・十勝」内の図書資料室に保管され、いつでも親子で楽しめる「世界の絵本コーナー」のスペースも設けられている。次代を担う子供たちの国際理解だけでなく、外国の人々にも「帯広市民と交流を広げるきっかけになる」と好評だ。

身近に触れ合う外国文化

外国人と市民の草の根交流を図ろうと同市が2000年度から始めた外国文化講座も「読み語り」と対をなすイベントだ。外国人講師派遣事業と銘打ち、04年度には16カ国44人の外国人が29講座を受け持った。

講座は、イタリア、インド、モンゴルなどの料理教室、英語、中国語、韓国語、タガログ語、インドネシア語などの語学教室、趣味ではアメリカ、カナダ、韓国、フィリピンなどの遊び、中国の切り絵、フィリピン伝統刺繍、韓国絵画、スリランカ、インドの民族衣装サリーの着方—など多彩で楽しい内容だ。

5人以上のグループで申し込みばOKで、しかも、会場費、材料費はグループ持ちだが、講師への謝礼は市が負担し、講座内容は参加者と講師が話し合いで決めるという、自主性を重んじた仕組みになっている。

数字はやや古いが03年度の講座参加者は一般サークル13件、PTA関係11件、町内会5件、個人申し込み6件、子育てサークル4件、高校サークル2件など41グループ1千160人になっている。

担当の国際交流員のスパワディ・ポリストワニトチョンさん（タイ出身）は「自分の国のことを知ってもらえるし、講座が終わっても日本人との付き合いが続いている例も多い。人々の心の通った草の根交流として大きな意味があると思う」と語っている。



米マディソンのチーズパイ作りの講習
=2004年3月



さまざまな国の人々と語り合うフリートークのひとコマ
=2004年8月

多くの出会いを生む国際交流広場

「読み語り」、「外国文化講座」と並ぶ国際交流のもう1つの柱が、同市の国際交流施設「森の交流館・十勝」内での国際交流広場「アイビー・ラウンジ」活動だ。

アイビーは英語でツタ類。同広場内で繁茂するツタ類にちなみのもので、ツタのように人と人のつながり、友情を広げていこう—との意味も込められている。

グループに分けて英語によるジェスチャーゲームや伝言ゲーム、ブラジルの料理作りとポルトガル語の勉強などを外国人と帯広市民が一緒になって楽しみ、学び合おうというイベントだ。

これについて同市では①少人数のため対話が図りやすく、身近な交流が出来る②毎回さまざまな民族の人と話し合うことで、言葉や文化の壁を取り省くことが出来る③講座を通して、交流の輪が広がる④市民と在住外国人間で国際相互理解が図れる—とその利点を強調する。

確かに、こういった3本柱を中心にした国際交流・理解活動を自治体自らがきめ細かく、しかも組織的に実施している点では、「帯広方式」といいほどの内容を備えているといえる。

中核となっている「森の交流館・十勝」

これらの多岐にわたる活動が有機的に行われている大きな理由として、国際協力機構（JICA）帯広と帯広市の「森の交流館・十勝」の存在が挙げられる。釧路市の国際ウエットランドセンター（KIWC）同様、帯広市の国際交流の活動、施設の中核的役割を果たしている。

JICAの地方への事業委託に伴って、道内では1996年（平成8年）、札幌市と帯広市の2カ所に国際センターが設置された。それぞれ社団法人北方圏センターが札幌国際センター、



森の交流館を活用した「世界のともだち」の楽しいイベント
=2004年

帯広国際センターとして管理運営、研修業務を受託している。

アジア・太平洋、中南米、中近東・アフリカなどの各地域の人々が毎年、道内で様々な研修を受けており、その人数は2004年度の場合、札幌、帯広合わせて811人、うち324人が帯広の担当だった。

1996年帯広の森にJICAの帯広国際センターがオープンすると同時に、隣接して建築されたのが「森の交流館・十勝」だ。

同交流館独自の活動だけでなく、色々な国の人々が同センターに宿泊、研修するのに合わせて、自然な形で住民との交流を行う場としても同交流館の人気は高く、利用者は年間3万人を超える。

同市には国際交流員が4人も常駐しており、100人以上の在住外国人や日本人ボランティアが企画・運営する「世界のともだち」のイベントや、森のハロウィーンパーティーなど工夫を凝らした催しが行われ、文字通りJICAの活動とも連携した“国際交流・理解・協力の場”として大きな役割を果たしている。



民族舞踊は各国の文化を理解する上でも格好の国際交流だ
=2004年7月

米、中の2市と姉妹・友好都市提携

【スワード市（米アラスカ州）】

スワード市との姉妹都市提携は40年近く前の68年（昭和43年）にさかのぼる。当時帯広農業高校教諭だった大園嘉之氏の実弟の雅彦氏がアラスカ滞在中の67年、スワード市長から帯広市との文化交流を希望する手紙を受け取った。この一通の手紙が縁となり、1年後には一気に姉妹都市提携の調印となった。

釧路市が82年に北洋漁業の補給基地のスワード港と姉妹港提携を結ぶ14年も前のことだ。

以来、高校生や親善使節団の相互派遣、児童子供たちの絵画の交換などの息の長い交流が続けられ、高校生の相互派遣だけでも両市からそれぞれ約100人、計200人を超えている。

また、スワード市で毎夏開かれている「マウント・マラソン・レース」には帯広市長杯が、また9日間にわたる釣り大会「シルバー・サーモン・ダービー」には「帯広市国際親善交流市民の会」会長杯が贈られ、交流は市民の間に着実に広がっている。

2003年（平成15年）7月、姉妹提携の橋渡しをした大園雅彦氏＝千葉県在住＝が、スワード開拓100周年、姉妹都市提携35周年を記念したスワード親善訪問団に特別参加し、両市にそれぞれ100万円を寄付した。

これを元に帯広市では「スワード市友好親善推進基金（通称、大園基金）」、スワード市では「市民交換プログラム」を設け、2004年度から市民各2人の相互訪問に活用している。

「市民レベルの交流の輪をさらに広げてほしい」という大園氏の願いが改めて実を結んだわけで、市民ぐるみの交流はさらに勢いがつきそうな気配だ。

【朝陽市（中国・遼寧省）】

両市の交流は1985年（昭和60年）5月朝陽市から経済貿易視察団が帯広市を訪れ、同年9月に今度は帯広市から中国東北地区親善訪問視察団が朝陽市を訪問したことから始まる。

87年以降毎年、農業研修員の受け入れ、専門家の派遣などが行われ、農業技術交流は定着した形になった。91年（平成3年）からは帯広市立若葉小と朝陽市立青紅小の間で児童の絵画などの作品交換も始まり、交流は次第に「農業」を越えた広がりをみせてきた。

この流れと15年間に及ぶ交流の実績に押されるように2000年（同12年）11月、朝陽市長を団長とする公式訪問団が帯広市を訪れ、友好都市提携の運びとなった。

02年から高校生の相互派遣を実施、また、同年の帯広市開基120年・市制施行70年記念式典には朝陽市歌舞伎団が親善公演をするなど、交流は活発化している。

さらに、友好都市提携5周年を記念して05年（同17年）7月、帯広市長を団長とした親善訪問団が朝陽市を訪れたが、

メインテーマは「経済交流のきっかけづくり」。朝陽市側は「日本企業だけの工業団地を造ってもいい」と極めて積極的に、具体化にはまだ課題は多いものの、将来に向けて経済交流の可能性も出てきている。

さまざまな自発的な動き

同市のこういった活動には民間の人々の自発性が下支えとなり、しかも相互のサポート体制がしっかりしているのが特徴になっている。

1975年（昭和50年）にスタートした「帯広市国際親善交流市民の会」は、地元の有力者も加入している会員約150人の市民団体で、スワード市との交換留学生の派遣・受け入れ、児童生徒の絵画交流、ワイン・パーティーによる「国際親善市民の夕べ」の開催、JICA研修員ら外国人に正月の遊びなどを学んでもらう「日本のお正月」の催し、朝陽市からの親善訪問団の受け入れ—など、市民レベルでの多彩な国際親善活動に取り組んでいる。

また、モンゴルとの友好団体である特定非営利活動法人（NPO法人）「モンゴルパートナーシップ研究所」（略称MoPI、本部・大阪市）の北海道支部も2005年（平成17年）春に帯広市内で設立され、同支部の最初の事業として同年6月「もうひとつのミルクの国・MoPIモンゴル 写真と子供の絵展」が開かれた。

こういった国際協力団体は十勝地方には30以上あるが、そのネットワークを作り、団体相互の連携強化や情報交換を図っているのが、「森の交流館・十勝」に事務局を置いている「十勝インターナショナル協会」だ。

外国人への生活相談や英語の十勝情報ガイド、マップを作成するなど、外国人が暮らしやすい情報の提供などさまざまな分野から市民レベルの国際交流・協力事業に幅広い活動を行っている。

このほか、帯広畜産大学の存在も帯広の国際化の大きな特徴だろう。

同大は8カ国11大学と国際交流協定を結んでおり、教員、学生の相互交流、共同研究、学術交流、さらにはJICAの研修員受け入れ、JICAとの協働体制による国際貢献の人材育成—など、一般ではなかなか出来ないような国際交流・協力が可能となっている。

例えば、1999年（同11年）に発足した「十勝ブランド検討委員会」（委員長・三上正幸帯広畜産大学名誉教授）は十勝のチーズの「地域ブランド」確立に取り組んでいるが、この流れの中で2005年（同17年）6月、帯広市で「コミテ・プレニエ・フロマージュ（ナチュラルチーズ国際交流会議）」の開催が実現した。

1991年（同3年）の第1回会議以来コミテが欧州以外の国で開かれたのは帯広が初めて、という快挙。2001年11月の「ナチュラルチーズサミットin十勝」にコミテの提唱者で、フランス農務省酪農担当官のジェラルド・リポー氏を招いたのが縁になったものだが、3日間の会議にフランス、イタリアなど欧州7カ国59人を含む約160人が参加した。

味覚、製造、衛生、販売・流通などの専門的な分科会討議や国産ナチュラルチーズのコンクールなども行われ、閉会の際、リポー氏は「十勝の生産者を勇気付けるためにコミテを開いた。頑張ってもらいたい」と国際的なエールを送った。

この試みが恒常的なものになるかどうかは、これからの課題だが、「十勝ブランド」が地域を越えて国際化への第一歩を踏み出したことは間違いない。

「森の交流館・十勝」建設時に帯広市長だった高橋幹夫・社団法人北方圏センター帯広国際センター館長は「もともと、十勝地方は大豆の国際相場など穀物生産に関連して国際感覚が生活の中に根付いており、歴史的にも新しいものや外国人への抵抗感が少ない。小回りの効く地方都市の良さに加え、帯広畜産大学、JICAの存在が国際化推進の願ってもない役割を果たしてくれている。帯広への経済効果という意味でも国際化はますます重要になっていくだろう」と指摘する。

帯広には他地域がうらやむほどの国際交流・協力の条件と環境、それを育てる気風、土壌があるといえるようだ。

帯広市

人口：約17万2千人 面積：618.9km²

<http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/>

十勝平野の中心部に位置し、十勝地方の政治、経済、産業、文化の中心で我が国を代表する畑作、酪農地帯。ハム、ソーセージ、チーズなどの畜産・酪農製品、菓子、帯広ニットなどが特産品だが、最近では

帯広発の豚丼も話題になっている。

国際交流の問い合わせ先

帯広市企画部国際交流課

同「森の交流館・十勝」

TEL(0155)24-4111

TEL(0155)34-0122

花開いた 「篤い親睦」の輪

ストニブレイン町(カナダ)との 姉妹都市提携

姉妹都市関係にあるストニブレイン町は、カナダ・アルバータ州の州都エドモントンの西20キロに位置し、人口も約6千人の鹿追町とほぼ同規模で壁画のマチとしても知られている。

ちょうど姉妹都市提携20周年に当たった2005年(平成17年)の7、9の両月にそれぞれが相互訪問し、20周年を祝い合った。7月の来訪の際、ドナ・コーワン町長が20周年を記念して新庁舎一面に描く横5.4メートル、縦2.7メートルの「日本・鹿追の風景」の壁画のレプリカを吉田町長に手渡した。

同時にコーワン町長はメールで「姉妹都市交流の成功は、両町の理解による財政的支援や、また何よりも交換留学生や訪問団に対して心や家庭を開いて頂いた両町民の献身的な協力があったからこそ成し得た。この関係は、今後ますます意義深いものとなっていくでしょう」と熱い気持ちを鹿追町民に語りかけた。

両町の姉妹都市提携調印は1985年(昭和60年)8月。道が姉妹提携をしているカナダ・アルバータ州の自治体と道内の自治体との姉妹都市提携は、前年の上川町―ロッキーマウンテン・ハウス町に次いで2番目(現在は9市町)の早さだった。

82年に22人の町民からなる第1次北方圏視察研修団が、た



ストニブレイン町の庁舎に描く壁画のレプリカを吉田・鹿追町長(左)にプレゼントするドナ・コーワン町長=2005年7月、鹿追町で

またストニブレイン町を訪れた際、同町から姉妹都市提携の話が持ち出され、84年の第2次研修団訪問の時もさらに温かい歓迎を受けた。こういった熱意もあって鹿追町も快諾、85年のストニブレインへの第3次研修団の訪問時に一気に正式調印の運びになった。

中身の詰まった留学生派遣事業

姉妹都市提携に伴って、両町間の交流は急速に進んだ。町や町民の友好訪問団派遣は北方圏視察研修団も含め、2005年



大正琴の演奏を通して日本文化を学び合う両町の高校生たち
=2004年10月、ストニブレイン町で



鹿追町で開かれた社団法人北方圏センター、鹿追町国際交流協会共催の「留学生ふれあい交流 inしかおい」の1コマ=2004年3月

(平成17年) 9月の20周年訪問団まで12回約170人に上っている。

個人負担10万円という町の施策もこれを支えているが、一番の特徴は調印2年後の1987年(昭和62年)から1年置きに交互に実施している相互短期留学生派遣事業だ。

当初、鹿追町からの派遣は中高校生10人程度だったが、97年から鹿追高校1年生全員(60人~70人)を対象とし、しかも、町が全額助成するという、積極策を打ち出した。

2005年までの派遣生徒数は引率の先生も含めて約780人、ストニイプレインからは165人が来町し、合計すると短期留学生だけで千人の大台に乗る数字に膨らんでいる。

約10日間の日程で、ホームステイをしながら授業や相互の文化などを学び体験する内容だが、「町内でもホームステイの家庭探しに大きな苦勞をすることがない」(鹿追町町民政策課)というほど交流は地に着き、成果を挙げている。

具体的には来町したストニイプレインの留学生と会話も十分出来なかった体験から、米国に語学留学した後ポートランド市で日本語教師補助をし、帰国後も国際交流団体でその経験を生かしている人、第1回留学の体験から語学留学も含め6回もカナダを訪問し、交流を深めている人など、子供たちの国際感覚の育成、将来の進路に少なからぬ影響も与えている。

さらに広がる国際理解の根

第5期鹿追町総合計画(2001年度-2010年度)の第2節「住民参加による行政と国際社会の理解のために」では、姉妹都市提携が「国際社会に対する理解と国際感覚の醸成に大きく寄与してきた」とした上で「国際性豊かな人材の育成や地域文化の形成など地域の活力を進める上で、町民が国際交流や

国際協力に積極的に関わりをもつことは非常に大切なことでず」とうたっている。

その言葉通り、同町が短期留学生派遣事業を中心に国際交流・理解事業だけで年間約2千500万円も投入し、その具体化を図っているのは、他の町村でもそう例がないほど積極的な姿勢といえる。

短期留学生派遣のほかに、もう1つ特色のある事業が、町が独自で採用している英語指導助手(AET)制度だ。

1991年(平成3年)にストニイプレイン町に依頼したことから始まったが、十勝管内の町村では初めて2人制をスタートさせたのが96年のこと。小・中・高だけでなく、保育所、保育園、幼稚園などで幅広く英語指導を行い、さまざまな国際交流事業にも参加してもらっている。

2005年(同17年)で英語指導助手は15、16代目になるが、そのうちの1人、ジェフリイ・ジェイ・コーワンさんはすでに3回目の勤務で、実はドナ・コーワン町長の息子さんだ。

ジェフリイさんが8歳の時、商工会の代表だった母親のドナさんが鹿追町民をホームステイで受け入れたのがきっかけで、その後自ら短期留学生として鹿追町を訪問、さらに、同町での英語指導助手の道を選んだ。

ジェフリイさんは「お互い小さな町なのに、これまで何百人という人々が交流を続けていることは、素晴らしいことだと思う。何よりも、未来を担う子供たちにとって貴重な経験となり、将来に希望を持てるのではないか。母もこのような事業に携わることが出来て、とても誇りに思っているようだ」と語っている。

民間レベルの受け皿になる鹿追町国際交流協会(会員数64人)も02年7月に設立された。両町の交流の輪は単なる姉妹都市交流を超えて、さらに篤く、深く広がり、それがまた、社団法人北方圏センターと鹿追町国際交流協会の共催で04年

3月、札幌、帯広両地方の留学生を対象にした「留学生ふれあい交流 in しかおい」の開催につながる一などといった好循環をも生み出している。

小中高一貫で「カナダ学」の授業も

「深く」という意味では、同町ならではの「カナダ学」の授業が挙げられる。町民ホールにある町教育委員会の入り口に『文部科学省研究開発学校指定・「小中高一貫教育」推進のマチ』—と墨で黒々と書かれた大きな木の看板が掛けられている。

03年（同15年）度から3カ年間、文部科学省の指定を受けたもので、もちろんそこにはストニイプレインとの姉妹都市提携、交換留学生といった鹿追町の国際交流・理解事業が高く評価された結果でもある。

その中心となる「カナダ学」は小学校に5人、中学校に2人、高校に3人、計10人のカナダ学専従の教員を置き、小中高教員の相互乗り入れで週1時間、学年に応じて英語やカナダ文化などを学習するという独特のもの。

これに、英語指導助手による保育所、保育園、幼稚園での英語教育とも相まって、英語検定合格率も全国平均を大きく上回るなど、国際理解はますます深まりをみせる結果になっているという。

「花と芝生の町づくり」のきっかけにも

2000年ストニイプレイン町を訪れた吉田・鹿追町長は、住宅周辺の管理の行き届いた見事な芝生と美しい花壇に感銘を受けた。

この年に開基80年を迎えていた鹿追町は、さっそく「環境美化宣言」を出し、「花と芝生の町づくり」に取り組んだ。

もともと鹿追町衛生協会の前から1戸1坪花壇植栽運動を実施していたこともあって、1戸30本だった花の苗の購入費の半額補助を50本に拡大するといった「一家で8ツ花（8種類の花）運動」などへの町民の反応も早く、翌01年には同町で第3回国際花サミットを開くまでになった。

サミットには「国際花の街づくりコンクール」を主催するカナダの民間非営利団体（NPO）「コミュニティーズ・イン・ブルーム」の関係者も出席、さらに、友好訪問で同町を訪れていたストニイプレイン町の園芸担当職員も講演するなど、サミットの成功は「花と芝生の町づくり」に一段と拍車をかける結果となった。

事実、同町は04年（同16年）度全国花のまちづくりコンクールで、大賞の「国土交通大臣賞」を受賞、また、同町の笹川小学校は1999年（同11年）から町内の養護老人ホームの花壇の花植えを続けており、同じく04年度に第32回道花いっぱいコンクール学校部門で最優秀賞を受賞した。

さらに、ストニイプレイン町、全国花のまちづくり実行委員会の推薦を受け、2005年9月にはカナダの「コミュニティーズ・イン・ブルーム」主催の「国際花の街づくりコンクール」に初参加、人口2万人以下の部で、最高賞は逃したが、同レベルの「5つの花」賞を受賞するまでになった。

心の通った姉妹都市交流が鹿追町の国際化、まちづくりに大きく貢献しただけでなく、「花と芝生の町」として世界に“発信”する原動力にまでなったわけだ。

人口わずか約6千人の鹿追町のこのあり方は、地方自治体の国際交流・協力・理解事業を考える上でさまざまな示唆に富んでいるといえよう。



鹿追名物の動物のトピアリー（庭木の造形）を造る鹿追町の人々
=2004年6月

鹿追町

人口：約6千人 面積：399.6km²

<http://town.shikaoi.hokkaido.jp/>

西は日高連峰、北は大雪山国立公園を背景に山と緑に囲まれ、然別湖、さらには「花と芝生の町づくり」の推進で「湖と花と緑の町」がキャッチフレーズ。畑作、酪農を中心とした近代的な農業と創造性豊かな街づくりを目指している。一村一品として鹿追そ

ばが知られ、同町で活躍した農民画家の神田日勝記念館もある。

国際交流の問い合わせ先
鹿追町総務部町民政策課

TEL(01566)6-2311

サンタランドのまちづくり

子供たちに夢を運ぶ「サンタメール」への道

『きみには大切な友だちはいるかな。サンタには、とても大切な友だちがいるんだ。でも知り合ったころはケンカばかりしていたよ。／そこでほんの少し魔法のちからを借りて、クリスマスカードに「大好きだよ」と気持ちが伝わるようにしたのさ。／するとたちまち仲良くなれたんだ。今年のカードにはやさしさいっぱい魔法をかけたよ。大切な人と、いつまでも仲良くしてほしい。／サンタからの願いをこめて。』

2004年12月 ひろおのサンタランドのサンタより』

京都市在住のイラストレーター・永田萌さんの幻想的なイラスト入りのクリスマスカードに添えられたサンタクローズからの手紙の全文だ。

1982年（昭和57年）社団法人北方圏センターが在日フィンランド大使館の依頼でサンタクローズへの手紙の書き方を紹介したところ、同国の「サンタの里・ロバニエミ」で用意したサンタクローズの返信が追いつかないほどの反響を呼んだ。



イルミネーションに彩られた広尾町のサンタランド

その2年後の84年（同59年）、広尾町は同じサンタ伝承のあるノルウェーから同国外では唯一のサンタランドの認定を受け、サンタメール事業をスタートさせた。

しかも、その発端がベルゲン市との水族館同士の姉妹提携で、その後、オスロ市近郊のフログン市との友好交流提携に結びつくというユニークな軌跡を描いている。

水族館姉妹提携からフログン市（ノルウェー）との友好交流都市へ

88年（同63年）の広尾町開町120年記念事業「十勝海洋博覧会」の会場となる臨海公園「シーサイドパーク広尾」と、その中核施設の広尾町海洋水族科学館が完成したのが80年（同55年）のこと。

それをきっかけに日高管内浦河町出身で広尾町ともゆかりの深い、ノルウェー水産省特別顧問の魚井一生さんから、姉妹館候補として同国ベルゲン市にある国立ベルゲン水族館を紹介された。

同年9月、町長ら4人が同水族館を訪れて姉妹館提携書に署名、同町とノルウェーとの関係が始まった。

翌年には広尾町の児童生徒の約100点の絵画がベルゲン水族館で展示され、公募による12人の北方圏諸国視察団も同水族館を訪れた。82年には広尾町北方圏交流振興会が設立され、ベルゲン少年少女使節団の来町など、交流は水族館を越える広がりを見せてきた。

交流の中で、首都オスロ市でサンタメール事業などに取り組んでいるサンタランドの存在を知り、「日本でもその事業のお手伝いをしたい」との強い希望を伝えたところ、オスロ市側が快諾、84年（同59年）11月、ノーデングン・同市長から同国外では初のサンタランド設立を認める認定書が贈られてきた。

サンタランドを通じたオスロ市との交流も始まったが、ノルウェー・サンタランド事務局が89年（平成元年）にオスロ市から近郊のフログン市に移管されたことから、今度は同市との交流もスタートした。

91年から5年間、広尾町の産業団体、一般の青年ら約50人が相次いでフログン市を視察・訪問したことなどから交流機運が高まり、96年（同8年）10月、ローゲ市長、ブルム副市長が広尾町を訪れ、友好交流提携に調印した。



オスロからの認定書が届けられた広尾サンタランド設立認定式
=1984年11月



フログン市の子供たちから送られてきた絵を楽しむ広尾町の子供たち
=2001年12月

その後、広尾第二小学校の児童がビデオレター、町内小学生の絵画34点、習字23点をフログン市に送り、同市からも子供たちの絵画200点が送られてくるなどの交流が続けられている。

180万通を越えた「ひろおサンタ」の手紙

サンタランドの認定書には「サンタランドの活動が両国民、とくに若い世代の人々に真の友情と、より良い相互理解が促進されることを希望します。この価値ある目的を達成するためには相互理解が最も重要であると信じ、協力することを約束します」と明記されている。

広尾町では「ノルウェー・サンタランドの基本理念は“愛と平和、感謝と奉仕”の心を世界に届けることであり、サンタランドというのはサンタの世界が持つ愛、夢、ロマン、あこがれ、やさしさがあがり、いつまでも誇らしさや思い出が育つ町」と捉え、サンタランド認定翌年の85年（昭和60年）から活動の中核として、サンタメール事業を開始した。

冒頭で紹介したように、きれいなクリスマスカードの中に「ひろおのサンタランドのサンタより」の署名入りの手紙が

入っているのが“ミン”。ノルウェーのサンタさんに手紙を出さなくても、広尾のサンタランドにいる公認のサンタさんから手紙が届くという仕組みだ。

88年から日本郵政公社の協力を得て、毎年11月10日から12月10日まで全国の郵便局に申込用紙を置いてもらい、申込者のメッセージも添えて、発送する。

1年目は2万4千通だったが、年によっては17万通も突破、2004年（平成16年）までの20年間でサンタの手紙は180万通を超えた。

“愛と平和、感謝と奉仕”の基本理念を実践するため、サンタメール事業の収益金はボランティア基金として積み立て、国内外の恵まれない子供たちに寄付している。

具体的には1995年、阪神・淡路大震災の被害を受けた神戸市立幼稚園会に500万円、広尾サンタランド認定20周年記念の04年には、札幌市の保育園、幼稚園に10本のミニ・クリスマスツリーを寄贈するなど、「サンタの心」をさまざまな方法で伝えている。

まちづくりと一体化した サンタランドだが…

町は2001年（同13年）度からスタートさせた「第4次広尾町まちづくり推進計画」で、「港と共に躍進するサンタランドのまち・広尾」をまちづくりのメインテーマに据えた。

サンタランド認定に伴って、町内の大丸山森林公園を舞台にサンタランド資料展示コーナー付きのログハウス、クリスマスツリーの点火式、イルミネーションによるライトアップ、サンタキャンドルを製作する「サンタ工房」などサンタランドらしい、さまざまな施設、装いやイベントが実行に移されている。

しかも、これらがまちづくりの一環として町ぐるみで行われているのが、大きな特色だ。

町内にはオスロ通り、サンタロードなどの名称の道路があり、クリスマスのシーズンにはイルミネーションツリーで彩られるほか、国道沿いの歩道や街路灯はサンタのデザイン、店舗のシャッターもサンタ風のイラストで描かれ、病院、消防署などの公共施設は北欧風にするという徹底ぶりだ。

この町を挙げた取り組みに対して、1989年（平成元年）に「広尾サンタランド」は北海道まちづくり100選の認定を受け、95年（同7年）にも北海道開発局から地域活性化功労賞が贈られた。

2001年度からの推進計画で改めてサンタランドのシンボルゾーン「大丸山森林公園」の整備計画が盛り込まれ、町は住民参加の検討会を5回開き、町ぐるみの意見をまとめた。

その結果、03年にはサンタの家の改修、サンタの鐘設置、トナカイモニュメントの設置などが実現、04年には民間のサンタランド推進委員会が主催し、約200万円をかけた「ふれ

あいガーデニング植樹祭」も行われ、サンタランドは装いをさらに新たにした。

サンタランドのもう1つの中心事業は毎年11月の第2土曜日に開催される「サンタランドツリー点火式」。大丸山森林公園のメインツリーだけでなく、町内のあらゆるイルミネーション（町からイルミネーション設置に補助金が出る）が一斉に点灯され、さらにはこれに賛同するサッポロファクトリー（札幌市）に贈ったトドマツにもリレー点火するという広がりを持っている。

これら一連のサンタランド事業は町だけでなく、1982年（昭和57年）に発足した各界代表による広尾町北方圏交流振興会、フロン市を訪問した青年が中心となったボランティア団体の「広尾サンタランド推進委員会」など、多くの民間団体がさまざまな形で事業に積極的に参加、さらには商工会青年部などによる「広尾サンタランド・ピクチャー作戦」などアイデアを凝らした多彩な活動が行われている。

ノルウェーとの国際交流から実現したサンタランド。その基本理念に基づいて「幼児からお年寄りまで幅広い層が参加し、愛、やさしさ、誇りや思い出の育つまち」を目指す広尾町のまちづくりは、国際交流のあり方を考える上でも道内の他都市から注目を集めてきた。

ただ、その広尾町ですら、厳しい財政難から免れる例外とはいなくなってきた。同町の国際交流のきっかけを作った80年（同55年）建設の臨海公園「シーサイドパーク広尾」の中核施設・「広尾町海洋水族科学館」は2005年（平成17年）度で惜しまれながら閉館となる。

また、町はサンタランドのメイン事業であるサンタメール事業も05年冬の結果を見て、継続か廃止を決める方針を打ち出している。町では「メール事業がなくともサンタランド自体は変わらない」としているものの、関係する民間団体の中には「全国的になっている“サンタランドの広尾”の知名度が落ち、サンタランドの精神に基づく国際交流や観光にも影響が出るのでは…」と心配する声も挙がっている。

曲がり角に来ているともいわれる国際交流の“苦悩”のひとつの具体例であり、それを広尾町がまちぐるみでどう乗り切っていくか—も改めて注目されているといえる。



社団法人北方圏センターの留学生支援事業で広尾町のサンタランドを訪れた9カ国34人の海外からの留学生=2001年11月



クリスマスツリーの点火式で合唱する子供たち



町民100人が参加して行われた「ふれあいガーデニング植樹祭」。奥に見える建物がサンタの家=2004年6月

広尾町

人口：約8千700人 面積：595.8km²

<http://www.town.hiroo.hokkaido.jp/>

1869年（明治2年）、十勝国は広尾郡など7郡に分けられ、1946年（昭和21年）に広尾町となった。帯広市から約84キロの距離で、北は大樹町、南はえりも町と接している。同町の十勝港は70年（同45年）重要港湾指定を受け、十勝・道東の国際流通拠点と

して期待されている。海洋性の気候で夏は過ごしやすく、秋は晴天の日が多い。

国際交流の問い合わせ先
広尾町水産観光課

TEL(01558)2-2111

「出会い ふれあい 個性豊かなふるさと」に

「全国初のカーリング」を呼び込んだ 姉妹都市提携

1977年（昭和52年）12月、池田町の総合体育館前の特設リンクで歓声が挙がった。多くの熱いまなざしの中で、二人のカナダ政府観光局員が講師となって、日本で初めての本格的なカーリング講習会を開いた時のことだ。

98年（平成10年）2月の長野冬季五輪での活躍で、カーリングといえば、網走管内常呂町一のイメージが一気に広がったが、実は、日本で初めてカーリングを導入したのが、池田町なのだ。

大胆な表現を使えば、池田町が日本でのカーリング“発祥の地”といえる。

しかも、このカーリングの導入は、77年5月に締結したペンティクトン市（カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州）との姉妹都市提携が“縁結び”になっているから、面白い。

姉妹都市の話し合いは当時の丸谷町長がその2年前の75年（昭和50年）に同市を訪問、基本合意したことから始まるが、その協議の中で、自然条件の類似した同市でウインタースポーツとして盛んだったカーリングの“輸入”も話題に上った。

それが、姉妹都市提携によって一気に具体化、同市の働きかけでカナダ政府観光局員による講習会に結びついたというわけだ。

同町では講習会翌年の78年2月にさっそく第1回池田冬まつりの一環として町民カーリング大会を開催。「私もやってみたい」の大きな反響を呼び、同年12月には池田カーリング協会が設立されるなど、「カーリングのマチ・池田」が早々に定着した。

その後社団法人北方圏センターなどの普及活動もあって、カーリングの波は道内各地にも急激な広がりをみせる。

池田町では現在でも約20チームが登録、各種のカーリング大会が開かれ、長野冬季五輪には選手こそ出場できなかったものの、2人が審判員として参加した。

姉妹都市提携がカーリングという冬のスポーツを池田町だけでなく、全道、全国に広げるきっかけになったものとして、注目出来る事例といえる。

ペンティクトン市（カナダ）との 「海を越えたきずな」

池田町では61年（同36年）からワイン事業を開始したが、これに合わせて、72年からワイン文化や関連の食文化、まちづくり研修を目的に隔年で欧米諸国を視察する「ワインツアー」をスタートさせた。

この中でブドウ栽培、ワイン生産など類似性のあるペンティクトン市との姉妹都市提携が77年（同52年）に実現した。カナダとの姉妹都市提携は全国では13番目、道内では釧路、



町民にすっかり根付いた池田町のカーリング大会の一コマ＝2004年12月



池田小で児童たちと一緒に給食をとるペンティクトンの人々
=2004年9月

名寄市に続いて3番目の早さだった。

姉妹都市交流の内容は、隔年毎の親善訪問団の相互訪問、79年からの高校生の相互派遣、91年（平成3年）から始めた中学生の相互派遣が主なもの。

数字をみると、その内容が極めて濃厚なことがうかがえる。親善訪問団の派遣は11回221人、受け入れは14回492人、高校生の派遣は16回50人、中学生の派遣が12回100人、中学・高校生の受け入れが16回163人、合計すると1千26人にも上る。

人口が9千人にも満たない池田町にとっては、非常に大きな数字といえる。

2004年（同16年）9月、ペンティクトン市から32人の親善訪問団が5日間の日程で池田町を訪れたが、その時のスケジュールをざっと見てみるとー。

初日はワイン城見学後、町主催の歓迎レセプション。2日目は町長への表敬訪問後、特別養護老人ホーム「光寿苑」、池田小、池田高を訪れ、夜は家庭訪問。3日目は書道教室、お茶会に出席し、語学ボランティアとの昼食後、帯広市内見学などの自由時間。夜は池田町ペンティクトン会主催の交流会。4日目は阿寒湖でのアイヌコタン見学。夜はお別れ会。

最終日はホテル前で見送り、帯広空港へー。

マチを挙げての歓迎ぶりが伝わってきそうだ。

こういった温かい交流を裏付けるように、ペンティクトン市では1994年（同6年）から同市にあるオカナガン湖畔に2005年（同17年）の完成を目指して「池田・日本庭園」の造成に着手した。

さらに、2000年に制定した同市の紋章の一部にその日本庭園の図柄を使うという気の入れようだ。

池田町は02年9月の広報紙でペンティクトン市との国際姉妹都市提携25周年記念特集を組み、そのタイトルを「海を越えたいぎさな」とした。長い歴史だけでなく、心のこもった人々の触れ合いが、そのタイトルに込められているといえる。

財政難で転換期—支える人々の心意気

国際交流への実績と熱い思い—01年（同13年）度から10年間の第3次総合計画で「出会い／ふれあい／個性豊かなふるさと」をうたった池田町だが、その心意気に反して財政難は例外なく押し寄せてきた。

人口は1960年（昭和35年）のほぼ半分に減少、地方交付税の削減など構造的な歳入減で、町は2004年（平成16年）に任期満了で退任した収入役、助役に後任を置かず、町長が兼務するという緊急措置を採っているほどだ。

町は「福祉などの優先事項もあり、残念ながら国際交流への余力は今のところない」と苦渋の選択を強いられた。

具体的には、隔年ごとに10回続けていた池田町からの親善訪問団派遣を01年で中止、16回にのぼった高校生、11回を数えた中学生の派遣を共に03年に取り止めた。

また、ペンティクトン市から1996年以降、5人の英語指導助手（AET）を招いていたが、これも2003年で中止し、在町の外国人への依頼に切り替えた。

ただ、町は今まで培ってきた親善、友好の絆をなんとかつなぎ続けようと、ペンティクトン市からの訪問団の受け入れ



子供たちともすっかり打ち解け、踊りを楽しむペンティクトンの人々=2004年9月、池田町で

は、歯をくいしばって従来通り続けている。

これとは別に、姉妹都市提携による英語指導助手との交流の深まりもあって、池田高校は1991年(同3年)からペンティクトン・セカンダリースクール(高校)と姉妹校提携をし、その後姉妹校提携は3校に拡大、1年間の交換留学、3年に1度の短期派遣、受け入れ事業をいまなお継続している。

同校は2004年、道教育委員会から「夢と活力あふれる高校づくり推進事業」の中で、英語教育の実践、研究を図る「北海道イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」の指定を受けた。

姉妹都市提携がタネをまき、町が苦境の中でも独自に国際交流の枝を広げていくものとして、期待がかけられている。

もうひとつ注目されるのが、池田ペンティクトン会の新たな動きだ。ペンティクトン市では、姉妹都市交流は民間のボランティアによる「ペンティクトン池田会」が中心になっており、それに合わせて町民がメンバーとなって1992年に設立されたのが「池田ペンティクトン会」。

2003年、町の親善訪問団の派遣が中止されたことを受けて、黒川俊男同会会長が「素晴らしい交流の実績と友情をつぶしてはならないし、相手の誠意を裏切ってはならない」と自主的に訪問団結成に立ち上がった。1人約20万円の自費で8人がペンティクトン市を訪れた。

感激したペンティクトン側は市長主催の歓迎会、ペンティクトン池田会主催の交流会など心温まる歓待で迎えてくれたという。

黒川さんは「今までの交流は本物だった。ワイン生産と並んでペンティクトン市との姉妹都市提携は町民にとって誇りだし、財産だ。なんとかこの歴史ある交流は続けていきたい」と語る。

この住民の動きは05年(同17年)にも引き継がれた。ペンティクトン市で造成されていた「池田・日本庭園」が完成、その正面に掲げられる利別川上流地域の原木から採った縦70センチ、横260センチ、厚さ6センチの看板を町、同会、十勝インターナショナル協会が合計約40万円を出し合って作製し、船便で発送した。

同時に03年同様、町と同会が共同で呼びかけた親善訪問団の派遣に、12人の町民が応募した。親善訪問団は05年9月、

ペンティクトン市を訪れ、大歓迎を受けた。完成した「池田・日本庭園」の落成式にも参加し、心のこもった姉妹都市の絆を新たにした。

財政難の中で、目に見えて「費用対効果」の成果が出にくい国際交流事業に、やむを得ず腰を引かざるを得ない自治体が増えているのは確かだ。

しかし、「自分たちの力で可能な限り継続したい」という池田町民のこの試みは、苦境の中でこそ、根を張った国際交流の実績の重みを感じさせる。他地域でも参考にしてほしいケースといえよう。



「素晴らしい交流と友情をつぶしてはならない」とアルバムを見ながら語る黒川俊男・池田ペンティクトン会会長=2005年1月



池田町とペンティクトン市との姉妹提携はなお篤い雰囲気に含まれているが…=2004年9月、池田町での交流会

池田町

人口：約8千500人 面積：372km²

<http://www.town.hokkaido-ikeda.lg.jp/>

十勝平野のやや東寄りにあり肥沃な土地で畑作、酪農などが主産業。鳥取藩主の池田公爵による「池田農場」が町名の由来。1961年(昭和36年)から始めたブドウ栽培によるワイン製造で、「ワインの町・池

田」が定着し、ワイン城は観光の目玉になっている。

国際交流の問い合わせ先
池田町企画財政課企画係

TEL(01557)2-3111

現在に生き続ける 「チャレンジ精神」

関寛齋翁が開いた町

ふるさと銀河線の陸別駅と「道の駅」も兼ね、同町の玄関ともいえる「オーロラタウン93」。その中に、陸別の開拓者、関寛齋の偉業を展示する町立の「関寛齋資料館」がある。

現在の千葉県出身の関寛齋は江戸時代末期、長崎でオランダのポンペ海軍軍医に西洋医学を学び、当時では珍しい“国際派の医師”の先駆けとなった。

その後徳島藩主の侍医、1868年（明治元年）の戊辰戦争時には大総督府の西郷隆盛から官軍の奥州出張病院頭取に任命されるなど、医師としての最高位を極めたほどの人だ。

その生き方は司馬遼太郎氏の著書「胡蝶の夢」や「街道を行く15—北海道の諸道」などに詳しいが、その後自ら一介の町医者となった関寛齋は、実に72歳の1902年（明治35年）、私財を投じて斗満原野（陸別町）の開拓に当たった。

10年後、斗満の地で自殺によってその劇的な人生を閉じることが、陸別が関寛齋の開いた町であることはいうまでもない。

町のホームページの「陸別町とはこんな町」では今でも関寛齋から解きほぐされ、「彼の死後も…人々はあきらめることなく、農場作り、子供たちの教育、青年会の組織、さらには文芸雑誌“交友”、“北潮”の発刊など、酷寒の地にも豊かさを見出していった」と記されている。

司馬遼太郎氏も陸別町史に「寛齋の志の存するところ、ひとびとが不退の心で拓いたところ、一木一草に、聖書的な伝説の滲みついたところ。森に、川に、畑に、それらのすべてが息づいています」との一文を贈っている。

内陸に位置し、北海道ちほく高原鉄道(株)のふるさと銀河線の廃止も決まった陸別町だが、その地理的なハンディにもかかわらず、国際交流には以前から前向きだ。

その理由について北海道陸別・関寛齋顕彰会の齋藤省三幹事は「小学校の郷土学習で子供たちは、必ず関寛齋のことを学ぶ。関寛齋の西洋医学や開拓といった偉大なチャレンジ精神が陸別町民の心のどこかに、遺産として生き続けているからだと思う」と分析する。



ラコム町で歓迎を受ける陸別町の訪問団
=2002年3月



ラコーム町からの訪問団と別れを惜しむさようならパーティー
=2004年7月、陸別町で

ラコーム町（カナダ）との 「しばれる町同士」の“暖かい関係”

その言葉を裏付けるように、町が世界に開かれた地域社会づくりの一環として、カナダ、北欧など北方圏諸国への町民海外研修派遣事業を開始したのは、1981年（昭和56年）と4半世紀も前のこと。

83、84年のラコーム町（カナダ・アルバータ州）への2度の訪問で気候、風土、人口規模（当時、陸別町は約4千500人、ラコーム町は約6千100人）の似た両町は急速に接近、85年のラコーム町長の陸別来訪を経て86年（同61年）7月、ラコーム町で姉妹友好提携の盟約書にスピード調印した。

陸別町は“日本一しばれる町”の異名を持つが、ラコーム町はそれ以上で、2月にはマイナス40度を下回るという。しばれる町同士の“暖かい国際交流”がスタートを切ったわけだ。

提携当初は隔年ごとに交互に町民が訪問し合って、友好関係を深めた。ラコーム町ではボランティアの陸別委員会が発足、これを受けて陸別町でも90年（平成2年）、海外研修の参加者を中心にした「陸別町国際交流町民の会」が設立され、交流に弾みをつけたが、ラコーム町長の交代などもあって91年に町民の研修訪問は一時休止の事態となった。

“全員参加”のユニークな 中高校生の教育研修

再開策として浮上したのが、「国際社会に対応できる豊かな人間性の育成」という、目的を明確にした中高校生の教育派遣事業。第1回目の92年（同4年）中学生10人、高校生5人、引率者3人の計18人がラコーム中学などを訪れた。これ

がラコーム町でも好評で以来、毎年途切れることなく派遣が続けられている。

2001年（同13年）秋は米同時多発テロ事件の影響で多くの自治体が派遣を見合わせたが、陸別町の担当者は「陸別は翌02年3月に延期しただけ。従って02年は2回の派遣となった」と胸を張る。

1986年の姉妹友好提携後だけでも、陸別町からの訪問団、派遣団は2004年まで17回344人にのぼり、ラコーム町からは8回70人が来町する分厚い交流となっている。

交流内容はホームステイをしながら学校訪問、体験入学、町の施設見学、各種の交流などで多くの市町村が実施する内容とそう変わりはないが、ユニークなのはその仕組みだ。

陸別町には中学校は陸別中1校で高校はない。町が中学生等海外研修派遣事業とし、「等」で対象を中学3年生から高校2年生に広げているのには、意味がある。

中学3年生は全員で20人前後。中学3年の時、事情があつ



カナダのバンフで記念写真を撮る陸別中の生徒たち
=2002年3月

て参加できなかった者にも卒業後高校2年生までは参加を認めるという制度だ。

往復旅費、宿泊費、食事代などの経費の半分は町が補助し、残り半分は上限を10万円として自己負担。余程のことがない限り、陸別の子供たちは全員カナダで国際交流を体験できるという、うらやましいような内容だ。

その代わりに、参加者は申し込み時に国際交流についての作文を提出し、出発までに英会話、マナーなど4回程度の事前研修、さらに帰国後には報告書への体験レポート提出などが義務付けられ、文字通り、中身を伴う教育派遣事業となっている。

マチに根付く国際交流

ラコーム町からの来訪者を受け入れる母体になっているのが、陸別町国際交流町民の会。海外研修などに参加した町民ら75人が会員になり、歓迎会や空港への出迎えなどを行っているが、研修経験者だけにホームステイも比較的スムーズに運んでいるという。

また、国際交流員も1991年（同3年）から配置し、中学校での英語授業をはじめ、保育所、小学校での英語のゲームや歌の勉強、週1回町民への英語教室なども開き、国際理解は町の中に広がりを見せている。

国際交流員制度はとりえず2004年で終わったが、7年間も国際交流員を務めたドンさんはラコーム町の近隣に住んで

いる関係で、今でも自主的に陸別とラコームをつなぐ役割を果たしてくれているという。

暖かい交流の証としてラコーム町には「陸別通り」があるが、陸別町でもふるさと銀河線の駅舎と道の駅、関寛齋資料館が入っている「オーロラタウン93」と町役場、「りくべつ宇宙地球科学館（愛称、銀河の森天文台）」を結ぶ約2キロの間を「ラコーム通り」としている。

街路灯にはカナダを象徴するメープルリーフ（カエデの葉）をあしらひ、表裏に日本語と英語でラコーム通りと書かれたボードが取り付けられている。その通りに面した家屋の壁に自主的にカナダ国旗を描いた民家もあり、内陸の町に国際交流の根がしっかりと下ろしている感じだ。

陸別町は1987年（昭和62年）度に環境庁から「星空の街」に選定され、97年（平成9年）度には「星空にやさしい街10選」に認定された。この自然環境を生かすため98年には銀河の森天文台がオープンした。

一般公開型天文台としては日本最大級の115cmの反射望遠鏡をはじめ、30cmの小型望遠鏡4基などを備えた公開型の天文台。名古屋大学太陽地球環境研究所の「陸別総合観測室」と環境庁国立環境研究所の「陸別成層圏総合観測室」も併設されている。

成層圏・対流圏の大気やオーロラ研究に関連して、外国人が参加する会議も適時開催されており、陸別町に新たな国際交流の芽が育ち始めている。



街路灯にカナダの象徴「メープルリーフ」があらわれている陸別町のラコーム通り。奥の建物は関寛齋資料館もある「オーロラタウン93」

陸別町

人口：約3千100人 面積：608.8km²

<http://www.town.rikubetsu.hokkaido.jp/>

道東部のほぼ中央に位置し、2000年にはアメダスの観測でマイナス33.2度を記録した。関寛齋が開拓した町として有名だが、酪農、林業のほかに、厳寒の町を活かした天文台、しばれフェスティバル、さら

にはオフロードレース、オールジャパンパッチ選手権などの新たな町興しにも積極的に取り組んでいる。国際交流の問い合わせ先 陸別町総務課 TEL(01562)7-2141

釧路管内

釧路市

釧路湿原が「国際化」に一段と拍車

転機となったラムサール条約

釧路市の北約5キロに位置する釧路湿原は、面積1万8千ヘクタールに及び日本最大の湿原（ウエットランド）である。

8割がヨシ、スゲにおおわれた低層湿原で、絶滅の危機にあるタンチョウ、シマフクロウ、オジロワシをはじめ、貴重な生物の豊かな多様性を誇っている。

1971年（昭和46年）、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」、いわゆる「ラムサール条約」がスタートしたが、80年（同55年）に釧路湿原は日本で最初のラムサール登録湿地に指定された。

国際化の大きな転機になったのが、93年（平成5年）に釧路市で開かれたラムサール条約第5回締約国会議。

95カ国、約1千200人が参加し、延べ4千人の地域の人々が通訳や会議運営、観光ボランティアとして活躍した。

同時に近くの厚岸湖・別寒辺牛（べかんべうし）湿原、霧多布湿原（浜中町）もラムサール登録湿地に指定されたこともあって、地域ぐるみで国際化をさらに進めようとの動きが広まってきた。

釧路市が翌94年度の「先進的・地域国際化推進のまち」部門で総務大臣表彰を受けたのは、これらの活動が評価されたことだ。



釧路国際ウエットランドセンターの技術委員会による現地調査で湿地保護が図られている

釧路国際ウエットランドセンター（KIWC）の誕生

この会議を機に高まった湿地保全と国際協力の気運を生かすために、釧路市が音頭を取って95年（同7年）に設立したのが釧路国際ウエットランドセンター（KIWC）。

国際会議を経験した市民、民間団体の熱意による4千万円の寄付も同センターの基本財産になった。

中心になっているのは釧路市だが、同じく登録湿原を持つ厚岸町、浜中町などの隣接5町村、関係行政、教育機関、釧路



ラムサール登録湿地に指定された貴重な釧路湿原

自然保護協会などの関係団体で構成する半官半民の組織体だ。

湿原の保全とその賢明な利用（ワイズユース）を図る活動拠点と位置づけし、その活動は文字通り多岐にわたっている。

項目だけみても、①国連訓練調査研修所（UNITAR）などによる年1回以上の国際会議の開催②国際協力機構（JICA）の渡り鳥研究などの研修事業③湧水などの調査研究④国際教育専門家の派遣⑤ニュースレター発行などによる普及啓発—などで、活動内容の幅広さが端的にうかがえる。

実を結ぶ幅広い活動

活動の具体的な内容を見てみよう。例えば、2002年（同14年）、JICA帯広、社団法人北方圏センター（帯広国際センター）と共に実施した「ブータン・ツル飛来湿地の保全とワイズユース研修」では、ブータン王国の非政府機関（NGO）である王立自然保護協会から職員2人が来道した。

同国のフォブジカ湿地が希少種のおぐろツルの重要な飛来、越冬地だったのが縁だが、従来なら全く交流のないブータン王国との具体的なつながりは、「今後の新たな財産になりうる」と関係者は期待する。

現に03年にJICAの地域提案型による草の根技術協力事業の事前調査のため、釧路国際ウエットランドセンターの職員が同国に事前確認調査を行った結果、同事業の3カ年の研修プログラムが実現し、04年と05年には、ブータン王立自然保護協会の職員各2人が相次いで釧路管内阿寒町（現在は釧路市）の阿寒国際ツルセンターや釧路湿原でタンチョウや湿原などの保護策を学んだ。

帰国後、同協会として釧路で吸収した研修結果をおぐろツルなどの自然保護に生かすと同時に、釧路湿原同様エコツアーの実施も検討したいとしている。

3年目となる06年もさらに同協会職員4人が道東に派遣されてくる予定で、日本側からの研修員の相互派遣も合わせ、自然環境保護を絆とした国際交流は予想以上に大きな成果を挙げているといえる。



自然の保全と共生を肌で感じるエコツアーもスタートしている

湿原の生態系保全のために専門的な研究に取り組んでいる同センター技術委員会は04年（同16年）、3年間にわたって実施した調査研究報告書「湿地及びその環境の修復・再生の試み」を作成。一般にも無料配布することで湿地復元や自然再生、人と自然の関わり合いのあり方を模索する「エコツーリズム」の提唱などの貴重な情報を住民に提供した。

同センターは釧路市環境部環境政策課が事務局を担当しているが、「地域の人々ともっと積極的に連携プレイをしているのが今後の課題」という。

だが、その一方で、釧路湿原自然再生協議会が湿原の全体的な再生事業を盛り込む「全体構想」づくりに、地域住民の意見を反映させるため開催している「地域検討会」には釧路市や釧路町の住民も参加し、活発な議論を展開するなど、活動の輪は地域住民の中にも広がり始めている。

4カ国6地域との多様なつながり

かつては北洋漁業の日本一の基地、極東、ロシア、北米ともつながる北太平洋の産業港、そしてラムサール条約の登録湿地に指定された世界的な湿原—釧路は地政学的にも、経済的にも、自然環境の面でも自ずと恵まれた国際性を備えているといえる。

40年前の1965年（昭和40年）にカナダ・バーナビーと姉妹都市提携を結んだのを皮切りに、現在、姉妹都市、姉妹校、港街友好都市、友好湿地は4カ国6地域にも及んでおり、釧路市がその特性を生かして積極的に国際交流を推進していることを裏付けている。

【姉妹都市】

【バーナビー市（カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州）】

カナダ西海岸のバンクーバー市に隣接し、文教施設が整備されているほか、通信機器などの先端技術産業が進出し、商業都市としても発展している。

釧路市とほぼ同緯度で都市の形態も似ていることから、65年、カナダの自治体とは道内では第1号の姉妹都市提携を結んだ。

両市関係者の相互訪問、中・高校生の交換事業だけでなく、釧路公立大学とサイモンフレーザー大学、キャピラノカレッジとの間で姉妹校提携を結ぶなど、交流の実績が挙げられているという。

【ホルムスク市=旧真岡=（ロシア・サハリン州）】

サハリン州南西部に位置し、同州最大の港湾施設を利用した鉄道貨物ターミナル基地建設で物流の拠点になっている。姉妹都市提携も30年前の旧ソ連時代の75年（同50年）。

港湾、紙パルプなどの基幹産業の類似性に加え、旧真岡市を故郷にする釧路市民が多いことなどが理由だが、記念植樹



提携5周年で釧路市の大訪問団がペトロパブロフスク・カムチャツキー市を訪れ、なごやかな交歓を繰り広げた=2003年8月

や文化・スポーツ・教育分野での交流のほか、保育園の相互交流なども行われている。

【姉妹港】

「スワード港（米アラスカ州）」

姉妹港提携は82年（同57年）のこと。アンカレジ市の南300キロに位置し、北洋漁業における補給基地、貿易の拠点としての経済交流が深かったのが理由。

その後北洋漁業の終焉と共に関係は疎遠になっているが、それでもスワード市開基100年の2003年（平成15年）には副市長が訪問し、大歓迎を受けるなど、姉妹港としての関係は続いている。

「ニューオーリンズ港（米ルイジアナ州）」

1984年（昭和59年）の提携で2004年（平成16年）に20周年を迎えた。同港はルイジアナの穀倉地帯を抱えた米国の物流拠点で釧路西港とは穀物、飼料輸送など船舶の往来による経済的な結び付きが強く、双方の利害が一致した経済主導の姉妹港提携といえる。

20周年の04年8月の世界子どもサミット釧路大会にはニューオーリンズ市の子供5人が出席、さらに、くしろ港まつりにもニューオーリンズ・ブラスバンドの7人が本場のジャズ演奏を披露するなど硬軟織り交ぜた交流が続けられている。

同年10月ニューオーリンズで行われた姉妹港提携20周年記念の友好調印式には、釧路から市長、市議会議員、海運関係者ら18人が出席し、両市と両港の経済、文化交流の一層の拡大を誓い合った。

【港街友好都市】

「ペトロパブロフスク・カムチャツキー市（ロシア・カムチャツカ州）」

両市が物流や漁業に重要な不凍港を持ち、港の産業を中心に発展した港街だったことから1998年（同10年）8月、珍し

い港街友好都市提携に調印した。

提携5周年の2003年8月には、市長以下75人の大訪問団が訪れ友好を深めたが、もともと民間の釧路カムチャツカ研究会が提携年の1998年から年1回の割合で両都市間にチャーター便を飛ばすなどの民間交流が基盤となっており、さらに、北海道教育大釧路校と国立カムチャツカ教育大が、姉妹校提携で留学生の交換を行うなど、民間主導の国際交流という特徴を持っている。

【姉妹湿地】

「クーラガング湿地およびその周辺湿地（オーストラリア・ニューサウスウェールズ州）」

「姉妹湿地」は、やはり湿原を持つ地域同士ならではの具体的な国際交流だろう。

釧路西高校の野外科学部が、以前から釧路湿原で繁殖しオーストラリアで越冬する、渡り鳥のオオジシギの調査研究を続けてきたことに加え、93年の釧路市でのラムサール条約締約国会議が契機となって翌94年（同6年）11月姉妹湿地提携が実現した。

同校は、同湿地のあるニューカッスル市のジェスモンド高校と姉妹校提携を結び、交換留学を行っているほか、同湿地周辺のポートステューブンス郡の人々が釧路を訪れて友好、交流を深めたり、研究者の交流による湿地再生研究、意見交換を行うなど、湿地を媒体・原動力としたユニークな国際交流が確実に結実し始めている。



姉妹関係にあるオーストラリアのクーラガング湿地周辺の人々との珍しい交流も始まっている=2004年9月、釧路市で

目立つ民間の活動

—世界子どもサミットの成功にも力

前にも触れたように釧路市はもともと、北洋漁業など環太平洋に目を開いた国際性があり、姉妹都市提携などの長い歴史を誇るが、それには釧路カムチャツカ研究会のロシアとのチャーター便交流を例に出すまでもなく、活発な民間活動による下支えが大きな特徴となっている。

特に、93年釧路でのラムサール条約締約国会議で活躍したボランティアを母体に、誕生した釧路国際交流ボランティア



ボランティア中心で運営し、成功を収めた第1回世界子どもサミット釧路大会=2004年8月

の会は、年2回機関誌「VISTA」を発行、留学生のホームステイを受け入れるなどのさまざまな活動を行っている。

「釧路にとっては、色々な意味で釧路湿原という自然条件とラムサール条約締約国会議が国際化の新たな土壌になった」（釧路市企画財政部企画課）といえる。

そんな流れの中で「釧路の国際化」の実力が試されたのが、2004年（同16年）8月に開かれた第1回世界子どもサミット釧路大会（大会実行委主催）だろう。

アメリカ、カナダ、ロシア、オーストラリア、韓国、中国、ベトナム、シンガポールなど9カ国236人の子供が5日間にわたって、湿地を中心にした自然資産を学びながら国際交流を楽しんだ。

ラムサール条約締約国会議とそれを支えたボランティア活動による成功が評価された結果、この第1回世界子どもサミットが釧路で開かれることになったわけだが、前年の12月に立ち上げた大会実行委員会にはさまざまなジャンルの14団体が参加、地域を挙げた取り組みとなった。

事務経費の節減のためでもあったが、ボランティアによる運営を基本に置き、例えば、普段は旅行会社に依頼するロシ

ア、中国などの参加者の入国査証（ビザ）申請手続きなどもインターネット情報を収集して、自分たちで実行し、また、通訳なども従来の学術会議のような形式にとらわれず、英語を中心に身振り手振りも交えて対話を図るという手づくりの大会に徹した。

期間中、釧路だけでなく釧路管内厚岸、浜中、標茶、釧路の各町で「ソフトクリーム・地引き網」競技などの地域を挙げた体験プログラムも行われた。

最終日には「さまざまな体験を通して得た釧路での多くの思い出を胸に、かけがえのない文化や自然を守るために、宇宙船地球号の乗組員として努力していくことを誓います」という釧路から世界の友だちへの「子ども宣言」を発信し、成功裏に大会を終えた。

関係者は「最初は何が出来るだろうと不安だったが、今までの経験を基に力まず自然体でやれたのが良かったと思う」としており、単に官民の協調態勢だけでなく、根付き始めたボランティアを中心にした地域ぐるみの高い国際性が、釧路の国際化に新たなエネルギーを付加してきているといっても過言ではないようだ。

釧路市

人口：約19万5千人 面積：1,363km²

<http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/>

釧路湿原国立公園を持ち、戦前から北洋漁業の基地として日本有数の水揚げを誇る水産都市。太平洋炭鉱の閉山などで経済の地盤沈下はあるものの、経済、文化など東北海道の中核、拠点都市の地位は変わらない。2004年大みそかのNHK紅白歌合戦で水森か

おりさんがヒット曲「釧路湿原」を歌った。05年10月11日、釧路管内阿寒町、音別町と道内では第1号の「飛び地合併」を実現した。

国際交流の問い合わせ先

釧路市企画財政部企画課

TEL(0154)23-5151

よみがえった 「150年前の海難」

歴史から再浮上したイーモント号

町役場の隣にある厚岸町海事記念館。その1階の奥中央のクラレンスコーナーに船底の残がいの木片が展示されている。これが1985年（昭和60年）、同町末広（まびろ）の300～500メートル沖の海底から135年ぶりに引き揚げられたオーストラリア（豪州）・タスマニア州ホバート港を母港とした捕鯨船イーモント号の木片だ。

案内してくれた同記念館学芸員の熊崎農夫博さんは「昔のことなので地元でも宝物を積んだ船が沈んでいる程度の話しか伝わっていなかったのですがね」と木片の存在感の“重み”を語る。

イーモント号（278トン）は1850年（嘉永3年）4月、前夜来の風雨のため末広沖で座礁、32人の乗組員が上陸し、救助を要請してきた。当時、厚岸は幕府の直轄地で松前藩の詰め所があり、アイヌの人々との交易の場所でもあった。

翌年、乗組員は長崎経由で故国に帰るが、1831年（天保2年）シドニーの捕鯨船「レディー・ロウェナ号」が厚岸のウライネコタン沖（現在の浜中町菱古丹沖）で松前藩と17日間にわたって戦闘とにらみ合いを続けた事件と合わせ、この2つ出来事が歴史的にも日本人と豪州人の初の接点といわれて

いる。

当時から厚岸にあった蝦夷3官寺のひとつ国泰寺に残る「日鑑記」にはイーモント号の海難事故は記録されていたが、厚岸の人々の間ではこの事故はすっかり忘れ去られていた。

それが、歴史の陰から再び浮上したのが、1977年（昭和52年）豪州捕鯨操業の歴史調査の一環で在日オーストラリア大使館からのイーモント号関係についての突然の問い合わせ。

時を合わせたように79年横浜市の作家、遠藤雅子さんがシドニーの新聞記者とともに来町し、イーモント号の遭難について調査。その結果は81年に「謎の異国船」として出版され、その史実が全国的に紹介されることになった。

一気に実現したクラレンス市との 姉妹都市提携

もともと、豪州に住んでいた遠藤さんの助力などもあって80年、厚岸町は在日オーストラリア大使館を通じてタスマニア州第2の都市・クラレンス市に姉妹提携の希望を伝え、同市もこの申し入れを快諾、遠藤さんの著書「謎の異国船」が出版された翌年の82年（同57年）2月、同市で姉妹都市提携のスピード調印となった。



姉妹都市提携21周年記念で来町したキャンベル副市長らクラレンス市の訪問団。クラレンスコーナーに展示されているイーモント号の船底の木片に感慨深げだ＝2003年9月、厚岸町海事記念館で

イーモント号の海難事故は132年目にして姉妹都市の“絆”として現代によみがえったわけだ。

39年（同14年）宗谷管内猿払村の沖合で遭難、720人が死亡した旧ソ連の貨客船インディギルカ号の大海難事故で、必死の救助活動を行った同村に感謝して、半世紀を経た91年（平成3年）、サハリンのオジョールスキイ村の希望で姉妹都市提携が実現している。

内容にはやや違いはあるものの1つの海難事故が長い時を経て、姉妹都市提携に結び付いたケースとしては珍しい類似点がある。加えて、厚岸町が北緯43度に位置しているのに対して、クラレンス市は南緯43度。赤道を挟んで仲良く経緯が同じ43度同士の姉妹都市となった。

ボランティア主導の中身の濃い交流

行政レベルでは周年ごとの訪問、議会関係者などの訪問が随時行われているが、厚岸町の場合は、民間が主導する中高校生の訪問派遣事業が柱といえる。

その中心的な役割を果たしているのが、90年（同2年）に町内の主婦など5、6人の女性が自発的に発足させた民間国際交流団体「アイリス」（西村由美子代表）。

「手紙のやり取りだけでなく、ペンパル同士を会わせてあげたかったから…」（同代表）が動機というが、93年から町の町おこし基金を活用して訪問派遣事業を開始した。

同基金は国のふるさと創生基金を原資に、町内の各種民間団体が自主的に取り組む地域活性化・振興事業に補助金を出し、活動を支援している。町から旅費、滞在費の半分が助成されるが毎年、中高校生が10数人訪問し、2005年（同17年）までに約120人に上っている。



姉妹都市提携20周年で獅子舞を披露するアイリス派遣の中学生たち
=2002年1月、クラレンス市で

アイリスの活動でユニークなのが、他の地方でもそう例のない徹底した事前学習。訪問希望中学生には募集時の1年生の5月にアイリスに入会してもらい、訪問時の2年生の末までの約20カ月間、英語やホテルマナー、豪州の歴史、文化などを週一回のペースで研修してもらう。

研修といっても、会員が手書きの楽譜を作り、会員宅で実施するというボランティアそのものの活動内容だ。訪問終了後も報告書の作成や発表会を開くなど、結果のフォローアップにも努めている。

西村代表は「町費を使っている以上、海外旅行が出来てラッキーだけではダメ。子供たちにとって実のある訪問となり、その後の人生や将来のまちづくりに生かしてもらいたい」と強調する。

町の花のヒオウギアヤメの英語名「アイリス」にちなんで名づけたアイリスの会。ボランティアで姉妹都市交流を支え、



ホームステイですっかりクラレンスの人々と仲良くなった厚岸の子供たち
=2004年3月

それを自らの努力で実りあるものにしようという活動は、地域おこし、人づくりの面からも注目していいだろう。

豪州輸入のシングルシード方式でカキ養殖に活路

「カキといえば厚岸」というほど道内では有名だが、その厚岸のカキが1983年（昭和58年）大量斃死（へいし）した。

厚岸漁協、町にカキ生産再生の命題が大きくのしかかってきたが、93年（平成5年）たまたま、姉妹都市交流でクラレンス市を訪問していた厚岸の中学生たちが、同市でカキのシングルシード養殖を見学した。

シングルシードは「1つの種」の意味で、従来のホタテ貝に多数のカキの稚貝を付着させ、養殖する方法と違い、細かく砕いた貝殻の一片にカキの幼生・種苗を1個ずつ対にして付着、養殖する方式で、豪州で確立された技術。

水産関係者も本などで知識はあったが、実際に見たことはなかったという。

中学生たちの報告を聞いて翌年と翌々年、町長や町の担当者らがクラレンスの養殖施設を視察、日本で初めてシングルシード方式導入の検討に入った。

この方式が軌道に乗れば、宮城種などの移入、養殖をして

いた従来のホタテ貝の多数種苗と違い、純粋の厚岸カキの養殖が可能になるという新たなメリットも生じる。

99年（同11年）、町は「厚岸生まれの厚岸育ち」の地元産種苗生産のために「カキ種苗センター」を建設し、試験生産に乗り出した。

2003年（同15年）には生態工学学会（本部・東京）から技術賞を受賞、同センターの養殖技術は全国的にも認められる段階にまでなった。

シングルシード技術によるカキ養殖は同町生産者の約3割。種苗の数にまだ限界があるため03年度の出荷額は約1千万円に止まっているが、町では「カキえもん」の名称で、純厚岸産のカキ生産増に本腰を入れている。

「姉妹都市提携で経済交流を」は各自自治体が望むところだが、距離的なハンディによる採算性の問題などで、なかなか実現には至っていないのが実情だ。そんな中で、姉妹都市交流から実現したカキのシングルシード方式は、厚岸のカキ生産の起死回生策の期待がかかる。

江戸時代に厚岸沖で難破した豪州捕鯨船イーモント号は約150年を経た現代、厚岸町に姉妹都市をプレゼントし、日本初のカキのシングルシード技術を呼び込んだ。

地元の言い伝え通り、本当に“宝船”だったのかもしれない。



大きな実りをもたらしている姉妹都市提携。21周年で来町したクラレンスの訪問団を歓迎する厚岸の人々＝2003年9月

厚岸町

人口：約1万2千人 面積：734.8km²

<http://info.town.akkeshi.hokkaido.jp/>

厚岸湖および厚岸湾外海をふくむ72キロの海岸線には漁村が点在し、丘陵地帯には酪農地帯が広がっている。「厚岸湖・別寒辺牛湿原」はラムサール条約にも登録され、5千年前からカキの生息が確認されている。江戸後期から厚岸は国防上の拠点、海産物

の産地として注目された。1960年（昭和35年）には一時、人口は2万人を越えたことがある。

国際交流の問い合わせ先
厚岸町まちづくり推進課 TEL(0153)52-3131

北方圏国際交流交易 拠点都市を目指して

国境の町が背負う 「北の玄関」としての国際性

北はオホーツク海、南は太平洋に面し、細長い半島状に突き出た水産都市・根室市。その地政学上の特性から、歴史的にも「国境の町」としての“宿命”を背負わされてきた。それを象徴しているのが、ロシア人のアダム・ラクスマンと米国人のリンダーバーグ夫妻の根室来訪だろう。

ラクスマンがアリュシャン列島に漂着した大黒屋光太夫を伴って、エカテリーナ号で根室港にやって来たのが、1792年（寛政4年）10月のこと。通商を求めるためだが、江戸幕府の返答を待つ8カ月間、乗組員42人は根室沖の弁天島に上陸し、家を建てて生活した。

当時、根室には松前藩の役人、商人、アイヌの人々数十人が住んでいたが、その間にはさながらロシアと日本の情報交換の場となった。日本側は初めてのロシア語辞典を作成したり、ロシアの地図を書き写したりした。ラクスマンらも日本地図の模写や植物、鉱物の標本を作るなど、日口間の初の歴史的な“国際交流”となった。

時代はずっと下がるが、米国人のリンダーバーグ夫妻が水上飛行機「シリウス号」で根室港に着水したのが、1931年（昭

和6年）8月。その4年前の北太平洋無着陸横断飛行で、一躍世界的な英雄になっていたリンダーバーグ氏は根室滞在の2日間、熱狂的な歓迎を受けた。

ラクスマンの来航は日口関係の幕開けを促すものだし、リンダーバーグの来日も米国と日本を結ぶ北太平洋空路開設のための調査飛行。時期も目的も違うが、共に根室が日本の「北の玄関」として米口両国にとって時代を超えて地政学的に重要な意味を持つことを示している。

さらに第2次大戦後、冷戦下での両国の戦略的な思惑が交差する地、「北方領土」という国際政治のくびきを担う「国境の町」として、望むと望まざるとにかかわらず国際性を運命付けられていたことを早くから物語っているもの、といえる。

ビザなし訪問による“日口交流”

第2次大戦後の北方領土を巡る日ソ関係、北洋漁業に関する日ソ漁業交渉の歴史などをひも解くまでもなく、冷戦による米ソの戦略的思惑が複雑に絡み合い、「国境の町・根室」は国際政治に翻弄され続けて来た。

それを大きく変えたのがソ連体制の崩壊に伴って92年（平成4年）4月から始まった北方四島とのビザなし訪問。



ビザなし訪問でやって来たロシアの子供と根室の子供との対話も活発だ

もちろん、領土問題が解決したわけではないが、永年途絶えていた“故郷”との往来の道が「ビザなし訪問」という限定付きながら再開され、北太平洋は「対立と緊張の海」から「対話と交流の海」に変貌したといえる。

独立法人北方領土問題対策協会の調べでは、92年(同4年)度から2004年(同16年)度までの13年間で日本側からは合計149回6千569人が北方領土を訪問、北方四島側からは106回5千358人が来道、双方合わせるとすでに1万人を超す往来となっている。

領土問題が解決していない以上、これを“国際交流”と呼ぶのは誤解を招くが、特別な措置による日本人とロシア人間の「日口交流」であることは間違いない。

ビザなし訪問では日本側からは3泊4日、北方四島側からは5泊6日程度の日程が主だが、ホームステイによる草の根レベルの交流、領土問題に関する討論集会、社会制度の違いなどを学ぶ相互理解セミナーの開催や書道、華道といった異文化体験—などの多彩なスケジュールが組まれており、「住民相互で理解が進み、誤解が解けつつあることは確か。手紙の交換など草の根レベルの交流も生まれてきた」(根室市北方領土対策室)という。

また、1994年(同6年)の北海道東方沖地震で大きな被害を出した北方四島に対してプレハブの仮設診療所や自航式はしけの供与、その後人道支援の枠組み合意やディーゼル発電設備の設置などが行われた。

さらに、ビザなし専門家交流の枠組みを使って99年以降毎年、ロシア人専門家と北方四島の生態系調査を実施している特定非営利活動法人(NPO法人)の「北の海の動物センター」が、4島の自然環境破壊を防ぐ日口共同の管理計画策定を呼びかける構想を持つなど、ビザなし訪問は単なる人的交流の枠を超えた新たな日口関係に発展しつつある。

町づくりに生かす国際交流推進計画

こういった時代の変化に対応するため根室市は、北太平洋に面した歴史と、「北の玄関」としての地理的特徴(利便性)を生かし、産業・経済、物流、情報などの中継・発信の拠点としての役割を果たすことを目標に「北方圏国際交流交易拠点都市を目指す国際交流推進計画」(1995年—2004年)を策定し、総合的なまちづくりに取り組んできた。

同計画と前後しながら、冷戦終結の変化に呼応して1992年、全道に先駆けてロシア人専用のインフォメーションセンターを設置した。

また、同市は人口3万人強に過ぎないが、ロシア人を中心に年間2万人もの外国人が訪れる“国際都市”ということもあって、市内の歓迎塔や道路標識、町名表記板やガイドブックなどは日本語だけでなくロシア語、英語で併記するなど、外国人が戸惑わないようなさまざまな施策を進めている。

さらに、基幹産業である漁業の振興を図るため、官民一体となった「パイセス」(北太平洋の海洋科学に関する調査・研究など国際条約で設立された政府機関組織)関係の国際会議開催など、従来にはない「北方圏国際交流交易拠点都市」づくりへの取り組みが行われている。

一方、同市内にある道立北方四島交流センターは、講演会などが開ける交流ホールのほかに茶道、華道などの日本文化を体験できる日本文化ルーム、ロシア料理などの調理実習室など国際交流のハードとソフトの両面を兼ね備えている。

また、65年(昭和40年)に設立された根室市日口友好親善協会はロシア語講座のテキスト作成、「ロシアの日・レセプション」への祝電を打つなどさまざまな活動やイベントを行っており、2004年(平成16年)9月、同協会が中心になって開催したサハリン合奏団根室公演も好評だった。

このほか、市、根室海保、根室港周辺の町会など官民合わせ35団体で組織する根室市国際交流安全対策会議は、公衆浴



「北の玄関」の国際性を象徴するように日本語、ロシア語、英語の3カ国語で書かれた根室市内の道路標示板



民間が中心となって開催されたサハリン合奏団根室公演
=2004年9月

場でのマナーのガイドブックを配布するなど、ロシア人とのトラブルを防止するための諸対策を協議、実行しており、官民共同による国際化、国際交流事業が多角的に推進されているのが特徴となっている。

こういった活動が評価され根室市は、順序は前後するが1997年（同9年）度に「世界に開かれたまち」として自治大臣表彰を受けた。

北太平洋を結ぶ2つの姉妹都市提携

【シトカ市（米アラスカ州）】

シトカ市はアラスカ州南東部のパラノフ島にある都市で、サケ、ヒラメ漁船が集結する水産都市としても有名。北洋漁業華やかかりし頃、根室市の北洋漁船が食糧補給などでシトカ市に立ち寄り、自然と交流が広がった。これが縁となり75年（昭和50年）、姉妹都市提携が結ばれた。

79年には根室市長を団長とする8人がシトカ市を訪問し、人的交流を中心に文化・教育面での交流を図っていくことが改めて確認された。

以来、両市のアマチュアジャズバンドの相互訪問、小学校の文通や美術作品などの交換、市長含むシトカ市から3度の訪問団の来根に加え、90年（平成2年）には花咲小とベストピア小、96年には根室高とシトカ高が姉妹校提携を結び、97年から99年までは高校生の交換留学も行われていた。

しかし、99年の根室市内のアマチュアジャズバンドのシトカ市訪問以来、具体的な交流は途絶えたままになっている。根室高では交流再開希望のメールなども送っているが、返答がなく、北洋漁業の衰退に合わせるように自然と関係が希薄になってきた。

根室市では北方圏国際交流交易拠点都市を具体化するためにも「絵画交流など比較的取り組みやすいプログラムなどから交流再開を図っていききたい」としている。

【セベロクリリスク市（ロシア・サハリン州）】

セベロクリリスク市は千島列島（クリール諸島）北東部の

パラムシル島（幌筈島）に位置し、北千島地区の拠点都市として行政府が置かれている人口約4千200人の水産都市。沖合は世界3大漁場の1つである北太平洋北西岸漁場でサケ、マス、マダラの宝庫だ。

セ市から91年に市長を団長とした漁業関係者、93年にも水産・建設視察団が根室市を訪れるなどの交流があった。漁獲量の減少に悩む根室市も地域経済活性化を図る有力なパートナーとしてセ市を評価、94年（同6年）に姉妹都市提携に調印した。

千島列島の都市との姉妹提携は全国でも初めてで、いかにも根室市ならではの特色を生かした判断だったといえる。

姉妹都市提携の直後、まず、セ市青少年訪問団の一行18人が根室市を訪れ、高校の体験入学、スポーツなどを通して高校生や市民との交流をスタートさせた。

また、98年には市議会議長を団長に高校生、産業・市民団体、行政関係などから成る17人の初の根室市民代表団がセ市を訪問し、一般家庭にホームステイをしながら、学校、幼稚園、企業などを訪れ、親交を深めたほか、第2次大戦終結時に日ソ両軍で約3千200人が戦死した激戦地のシュムシュ島（占守島）での戦没者の慰霊も実現した。

ただ、根室から船で3昼夜もかかるため、仙台からチャーター便でカムチャツカに飛び、さらに、ヘリコプターでセ市に1という交通事情が交流のネックになっているのも事実。

最近では2003年（同15年）2月に双方による青少年絵画交流事業を実施し、息の長い姉妹都市交流を目指している。

肝心の経済交流の面では、根室市は市内12民間団体とともに経済振興協会を設立し、水産を軸にした関係の拡大を模索している。

04年7月、札幌市で開かれたサハリン州姉妹友好都市代表者会議でセ市代表者とベニザケ、マダラの直接輸入について協議したものの、不漁が災いして実現に至らなかった。

根室市としては今後も粘り強く協議を続けていく方針だが、実現すれば、姉妹都市提携の実のある柱ができ、地域の活性化にもつながるものとして、注目される。

根室市

人口：約3万2千人 面積：512.6km²

http://www.marimo.or.jp/~n_city1/nemuro/jp/

1880年（明治13年）に郡役所、戸長役場が置かれ、82年には北海道内3県の1つとして根室県庁が設置され、開拓が進んだ。特に北方領土近海の豊かな水産資源によって1900年（同33年）には早くも人口は1万4千人を突破した。45年（昭和20年）の戦災でマチの大半を焼失したが、日本有数の水産都市とし

て復興。67年（同42年）の人口は4万9千人をオーバーしたが、77年の200カイリ時代の幕開けによって、北洋漁業は大きな打撃を受け、市勢も停滞気味になっている。

国際交流の問い合わせ先

根室市総務部北方領土対策室 TEL(0153)23-6111

「ひと、もの、情報の 国際交流拠点都市」に

歴史と市民が支える国際都市

「日口交流はここに眠る人々の犠牲が基礎になっている」—2005年（平成17年）6月30日、函館ハリストス正教会の馬場登司祭が初代ロシア領事ゴシケビッチ夫人をはじめ50人のロシア人が眠る函館市のロシア人墓地の慰霊祭で、こう弔辞を述べた。

1855年（安政2年）の日露通好条約締結150周年を記念して日露青年交流センターが主催した「友好の船」事業のひとつだ。同事業には日口両国の約160人の青年が参加したが、函館での慰霊祭は同条約に調印したロシア使節プチャーチン提督の渡航経路にちなんで行われたもので、いかに函館が以前から「世界に繋がっていたマチ」であったかを、改めて印象付けた。

それに先立つこと約60年前の1793年（寛政5年）には、ロシア使節ラクスマンがエカテリーナ号で通商交渉のため箱館港を訪れている。高田屋嘉兵衛やゴロウニンなどの名を挙げるまでもなく箱館は、松前と並んで日本と世界、特にロシアとの北の玄関の役割を自然と担わされてきた。

明治維新10年前の1858年（安政6年）、幕府が米、英、露、仏、オランダと修好通商条約を締結したことで、横浜、長崎とともに一気に国際貿易港の地位に押し上げられた。

同年ロシア領事ゴシケビッチが箱館に着任したのをはじめ、一時は10数カ国の領事館、教会などが開設され、それに



ロシアのサンクト・ペテルブルグ市とフィンランドのハミナ市の共催で開かれた第3回世界星形城郭サミット＝2003年8月

伴って、多くの外国人が居住、函館（1869年＝明治2年＝の開拓使設置で、箱館から地名変更）は、近代国家の夜明けと共に、国際都市の“宿命”を持ち、人々は他地域とはひと味違う国際性を自ずと体現することとなった。

こういった背景が現在の国際都市の下地になっているのか、2004年（平成16年）12月の合併以前の旧函館市だけでも国際交流の市民団体は25を数え、民間レベルでの活発な活動が続けられてきた。

それが旧ソ連体制の崩壊と新生ロシアの誕生によって、歴史を規定してきた要素が再びクローズアップされ、「歴史と市民が支える国際都市」の位置付けが改めて注目される新時代を迎えた、といえる。

遺産が生んだ「星形城郭サミット」

函館市ならではの歴史的遺産を生かした象徴的な国際交流といえば、世界星形城郭サミットが挙げられる。

いうまでもなく幕末の1864年（元治元年）築城された函館の五稜郭は星形の、日本では初めての西洋式城郭。

1995年（平成7年）ハリファックス市（カナダ）で開かれた先進国首脳会議（サミット）の関連行事に参加した函館市長が、ハリファックス市長に世界に点在する星形城郭都市によるサミットを提案、その2年後に函館市で第1回世界星形城郭サミット開催が実現した。

第1回サミットには9カ国、10都市が参加、採択されたコミュニケでは「サミットを継続開催し、共通の歴史・文化遺産を通じ、今後一層の友好と親善を深めるとともに、その連携のもと、世界の平和に向けた都市ネットワークの構築と発展に努力する」とうたわれた。

3年に1度の開催で第2回目は2000年（同12年）にパルノヴァ市（イタリア）、03年の第3回目はサンクト・ペテルブルグ市（ロシア）とハミナ市（フィンランド）の両市共催で開かれ、第4回目は06年ヘレヴーツリュイス市（オランダ）での開催が予定されている。

函館市では「城郭で結ばれた、世界でもユニークな都市間交流であり、可能な限り続けたい」意向だが、問題は各都市が抱えている財政問題。財政難からサミットへの参加数にもばらつきがあり、これをどう乗り切っていくか、が課題になっている。

市民と行政が進める5つの姉妹都市提携

函館のまちづくり3カ年計画にある5つの柱のトップに「世界と結び豊かな心と文化をはぐくむまち—歴史と文化が香る国際交流拠点の形成と21世紀を担う人づくり」が、掲げられている。

誕生の経緯から「国際都市」として歩んできた函館だが、市民と行政が一体となった国際交流の努力が、これを肉付けしてきた、といえる。

国際交流全般を扱う財団法人北海道国際交流センター、函館市国際理解教育研究会の2団体のほか、早くは1953年（昭和28年）の日本中国友好協会函館支部発足から、2004年（平成16年）6月の函館・江差・オランダ交流友の会設立まで、函館日口親善協会を含む国別の民間交流団体は16カ国23団体にもものぼり、それぞれの活動が分厚い国際交流の土台を築いてきたといっている。

市もこれらの活動を支援するため、1990年（同2年）に「函館市国際交流基金」を設置した。

支援対象は大きく分けて①民間団体の会議などの事業、外国語講座などの国際交流活動への補助②外国人留学生への補助—の2分野で、官民の協調態勢が函館のひとつの特徴となり、世界星形城郭サミットだけでなく、5つの姉妹都市提携の幅広さにもつながっている。

【ハリファックス市（カナダ）】

海外との姉妹都市交流を望む市民の声もあって1982年（昭和57年）、函館市市制施行60周年を記念して、同じ星形城郭「ハリファックス砦」のある同市と姉妹都市提携を結んだ。

両市長の相互訪問、世界星形城郭サミットの共催など行政ベースの交流はもちろんだが、提携後、行政以外でも市立東山小とバートン・エッチンジャー小、市立五稜郭中とフェアビュー中、両市の図書館など9団体が次々と各種の姉妹提携を実現し、語学研修派遣、図書館交流など幅広い付き合いを繰り広げている。

中でも姉妹校となった北海道教育大函館校とセント・メリーズ大との間では毎年教員の交換交流が行われているほか、函館青年会議所の強い要請もあって、ハリファックス市が98年（平成10年）の函館クリスマスファンタジー開催時から毎年、巨大なもみの木をクリスマスツリーとしてプレゼントし、姉妹都市ならではの温もりが市民の間にも広まってきている。

【ウラジオストク市（ロシア沿海地方）】

明治の初めから、日本人が住み、1925年（大正14年）には日本領事館が設置されるなど、海を隔てた港湾都市でもある両市にはもともと歴史的な交流があった。

旧ソ連体制下での長い「閉鎖都市」が解除された89年（平成元年）、会員数150人による函館日ソ親善協会（その後、函館日口親善協会に名称変更）が設立されたこともあって、民間ベースによる経済、文化、演劇交流の絆が深まった。

市民からの要望に加え、函館市市制施行70周年を記念して92年（同4年）、姉妹都市提携が実現した。2年後に日本では初のロシア極東国立総合大学函館校が開学したことは姉妹都市提携が生み出した大きな成果といえる。

このほか、小学校2校、中学校1校がそれぞれ姉妹校、函館市にある北大水産学部とロシア科学アカデミー極東支部海



五稜郭と同じハリファックスの星形城郭都市を見学する函館の訪問団＝2004年7月



中学生海外派遣事業で18人がウラジオストク市を訪問し、親善を深めた＝2004年9月

洋生物研究所、博物館同士もそれぞれ姉妹関係を結び、医療関係者も同様に、相互訪問、研修をするなど、交流は多岐にわたっている。

また、港町らしく、青函カップヨットレースにウラジオストクのヨットマン12人が出場するなど、スポーツ面での親睦も進んでいる。

【レイク・マコーリー市（オーストラリア）】

ウラジオストク市と同様、市制施行70周年を記念して92年（同4年）に姉妹都市提携をした。9年前の83年（昭和58年）に函館オーストラリア協会が発足し、レイク・マコーリー姉妹都市協会との民間交流などが基盤となって姉妹都市提携に結び付いた。

中学校2校が姉妹校関係を樹立しているほか、南北海道外洋帆走協会とレイク・マコーリーヨットクラブが姉妹提携を結ぶなど教育、スポーツなどの交流に広がってきている。

【ユジノサハリンスク（ロシア・サハリン州）】

空路でわずか2時間弱。もともと歴史的なつながりがあったうえ、94年（平成6年）に函館—ユジノサハリンスク間に国際定期便が就航したことで、97年（同9年）の姉妹都市提携となった。

音楽、教育、スポーツ、文化など官民を問わぬ交流があることは、いうまでもない。新千歳空港と共に北海道とロシアをつなぐ空の玄関であり、サハリンでの石油・天然ガスの開発プロジェクトに関連して、ひと、ものの往来は国際交流の

言葉を遙かに超えた日常的なものとなっている。

【天津市（中国）】

1990年代に入って函館から中国経済訪問団が毎年のように天津市を訪問、また、91年（同3年）には函館五稜郭病院と天津医学院附属医院が姉妹病院提携をするなど、民間レベルでの交流が続けられていたが、これが一気に膨らんだのが95年にスタートを切った函館—天津空港間のチャーター便の開設だ。

両市が取り組んでいる国際定期航空路開設運動の一環だが、中学、高校のほか函館大学と南開大学も姉妹校提携を結び、両市も2001年（同13年）に友好交流都市の関係を築いた。単に友好だけでなく今後、空路による「ひと、もの、情報」の実質的な関係拡大への期待もかけられている。

国際観光・水産・海洋・学術 —新たな都市構想への再スタート

04年（同16年）12月、函館市は渡島管内戸井、恵山、椴法華、南茅部の4町村と合併し、新・函館市として再スタートを切った。

今後10年間の新市の総合計画では、国際観光都市に加え「国際水産・海洋都市構想」を進めることになっている。いずれにしろ、姉妹都市のあり方から見ても、函館市が海と空路という立地に根差した他都市とはひと味違う国際化の新局面を迎えていることは間違いない。

その最たるものがロシアとの関係だろう。もともと函館が横浜、長崎と共に国際貿易港になったのは、ロシアとの地政学上の位置が大きな要素だったが、ソ連邦の崩壊、それに続くユジノサハリンスクとの定期空路の開通で再び今日的な脚光を浴びてきたといえる。

ウラジオストクとの姉妹都市提携の話とほぼ同時に進められた、函館市でのロシア極東国立総合大学函館校の開校(1994年=同6年)は日本では初めてのもの。

ロシア語はもちろんロシアの歴史・文化・政治・経済・社会などを学び、ロシア関係のスペシャリストを育成するのが目的で、ある意味で国際協力・交流面での“教科書的存在”との言い方も出来るかもしれない。

また、先にも触れたようにユジノサハリンスクとの週2回の定期便で年間約5千人、さらに週3回のチャーター便で約3千人が利用、サハリンとわずか2時間弱の空路はロシアとの新たな交通路となった。

特に、サハリンでの石油、天然ガス開発プロジェクトに関連して工事関係者がチャーター便で来函、医療、ショッピングなど日帰りで用を足すケースも増え、サハリンと函館がひとつの生活圈を形成しつつある、とすらいえる。

こういったことから、函館市はサハリン・プロジェクトの後方支援基地を目指しており、2003年(同15年)9月に市、函館極東貿易協同組合、函館商工会議所、港湾空港に関係した22社・団体が出資して第三セクターの(株)函館国際貿易センターを設立した。貿易相談、ビジネス交流会開催などの産業支援事業、サハリンオイルメジャーとの取引、仲介サービスなどの貿易促進事業などで、国際交流による経済の活性化に

取り組んでいる。

また韓国、香港、シンガポールなどから直行チャーター便による観光客が年々増え、年間で10万人にも届きそうな勢い。

観光による自然な国際交流のほか1992年(同4年)、函館国際観光コンベンション協会とシンガポール政府観光局が姉妹提携し、観光や物産を中心とする交流を続け、国際観光都市同士ならではの新たな関係が生まれてきている。

函館市は合併によって漁獲高は根室、釧路市について全道で3位となった。いうまでもなく函館は対馬、リマン、千島の3つの海流が流れ込む津軽海峡に面し、北大水産学部など多くの学術・研究機関、水産・海洋関連産業が集積、水産・海洋の研究を行う上で、他地域にはない環境が整っている。

今後10年間で「海」をテーマに研究、観光施設を充実させ、漁業振興を図る「函館国際水産・海洋都市構想」は、イタリアのナポリ、米マサチューセッツ州のウッズホールのような国際的な水産・海洋都市づくりを構想している。

どこまで実現するかはこれからの課題だが、水産・海洋の学術、研究などによる新たな国際交流の道を探るものとして注目していいようだ。

全国でも注目されるボランティア組織 財団法人北海道国際交流センター(HIF)

2003年(同15年)10月、函館市にある財団法人北海道国際交流センターによる「国際交流のつどい」25周年を記念する「国際交流フェスタ2003」が、19日間にわたって同市内で開かれた。



ホームステイで日本の餅づくりを体験する外国の学生たち
=2004年8月

初日から1週間のオープニングパネル展だけでも2千215人が来場し、期間中、記念講演と討論会、留学生との交流パーティー、世界の異文化体験、南米料理にチャレンジ、25周年記念シンポジウムなど盛りだくさんのイベントが催された。

その内容の多彩さはもちろんだが、ほとんどがボランティアの人々の支援で企画、運営が行われたところに、同センターの特徴がはっきりと表れている。

同センターの発足は1979年（昭和54年）、当時渡島管内七飯町に住み、カナダでの永住権も持っていた秋尾晃正さんが、出身校の早稲田大学からの依頼で16人の外国人留学生を同町内で2週間ホームステイをさせたのが、きっかけ。

「ホームステイで地域を変える。無形の学園を創る」という秋尾さんの強い意思に七飯町役場、農協青年部、教育関係者が賛同、翌80年に任意団体として南北朝道国際交流センターを立ち上げた。

84年に道教育委員会の認可で財団法人化、86年（同61年）に財団法人北海道国際交流センターに名称を変更し、現在に至っている。

ユニークな「国際交流のつどい」と夏期セミナー

同センターの事業は2本の大きな柱から成っている。その1つが毎年8月に実施する2週間の「国際交流のつどい」で

あり、もう1つが毎年開く2カ月間の日本語・日本文化講座夏期セミナーだ。

国際交流のつどいは1度に300人以上の外国人が函館市とその周辺の町村でホームステイをし、さまざまな形で日本の文化、生活を体験してもらおうというもので、すでに、約100カ国から6千人以上の人々が、草の根の交流を図っている。

86年から始まっている2カ月間の日本語・日本文化講座夏期セミナーは、国内外の専門家が大学での1年間の学習量に相当する150時間もの日本語集中講座を行うもので、米エール大学など海外の一流大学でも、大学の単位認定プログラムにしているほどの高い評価を受けている。

いずれも同センターの呼びかけによるボランティアのホームステイが支えになっているのが大きな特色だ。

民間ボランティア団体として、この種の活動は全国でもそう例がなく、第5回北海道青少年科学文化振興賞（1982年）、国際ソロプチミスト日本財団千嘉子賞（84年）、国際交流基金国際交流奨励賞地域振興賞（85年）、外務大臣賞（91年）、第1回北海道地域文化選奨（94年）、自治大臣表彰（99年）と数多くの賞に輝いている。

鹿児島県にある「からいも交流」もボランティアによる日留学生のホームステイ・プログラムに取り組んでいることで有名だが、先輩格の同センターのホームステイによる「国際交流のつどい」を参考にしたものといわれ、同センターは全国的にも脚光を浴びる存在になっている。



財団法人北海道国際交流センターの第19回日本語・日本文化講座夏期セミナーに参加した受講者たち＝2004年7月。左側が同センターの事務所とロシア極東国立総合大学函館校が入っている建物



大沼国定公園で国際交流を楽しむ各国の学生たち＝2004年8月

財政難の克服が大きな課題

悩みがないわけではない。その最大のものが財政問題。財団法人として民間からの寄付で3千万円の基本財産はあり、事務所も市から無料貸与されているが、年間の事業費約6千万円に対して、日本語講座などの収入は5千万円、残りは補助金600万円と後援会費や寄付金など400万円。補助金、寄付金も減る傾向にあり、同センターでは事務局のスタッフを9人から5人に削減するなどして、急場をしのいでいる。

同センターの基本でもあるボランティアの確保も大変だ。2カ月間のホームステイの場合は食事代の一部として月3万5千円の補助を出しているが、2週間の場合はボランティアの善意に頼って無料。

同センターは縦割りでも、横並びでもないボランティアの自発的なエネルギーによる運営だが、ボランティアの人々の持ち出しをどうカバーするか、講座を担当する専門家への謝

礼は今のままでいいのか—など、解決を迫られる懸案も少なくない。

こういったこともあって、同センター、函館市役所、30もの団体があるNPO推進道南会議が協同で2003年（平成15年）3月、無料の情報誌「ボラット」を発刊した。季刊で創刊号の発行部数は5千部。「ぶらっとボランティアをやりませんか」という意味を込めた「ボラット」で、ボランティア活動への新たな参加を呼びかけている。

同センターの山崎文雄代表理事は「やはり、今後もボランティアの人々の自発性に期待したいし、国際交流は頭だけでなく、肌で感じていく時代に入っている。そのためにもボランティアによるホームステイの重要性はますます高まっている」と語る。

25年の経験でどう難局を乗り越えていくか、民間の国際交流のあり方を模索していく上でも全国的に注目されているといえよう。

函館市

人口：約29万8千人 面積：678km²

<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/>

1858年に横浜、長崎とともに対外貿易港として開港された。2004年12月、改正合併特例法による道内第1号として渡島管内戸井、恵山、楡法華、南茅部の4町村と合併、新・函館市として再スタートを切った。人口約29万8千人は札幌、旭川市に次いで3番

目。漁獲高も約180億円で、根室、釧路市に次いで3番目で、2005年10月に「中核市」に指定された。

国際交流の問い合わせ先

函館市企画部国際課

財団法人北海道国際交流センター

TEL(0138)21-3111

TEL(0138)22-0770

「世界を結ぶ 北緯42度の里」づくり

歴史の土壌に根ざした国際化

『七飯町は明治以来、異国文化に接する機会が多く、西洋農業、農法の北海道における発祥地として、今もその影響は随所に残されております。昭和39年（1964年）国際福音宣教師団チーフスクールが設立され、宣教師の子女と地域との交流も自然発生的に進み、昭和54年には、オレゴン州立大学の日本留学生のホームステイによる町民レベルの交流を深めて以来、(財)北海道国際交流センターの活発な活動により全道的な草の根交流事業として、定着しております。これらの国際交流の定着は、町民にとっても国際性が培われつつある状況となってきております。』

やや長い引用だが、1993年（平成5年）同町が自治省のリーディングプロジェクト「国際都市整備」の指定を受けて、作成した「世界を結ぶ北緯42度の里」推進計画書での金沢・七飯町長（当時）のまえがきの一節である。

引用したのは同町が国際化を積極的に推進している背景と基盤が分かり易く表現されているからだ。

江戸幕府は1854年（安政元年）の箱館（現在の函館）開港と同時に、七重（現在の七飯町）を外国人の限られた遊歩地に指定し、寄港する外国船、乗組員の需要を満たす目的で食糧供給地域づくりにも着手した。

「七重で欧州型の農業法を導入したい」というプロシャ（現在のドイツ）商人のR・ガルトネルが榎本武揚・蝦夷臨時政権総裁との間で七重の土地を99年間租借した“ガルトネル事件”は有名だが、明治政府は1870年（明治3年）に七重官園で気候や土地の似た米国農法の実験を開始、「西洋農業発祥の地」として、現在の北海道農業の基礎を作った。

「北海道酪農の父」といわれる米国人のエドウィン・ダンが七重官園にいたのもこの頃で、津軽出身の松田鶴と国際結婚、七重ではいち早く国際化の花が開いていた証しともいえる。

1908年（明治41年）川田龍吉男爵（函館ドック社長）が、米マサチューセッツ州原産のジャガイモ「アイリッシュ・コプレー」を買い入れ、七飯村（1902年＝明治35年＝から村制を敷き七重から七飯村に）の自家農園で栽培、普及させたのが、有名な「男爵イモ」。

また、明治初期からワイン用のぶどう栽培も試験的に行われたが、七飯町にある「株はこだてわいん」が現在生産して

いる無添加ワイン「コンコード」は、同町が姉妹都市提携している米国のコンコード町原産のぶどうがルーツという奇縁となっている。

さらに、中国山東省に端を発した外国人宣教師の師弟のための「チーフスクール」が、64年（昭和39年）に同町でも開設された。言ってみれば、インターナショナル・スクールの日本版で、他にアジアではマレーシアに1校あっただけという、それ自体が珍しい“国際的な存在”だった。

同町では英語、中国語、韓国語、日本語などで教育し、チーフスクールの子供たちは同町の峠下小、中学校の運動会に参加するなど、地域交流も盛んだった。

98年（平成10年）に閉鎖されたが、近くに住んでいたという同町の磯場嘉和・国際交流係長は「よく遊んだし、外国人という違和感は子供の頃からなかった」と話す。

同町には日常の中で異文化と接し、国際性が“自生”するという独特の歴史があったわけだ。

その土壌が、その後の「国際交流のつどい」や「世界を結ぶ北緯42度の里」づくり、米マサチューセッツ州コンコード町との姉妹都市提携——といったさまざまな国際交流の取り組みを生み出していったといえる。

生き続ける「国際交流のつどい」の精神

函館市の項で財団法人北海道国際交流センターについては詳しく触れているが、ホームステイによるボランティアの国際交流は同町で始まった。79年（昭和54年）同町に在住し、カナダの永住権も持っていた秋尾晃正さんが外国人留学生を2週間、同町でホームステイをさせたのが、そもそものきっかけ。

「ホームステイで地域を変える。無形の学園を創る」という秋尾さんの呼びかけに、同町の農協青年部、教育関係者らが立ち上がり、翌年には任意団体の南北海道国際交流センターを発足させた。

その活動は86年（同61年）に財団法人として再スタートを切った北海道国際交流センター（函館市）に引き継がれ、全道規模の広がりを持ってきている。

以来、「国際交流のつどい」発祥の地・七飯町は同センターから毎年20人前後のホームステイを受け入れ、同つどいでのホームステイ実施は2005年で27回目を数える。



コンコード町から11人の教師が七飯町の峠下小学校を訪れ、子供たちと和やかな交歓を行った＝2005年6月

活動は自然な形で引き継がれているわけで、町では「町民の国際交流の意識向上に果たした役割は大きく、心温まる数々のエピソードは、そのまま町民が豊かに生きる財産になっている」という。

「国際観光ゾーン」が持つ“財産”

前述したように、自然が作り出した造形美ともいえる活火山の駒ヶ岳、その麓の大沼、小沼、じゅんさい沼などを含む緑豊かな一帯は、明治維新前から外国人の遊歩地に指定されたほどだ。1903年(明治36年)には道立公園として自然保護、公園整備がさらに進められ、全国でも最古の自然公園の1つとなった。

58年(昭和33年)には全国で13番目の国定公園に昇格、86年に同町国道5号線沿いの「赤松街道」が「日本の道百選」に選ばれたこともあって、国際観光地としての同町の大きな財産になった。

具体的には、翌87年大沼は函館と共に、外国人観光客が1人歩き出来る「函館大沼国際観光モデル地区」の指定を受けたのを皮切りに、96年(平成8年)には運輸省の「ウェルカムプラン21(訪日観光交流増進計画)」、続く97年には自治省の「国際交流の町推進プロジェクト」にも相次いで指定された。

大沼国定公園への観光客の入り込み数は年間200万人を越え、宿泊者も約20万人、うち外国人は約3千人。外国人が安心して散策できるように英語などのパンフレット、案内標識の作成だけでなく、多様化するニーズに対応することでリピート観光につながるよう、情報提供とガイド機能、国際交流と参加体験機能の充実を図っている。

その中心になっているのが、町が2000年(同12年)、JR大沼公園駅前に開設した「七飯町大沼国際交流プラザ」。

英語の出来る職員を配置し、写真パネル、インターネットなどを活用した情報の提供、さらに、各種ボランティアと協

力して地場製品の紹介などを行っているほか、絵手紙や押し花、七宝焼きなどの体験教室も開いて、参加・体験型の観光対策にも力を入れている。

同町の国際化には歴史の流れだけでなく、大沼国定公園といった恵まれた自然が大きくプラスに作用しており、外国人観光客による国際交流、経済効果が自然に生まれる—という他地方にはうらやましいほどの土壌となっている。

道は05年(同17年)7月に体験型観光を推進するモデル団体として道内3団体を選定した。そのうちの1つが駒ヶ岳・大沼ツーリズム実行委員会。道内でも有数の国際観光ゾーンが今後さらに「国際交流の町」をどう大きく成長させていくのか—が試されているといえる。

交流の拠点 —「大沼国際セミナーハウス」

1985年(昭和60年)度に策定された七飯町総合計画は「豊かな緑につつまれた魅力あるあすのまちづくり」を目指し、その中心に「人」を据え、国際交流の拠点づくりの推進に取り組んできた。

その発想の基盤には前述した「国際交流のつどい」があったというが、その延長線上にある「世界を結ぶ北緯42度の里」の拠点構想が89年(平成元年)、自治省のリーディングプロジェクト(国際都市整備)の指定を受け、91年から5カ年計画で構想の具体化が始まった。

総事業費は約14億円。約54ヘクタールの土地に「国際交流の森」と「国際自然の森」を設け、約24ヘクタールの「国際交流の森」の中に「世界を結ぶ北緯42度の里」を実現する拠点施設を整備・建設した。

92年(同4年)にオープンした北海道大沼国際セミナーハウス(写真)は、3カ国語の同時通訳が可能な80席の国際会議場、3つの研修室、和風研究棟などを備えた堂々たる施設。

(財)数理科学振興会主催の日米JAMSセミナー、国際啄木学



「世界を結ぶ北緯42度の里」の拠点となっている北海道大沼国際セミナーハウス



姉妹都市国際交流員のバートン・ベイツさん（中央）が大沼国際セミナーハウスとその周辺で開いた「ネイチャー・スクール」＝2005年4月

会北海道大会、第13回国際地球内部電磁誘導研究集会、環境問題を考える日米高校生会議など参加者が100人を超える国際会議が、例年開かれている。

また、財団法人北海道大沼国際交流協会（職員4人）も翌93年、七飯町を中心に函館市、上磯町、大野町の1市3町の協力体制で設立され、同セミナーハウスの管理・運営に当たっている。

同交流協会主催のダニエル・カール、ケント・ギルバート氏らによる国際理解講演会も例年のように開かれ、さらに、町民から通訳・翻訳、ホームステイ、茶道、華道などの文化交流ボランティアの登録を受け、さまざまな国際交流イベントを実施している。

緑の森に囲まれた同セミナーハウスを文字通り国際交流の拠点にしようと、元山口大学学長で世界的な数学者の広中平祐氏が世界の頭脳を集めた「湧源大学」開設を提唱、その後これとは別にはこだて未来大学が実現するが、2004年（同16年）8月には同セミナーハウス内に広中氏の研究室「湧源室」の開設をみた。

米田力・同セミナーハウス事務局長心得は「まだ利用者が少ないので、さらにアイデアを凝らして、利用者増に努めたい」と語るが、年間の利用者は02年（同14年）度から連続して200件、1万人を超えてきた。

利用者増は当然国際観光地区としての同町の発展と経済効果に波及していくわけで、「世界を結ぶ北緯42度の里」は、その存在感を維持し続けているといえる。

北緯42度同士のコンコード町（米国）との姉妹都市提携

「北緯42度の里」づくりと並行して1992年（同4年）、北海道庁の紹介で米マサチューセッツ州のコンコード町との交流が始まった。

前述したように七飯町発祥の男爵イモや同町特産のリングなどは同州から取り入れたものだし、明治初期の「七重官園」はコンコード町出身のホイラー氏が設計、そこでの米国農業実験も同州と深いつながりがある。

いわば七飯町の「国際化の歴史」が呼び込んだ姉妹都市提携といっても過言ではない。

同町と同じ北緯42度、州都ボストンの北西約30キロに位置するコンコード町は、人口約1万6千人の町。独立戦争勃発の地で同町生まれの作家ルイザ・オルコットが書いた「若草物語」の舞台であり、ヘンリー・ソロの「森の生活」も大沼に似たコンコードのウォールデン湖を舞台にしている。

歴史的なつながりに加え、気候、農作物、風土などが七飯町と類似していることもあって、両町の相互訪問、小学生の作品の交換・展示など交流が一気に加速、94年には民間の「コンコードと仲良くする会」も結成された。

両町が七飯町で正式に姉妹都市提携の調印をしたのは、97年（同9年）11月のこと。道内では滝川市とスプリングフィールド市に次いでマサチューセッツ州の自治体とは2番目の姉妹都市提携となった。

交流内容は中、高校生の海外交流研修が主。毎年10月に中学生5人、高校生2人、引率教諭、町職員、町民代表がコンコード町を訪れ、5泊のホームステイで授業参観などの交流を図る。町が全額助成(2005年からは1人3万円の自己負担)してきた。

また、2004年(同16年)度から町が半額助成して、町民レベルの人的、文化的交流によって相互理解を深める姉妹都市交流町民派遣事業もスタートさせた。

コンコード町の方からは、中学生や高校生、さらには教師が来町しているが、大規模な訪問団としてはコンコード・カーライル高スクールバンドの生徒が1998年(同10年)に79人、2004年には93人が七飯町を訪れ、地元の七飯中、七飯高との合同演奏会を開いたり、近隣の高校生と日米環境問題討論会を催すなど中身の濃い交流となっている。

もう一つの特徴は1998年以降、七飯町独自でコンコード町から国際交流員を採用していること。

国際交流員は町民を対象に初級、中級、上級の10クラスの英会話講座、年4回の野外活動講座「ネイチャー・スクール」、各種国際イベントへの参加などで“親善大使”の役割を果たしている。

2代目の国際交流員のモニカ・テリーさんは日本人と国際結婚したし、4代目のバートン・ベイツさんは小樽商大に1年間留学したこともある親日家。「人々が親切で、七飯町が大好きだ。コンコードとの絆をもっと強めたい」という。

人口3万人にも満たない七飯町だが、以前から町には国際交流係があり、国際交流に力を入れてきた。「スクールバンドの100人近い高校生でも、町の人々がホームステイを引き受けてくれる。国際交流のつどいの経験からでしょうか…」と磯場・同町国際交流係長も感心する。

国際観光を標ぼうできる恵まれた自然と国際性豊かな歴史があるものの、同町の自然体ともいえる国際交流は、これらに加え、財団法人北海道国際交流センターの発祥地として培ったボランティアの高い国際意識と、国際化の土壌をさらに豊かに拡大しようという、町ぐるみの前向きな姿勢が、相乗効果になって現れていることは間違いないようだ。



姉妹都市提携5周年でいつものようにホームステイによる温かいもてなしが待っていた=2002年10月



1998年に次いでコンコード・カーライル高校スクールバンドのメンバー93人が来町し、七飯中、七飯高との合同演奏会で親交を深めた=2004年4月

七飯町

人口：約2万9千人 面積：216.6km²

<http://www.town.nanae.hokkaido.jp/>

七飯はもともと七重と書かれていたが、1902年(明治35年)の2級町村制の施行で七飯村となり、1957年(昭和32年)に現在の七飯町の名称となった。人口は59年の精進川鉱山の閉山で一時減少したが、函館市、上磯町、大野町との1市3町で形成する函館圏の一翼を担い、1975年以降函館市のベッドタウンとして人口増加が続いている。明治初期の七重官園

での西洋農業発祥の地という歴史を持つ農業、酪農に加え、「大沼国定公園」による国際観光で今後、通過型から滞在型への展開が課題になっている。

国際交流の問い合わせ先
七飯町企画財政課国際交流係 TEL(0138)65-2511
財北海道大沼国際交流協会 TEL(0138)67-3950

親子二代がはぐくむ 日米の絆

きっかけは友情とホルスタイン

日本で初めての女医、荻野吟子氏が明治時代に医院を開業し、生活したことで一躍全国にその名を知られるようになった「瀬棚」。旧瀬棚町役場（現在の瀬棚総合支所）の玄関に入ると、すぐ目に飛び込んで来るのが米ハンフォード市（カリフォルニア州）との姉妹都市コーナーだ。

訪れた人が一目で分かるように、姉妹都市提携の盟約書、交歓風景の写真などがきっちりと展示されている。

人口3千人にも満たない旧瀬棚町（以下、旧名で記載）が荻野吟子氏とは別に、もう1つ誇りとしているのが、友情とホルスタインが取り持った、この国際交流なのだ。

その生みの親ともいえるのが、ハンフォード市出身の日系アメリカ人のアーサー・神塚氏。神塚氏は江別市の酪農学園大学に勤務中、親しくなった同町の酪農家を時々訪れ、その都度酪農技術の指導も行っていた。

その縁もあって同氏の働き掛けで1960年（昭和35年）、ハンフォード市からホルスタインの優秀な未經産牝牛10頭、翌

年にも10頭、合わせて20頭が同町に寄贈され、「瀬棚における酪農振興の出発点になった」（同町）との経緯がある。

その後の交流もあって、同町は90年（平成2年）に同氏を通じて姉妹都市提携を申し入れ、91年（同3年）のハンフォード市開基100年記念式典に招待された佐々木町長（当時）らが、盟約書に正式調印した。

人口だけでも同町の20倍以上もある同市が提携に踏み切ったのは、同市にある地元紙が姉妹都市提携時に掲載した「本来、姉妹都市提携は都市同士の関係ではなく、住民の努力、人と人との関係で築かれるべきものだ」という識者の意見を実行に移した形。

その意味では道内でもそう例のない友情が築いた住民レベルの提携といえる。

米ハンフォード市との手作りの友好、親善

提携翌年の92年から瀬棚、ハンフォード双方がそれぞれ隔年毎に相互訪問を続けている。1週間程度、ホームステイを



よさこいソーラン祭りに参加するのも交流の楽しみというハンフォードの人たち
=2004年6月、札幌市で



和太鼓で日本文化体験も
=2004年6月、旧瀬棚町で

して親睦を図るが、日米間の旅費はそれぞれが持ち、その国の滞在期間中の費用は、招待者側が負担する仕組み。

瀬棚では米国への訪問団参加者の旅費の3分の2を補助していた。

小さな町だけに交流は、気持ちのこもった“手作り”の内容になっている。例えば、2004年（同16年）6月、同町を訪れたハンフォードからの訪問団18人（高校生12人、一般人6名）の8日間のスケジュールを見てみると一。

新千歳空港到着後、同夜は札幌泊。2日目は瀬棚での歓迎式を皮切りに記念撮影、ホストファミリーとの対面。3日目は、瀬棚海上保安署の巡視艇搭乗後、立象山展望台などの町内観光。さらにパークゴルフ大会参加、よさこいソーラン踊りの練習と続く。

4日目は瀬棚商業高校との交流、日本料理講習、町民との



瀬棚海上保安署巡視艇で洋上視察を楽しむハンフォードの人々
=2004年6月

交歓パーティー。5日目は姉妹都市懇談会、学校訪問、日本文化体験（ちぎり絵、茶道、書道など）、よさこいソーラン踊り練習。6日目は町内散策、近隣観光地視察。

7日目はお別れ式後、札幌のよさこいソーラン祭りに参加し、札幌泊。最後の日は同じくよさこいソーラン祭りを楽しんだ後、新千歳空港へというハードな日程。町ぐるみで歓迎する姿が目浮かぶようなスケジュールになっている。

交流内容もほぼ想像できるが、映画「ラスト・サムライ」の影響もあって、北檜山警察署での剣道体験、威勢のいいよさこいソーラン踊りなどが人気で、ハンフォードを訪れた際も、よさこいソーラン踊りを披露したり、ちぎり絵講習も実施しているようだ。



ハンフォード市を訪れた際、ちぎり絵作りを指導する瀬棚の参加者

ピアノコンサート —親子二代が引き継ぐ交流

ジョン・神塚氏は国際的にも著名なピアニストだが、名前でも分かるように、アーサー・神塚氏のご子息。

ジョンさんは幼少の頃、父親のアーサー氏に連れられて同町によく遊びに来ていたほか、アメリカンスクール時代に同町にある三愛牧場でのワークキャンプに参加、瀬棚ファンになったそう。

こういったこともあって、姉妹都市提携翌年の1992年（平成4年）から毎年、日本での公演の都度同町を訪れ、文字通り、“瀬棚のためのピアノコンサート”を開いている。

2004年（同16年）までコンサートは13回を数えるが、瀬棚では滅多にチャンスのない生のピアノ演奏を楽しめるほか、時間があればジョンさんが直接子供たちにピアノを教える、といった心のこもったサービスも一。

父親が芽吹かせた国際交流を息子がさらに温かく包み込み、親子二代で「友情の絆」を膨らませ続けているわけだ。

瀬棚の人々が誇りに思うのもうなずける、文字通りのほのぼのとした「心の懸け橋」となっている。

姉妹校提携にも発展

姉妹都市提携後から、小、中学生による絵画などの交流のほか、中、高校生の文通も続けられてきたが、瀬棚商業高校とハンフォード高校との姉妹校提携が出来たのが、1998年(同10年)のこと。

翌99年から2001年の米国での同時多発テロ事件、03年(同15年)の重症急性呼吸器症候群(SARS)流行時を省いて毎年、瀬棚商業高2年生全員が修学旅行で同市を訪問、米国からも訪問団の中に高校生が積極的に参加し、親睦を深めている。

瀬棚商業高では、ハンフォード市から取り寄せた物産を実習販売会で町民向けに販売したり、ハンフォード高では日本語クラブが設立されるなど、交流の具体的な成果が出てきている。

旧瀬棚町の国際交流担当者は「こんな地方にもかかわらず外国人への違和感は無くなってきたし、修学旅行などで知り合いも出来、ホームステイの依頼もスムーズになってきた。姉妹都市交流のいい結果」という。

2005年9月1日に旧瀬棚町は北檜山町、大成町と合併し「せたな町」となったが、神塚親子が取り結んだ“友情の絆”が、今後も生きていくことは間違いないだろう。



姉妹校提携で高校生同士の交流も深まっている
=2004年6月

せたな町瀬棚区

人口：約1万1千人 面積：638.6km²

<http://www.town.setana.lg.jp/>

日本で初めての女性医師で、婦人解放運動でも著名な萩野吟子氏が1894年(明治27年)瀬棚区(旧瀬棚町)に居を移し、医院を開業したことで有名。酪農、漁業のまちで、海岸線は変化に富み、狩場茂津多道立自然公園にも指定されている景勝地でもある。旧

瀬棚町(面積125.7km²、人口約2千700人)は2005年9月1日、北檜山町、大成町と合併し、「せたな町」となった。

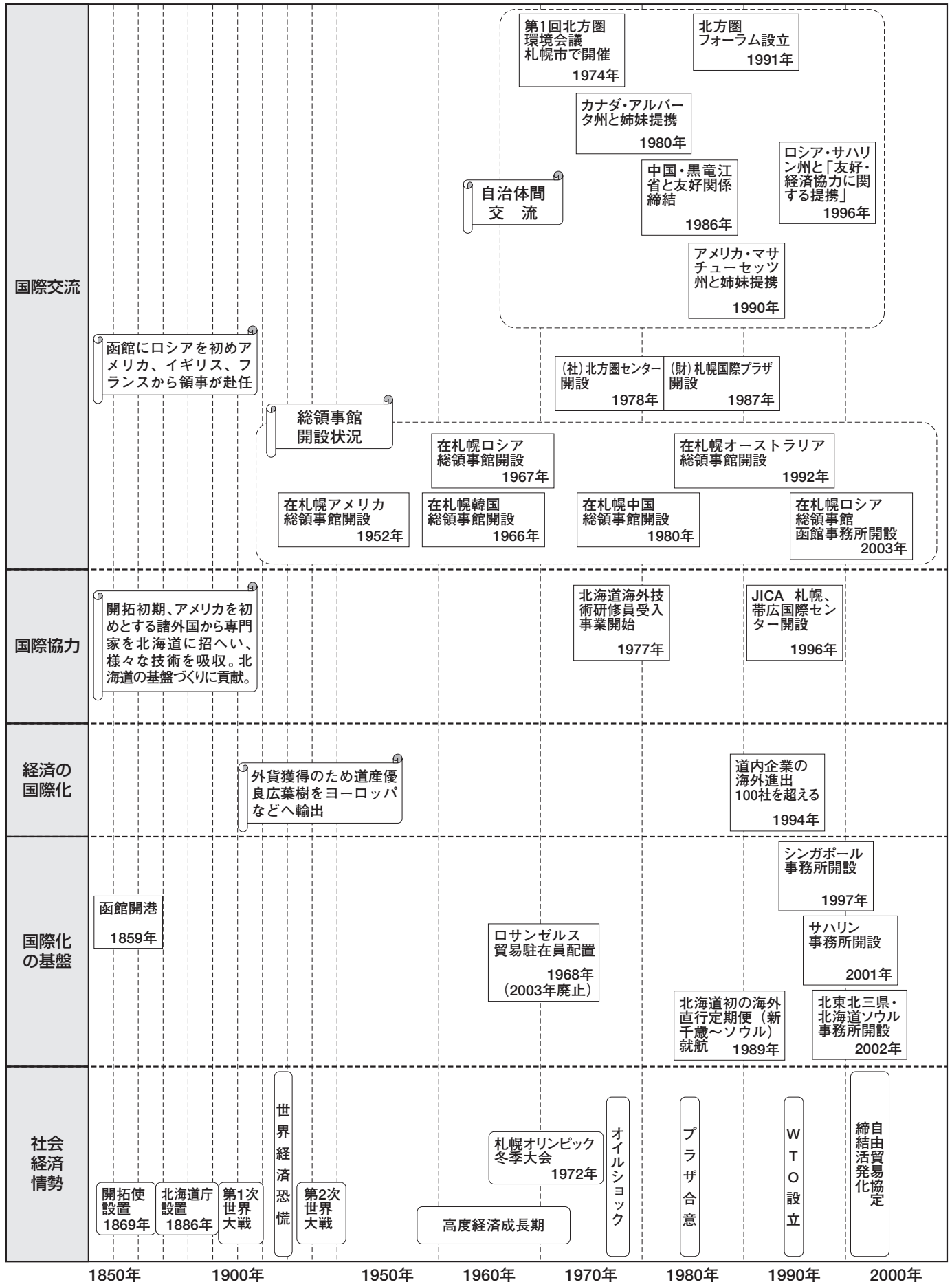
国際交流の問い合わせ先
せたな町瀬棚教育事務所

TEL(01378)7-3322

データ集

- ① 北海道の国際化の歩み156
- ② 北方圏構想推進の歩み157
- ③ 社団法人北方圏センター158
- ④ 道内姉妹友好提携都市一覧（国籍別）.....160
- ⑤ 道内市町村の海外との交流状況（平成16年度）.....162
- ⑥ 北海道における外国人登録者数の推移（地域別）...168
- ⑦ 在道外国公館169
- ⑧ 外国人留学生数の推移170
- ⑨ NPO団体の状況.....170
- ⑩ 道内国際交流団体一覧171

①北海道の国際化の歩み



②北方圏構想推進の歩み

年	月	主な交流・出来事
1971年(昭和46年)	4	北方圏調査会設立
	9	第3期北海道総合開発計画スタート(北方圏構想が盛り込まれる)
	9	シベリア・極東地方経済文化視察団派遣
1972年(昭和47年)	2	北海道・カナダ親善スポーツ交流
	5	北方圏調査室設置(北海道)
	6	北方圏交流推進協議会設置(北海道)
	8	第1回北海道・ソ連極東地区親善スポーツ夏季大会(札幌、釧路)
	9	北海道・カナダアラスカ経済文化視察団派遣
1973年(昭和48年)	11	北方圏構想推進の季刊誌「北方圏」創刊
	1	北歐文化視察団派遣
	2	第1回北海道・ソ連極東地区親善スポーツ冬季大会(札幌ほか)
1974年(昭和49年)	10	北海道・アルバータ州スポーツ指導者交流
	7	北海道・アルバータ州酪農科学技術交流開始
	8	農業技術交流団派遣
1975年(昭和50年)	9	第1回北方圏環境会議(札幌)
	11	北方圏交流推進委員会設置(知事の諮問機関)
	2	第1回北方圏文化会議(札幌)
1976年(昭和51年)	11	北方圏情報センター設立(北方圏調査会に併設)
1977年(昭和52年)	3	北歐ファッション視察団派遣
	9	北歐生活環境視察団派遣
	12	北海道のカーリング元年
1978年(昭和53年)	4	(社)北方圏センター発足
	5	(社)北方圏センター設立総会
	7	勸北方圏交流基金創設(2004年に北方圏センターと統合)
1979年(昭和54年)	1	北方圏センター新施設オープン
	2	北方圏ジャーナリスト交流会議(札幌)
	6	北方圏寒地住宅視察調査団派遣
	9	第2回北方圏環境会議(カナダ・エドモントン)
1980年(昭和55年)	2	第1回札幌国際スキーマラソン大会(札幌)
	9	北海道とカナダ・アルバータ州との姉妹提携調印
1981年(昭和56年)	11	北海道・アルバータ州経済交流会議(札幌)
1982年(昭和57年)	2	第1回北方都市会議(札幌)
	6	北方圏交流北海道国際会議(札幌)
1983年(昭和58年)	2	第1回寒地開発に関する国際シンポジウム(札幌)
	2	「冬の装い」研究協議会・国際展(札幌)
1984年(昭和59年)	4	第1回日ソ極東・北海道友好交流会議(ロシア・ハバロフスク)
	6	札幌国際見本市開催(札幌)
1985年(昭和60年)	9	第2回北方都市会議(瀋陽市)
1986年(昭和61年)	2	氷海域開発国際シンポジウム(紋別)
	6	北海道と中国・黒竜江省との友好提携調印
1987年(昭和62年)	3	北方圏スパイクタイヤセミナー(札幌)
1988年(昭和63年)	2	第3回北方都市会議(カナダ・エドモントン)
	8	第2回寒地開発に関する国際シンポジウム(中国・ハルビン)
1990年(平成2年)	2	北海道とアメリカ・マサチューセッツ州との姉妹提携調印
	3	第4回北方都市会議(ノルウェー・トロムソ)
	9	第3回北方圏会議(アメリカ・アンカレジ)
1991年(平成3年)	6	第3回寒地開発に関する国際シンポジウム(カナダ・エドモントン)
	11	北方圏フォーラム設立
1992年(平成4年)	1	第5回北方都市会議(カナダ・モントリオール)
1993年(平成5年)	9	北方圏フォーラム第1回総会(ノルウェー・トロムソ)
1994年(平成6年)	3	第6回北方都市市長会議(名称変更 アメリカ・アンカレジ)
	6	第4回寒地開発に関する国際シンポジウム(フィンランド・エスポ)
1995年(平成7年)	9	北方圏フォーラム第2回総会(札幌、赤井川)
	9	北方圏フェスティバル'95(札幌)
1996年(平成8年)	2	第7回北方都市市長会議(カナダ・ウィニペグ)
1997年(平成9年)	5	第5回寒地開発に関する国際シンポジウム(アメリカ・アンカレジ)
	8	北方圏フォーラム第3回総会(ロシア・ヤクーツク)
1998年(平成10年)	1	第8回北方都市市長会議(中国・ハルビン)
	11	北海道とロシア・サハリン州との友好・経済協力提携調印
1999年(平成11年)	5	北方圏フォーラム第4回総会(フィンランド・ロバニエミ)
	6	第1回北方圏経済人会議(フィンランド・ロバニエミ)
2000年(平成12年)	1	第6回寒地開発に関する国際シンポジウム(オーストラリア・ホバート)
	2	第9回北方都市市長会議(スウェーデン・ルレオ、キルナ)
	8	北方圏フォーラム野生動物保護管理指針遂行プロジェクト委員会(ロシア・カムチャツカ)
2001年(平成13年)	10	北方圏フォーラム第5回総会(カナダ・エドモントン)
	12	ユース・エコ・フォーラム(カナダ・エドモントン)
2002年(平成14年)	2	第10回北方都市市長会議(青森)
	6	北方圏フォーラム環境教育プロジェクト委員会(中国・ハルビン)
2003年(平成15年)	4	北方圏フォーラム第6回総会(ロシア・サンクトペテルブルグ)
2004年(平成16年)	2	第11回北方都市市長会議(アメリカ・アンカレジ)
	8	ユース・エコ・フォーラム(札幌、当別)
	9	第7回寒地開発に関する国際シンポジウム(札幌)
2005年(平成17年)	6	北方圏フォーラム第7回総会(中国・ハルビン)
	8	ユース・エコ・フォーラム(アイスランド・アクレイリ)

③ 社団法人北方圏センター

北方圏構想と北方圏センターの設立

1971年（昭和46年）4月、北海道開発の長期的な指針である「第三期北海道総合開発計画」（10カ年）がスタートし、その中に北方圏諸国との交流を目指す北方圏構想が盛り込まれました。

この北方圏構想は、北海道と同じような積雪寒冷の気候風土の中で長い歴史を持ち、高い文化を培ってきた北米、カナダ、北欧諸国などとの交流を通じて、北海道の産業経済や生活、文化の向上を図り、北国の風土に根ざした北海道らしい地域づくりを進めていこうとするもので、これは、開拓以来の中央から持ち込まれた南方志向の発想を、北海道の風土に立脚した北方志向の発想へと、道民意識のドラスティックな転換を求めるものでもありました。しかし、この構想が始動した当時は、「北方圏」の言葉自体が耳新しいものであったうえ、「北方圏」とはどこを指すのかなど馴染みがなく、構想の推進の第一歩は、まず道民に対する啓蒙活動から始められました。

この北方圏構想の推進母体となったのが、三期計画のスタートと同時に設立された「北方圏調査会」であり、翌年1月に内閣総理大臣から社団法人の認可を得、1976年（昭和51年）11月には、北方圏諸国に関する資料・文献などを収蔵する「北方圏情報センター」を併設し、さらに、1978年（昭和53年）4月には、これらを発展的に改組の上、事務所を北海道庁別館に移転して、現在の「社団法人北方圏センター」が発足しました。以来、北方圏交流を主軸としたシンクタンク機能、データバンク機能、エクスチェンジ機能を持った全国でもユニークな国際交流団体として活発な活動を展開し、冬の生活に対する道民意識の改革や特色ある地域づくりに向け、多方面に大きなインパクトを与えてきました。また、北方圏センター発足後の1978年（昭和53年）7月には、民間団体などの北方圏交流事業を資金面から支援する「財団法人北方圏交流基金」も設立されました。

総務省から地域国際化協会の認定

近年のグローバル化の進展の中で、国際社会の相互依存関係がますます強まるとともに、地域に対する国際協力への要請など、様々な変化が押し寄せてきています。

このようなことから北方圏センターでは、北海道が北米や欧州諸国に最も近く、北方圏諸国とアジア太平洋地域との結節点に位置する地域でもあることから、従来の北方圏諸国との交流のみならず、さらに広く世界との交流や協力活動にも力を入れていくこととし、1995年（平成7年）6月、定款の一部変更を行い、活動の拡大を図りました。

そして1996年（平成8年）4月からは、国際協力機構（JICA）が開発途上国の技術研修員の受け入れを進めるために設置した「札幌国際センター」、「帯広国際センター」の管理・運営を受託するとともに、道の技術研修員の受入事業なども担当。さらに、1998年（平成10年）3月には、総務省から「地域国際化協会」に認定され、また2004年（平成16年）7月には、（財）北方圏交流基金を吸収統合し、北海道の中核の国際交流団体として、北海道の国際化の推進に向け、幅広く多彩な活動を展開してきています。

北方圏センター年表（略）

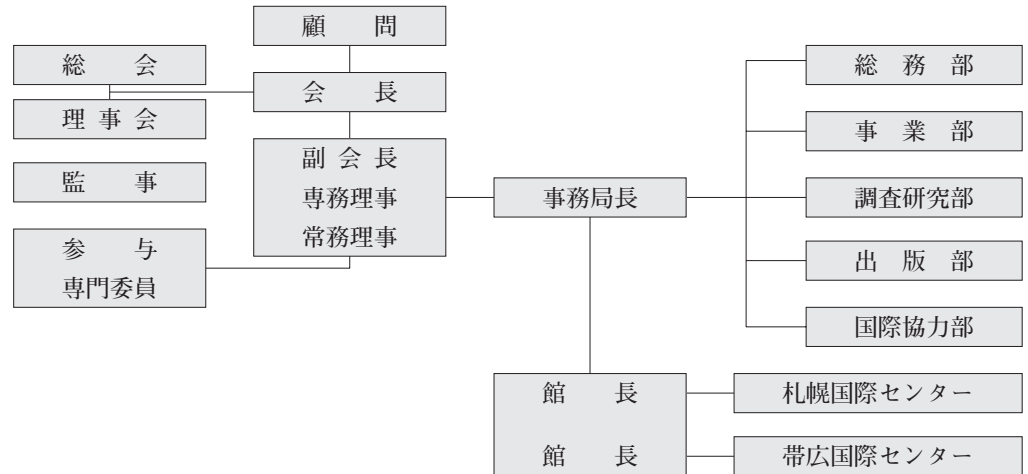
- ・1971年（昭和46年）4月 北方圏調査会の設立
- ・1972年（昭和47年）1月 内閣総理大臣から社団法人の認可
- ・1976年（昭和51年）11月 北方圏情報センターの併設
- ・1978年（昭和53年）4月 社団法人北方圏センターに改組
- ・1995年（平成7年）6月 定款一部変更（青年婦人国際交流事業の統合）
- ・1996年（平成8年）4月 国際センターの管理運営
- ・1998年（平成10年）3月 総務大臣から地域国際化協会の認定
- ・2004年（平成16年）7月 財団法人北方圏交流基金を統合

組 織

北方圏センターは、会員をもって構成される社団法人であり、会員数は平成17年4月1日現在、約1,600人です。

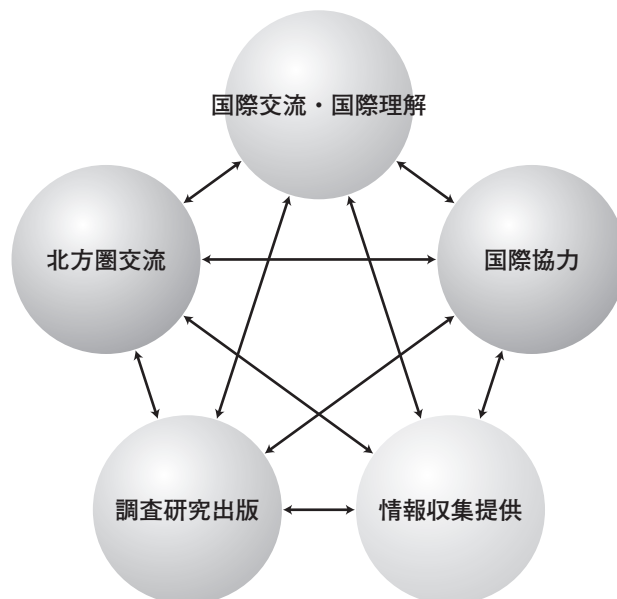
北方圏センターの運営は、会員総会で選出された理事によって構成される理事会があり、そこで会長、副会長、専務理事などが選任されて行われ、そのもとに事務局が置かれて事業の推進にあたっています。

事務局は、事務局長のもとに、本部には総務、事業、調査研究、出版、国際協力の5部が、出先には札幌、帯広の2国際センターが置かれています。



活 動

北方圏センターは、設立以来、シンクタンク機能・データベース機能・エクスチェンジ機能の3つの柱をもとに、北方圏交流をはじめ、世界との国際交流・国際理解や国際協力、さらには調査研究出版、情報収集提供などの事業を行い、本道の国際化の推進に取り組んでいます。



④道内姉妹友好提携都市一覧（国籍別）

73市町村 17カ国 103組

平成17年11月現在

国名	州・省・地域	提携先	市町村名	提携年月日	提携順	
アメリカ	アラスカ州	スワード	帯広市	1968年3月27日	9	
		アンカレジ	千歳市	1969年4月21日	10	
		シトカ	根室市	1975年12月19日	22	
		パーマ	佐呂間町	1980年10月28日	30	
		ホーマー	天塩町	1984年4月7日	37	
		ポートライオンズ	福島町	1987年6月23日	45	
		フェアバンクス	紋別市	1991年2月8日	60	
	オレゴン州	ポートランド	札幌市	1959年11月17日	1	
		ニューポート	紋別市	1966年4月8日	5	
		シーサイド	積丹町	1966年5月17日	6	
		グレシャム	江別市	1977年5月20日	25	
		キャンビー	栗沢町	1989年7月19日	50	
	カリフォルニア州	トレーシー	芽室町	1989年8月5日	51	
		ハンフォード	せたな町	1991年8月11日	64	
	マサチューセッツ州	スプリングフィールド	滝川市	1993年8月7日	73	
		コンコード	七飯町	1997年11月15日	88	
	イリノイ州	ブルームントン・ノーマル	旭川市	1962年10月11日	2	
	ニュージャージー州	エリザベス	北見市	1969年6月12日	11	
アイダホ州	ボカテロ	岩見沢市	1985年5月20日	40		
ケンタッキー州	レキシントン	静内町	1988年7月21日	47		
テネシー州	ノックスビル	室蘭市	1991年1月16日	59		
コロラド州	アスペン	占冠村	1991年8月29日	65		
カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	バーナビー	釧路市	1965年9月9日	4	
		ベンティクトン	池田町	1977年5月19日	24	
		スパークウッド	上砂川町	1980年9月23日	29	
		ケネル	白老町	1981年7月13日	32	
		キャンベルリバー	石狩市	1983年10月24日	36	
		ポートアルバーニ	網走市	1986年2月9日	43	
		キャッスルガー	遠別町	1989年6月21日	48	
		レイクカウチン	大滝村	1989年10月8日	52	
		ポートハーディ	沼田町	1994年4月3日	75	
		アシュクラフト	美深町	1994年7月23日	76	
		サマーランド	豊頃町	1996年6月11日	80	
		アボツフォード	深川市	1998年9月14日	93	
		アルバータ州	ロッキーマウンテンハウス	上川町	1984年6月21日	38
	ストーンプレイン		鹿追町	1985年8月26日	41	
	カムローズ		上富良野町	1985年9月5日	42	
	ラコム		陸別町	1986年7月5日	44	
	カンモア		東川町	1989年7月12日	49	
	ステットラー		興部町	1990年6月26日	55	
	ウェタスキウィン		足寄町	1990年9月15日	56	
	バーヘッド		常呂町	1991年7月4日	63	
	ホワイトコート		上湧別町	1998年7月17日	90	
	オンタリオ州		リンゼイ	名寄市	1969年8月1日	12
		ケノーラ	下川町	2001年2月16日	99	
	ノバスコシア州	ハリファックス	函館市	1982年11月25日	35	
	プリンス・エドワード・アイランド州	シャーロットタウン	芦別市	1993年7月1日	72	
	ブラジル	サンパウロ州	バストス	遠軽町	1972年10月18日	18
	中国	遼寧省	瀋陽	札幌市	1980年11月18日	31
			撫順	夕張市	1982年4月19日	34
			朝陽	帯広市	2000年11月17日	98

国名	州・省・地域	提携先	市町村名	提携年月日	提携順
中国	黒竜江省	哈爾濱	旭川市	1995年11月21日	79
	河北省	秦皇島	苫小牧市	1998年9月1日	92
		天津	函館市	2001年10月18日	101
	湖南省	汨羅	赤平市	1999年9月30日	95
	四川省	彭州	石狩市	2000年10月24日	97
	広東省	広州	登別市	2002年3月19日	102
山東省	日照	室蘭市	2002年7月26日	103	
韓国	慶尚南道	晋州	北見市	1985年5月16日	39
	京畿道	水原	旭川市	1989年10月17日	53
	江原道	三陟	赤平市	1997年7月18日	83
フィリピン		バギオ	稚内市	1973年3月20日	19
オーストラリア	ニューサウスウェールズ州	レイクマコーリー	函館市	1992年7月31日	69
		ゴールバーン	士別市	1999年7月3日	94
	タスマニア州	クラレンス	厚岸町	1982年2月9日	33
	ビクトリア州	ミッチェル	本別町	1991年9月15日	66
	クィーンズランド州	ゴールドコースト	鷹栖町	1995年11月18日	78
ニュージーランド	タスマン地区	モトエカ	清里町	1997年9月7日	84
	ワイパ地区	ケンブリッジ	美幌町	1997年10月12日	86
		ネーピア	苫小牧市	1980年4月22日	27
		ダニーデン	小樽市	1980年7月25日	28
	セルウィン	湧別町	2000年7月14日	96	
オーストリア	ザルツブルグ州	サールフェルデン	蘭越町	1969年10月15日	13
		ザールバツハ	美瑛町	1973年7月6日	20
	シュタイヤーマルク州	シュラートミンク	富良野市	1977年2月23日	23
ドイツ	バイエルン州	ミュンヘン	札幌市	1972年8月28日	16
		バツサーブルグ	別海町	1979年5月10日	26
フィンランド		ケミヤルビ	壮瞥町	1993年5月20日	70
		ハウスヤルビ	奈井江町	1995年4月1日	77
スウェーデン	ダーラナ県	レクサンド	当別町	1987年10月5日	46
	ベステルノルランド州	ソレフテオ	枝幸町	1996年11月4日	82
スイス	グラウビュンデン州	サンモリッツ	倶知安町	1964年6月11日	3
イギリス	スコットランド地方	イースト・ダンバートンシャイア	余市町	1997年11月11日	87
フランス	ジェラ県	モアラン・アン・モンターニュ	遠軽町	1998年5月22日	89
ノルウェー		フログン	広尾町	1996年10月22日	81
ロシア	サハリン州	ユジノサハリンスク	旭川市	1967年11月10日	8
			函館市	1997年9月27日	85
			稚内市	2001年9月9日	100
		コルサコフ	紋別市	1991年1月12日	58
			稚内市	1991年7月2日	62
		ポロナイスク	北見市	1972年8月13日	15
		ネベリスク	稚内市	1972年9月8日	17
		ホルムスク	釧路市	1975年8月27日	21
		オジョルスキー	猿払村	1990年12月25日	57
		ドリンスク	名寄市	1991年3月25日	61
	トマリ	天塩町	1992年7月28日	68	
	セベロクリリスク	根室市	1994年1月27日	74	
	沿海地方	ナホトカ	小樽市	1966年9月27日	7
		ウラジオストク	函館市	1992年7月28日	67
	ブリヤート自治共和国	ウラン・ウデ	留萌市	1972年7月5日	14
	ノボシビルスク州	ノボシビルスク	札幌市	1990年6月13日	54
	ハバロフスク地方	ワニノ	石狩市	1993年6月3日	71
	カムチャツカ州	ペトロパブロフスクカムチャツキー	釧路市	1998年8月25日	91

北海道知事政策部知事室国際課調べ（北海道の国際化の現状（平成17年）参照）

⑤道内市町村の海外との交流状況（平成16年度）

支庁	市町村名	提携・交流先			提携年月日	H16年度事業実績	担当課	
		国名	省・州名	市町村名				
石狩	札幌市	アメリカ	オレゴン州	ポートランド	1959(S34).11.17	姉妹都市提携45周年記念事業	総) 交流課	
						男女共同参画交流事業(周年事業)	市) 男女共同参画課	
						国際親善ジュニアスポーツ姉妹都市交流事業	市) 企画事業課	
						札幌マラソン姉妹都市交流事業	市) 企画事業課	
		ドイツ	バイエルン州	ミュンヘン	1972(S47).8.28	訪問団の派遣・受入(周年事業)	議) 総務課	
						ミュンヘン・クリスマス市 in Sapporo	総) 交流課	
		中国	遼寧省	瀋陽	1980(S55).11.18	市議会訪問団受入	議) 総務課	
						技術交流団受入(1990(H2).9.9協議書締結)	水) 総務課	
						医学分野における技術交流団受入	病) 管理課	
		ロシア	ノボシビルスク州	ノボシビルスク	1990(H2).6.13	技術交流団受入	消) 総務課	
						ノボシビルスク少年交流団派遣	子) 子どもの権利推進課	
		中国	浙江省	杭州		札幌カップ国際アイスホッケー大会	市) 企画事業課	
						都市セミナー(相互交流)	総) 交流課	
		中国		北京		札幌経済交流室(市内企業の中国ビジネス支援、観光客誘致)	経) 産業企画課	
						東アジア都市間文化交流事業	総) 交流課	
		韓国		ソウル		2005 ソウル・札幌の物産と観光フェア(札幌の特産品販売と観光PR)	経) 産業企画課	
						東アジア都市間文化交流事業	総) 交流課	
		韓国	忠清南道	大田	2004(H16).2.26 「経済交流に関する覚書」	H16年7月に副市長を代表とする訪問団にて大田市を訪問。大徳バレー常設テクノマート内に札幌市常設展示コーナーをオープン。10月には札幌市エレクトロニクスセンター内に札幌市IT産業国際交流スペースとして大田市の常設展示スペース等を開設。	経) 産業企画課	
						2005(H17).1.24 「同市企業の札幌進出に関する覚書」	これまでのeシルクロード事業を通じ札幌進出に意欲的な姿勢を見せている韓国企業4社が、札幌市IT産業国際交流スペースの海外企業進出サポートルームへの進出を決定。その4社及び大田広域市先端産業財団が来札し、副市長を表敬訪問。	経) 産業企画課
		モンゴル	バヤンゴル地区	ウランバートル	2004(H16).1.6 「中央区とバヤンゴル地区における子ども交流事業に関する議定書」	自治体職員協力交流事業	総) 交流課	
						バヤンゴル地区子ども交流団受入	中) 地域振興課	
		カナダ	アルバータ州	エドモントン カルガリー ブランドン		札幌カップ国際アイスホッケー大会	市) 企画事業課	
		カメルーン ザンビア バヌアツ ハイチ ガーナ				JICA集団研修 「道路技術」コース	建) 総務課	
		バングラデシュ				JICA国別研修 (道路と橋梁の継続的維持管理)	建) 総務課	
		江別市	アメリカ	オレゴン州	グresham	1977(S52).5.20	(なし)	秘書課
			コロンビア				コロンビア共和国行政職員の研修受入(JICA受託事業)	秘書課
		千歳市	アメリカ	アラスカ州	アンカレジ	1969(S44).4.21	当市イベントへのミスアンカレジ参加	国際交流課
中国	吉林省		長春		市民訪問団の長春市訪問	国際交流課		
					千歳市と長春市の友好親善都市合意書の取り交わし(2004.10.11)	国際交流課		
オランダ		アムステルフェン		経済訪問団の来訪	国際交流課			
北広島市	カナダ	サスカチュワン州	サスカトーン		高校生相互訪問(受入れ・派遣)	教育委員会		
石狩市	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	キャンベルリバー	1983(S58).10.24	高校生の交換留学	秘書課		
					少年少女親善訪問団来訪	秘書課		
	ロシア	ハバロフスク地方	ワニノ	1993(H5).6.3	代表使節訪問	秘書課		

支庁	市町村名	提携・交流先			提携年月日	H16年度事業実績	担当課
		国名	省・州名	市町村名			
石狩	石狩市	中国	四川省	彭州	2000(H12).10.24	医療関係者来訪 5周年記念訪問(石狩→彭州)	秘書課 秘書課
	当別町	スウェーデン	ダーラナ県	レクサンド	1987(S62).10.5	日本公園開園記念レクサンド訪問団派遣事業	企画課
	新篠津村	オーストラリア	クイーンズランド州	ブリスベン		国際理解教育推進事業	教育委員会
渡島	函館市	カナダ	ノバスコシア州	ハリファックス	1982(S57).11.25	訪問団派遣 クリスマスツリー受贈	国際課 観光課
		ロシア	沿海地方	ウラジオストク	1992(H4).7.28	博物館交流事業 訪問団受入	博物館 国際課
		オーストラリア	ニューサウスウェールズ州	レイク・マコーリー	1992(H4).7.31	中学生派遣事業 青少年派遣	学校教育課 学校教育課
		ロシア	サハリン州	ユジノサハリンスク	1997(H9).9.27	経済交流団派遣 訪問団受入	商業課 国際課
						青少年交流団受入 職員交流派遣	学校教育課 人事課
						中学生派遣事業	学校教育課
		中国		天津	2001(H13).10.18	訪問団派遣 訪問団受入	国際課 国際課
					中学生派遣事業	学校教育課	
	大野町	オーストラリア		マンリー		(なし)	総務課
	七飯町	アメリカ	マサチューセッツ州	コンコード	1997(H9).11.15	コンコード交流事業(受入)	企画国際課
						中高生海外派遣事業	企画国際課
						町民代表海外派遣事業	企画国際課
国際交流員受入事業						企画国際課	
檜山	江差町	オーストラリア	クイーンズランド州	ブリスベン		(なし) 教育委員会 社会教育課	
	上ノ国町	カナダ	アルバータ州	カルガリー、バンフ		少年少女親善訪問事業	教育委員会
	厚沢部町	中国	江蘇省	江都		農業県修正受入事業	農林課
	(旧)瀬棚町	アメリカ	カリフォルニア州	ハンフォード	1991(H3).8.11	ハンフォード市訪問団受入 ハンフォード市訪問団派遣	教育事務所 教育事務所
						瀬棚商業高校修学旅行 児童生徒会絵画等交流	瀬棚商業高校 教育事務所
	今金町	ニュージーランド		クライスチャーチ		バーンサイド高校生受入	教育委員会
後志	小樽市	ロシア	沿海地方	ナホトカ	1966(S41).9.12	(なし)	秘書課
		ロシア	サハリン州	ホルムスク港	1991(H3).8.20 ※姉妹港	小樽～ホルムスク旅客航路開設 日ロフェリー5周年記念事業 (セミナー・交流懇親会)	港湾振興室 〃
		ニュージーランド		ダニーデン	1980(S55).7.25	ダニーデン市親善使節団歓迎事業 少年少女使節団ダニーデン市派遣事業	秘書課 〃
		中国		廈門		中国視察(表敬訪問・市内視察)	港湾振興室
	倶知安町	スイス	グラウビュンデン州	サンモリッツ	1964(S39).3.19	通信員制度の充実 スキーインストラクター交流	企画振興 〃
		ペルー		タルマ		(なし)	
	神恵内村	中国	遼寧省	大連・回龍		(なし)	
	余市町	イギリス	スコットランド地方	イースト・ダンバトンシャイア	1997(H9).11.11	(なし)	
	赤井川村	オーストラリア	ヴィクトリア州	メルボルン		赤井川村中学生海外研修事業	教育委員会
	空知	夕張市	中国	遼寧省	撫順	1982(S57).4.19	撫順市友好経済考察団受入事業 夕張市友好交流代表団派遣事業
岩見沢市		アメリカ	アイダホ州	ポカテロ	1985(S60).5.20 ※姉妹港	中高生相互訪問事業 インターネット会議	市長室 民間
		中国		天津市津南区		市民訪問団派遣	市長室
		中国	河北省	承德		市民訪問団派遣	市長室
		中国	遼寧省	瀋陽		市民訪問団派遣	市長室
						食品加工業視察団受入	市長室
芦別市		カナダ	プリンス・エドワード・アイランド州	シャーロットタウン	1995(H7).7.1	カナダ中学生受入れ事業 カナダ中学生派遣事業	企画課 企画課
赤平市		韓国	江原道	三陟	1997(H9).7.18	(なし)	
		中国	湖南省	汨羅	1999(H11).9.30	赤平市市制施行50周年記念事業	企画財政課
滝川市		アメリカ	マサチューセッツ州	スプリングフィールド	1993(H5).8.7	ジュニア大使訪問団派遣事業	秘書課
						短期留学生相互派遣事業	教育委員会

支庁	市町村名	提携・交流先			提携年月日	H16年度事業実績	担当課	
		国名	省・州名	市町村名				
空知	滝川市	マラウイ	デザ県	ロビ		農業研修員受入	秘書課	
						農業技術専門家派遣 2000年より毎年受入(約4カ月)	秘書課	
		ブータン				農業研修員受入 2004年7月から開始(約3カ月間受入)	秘書課	
		スリランカ				(なし)		
	深川市	カナダ	ブリティッシュ・ コロンビア州	アボツフォード	1998(H10).9.14	深川市公式訪問団派遣 青少年カナダ交流訪問団派遣 高校生の交換留学制度事業	企画課 企画課 企画課	
		栗沢町	アメリカ	オレゴン州	キャンビー	1989(H元).7.19	中学生派遣事業	学務課
		奈井江町	フィンランド		ハウスヤルビ	1995(H7)4.1	ハウスヤルビ町訪問団受入	まちづくり課
	栗山町	フィンランド		スオムサルミ		介護福祉学校生交換留学	教育委員会	
	雨竜町	カナダ	オンタリオ州	トロント	1979(S54).12.1 ※雨竜小と姉妹校提携	(なし)		
	沼田町	カナダ	ブリティッシュ・ コロンビア州	ポートハーディ	1994(H6).9.3	ポートハーディ訪問団受入事業 ポートハーディ姉妹都市提携10 周年記念事業 ポートハーディ派遣事業	総務課 総務課 総務課	
		幌加内町	フィンランド		ルオヴェシ		町内そば愛好会のそば交流	総務課
			韓国		天安		幌加内高等学校修学旅行 (天安農業高校との交流)	教育委員会
	上川	旭川市	アメリカ	イリノイ州	ブルーミントン ノーマル	1962(S37).10.11	高校生の受入・派遣 中学生一行の受入・派遣	国際交流課 〃
			ロシア	サハリン州	ユジノサハリンスク	1967(S42).11.10	ユジノサハリンスク市代表団の受入 ユジノサハリンスク市医療研修 生の受入	国際交流課 〃
						姉妹友好都市代表者会議出席	〃	
韓国			京畿道	水原	1989(H元).10.17	姉妹都市提携15周年記念訪問団 の派遣 水原市技術職員研修員の受入 水原市ベンチマーキング視察団 の受入(2回)	国際交流課 〃 〃	
						旭川市経済交流団の派遣	〃	
中国			黒竜江省	哈爾濱	1995(H7).11.21	ハルビン市代表団派遣 ハルビン市代表団受入	国際交流課 〃	
名寄市		カナダ	オンタリオ州	リンゼイ (現カワーサレイク州)	1969(S44).8.1	姉妹都市提携35周年記念訪問団 の派遣 市内高校生2名の交換学生派遣	企画調整課 企画調整課	
		ロシア	サハリン州	ドーリンスク	1991(H3).3.25	ドーリンスク市開拓120周年記 念訪問団の派遣	企画調整課	
		中国				(なし)		
		韓国				(なし)		
士別市		オーストラリア	ニューサウスウェールズ州	ゴールバーン	1999(H11).7.3	ゴールバーン市短期留学研修事業(訪問)	企画課	
鷹栖町		オーストラリア	クイーンズランド州	ゴールドコースト	1995(H7).11.18	鷹栖町学生訪問団派遣 国際交流アシスタント招致	企画課 企画課	
		東神楽町	カナダ		バンクーバー島ビクトリア		青少年海外派遣事業	社会教育課
上川町		カナダ	アルバータ州	ロッキーマウンテン ハウス	1984(S59).6.21	カナダ中学生受け入れ事業 上川高校生海外派遣事業 姉妹提携20周年記念事業	教育委員会 企画商工観光課 企画商工観光課	
		東川町	カナダ	アルバータ州	カンモア	1989(H元).7.12	カンモア高校生受入れ クリスマスカード交換	企画総務課 企画総務課
上富良野町		カナダ	アルバータ州	カムローズ	1985(S60).9.5	(なし)	総務課	
占冠村		アメリカ	コロラド州	アスペン	1991(H3).8.29	中学生短期交換留学事業	教育委員会	
下川町		カナダ	オンタリオ州	ケノーラ	2001(H13).2.16	交換留学生受け入れ	税務住民課	
美深町		カナダ	ブリティッシュ・ コロンビア州	アシュクラフト	1994(H6).7.23	札幌在住留学生美深町体験プロ グラム(ホームステイ) 近隣市町村ALT交流事業「英語 であそぼ!」	総務課町政推進室 〃	
		留萌市	ロシア	サハリン州	コルサコフ		児童民謡舞踊団受入交流事業	区画調整
ロシア	ブリヤート共和国		ウラン・ラデ	1972(S47.7.5)	(なし)			
中国	遼寧省		営口	1990(H2).4.17	(なし)			
苫前町	ロシア	サハリン州			(なし)			
羽幌町	韓国				韓国素明(ソンミョン)女子高 等学校国際交流事業 羽幌高校生及び協会会員による 韓国訪問 事業主体:羽幌国際交流協会	企画課 〃 〃		

支庁	市町村名	提携・交流先			提携年月日	H16年度事業実績	担当課
		国名	省・州名	市町村名			
留萌	遠別町	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	キャッスルガー	1989(H元).6.21	キャッスルガー市青少年訪問団受入事業	総務課
	天塩町	アメリカ	アラスカ州	ホーマー	1984(S59).4.7	交換留学生受入	振興課
	幌延町	ロシア	サハリン州	トロイツコエ	1990(H2).12.25	(なし)	総務課
宗谷	稚内市	ロシア	サハリン州	ネベリスク	1972(S47).9.8	友好都市水産問題会議	水産問題連絡協議会
						ネベリスク市誕生150周年記念式典出席	サハリン課
						少年少女サミット訪問	稚内国際文化交流協議会
						友好都市研修生受入れ事業	サハリン課
		ロシア人研修生受入れ事業	商工会議所				
		ロシア	サハリン州	コルサコフ	1991(H3).7.2	友好都市水産問題会議	水産問題連絡協議会
						稚内コルサコフ定期航路合同会議	稚内コルサコフ定期航路利用促進協議会
						稚内コルサコフ少年サッカー交流	稚内国際文化交流協議会
	友好都市研修生受入れ事業					サハリン課	
	ロシア人研修生受入れ事業	稚内商工会議所					
	稚内商工高校・コルサコフ6番学校交流事業	稚内商工高校					
	ロシア	サハリン州	ユジノサハリンスク	2001(H13).9.9	トレードフェア IN サハリン	トレードフェア IN サハリン実行委員会	
					友好都市研修生受入れ事業	サハリン課	
					民族アンサンブル「エトナス」受入 文化交流事業	稚内国際文化交流協議会	
ロシア人研修生受入れ事業					稚内商工会議所		
稚内北星学園大学・サハリン国立総合大学交換留学生事業	稚内北星学園大学						
猿払村	ロシア	サハリン州	オジョールスキ	1990(H2).12.25	学童相互交流事業(訪問・受入)	総務課	
浜頓別町	ロシア	サハリン州			(なし)		
中頓別町	ロシア	サハリン州	ノビコボ		サハリン州ノビコボ村青少年交流事業(受入)	総務課	
枝幸町	スウェーデン		ソレフテオ	1996(H8).11.4	ソレフテオ市公式訪問団派遣事業	企画係	
					ソレフテオ市中学校交流事業	教育委員会	
礼文町	ロシア	サハリン州	ユジノサハリンスク		(なし)		
利尻富士町	ロシア	サハリン州	ユジノサハリンスク		(なし)		
網走	北見市	カナダ	アルバータ州	エドモンド		青年海外派遣研修事業	青少年課
		韓国	慶尚南道	晋州	1985(S60).5.16	韓日親善協会会長来北	国際交流主幹
		ロシア	サハリン州	ポロナイスク	1972(S47).8.13	職員交流事業(受け入れ)	国際交流主幹
	網走市	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	ポートアルバーニ	1986(S61).2.9	高校留学生受入事業	企画調整課
						派遣事業	
						少年少女訪問団派遣事業	
	紋別市	アメリカ	オレゴン州	ニューポート	1966(S41).4.8	中学生親善訪問団派遣	企画調整課
		アメリカ	アラスカ州	フェアバンクス	1991(H3).2.8	紋別市市制50周年記念式典招待	企画調整課
		ロシア	サハリン州	コルサコフ	1991(H3).1.12	北方圏国際シンポジウム参加	企画調整課
	美幌町	ニュージーランド	ワイパ地区	ケンブリッジ	1997(H9).10.12	紋別市市制50周年記念式典招待	企画調整課
						ヨット親善訪問団招待	企画調整課
						高校生短期交換留学制度	住民活動課
						高校生親善大使海外派遣事業	住民活動課
						JETプログラムALT受入	教育委員会
美幌ケンブリッジ交流事業	住民活動課						
ケンブリッジ訪問団受入	住民活動課						
斜里町	ロシア	カムチャツカ州	エリゾボ		(なし)		
清里町	ニュージーランド		モトエカ	1997(H9).9.7	高校生交換留学事業	社会教育課	
					中・高校生海外研修事業	社会教育課	
置戸町	アメリカ	ケンタッキー州	ベリア		置戸町高校生海外ホームステイ事業	教育委員会	
佐呂間町	アメリカ	アラスカ州	パーマ	1980(S55).10.28	高校生短期派遣・受入事業	企画財政課	
					中学生短期派遣・受入事業	教育委員会	
					姉妹都市提携25周年記念訪問団派遣事業	企画財政課	
常呂町	カナダ	アルバータ州	バーヘッド	1991(H3).7.4	常呂町児童生徒国際交流派遣事業	管理課(教育委員会)	
(旧)生田原町	フランス	フランシュ・コンテ州ジュラ県	モアラン・アン・モンターニュ	1998(H10).5.22	(なし)		
遠軽町	ブラジル	サンパウロ州	バストス	1972(S47).10.18	バストス市訪問団の来町(副市長、日系文化体育協会会長)	企画財政室	
(旧)白滝村	カナダ	アルバータ州	バンフ		第15回カナダアルバータ州バンフ親善交流訪問	教育委員会	
上湧別町	カナダ	アルバータ州	ホワイトコート	1998(H10).7.17	中高生派遣事業	教育委員会	
					一般町民派遣事業	総務課	

支庁	市町村名	提携・交流先			提携年月日	H16年度事業実績	担当課
		国名	省・州名	市町村名			
網走	湧別町	ニュージーランド	カンタベリー地方	セルウィン	2000(H12).7.14	訪問団受入	企画課
						中高生海外派遣研修事業	企画課
						一般海外派遣研修事業	企画課
網走	興部町	カナダ	アルバータ州	ステットラー	1990(H2).6.26	交換留学生事業	企画課
	西興部村	アメリカ	アラスカ州	ジュノー		姉妹都市訪問団受入事業	企画財政課
胆振	室蘭市	アメリカ	テネシー州	ノックスビル	1991(H3).1.16	中学生派遣事業	総務課
		中国	山東省	日照	2002(H14).7.26	市長一行親善訪問	総務課
	苫小牧市	ニュージーランド		ネーピア	1980(S55).4.22	ネーピア市市民親善訪問団受入	国際交流
		中国	河北省	秦皇島	1998(H10).9.1	中学生秦皇島市派遣事業	国際交流
	登別市	韓国		ソウル		(なし)	
		デンマーク		リンゲ ウィスリンゲ		中学生海外派遣事業	総務課
		中国		広州	2002(H14).5.19	自治体職員協力交流事業 友好交流促進都市盟約 3周年記念訪問団の派遣	総務課 観光課
	豊浦町	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	クオリカムビーチ	1997(H9).10.21	(なし)	
	洞爺村	イギリス				プロジェクトラスト派遣の英国青年(2名)受入れ	教育委員会 生涯学習課 社会教育係
	大滝村	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	レイクカウチン	1989(H元).10.8	第16次レイクカウチン町・大滝村親善訪問団	教育委員会
						第17次大滝村・レイクカウチン町親善派遣団	教育委員会
	壮瞥町	フィンランド		ケミヤルヴィ	1993(H5).5.22	第16代英語指導助手招聘	教育委員会
						中学生フィンランド国派遣(海外研修)事業(ホームステイ) 国際雪合戦交流事業 相互派遣(副市長、日系文化体育協会長)	社会教育課 経済課
	白老町	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	ケネル	1981(S56).7.13	日本文化支援事業(シラオイハウスオープンセレモニー参加、日本文化披露・交流)	企画課
	日高	新冠町	モンゴル		ナライハ		モンゴル少年国際交流事業(青少年の派遣)
静内町		アメリカ	ケンタッキー州	レキシントン	1988(S63).7.21	レキシントン市友好親善訪問団受入	企画課
		レキシントン市長ほか訪問団受入	企画課				
		レキシントン市友好親善訪問団派遣	企画課				
浦河町	イギリス	サフォーク州	フォーレストヒース		(なし)		
十勝	帯広市	アメリカ	アラスカ州	スワード	1968(S43).3.27	高校生相互派遣事業 成人相互派遣事業 市長賞等相互交換事業	国際交流課 国際親善市民の会 国際交流課
		中国	遼寧省	朝陽	2000(H12).11.17	高校生相互派遣事業	国際交流課
						JICA支援による交流	帯広市中国朝陽市農業交流協議会
						「朝陽市建平県畑作振興」コース受け入れ JICA草の根技術協力事業短期専門家派遣	
		上士幌町	カナダ	アルバータ州	スレイブレイク		AET招聘
	スペイン			ソルゾーナ		(なし)	学校教育担当
	鹿追町	カナダ	アルバータ州	ストニイブレイン	1985(S60).8.26	ストニイブレイン町交換留学生受入	町民政策課
						AET歓送迎会	学校教育課
						鹿追高校カナダ短期留学	学校教育課
						北海道・アルバータ州姉妹都市連絡会議	町民政策課
清水町	アメリカ	ミシガン州	チェルシー		関係機関への情報提供、原稿協力	町民政策課	
芽室町	アメリカ	カリフォルニア州	トレーシー	1989(H元).8.5	清水町国際交流協会補助金	学校教育課	
					中学生訪問団相互交流事業	企画財政課	
					物産交流事業	企画財政課	
中札内村	アメリカ	ワシントン州	エルマ	1985(S60).9.5	中学生芸術交流事業	社会教育課	
					英語指導助手招致事業	学校教育課	
幕別町	オーストラリア		キャンベラ		中学生同士の相互訪問	教育委員会	
池田町	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	ペンティクトン	1977(S52).5.19	(なし)	親善訪問団受入事業	地域振興課

支庁	市町村名	提携・交流先			提携年月日	H16年度事業実績	担当課	
		国名	省・州名	市町村名				
十勝	豊頃町	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	サマーランド	1996(H8).6.11	中学生によるサマーランドへの派遣交流事業 サマーランドからの訪問団の受入交流事業	企画財政課	
	本別町	オーストラリア		ミッチェル	1997(H9).11.20	ミッチェル訪問団受入	総務課 教育委員会	
	足寄町	カナダ	アルバータ州	ウェタスキウィン	1990(H2).9.15	国際交流員の委嘱(継続) 国際協力員の委嘱(継続)	教育委員会 総務課	
	陸別町	カナダ	アルバータ州	ラコーム	1986(S61).7.5	中学生等海外派遣事業	総務課	
						ラコーム町訪問団受入事業	総務課	
釧路	釧路市	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	バーナビー	1965(S40).9.9	「世界子どもサミット釧路大会」参加の訪問団受入	企画財政部 企画課	
		ロシア	サハリン州	ホルムスク	1975(S50).8.27	「世界子どもサミット釧路大会」参加の訪問団受入	企画財政部 企画課	
		アメリカ	アラスカ州	スワード	1982(S57).7.21 (姉妹港)	「世界子どもサミット釧路大会」参加の訪問団受入	企画財政部 企画課	
		アメリカ	ルイジアナ州	ニューオリンズ	1984(S59).10.31 (姉妹港)	「世界子どもサミット釧路大会」参加の訪問団受入 ニューオリンズ市訪問	企画財政部 企画課 港湾空港課	
		ロシア	カムチャツカ州	ペトロパブロフスク・カムチャツキー	1998(H10).8.25 (港街友好都市)	「世界子どもサミット釧路大会」参加の訪問団受入	企画財政部 企画課	
		オーストラリア	ニューサウスウェールズ州	クーラガング湿地	1994(H6).11.7 (姉妹湿地)	「世界子どもサミット釧路大会」参加の訪問団受入 ニューカッスル市200周年記念式典に出席及び、姉妹湿地提携更新。	企画財政部 環境政策課	
	厚岸町	オーストラリア	タスマニア州	クラレンス	1982(S57).2.9	世界子どもサミット釧路大会におけるクラレンス市参加者との交流 中高生ホームステイ訪問(民間団体)	まちづくり推進課 教育委員会生涯学習課	
	白糠町	中国	福建省	福州		(なし)		
		中国	福建省	廈門		(なし)		
	根室	根室市	アメリカ	アラスカ州	シトカ	1975(S50).12.19	(なし)	
			ロシア	サハリン州	セベロクリリスク	1994(H6).1.27	(なし)	
ロシア			サハリン州	ユジフサハリンスク		第3回ハナサキプログラムワークショップ	水産課	
標津町		カナダ	ブリティッシュ・コロンビア州	ノースバンクーバー	1992(H4).9.15	中学生海外研修派遣事業	あすばる	

北海道知事政策部知事室国際課調べ(北海道の国際化の現状(平成17年)参照)

⑥北海道における外国人登録者数の推移(地域別)

(各年12月末日現在)

圏 域 名		支 庁 名		市 町 村 名	外国人登録者数	
					H16	H15
道 央 圏	12,256	石 狩 支 庁	9,474	札 幌 市	8,418	8,619
				江 別 市	317	295
				千 歳 市	307	320
				恵 庭 市	205	204
				石 狩 市	70	64
				北 広 島 市	110	106
				町 村 計	47	46
		後 志 支 庁	666	小 樽 市	357	378
				町 村 計	309	225
		空 知 支 庁	611	夕 張 市	10	7
				岩 見 沢 市	128	118
				美 唄 市	70	58
				芦 別 市	65	77
				赤 平 市	18	19
				三 笠 市	15	13
				滝 川 市	65	81
				砂 川 市	27	28
				歌 志 内 市	15	19
				深 川 市	40	36
		町 村 計	158	158		
胆 振 支 庁	1,138	室 蘭 市	274	304		
		苫 小 牧 市	484	495		
		登 別 市	95	84		
		伊 達 市	52	56		
		町 村 計	233	208		
日 高 支 庁	367	町 村 計	367	394		
道 南 圏	1,120	渡 島 支 庁	1,035	函 館 市	618	583
				町 村 計	417	333
		檜 山 支 庁	85	町 村 計	85	79
道 北 圏	1,649	上 川 支 庁	930	旭 川 市	624	587
				士 別 市	24	28
				名 寄 市	51	42
				富 良 野 市	51	50
		町 村 計	180	173		
		留 萌 支 庁	237	留 萌 市	54	39
				町 村 計	183	179
		宗 谷 支 庁	482	稚 内 市	261	274
町 村 計	221			177		
オホーツク圏	1,637	網 走 支 庁	1,637	北 見 市	378	380
				網 走 市	218	200
				紋 別 市	252	174
				町 村 計	789	640
十 勝 圏	831	十 勝 支 庁	831	帯 広 市	493	477
				町 村 計	338	353
釧路・根室圏	1,076	釧 路 支 庁	692	釧 路 市	464	437
				町 村 計	228	228
		根 室 支 庁	384	根 室 市	207	185
町 村 計	177			135		
合 計					18,569	18,165

注：各市町村では、法務省入国管理局からの通知後処理を行うため、出入国管理統計年報掲載の数値と差異が生じています。
北海道知事政策部知事室国際課調べ

⑦在道外国公館

(総領事館)

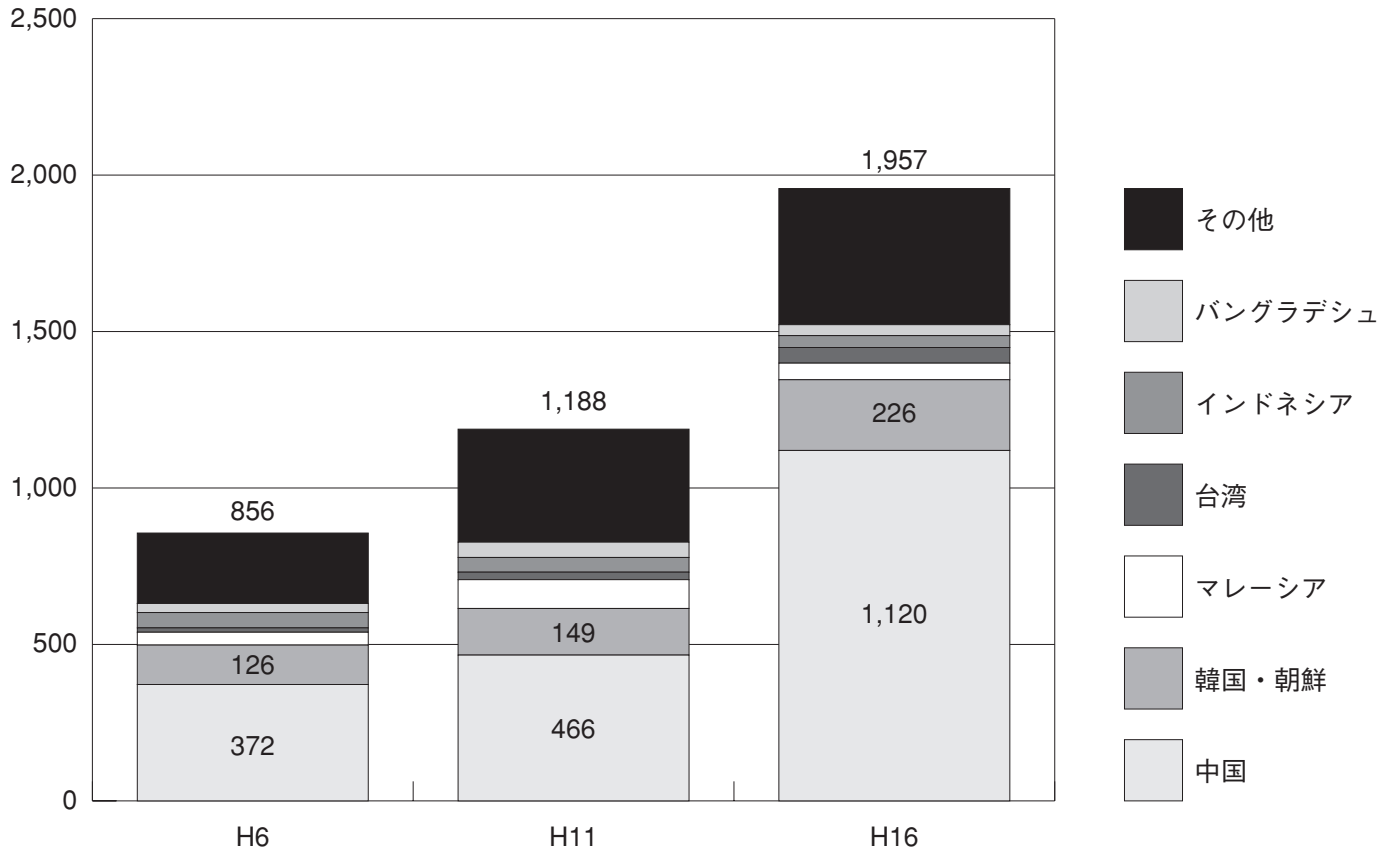
(2005年11月1日現在)

館名	所在地	開設年月日	代表者	備考
在札幌アメリカ合衆国総領事館	〒064-0821 札幌市中央区北1条西28丁目 (TEL 011-641-1115~7)	昭和 27.4.28	総領事(8代目) マリー・シェーファー (平成16.8.26認証)	昭和61.11.21 領事館から総 領事館に昇格
在札幌大韓民国総領事館	〒064-0823 札幌市中央区北3条西21丁目9-1 (TEL 011-621-0288~9)	昭和 41.6.9	総領事(14代目) 呉 榮煥 (平成15.7.7認証)	
在札幌ロシア連邦総領事館	〒064-0914 札幌市中央区南14条西12丁目826 (TEL 011-561-3171~2)	昭和 42.10.9	総領事(10代目) レオニード・レオニードヴィッチ・シェフチューク (平成16.9.8認証)	
函館事務所	〒040-0054 函館市元町14-1 (TEL 0138-24-8201)	平成 15.9.19	所長(副領事) アレクセイ・ウソフ	
在札幌中華人民共和国総領事館	〒064-0913 札幌市中央区南13条西23丁目15 (TEL 011-563-5563)	昭和 55.9.10	総領事(10代目) 齊 江 (平成17.6.21認証)	
在札幌オーストラリア領事館	〒060-0005 札幌市中央区北5条西6丁目2番地 札幌センタービル17階 (TEL 011-242-4381)	平成 4.12.2	領事(3代目) ジョアンナ・ルース・ ナーシー・プレイ (平成14.1.21認証)	

(名誉領事館)

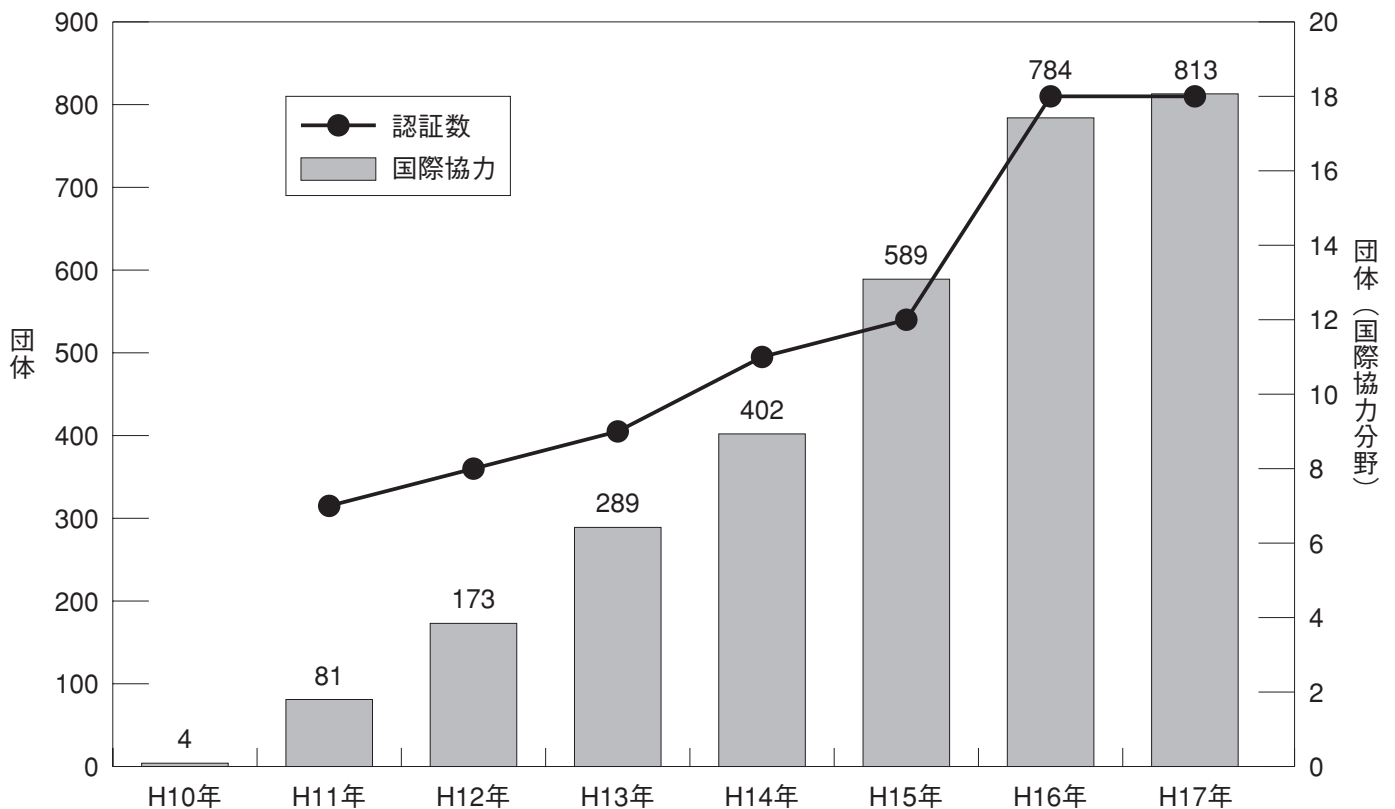
館名	所在地	代表者	備考
在札幌インドネシア共和国 名誉領事館	〒060-0042 札幌市中央区大通西7丁目3番地 (TEL 011-207-2100)	名誉領事(4代目) 佐々木 正丞 (平5.4.19認証)	開設 連絡先 昭和44.12 北海道ガス(株)
在札幌オーストリア共和国 名誉領事館	〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目富士メガネビル6F (TEL 011-261-3233)	名誉領事(2代) 金井 重博 (平15.7.15認証)	開設 連絡先 昭和47.2 (株)富士メガネ
在札幌フィンランド共和国 名誉領事館	〒062-0931 札幌市豊平区岸平1条1丁目9-6 (TEL 011-813-2525)	名誉領事(3代目) 横山 清 (平7.9.5認証)	開設 連絡先 昭和48.8 (株)ラルズ
在札幌ベルギー王国 名誉領事館	〒060-8646 札幌市中央区大通西5丁目11-1 (TEL 011-218-1000)	名誉領事(3代目) 山崎 泰博 (平14.2.15認証)	開設 連絡先 昭和55.3 (株)ロイズコンフェクト
在札幌ドイツ連邦共和国 名誉領事館	〒060-0041 札幌市中央区大通東1丁目2 (TEL 011-251-1111)	名誉領事(2代目) 中野 友雄 (平2.1.23認証)	開設 連絡先 昭和55.5 北海道電力(株)
在札幌フィリピン共和国 名誉領事館	〒063-0841 札幌市西区八軒1条西1丁目1-26健由ビル4階 (TEL 011-614-8090)	名誉領事(2代目) 戸部 謙一 (平5.2.22認証)	開設 連絡先 昭和58.6 日本食品製造(合)
在札幌デンマーク王国 名誉領事館	〒060-8644 札幌市中央区北11条西15丁目JR北海道(株)内 (TEL 011-700-5700)	名誉領事(3代目) 大森 義弘 (平12.6.5認証)	開設 連絡先 昭和61.3 (閉鎖 平成11.8、再開 平成12.6) JR北海道(株)
在札幌チリ共和国 名誉領事館	〒060-0004 札幌市中央区北4条西4丁目1加森ビル3 (TEL 011-232-0639)	名誉領事(初代) 加森 公人 (平6.6.24認証)	開設 連絡先 平成6.6.24 (株)加森観光
在札幌コロンビア共和国 名誉領事館	〒063-0052 札幌市西区宮の沢2条2丁目11-36 (TEL 011-666-1483)	名誉領事(初代) 石水 勲 (平7.5.26認証)	開設 連絡先 平成7.5.26 (株)石屋製菓
在札幌ノルウェー王国 名誉領事館	〒060-0004 札幌市中央区北4条西11丁目 (TEL 011-231-6547)	名誉領事(初代) 滝沢 靖六 (平8.1.30認証)	開設 連絡先 平成8.1.30 (株)札幌オーバーシーズ・ コンサルタント
在札幌カナダ 名誉領事館	〒060-0807 札幌市北区北7条西2丁目20東京建物札幌ビル2階 (TEL 011-726-2861)	名誉領事(2代目) 藤田 恒郎 (平11.9.2認証)	開設 連絡先 平成8.11.25 北海道カナダ協会
在札幌スペイン国 名誉領事館	〒064-0912 札幌市中央区南12条西18丁目2の1 (TEL 011-563-8990)	名誉領事(初代) 名塩 良一郎 (平11.1.1認証)	開設 連絡先 平成11.1.13 (株)ナシオ
在札幌モンゴル国 名誉領事館	〒062-8605 札幌市豊平区旭町4-1-40 (TEL 011-841-1161)	名誉領事(初代) 森本 正夫 (平11.5.3認証)	開設 連絡先 平成11.6.1 北海学園大学
在札幌スリランカ民主 社会主義共和国 名誉領事館	〒060-0005 札幌市中央区北5条西6丁目1-23 第2北海道通信ビル (TEL 011-222-3681)	名誉領事(2代) 中村 光雄 (平14.5.14認証)	開設 連絡先 平成14.5.14 菱中建設(株) (再開)
在札幌リトアニア共和国 名誉領事館	〒060-0042 札幌市中央区大通り西11丁目4 大通藤井ビル2F (TEL 011-221-3939)	名誉領事(初代) 藤井 英勝 (平16.7.23認証)	開設 連絡先 平成16.7.23 (株)藤井ビル

⑧外国人留学生数の推移



北海道知事政策部知事室国際課調べ
資料：北海道の国際化の現状

⑨NPO団体の状況



資料：北海道環境生活部

⑩道内国際交流団体一覧

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号	
1	石狩	札幌市	アジアのこどもの会	タイ	062-0921	札幌市豊平区中の島1条7丁目6-10	アジア・スパイス内	011-820-5227
2	石狩	札幌市	アジア友好協会	アジア	064-0807	札幌市中央区南7条西15丁目1-1	ミナト光産(株)内	011-512-0075
3	石狩	札幌市	アムネスティ・インターナショナル札幌28G	全般	063-0001	札幌市西区山の手1条13丁目3-3		011-622-5453
4	石狩	札幌市	イーマンズ国際平和教育財団設立準備委員会	全般	003-0024	札幌市白石区本郷通13丁目5-19		011-861-0660
5	石狩	札幌市	犬養基金を支える市民の会(通称：ライラックの会)	全般	064-0804	札幌市中央区南4条西17丁目	北星学園中・高校気付	011-373-4948
6	石狩	札幌市	NPO法人 エスニコ	全般	060-0042	札幌市中央区大通西16丁目1-13	けいぼくビル2階	011-640-2825
7	石狩	札幌市	(財)オイスカ北海道支部	東アジア	060-0001	札幌市中央区北1条西2丁目	経済センタービル 6階	011-222-4248
8	石狩	札幌市	オーストラリア交流センター	オーストラリア	060-0004	札幌市中央区北4条西5丁目	アスティ45 7階	011-205-6752
9	石狩	札幌市	(社)ガールスカウト日本連盟北海道支部	全般	060-0002	札幌市中央区北2条西7丁目1	かでの2・7 9階	011-221-4811
10	石狩	札幌市	(社)ガールスカウト日本連盟北海道支部札幌地区協議会	全般	060-0002	札幌市中央区北2条西7丁目1	かでの2・7 9階	011-221-4811
11	石狩	札幌市	(社)北太平洋地域研究センター	アメリカ・中国 韓国	062-0911	札幌市豊平区旭町4-1-40	北海学園内	011-832-9070
12	石狩	札幌市	「999人の第九」の会	全般	062-0034	札幌市豊平区西岡4条4丁目4-13	黒田様方	011-850-0890
13	石狩	札幌市	草の根会	ロシア モンゴル	064-0808	札幌市中央区南8条西12丁目		011-561-2998
14	石狩	札幌市	言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ札幌	全般	062-0906	札幌市豊平区豊平6条6丁目5-40-301	奥山真由美様方	011-824-1130
15	石狩	札幌市	国際オアシスクラブ	全般	060-0041	札幌市中央区大通東2丁目	プレジデント札幌802	011-232-0209
16	石狩	札幌市	(独)国際協力機構 札幌国際センター	開発途上国 全般	003-0026	札幌市白石区本通16丁目南4-25		011-866-8333
17	石狩	札幌市	国際ソブチミスト札幌	全般	060-0063	札幌市中央区南3条西6丁目	セザール第一札幌312号	011-281-1230
18	石狩	札幌市	国際ソブチミスト札幌アカシア	全般	003-0875	札幌市白石区米里5条2丁目2-30	協和交通(株)内	011-873-8286
19	石狩	札幌市	国際ソブチミスト札幌中央	全般	060-0061	札幌市中央区南1条西11丁目1	コンチネンタルビル5階 高橋合同事務所内	011-241-0448
20	石狩	札幌市	国際ソブチミスト札幌ノイエ	全般	004-0014	札幌市厚別区もみじ台北5丁目2-6	松原悦子様方	011-897-2404
21	石狩	札幌市	ザ・フレンドシップ・フォース・オブ札幌	全般	061-2272	札幌市南区簾舞5条1丁目	船本のりえ様方	011-596-5062
22	石狩	札幌市	在日外国人の人権を守る会・北海道	全般	064-0821	札幌市中央区北1条西23丁目1-36	DRMビル 2階 女のスペース・おん気付	011-622-7240
23	石狩	札幌市	在日本大韓民国大韓婦人会 北海道地方本部	日本・韓国	064-0809	札幌市中央区南9条西4丁目1-7	韓国会館4F	011-531-2733
24	石狩	札幌市	在日本大韓国民団北海道地方本部	日本・韓国	064-0809	札幌市中央区南9条西4丁目1-7	商銀ビル	011-511-3381
25	石狩	札幌市	在日朝鮮人総聯合会北海道本部	北朝鮮	060-0031	札幌市中央区北1条東8丁目84-2	平和ビル	011-241-5371
26	石狩	札幌市	札幌アジア・アフリカ研究会	アジア・アフリカ	004-0871	札幌市清田区平岡1条1丁目5-24	テレジアの家101	011-882-9627
27	石狩	札幌市	札幌英会話協会ACCESS	全般	003-0802	札幌市白石区菊水2条2丁目4-23	喜多英明様方	011-831-4535
28	石狩	札幌市	札幌オランダ交流協会	オランダ	064-8588	札幌市中央区南4条西7丁目	(株)地崎工業内	011-511-8112
29	石狩	札幌市	札幌海洋少年団	全般	060-0806	札幌市北区北6条西6丁目	北海道青年会館内	011-861-2324
30	石狩	札幌市	(財)札幌がんセミナー	全般	060-0042	札幌市中央区大通西6丁目6		011-222-1506
31	石狩	札幌市	(社)札幌観光協会	全般	060-8611	札幌市中央区北1条西2丁目	札幌市役所内	011-211-3341
32	石狩	札幌市	札幌ケア研究会	全般	006-0816	札幌市手稲区前田6条6丁目2-19	小原様方	011-695-3098
33	石狩	札幌市	(財)札幌市芸術文化財団	全般	005-0864	札幌市南区芸術の森2丁目75		011-592-5111
34	石狩	札幌市	札幌圏大学国際交流フォーラム	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目札幌MNビル3階	(財)札幌国際プラザ内	011-211-2105
35	石狩	札幌市	札幌圏ホームステイ交流協会	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目札幌MNビル3階	(財)札幌国際プラザ内	011-211-2105
36	石狩	札幌市	札幌国際見本市協会	全般	003-0030	札幌市白石区流通センター4丁目3番55号	札幌産業流通振興協会内	011-865-5811
37	石狩	札幌市	札幌国際親善の集い	全般	064-0953	札幌市中央区宮の森3条13丁目4-35	谷口良一様方	011-644-1735
38	石狩	札幌市	札幌国際美術協会	全般	064-0809	札幌市中央区南9条西4丁目6-3	弘成ビル	011-552-8716
39	石狩	札幌市	(財)札幌国際プラザ	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目札幌MNビル3階		011-211-2105
40	石狩	札幌市	札幌国際プラザフローラルアートグループ	全般	065-0041	札幌市東区本町1条9丁目1-29		011-781-0761
41	石狩	札幌市	札幌国際理解教育研究会	全般	060-0809	札幌市北区北9条西1丁目	札幌市立北九条小学校内 嶋田肇様	011-736-2564

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
42	石狩	札幌市	札幌姉妹都市協会	姉妹都市	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目 札幌MNビル3階	(財)札幌国際プラザ内 011-211-2105
43	石狩	札幌市	さっぽろ自由学校「遊」	全般	060-0061	札幌市中央区南1条西5丁目	愛生館ビル 2階 011-252-6752
44	石狩	札幌市	(社)札幌青年会議所	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西2丁目 2-1	北海道経済センタービル 9階 011-222-1439
45	石狩	札幌市	札幌アリアンス・フランセーズ	フランス	060-0062	札幌市中央区南2条西5丁目 10-2	南2西5ビル 2階 090 - 9080 - 1461
46	石狩	札幌市	札幌日韓友好親善協会	韓国	064-0809	札幌市中央区南9条西4丁目	商銀ビル 6階 011-511-4064
47	石狩	札幌市	札幌日中友好協会	中国	060-0004	札幌市中央区北4条西4丁目	加藤ビル③ 5階 011-231-4453
48	石狩	札幌市	札幌日本語クラブ	全般	064-0953	札幌市中央区宮の森3条7丁目 1-40-204	竹田あけみ様方 011-521-6230
49	石狩	札幌市	札幌ニュージーランド協会	ニュージーランド	064-0805	札幌市中央区南5条西1丁目 1-12	ヒカリビル9F 011-532-7830
50	石狩	札幌市	札幌フォスター・ペアレントの会	全般	063-0804	札幌市西区二十四軒4条4丁目 13-1-201	西崎様方 011-644-5845
51	石狩	札幌市	札幌貿易協会	全般	060-8610	札幌市中央区北1条西2丁目	札幌商工会議所内 011-231-1122
52	石狩	札幌市	札幌ホームステイ協会	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目 札幌MNビル3階	(財)札幌国際プラザ内 011-211-2105
53	石狩	札幌市	札幌・香港親善協会	香港	060-8611	札幌市中央区北1条西2丁目	札幌市役所内 (社)札幌観光 協会 011-211-3341
54	石狩	札幌市	札幌ユネスコ協会	全般	060-0002	札幌市中央区北2条西3丁目	朝日生命ビル 2階 011-251-6670
55	石狩	札幌市	札幌Iゾンタクラブ	全般	064-0823	札幌市中央区北3条西22丁目 1-5	渋谷みよ様方 011-621-9537
56	石狩	札幌市	札幌IIゾンタクラブ	全般	064-0915	札幌市中央区南15条西18丁目	011-531-3845
57	石狩	札幌市	(財)自治体国際化協会北海道支部	全般	060-8588	札幌市中央区北3条西6丁目	北海道知事政策部知事室国 際課内 011-231-4111
58	石狩	札幌市	シャプラニール札幌連絡会	バングラディ シュ・ネパール	063-0812	札幌市西区琴似2条7丁目	くすみ書房気付 011-611-3819
59	石狩	札幌市	ジェム・サハラの会		062-0035	札幌市豊平区西岡5条14丁目	ウェストヒルズ3番館201 号 011-583-0687
60	石狩	札幌市	瀋陽会	瀋陽	063-0823	札幌市西区発寒3条4丁目9- 15	佐々木龍雄様方 011-661-2676
61	石狩	札幌市	スリランカ・チャイルド・エイド	スリランカ	005-0040	札幌市南区藻岩下3丁目7-19	スタジオワーム内 米山均 様方 011-582-2227
62	石狩	札幌市	星光(せいこう)会	中国	060-0001	札幌市中央区北1条西2丁目	オーク札幌ビル6階 創業 準備室 090 - 8639 - 5767
63	石狩	札幌市	青年海外協力隊北海道OB会	全般	003-0026	札幌市白石区本通16丁目南4- 25	JICA札幌国際センター 011-866-8393
64	石狩	札幌市	世界平和女性連合	全般	060-0034	札幌市中央区北4条東2丁目 7-1	シャルム北4条 201号室 011-232-0446
65	石狩	札幌市	(財)ダント町村記念事業協会	アメリカ オハイオ州	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目	北海道酪農協会内 011-241-2738
66	石狩	札幌市	たんぼぼ	全般	005-0022	札幌市南区真駒内柏丘7丁目 4-17	外山様方 011-582-5056
67	石狩	札幌市	チェルノブイリへのかけはし	ベラルーシ共和国	064-0917	札幌市中央区南17条西6丁目 1-1	011-511-3680
68	石狩	札幌市	どさんこ海外保険協力会	全般	060-0042	札幌市中央区大通西15丁目2- 18	ファミリー西15 303 011-622-8186
69	石狩	札幌市	NPO法人「飛んでけ!車いす」の会	開発途上国 アジア	060-0005	札幌市中央区北5条西6丁目 2	札幌ビル 2階 011-242-8171
70	石狩	札幌市	日中友好道民運動連絡会議	中国	060-0004	札幌市中央区北4条西12丁目	ほくろうビル 3階 011-261-8674
71	石狩	札幌市	日本語教師の会ひらがなクラブ	全般	064-0952	札幌市中央区宮の森2条16丁目 4-10	高島様方 011-613-4372
72	石狩	札幌市	日本国際連合協会北海道本部	全般	060-8588	札幌市中央区北3条西6丁目	北海道知事政策部知事室国 際課内 011-231-4111
73	石狩	札幌市	日本語ボランティア「窓」	全般	003-0024	札幌市白石区本郷通7丁目南 2-8	佐藤真紀子様方 011-862-9576
74	石狩	札幌市	日本シェラレオネ友好協会	シェラレオネ 共和国	003-0029	札幌市白石区平和通5丁目北 2-8	(株)シスコム内 011-866-8180
75	石狩	札幌市	日本チェコ協会/日本スロバキア協会 北海道支部	チェコスロバキア	063-0037	札幌市西区西野7条2丁目1- 52	011-671-0236
76	石狩	札幌市	(社)日本ネパール協会北海道支部	ネパール	064-0944	札幌市中央区円山西町5-2-22	在田一則様方 011-644-0093
77	石狩	札幌市	日本ハンガリー友好協会北海道支部	ハンガリー	064-0952	札幌市中央区宮の森2条3丁目 1-1-609	谷本様方 011-622-6926
78	石狩	札幌市	日本ボーイスカウト札幌地区委員会	全般	007-0842	札幌市東区北42条東15丁目2- 12	コード撮影(株)気付 011-752-1620
79	石狩	札幌市	日本ボーイスカウト北海道連盟	全般	062-0934	札幌市豊平区平岸4条14丁目 3-40	北海道ボーイスカウト会館 内 011-823-7121
80	石狩	札幌市	(社)日本モンゴル協会北海道支部	モンゴル	063-0038	札幌市西区西野8条9丁目16- 2	菊池様方 011-663-1939
81	石狩	札幌市	日本ユーラシア協会札幌支部	ロシア ユーラシア諸国	060-0809	札幌市北区北9条西4丁目	エルムビル 4階 011-707-9722
82	石狩	札幌市	日本ユーラシア協会北海道連合会	ロシア ユーラシア諸国	060-0809	札幌市北区北9条西4丁目	エルムビル 4階 011-707-0933
83	石狩	札幌市	(財)日本ユニセフ協会北海道支部	全般	063-0831	札幌市西区発寒11条5丁目10- 1	コープさっぽろ本部 2階 011-671-5717
84	石狩	札幌市	日本ルーマニアアンレース協会	ルーマニア	004-0864	札幌市清田区北野4条3-8-27	011-885-6682
85	石狩	札幌市	(財)バシフィック・ミュージック・ フェスティバル (PMF) 組織委員会	全般	064-0931	札幌市中央区中島公園1-15	札幌コンサートホール内 011-520-2222

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
86	石狩	札幌市	バン格拉デシュ会・てんしのゆめ	バン格拉デシュ	064-0917	札幌市中央区南17条西16丁目3-1-202	011-563-7071
87	石狩	札幌市	ベトナムの子どもの家を支える地球ともだちいいん会・札幌	ベトナム	065-0018	札幌市東区北18条東16丁目2-10	011-780-7112
88	石狩	札幌市	北海道AALA(アジア・アフリカ・ラテンアメリカ)連帯委員会	アジア・アフリカ	001-0017	札幌市北区北17条西3丁目21番地	011-747-0977
89	石狩	札幌市	北海道ILO協会	アジア・アフリカ・南米	060-8588	札幌市中央区北3条西6丁目	011-231-4111
90	石狩	札幌市	北海道NGOグローバルトレイン	全般	003-0021	札幌市白石区栄通17丁目1-26	011-851-0086
91	石狩	札幌市	(財)北海道YMCA	全般	064-0811	札幌市中央区南11条西11丁目	011-561-5217
92	石狩	札幌市	北海道インドネシアガルーダ会	インドネシア	062-0032	札幌市豊平区西岡2条1丁目2-6	011-853-6551
93	石狩	札幌市	北海道カーリング協会	全般	062-0905	札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1	011-815-8828
94	石狩	札幌市	北海道海外移住家族会	南米	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目第2水産ビル	011-271-0353
95	石狩	札幌市	(財)北海道海外協会	南米	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目	011-271-0353
96	石狩	札幌市	(社)北海道開発技術センター	全般	060-0051	札幌市中央区南1条東2丁目11	011-271-3028
97	石狩	札幌市	北海道カナダ協会	カナダ	060-0807	札幌市北区北7条西2丁目20	011-726-2861
98	石狩	札幌市	(社)北海道観光連盟	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西2丁目	011-231-0941
99	石狩	札幌市	(社)北海道機械工業会	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西5丁目	011-221-3375
100	石狩	札幌市	北海道企業誘致推進会議	全般	060-8588	札幌市中央区北3条西6丁目	011-231-4111
101	石狩	札幌市	北海道国際音楽交流協会(HIMES)	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目札幌MNビル6階	011-232-7592
102	石狩	札幌市	(社)北海道国際農業交流協会	全般	060-0042	札幌市中央区大通西7丁目2	011-251-3853
103	石狩	札幌市	北海道国際女性協会	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目札幌MNビル6階	011-221-3501
104	石狩	札幌市	(社)北海道国際貿易促進協会	中国	060-0001	札幌市中央区北1条西2丁目	011-211-7341
105	石狩	札幌市	北海道国際理解教育研究協議会	全般	006-0805	札幌市手稲区新発寒5条4丁目2-1	011-684-5561
106	石狩	札幌市	北海道札幌市国際交流のつどい連絡協議会	全般	004-0863	札幌市清田区北野3条5丁目27-20	011-881-4673
107	石狩	札幌市	北海道・札幌文化団体協議会	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西13丁目	011-271-5036
108	石狩	札幌市	北海道サハリンビジネス交流支援協会	サハリン	060-0004	札幌市中央区北4条西6丁目	011-222-3669
109	石狩	札幌市	北海道自然体験学校NEOS	全般	064-0805	札幌市中央区南5条西8丁目	011-520-2066
110	石狩	札幌市	北海道JICA帰国専門家連絡会	開発途上国	003-0026	札幌市白石区本通16丁目4-25	011-866-7222
111	石狩	札幌市	北海道ジャバ・ベトナム	ベトナム	002-0852	札幌市北区屯田2条2丁目4-7	011-773-9057
112	石狩	札幌市	北海道女性国際交流連絡協議会	全般	060-0005	札幌市中央区北3条西7丁目	011-778-5407(事務局長宅)
113	石狩	札幌市	北海道スウェーデン協会	スウェーデン	060-0062	札幌市中央区南2条西10丁目	011-214-8444
114	石狩	札幌市	(財)北海道青少年科学文化財団	全般	060-0002	札幌市中央区北2条西3丁目	011-271-0864
115	石狩	札幌市	北海道青年国際交流機構(北海道IYEO)	全般	004-0865	札幌市清田区北野5条4丁目15-3	011-881-8340
116	石狩	札幌市	北海道青年海外協力隊を育てる会	全般	003-0026	札幌市白石区本通16丁目4-25	011-866-7222
117	石狩	札幌市	(財)北海道体育協会	カナダ・中国・ロシア・ドイツ	062-8572	札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1	011-820-1701
118	石狩	札幌市	北海道大学国際婦人交流会	全般	060-0808	札幌市北8条西5丁目	011-716-2111
119	石狩	札幌市	北海道タイランドクラブ	タイ	060-0034	札幌市中央区北4条東2丁目	011-219-0444
120	石狩	札幌市	北海道台湾貿易協会	台湾	060-8610	札幌市中央区北1条西2丁目	011-231-1122
121	石狩	札幌市	北海道中国人留学生協会	中国	001-0045	札幌市北区麻生町2丁目9-3-105	011-726-0025
122	石狩	札幌市	北海道デンマーク会	デンマーク	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目	011-241-2738
123	石狩	札幌市	北海道二胡愛好会	全般	064-0820	札幌市中央区大通西24丁目2-20	011-642-5536
124	石狩	札幌市	北海道日伊協会	イタリア	003-0029	札幌市白石区平和通15丁目北1-21	011-861-2288
125	石狩	札幌市	北海道日英協会	イギリス	060-0808	札幌市北区北8条西7丁目	011-820-4878
126	石狩	札幌市	北海道日豪協会	オーストラリア	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目札幌MNビル6階	011-281-4222
127	石狩	札幌市	北海道日独協会	ドイツ	060-0005	札幌市中央区北5条西7丁目	011-271-0111
128	石狩	札幌市	北海道日米協会	アメリカ	064-0821	札幌市中央区北1条西28丁目	011-882-4098
129	石狩	札幌市	北海道日韓友好親善協会連合会	韓国	064-0809	札幌市中央区南9条西4丁目	011-511-4064

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号	
130	石狩	札幌市	北海道日中友好協会	中国	060-0004	札幌市中央区北4条西4丁目 加藤ビル③ 6階	011-231-4453	
131	石狩	札幌市	北海道日中友好センター	中国	060-0001	札幌市中央区北1条西8丁目 東信札幌ビル 9階	011-251-6837	
132	石狩	札幌市	北海道日朝連帯道民会議	北朝鮮	060-0004	札幌市中央区北4条西12丁目 ぼくろうビル 2階 北海道平和運動フォーラム気付	011-210-0200	
133	石狩	札幌市	北海道日伯協会	ブラジル	060-0061	札幌市中央区南1条西4丁目 日本旅行ビル 4階	011-281-1510	
134	石狩	札幌市	北海道日本語教育ネットワーク	全般	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館 12階 (社)北方圏センター内	011-280-5834	
135	石狩	札幌市	北海道日本ロシア協会	ロシア	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目 緑園ビル 10階	011-261-8887	
136	石狩	札幌市	北海道ノルウェー協会	ノルウェー	060-8671	札幌市中央区北12条西20丁目1-10	高橋水産株式会社内	011-618-2111
137	石狩	札幌市	北海道ハンガリー文化交流協会	ハンガリー	062-0024	札幌市中央区大通西17丁目1-20-501		011-618-3155
138	石狩	札幌市	北海道パラグアイ懇話会	パラグアイ	006-0061	札幌市中央区南1条西4丁目 日本旅行ビル 4階 北海道日伯協会内	011-281-1510	
139	石狩	札幌市	北海道フィンランド協会	フィンランド	060-0002	札幌市中央区北2条西3丁目 札幌第1ビル 7階	011-271-0864	
140	石狩	札幌市	北海道ヘルー友好協会	ヘルー	062-8605	札幌市豊平区旭町4-1-40	北海学園大学内	011-841-1161
141	石狩	札幌市	(社)北海道貿易物産振興会	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西2丁目	北海道経済センター	011-251-7976
142	石狩	札幌市	北海道北方博物館交流協会	全般	040-0000	札幌市厚別区厚別町小野幌53-2	北海道開拓記念館 開拓の村文化振興会内	011-898-4564
143	石狩	札幌市	北海道・マサチューセッツ協会	アメリカ・マサチューセッツ州	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目	道庁別館 12階	011-231-3392
144	石狩	札幌市	北海道マルディコラ・ネパール教育基金	ネパール	006-0811	札幌市手稲区前田1条9丁目4-12		011-682-5684
145	石狩	札幌市	北海道民際交流センター	全般	060-0061	札幌市中央区南1条西5丁目 プレジデント河村ビル 8階 土田企画株内	011-232-3460	
146	石狩	札幌市	北海道モンゴル親善協会	モンゴル	062-0934	札幌市豊平区岸4条8丁目9-9		011-831-0888
147	石狩	札幌市	北海道ユネスコ連絡協議会	全般	060-0002	札幌市中央区北2条西3丁目	朝日生命ビル 2階	011-251-6670
148	石狩	札幌市	北海道留学生交流推進協議会	全般	060-0808	札幌市北区北8条西8丁目	北海道大学学務部留学生課内	011-706-2191
149	石狩	札幌市	(社)北方圏センター	全般	060-0003	札幌市中央区北3条西7丁目	道庁別館 12階	011-221-7840
150	石狩	札幌市	山と森の散歩道	全般	063-0002	札幌市西区山の手2条11丁目3-15	石島しのぶ様方	011-621-5380
151	石狩	札幌市	ラポ国際交流センター北海道連絡所	全般	003-0021	札幌市白石区栄通18丁目5-45	ライフルビル 3階	011-855-5388
152	石狩	札幌市	I.H.C北海道	ネパール	061-2284	札幌市南区藤野4-4-9-7	三浦博志様方	070-5117-1027
153	石狩	札幌市	J.WORKS	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目 札幌MNビル6階	SIS内	090-8370-4381
154	石狩	札幌市	北欧社会研究協会 (NESSA)	北欧	002-8055	札幌市北区篠路町福移147-3	(社)札幌協働福祉協会あいのさと アクティビティセンター内	011-792-4264
155	石狩	札幌市	N・R・S日本語の会	全般	001-0034	札幌市北区北34条西5丁目1-3-908		011-709-7565
156	石狩	札幌市	SICPF外国語ボランティアネットワーク	全般	060-0001	札幌市中央区北1条西3丁目 札幌MNビル3階	(財)札幌国際プラザ内	011-211-2105
157	石狩	江別市	(社)いげばなインターナショナル札幌支部	全般	069-0844	江別市大麻西町11丁目1	佐野様方	011-386-1229
158	石狩	江別市	江別グリーンライオンズクラブ	全般	069-0811	江別市錦町13-1	吉川ビル 2階	011-382-7772
159	石狩	江別市	江別グレンシャム会	全般	067-0023	江別市東光町25-13	たしろ屋製菓内	011-382-5026
160	石狩	江別市	江別市国際交流推進協議会	全般	069-0822	江別市東野幌本町7-4		011-381-1111
161	石狩	江別市	江別市民国際交流協会	全般	069-0851	江別市大麻園町24-10		011-386-6423
162	石狩	江別市	江別市都市提携委員会	全般	067-8674	江別市高砂町6	江別市役所企画政策部秘書課内	011-381-1008
163	石狩	江別市	江別西ロータリークラブ	全般	069-0812	江別市幸町10-7		011-382-0081
164	石狩	江別市	江別日中友好の会	中国	069-0831	江別市野幌若葉町28-6		011-382-4582
165	石狩	江別市	江別ユネスコ協会	全般	067-0074	江別市高砂町24	江別市教育委員会青少年課	011-381-1060
166	石狩	江別市	江別ライオンズクラブ	全般	067-0003	江別市緑町東1-67	角屋興産(株)内	011-383-3000
167	石狩	江別市	江別ロータリークラブ	全般	067-0071	江別市高砂町10-15		011-382-0939
168	石狩	江別市	外国人妻の会北海道支部	全般	069-0833	江別市文京台南12-10		011-387-5411
169	石狩	江別市	言語交流研究所 ヒップファミリークラブ江別	全般	069-0834	江別市文京台東町16-14		011-387-7320
170	石狩	江別市	北海道アルバータ 酪農科学技術交流協会	カナダ・アルバータ州	069-0836	江別市文京台緑町582-1	酪農学園大学内	011-386-2676
171	石狩	江別市	北海道ポーランド文化協会	ポーランド	069-0851	江別市大麻園町28-18	小笠原正明様方	011-386-3405
172	石狩	江別市	楽・智んサークル	全般	069-0835	江別市文京台南町61-16		011-386-0852
173	石狩	江別市	CLUB LATINO	南米	067-0025	江別市あけぼの町19-27		011-382-0749

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
174	石狩	江別市	Affinity	全般	069-0814	江別市野幌松並町24-10	011-382-3704
175	石狩	千歳市	ガールスカウト日本連盟 北海道第31団	全般	066-0067	千歳市桂木5丁目4-33	0123-23-5390
176	石狩	千歳市	国際ソロプチミストアメリカ 日本北リジョン千歳	全般	066-0064	千歳市錦町2丁目	ホテル千歳屋内 0123-23-2811
177	石狩	千歳市	千歳姉妹都市交流協会	アメリカ	066-8686	千歳市東雲町2丁目34	千歳市国際交流係 0123-24-3131
178	石狩	千歳市	千歳観光連盟	全般	066-0062	千歳市千代田町6-20	第12ふじやビル 0123-24-8818
179	石狩	千歳市	千歳国際高等教育村	全般	066-0062	千歳市千代田町5丁目3	0123-24-2535
180	石狩	千歳市	千歳国際交流協会	全般	066-8686	千歳市東雲町2丁目34	千歳市国際交流係 0123-24-3131
181	石狩	千歳市	千歳市女性団体協議会	全般	066-0042	千歳市東雲町2丁目34	0123-24-3131
182	石狩	千歳市	千歳セントラルロータリークラブ	全般	066-0047	千歳市本町4丁目	ホテル日航千歳内 0123-26-5788
183	石狩	千歳市	千歳中央ライオンズクラブ	全般	066-0047	千歳市本町4丁目	ホテル日航千歳内 0123-26-3331
184	石狩	千歳市	千歳日中交流促進会	中国	066-0034	千歳市富丘3丁目11-7	0123-24-2010
185	石狩	千歳市	千歳ボランティア通訳クラブ	全般	066-0042	千歳市東雲町5丁目44	0123-23-5885
186	石狩	千歳市	千歳ユネスコ協会	全般	066-0042	千歳市東雲町2丁目34	千歳市教育委員会内 0123-24-3131
187	石狩	千歳市	千歳ライオンズクラブ	全般	066-0047	千歳市本町4丁目	ホテル日航千歳内 0123-23-1797
188	石狩	千歳市	千歳ロータリークラブ	全般	066-0036	千歳市北栄2丁目2-1	千歳全日空ホテル 0123-23-4470
189	石狩	千歳市	日中交流千歳市民会議	全般	066-0035	千歳市高台5丁目7-13	JA千歳市内 0123-23-5151
190	石狩	千歳市	北海道スペイン協会	スペイン	066-0047	千歳市本町5丁目878-30	0123-23-9212
191	石狩	恵庭市	恵庭国際交流市民の会	全般	061-1431	恵庭市有明町3丁目1-6	宮協實海様方 0123-32-5224
192	石狩	恵庭市	恵庭国際交流プラザ	全般	061-1431	恵庭市有明町3丁目1-6	宮協實海様方 0123-32-5224
193	石狩	恵庭市	恵庭市青少年育成市民の会	全般	061-1498	恵庭市新町10番地	恵庭市教育委員会生涯学習振興課内 0123-33-3131
194	石狩	恵庭市	恵庭日中友好協会	中国	061-1411	恵庭市恵南7-46	斎藤昭子様方 0123-33-2702
195	石狩	恵庭市	恵庭ニュージーランド協会	ニュージーランド	061-1444	恵庭市京町80番地	恵庭商工会議所内 0123-34-1111
196	石狩	恵庭市	恵庭ユネスコ協会	全般	061-1364	恵庭市下島松626	吉田法純様方 0123-36-8229
197	石狩	恵庭市	恵庭ライオンズクラブ	全般	061-1424	恵庭市大町4丁目2-27	0123-33-9198
198	石狩	恵庭市	恵庭ロータリークラブ	全般	061-1441	恵庭市住吉町80-1	0123-32-2388
199	石狩	恵庭市	国際ソロプチミスト恵庭	全般	061-1431	恵庭市有明町6-3-5	伊藤美智子様方 0123-32-2304
200	石狩	恵庭市	スウェーデン・ロシアを迎える会	全般	061-1353	恵庭市島松本町1丁目6-1	掛水美枝子様方 0123-33-2702
201	石狩	恵庭市	日中友好恵庭市民協会	中国	061-1444	恵庭市京町80番地	恵庭商工会議所内 0123-32-4050
202	石狩	恵庭市	北海道文教大学	全般	061-1408	恵庭市黄金町196-1	0123-34-0011
203	石狩	北広島市	北広島国際交流協議会	カナダ	061-0021	北広島市中央4丁目2-1	北広島市教育委員会生涯学習部 011-372-3311
204	石狩	北広島市	国際ソロプチミスト北広島	カナダ	061-1127	北広島市新富町西2丁目1-12	丸清建設内 011-373-5385
205	石狩	石狩市	石狩国際交流協会	カナダ・ロシア・中国	061-3217	石狩市花畔2条1丁目9-1	北ガスプラザ2階 0133-64-5931
206	石狩	石狩市	石狩市議会日本・ロシア議員連盟	ロシア	061-3212	石狩市花川北2条6丁目249	片平様方 0133-74-1655
207	石狩	石狩市	石狩地区日本ロシア協会	ロシア	061-3212	石狩市花川北2条6丁目249	0133-74-1655
208	石狩	石狩市	石狩日中友好協会	中国	061-3213	石狩市花川北3条4丁目124	0133-74-5261
209	石狩	石狩市	石狩ユネスコ協会	全般	061-3212	石狩市花川南3条5丁目1	漆様方 0133-74-0333
210	石狩	石狩市	石狩ライオンズクラブ	全般	061-3202	石狩市花川南2条2丁目220	小寺ビル2階 0133-74-3780
211	石狩	石狩市	国際ソロプチミスト石狩	全般	061-3207	石狩市親船町60-9	0133-62-3069
212	石狩	石狩市	少年ケニアの友北海道支部	アフリカ	061-3213	石狩市花川北3条4丁目6	佐藤様方 0133-74-6255
213	石狩	石狩市	日本ユーラシア協会石狩支部	ロシア	061-3204	石狩市花川南4条1丁目97	0133-73-0599
214	石狩	石狩市	北海道地球市民の会	全般	061-3214	石狩市花川北4条2丁目197	0133-74-1296
215	石狩	当別町	勲スウェーデン交流センター	スウェーデン	061-3772	当別町スウェーデン・ヒルズ2329番地25	0133-26-2360
216	石狩	当別町	当別・レクサンド都市交流協会	スウェーデン	061-0226	当別町錦町1248	当別商工会館内 0133-23-2447
217	渡島	函館市	日朝連帯函館市民の会	朝鮮	040-0032	函館市新川町2-16	道南労働福祉会館 0138-22-5723

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
218	渡島	函館市	日朝協会函館支部	朝鮮	042-0943	函館市乃木町4-13 佐竹様方	0138-52-0841
219	渡島	函館市	日本中国友好協会函館支部	中国	040-0005	函館市人見町26-38 大淵様方	0138-51-5154
220	渡島	函館市	日本ベトナム友好協会函館支部	ベトナム	041-0844	函館市川原町18-2-201 佐藤様方	0138-53-6260
221	渡島	函館市	日本ユーラシア協会函館地方支部	ロシア	041-0806	函館市五稜郭町44-2 函館博物館五稜郭分館内 組合様方	0138-51-2548
222	渡島	函館市	特定非営利活動法人 函館アフリカ支援協会	アフリカ各国	041-0836	函館市山の手3-34-4 升田様方	0138-54-6712
223	渡島	函館市	函館インドネシア友好協会	インドネシア	040-0084	函館市大川町4-43-713 山田様方	0138-41-8051
224	渡島	函館市	函館オーストラリア協会	オーストラリア	040-0043	函館市宝来町14-8 藤井様方	0138-22-6847
225	渡島	函館市	函館市国際理解教育研究会	全般	040-0044	函館市青柳町22-13 青柳小学校 石山様方	0138-23-8348
226	渡島	函館市	函館シンガポール協会	シンガポール	040-0054	函館市元町33-14 (社)函館国際観光コンベン ション協会内	0138-27-3535
227	渡島	函館市	函館中国経済促進協会	中国	041-0821	函館市港町3-18-15 (株)テーオー小笠原内	0138-45-3911
228	渡島	函館市	函館日英協会	イギリス	040-0054	函館市元町33-14 旧イギリス領事館内	0138-27-8159
229	渡島	函館市	函館日独協会	ドイツ	042-0935	函館市駒場町16-14 ごとう内科胃腸科内	0138-54-7036
230	渡島	函館市	函館日仏協会	フランス	040-0053	函館市末広町4-5 五島軒本店内	0138-23-1106
231	渡島	函館市	函館日米協会	アメリカ	040-0001	函館市五稜郭町43-9 五稜郭タワー(株)内	0138-51-4785
232	渡島	函館市	函館日口親善協会	ロシア	040-0054	函館市元町14-1 ロシア極東国立総合大学函 館校内	0138-23-6523
233	渡島	函館市	函館日韓友好親善協会	韓国	040-0064	函館市大手町16-3 民団函館支部	0138-22-6411
234	渡島	函館市	函館日中文化交流をすすめる会	中国	042-0955	函館市高丘町19-13 木村様方	0138-57-5467
235	渡島	函館市	函館日中問題研究会	中国	040-0053	函館市末広町12-1 石田様方	0138-22-1728
236	渡島	函館市	函館日中友好協会	中国	040-0013	函館市千代台町14-8 喫茶「隼」内	0138-51-0041
237	渡島	函館市	函館モンゴル友好親善協会	モンゴル	041-0824	函館市西栲樹町218-43 ききょう幼稚園内	0138-49-0313
238	渡島	函館市	函館ユネスコ協会	全般	040-0044	函館市青柳町12-17 函館市公民館内	0138-22-3320
239	渡島	函館市	(財)北海道国際交流センター	全般	040-0054	函館市元町14-1	0138-22-0770
240	渡島	函館市	北海道日中青少年交流協会	中国	040-0047	函館市川原町8-6 淡路様方	0138-52-5677
241	渡島	函館市	函館日本語教育研究会	全般	042-0942	函館市柏木町2-17 田中様方	0138-32-6103
242	渡島	函館市	日本と中国の心をつなぐ会	中国	041-0807	函館市北美原2-9-2 高橋様方	0138-46-2107
243	渡島	函館市	函館・江差・オランダ交流友の会	オランダ	040-0051	函館市弁天町24-1 オクトバス内	0138-26-4705
244	渡島	上磯町	上磯国際交流ネットワーク (Kif-net)	全般	049-0121	上磯町久根別4丁目5-5 小林様方	0138-73-6202
245	渡島	上磯町	函館ニュージーランド友好協会	ニュージーランド	040-0049	上磯町飯生1-7-2 山本様方	0138-73-6922
246	渡島	上磯町	函館ハリファックス協会	カナダ	049-0155	上磯町字中野182-2 三上様方	0138-73-8261
247	渡島	七飯町	コンコードと仲良くする会	アメリカ	041-1122	七飯町大川4丁目21-10	0138-65-8232
248	渡島	七飯町	(財)北海道国際交流センター七飯支部	全般	041-1111	七飯町字本町568-3 七飯町役場企画国際課	0138-65-2511
249	渡島	七飯町	(財)北海道大沼国際交流協会	全般	041-1354	七飯町字大沼町127-1 大沼国際セミナーハウス内	0138-67-3950
250	渡島	八雲町	八雲町国際交流をすすめる会	韓国	049-3112	八雲町末広町154 八雲町教育委員会内	01376-3-3131
251	渡島	八雲町 (旧熊石町)	北海道日中青少年交流協会熊石支部	中国	040-0057	八雲町熊石関内町関内小学校 内	01398-2-3385
252	渡島	長万部町	長万部国際交流センター	全般	049-3521	長万部町字長万部11 守田様方	01377-2-2305
253	檜山	江差町	江差国際交流協会 (江差オーストラリア協会)	オーストラリア	043-0043	江差町字本町271 江差町教育委員会内	01395-2-1047
254	檜山	せたな町	瀬棚姉妹都市交流推進協議会	アメリカ	049-4812	せたな町瀬棚区本町719 瀬棚教育事務所	01378-7-3322
255	檜山	今金町	今金町ベガサスの翼 ニュージーランド友好協会	ニュージーランド	049-4308	瀬棚郡今金町字今金48-1 今金町教育委員会事務局	01378-2-3488
256	後志	小樽市	アイセック(国際経済商学学生協会) 小樽商科大学委員会	全般	047-0034	小樽市緑3丁目5-21 小樽商科大学 新サークル 会館内	
257	後志	小樽市	小樽市国際理解教育研究会	全般	047-0155	小樽市望洋台1-8-25 望洋台小学校内	0134-52-2007
258	後志	小樽市	小樽市姉妹都市提携委員会	ロシア・ ニュージーランド	047-8660	小樽市花園2丁目12-1 小樽市役所総務部秘書課内	0134-32-4111
259	後志	小樽市	小樽商科大学国際企画課	全般	047-0034	小樽市緑3丁目5-21	0134-27-5260
260	後志	小樽市	小樽青年会議所	全般	047-0031	小樽市色内1丁目6-32 小樽商工会議所 2階	0134-22-2166
261	後志	小樽市	小樽ゾンクラブ	全般	047-0021	小樽市入船5丁目10-5	0134-23-4873

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
262	後志	小樽市	小樽地区日本・中国友好協会	中国	047-0152	小樽市新光1丁目14-27	0134-54-8355
263	後志	小樽市	小樽地区日親善協会	ロシア	047-0024	小樽市花園3-9-14	新川ビル2F 民主党小樽総支部内 0134-33-8750
264	後志	小樽市	小樽ニュージーランド協会	ニュージーランド	047-8660	小樽市花園2丁目12-1	小樽市役所総務部秘書課内 0134-32-4111
265	後志	小樽市	小樽日本語サポートくらぶ(ONSA)	全般	047-0261	小樽市銭函1丁目16-28	0134-62-3164
266	後志	小樽市	小樽ユネスコ協会	全般	047-0024	小樽市花園5丁目10-1	小樽市教育委員会生涯学習課内 0134-32-4111
267	後志	小樽市	国際ソプロチミスト小樽	全般	047-0024	小樽市花園2-10-20	0134-22-8312
268	後志	小樽市	国際ソプロチミスト小樽マリン	全般	047-0156	小樽市桜2丁目1-1	0134-54-8233
269	後志	小樽市	日本中国友好協会小樽支部	中国	047-0011	小樽市天神1丁目10-151	0134-25-1301
270	後志	小樽市	日本ユーラシア協会小樽支部	ロシア	047-0031	小樽市色内2丁目13-5	小樽市民センター内 0134-32-2843
271	後志	寿都町	世界の友と手を結ぶ寿都の会	全般	040-0413	寿都町字樽岸町樽岸151番地	0136-62-2085
272	後志	蘭越町	蘭越町海外研修友の会	全般	048-1392	蘭越町蘭越町258-5	蘭越町役場内 0136-57-5111
273	後志	真狩村	真狩村国際交流協議会	全般	040-1631	真狩村字真狩118	真狩村役場内 0136-45-2121
274	後志	倶知安町	くっちゃんJAZZフェスティバル実行委員会	全般	044-0031	倶知安町南1西1	やまだ園内 0136-22-0201
275	後志	倶知安町	倶知安町国際交流協会	全般	044-0081	倶知安町字山田	ペンションきのこの内 0136-22-6623
276	後志	倶知安町	倶知安国際支援協会 KISS (Kutchan International Support Society)	全般	044-0076	倶知安町字高砂224	倶知安塗装工芸社内 090-3019-4517 (0136-22-0579)
277	後志	倶知安町	国際ソプロチミスト倶知安	全般	044-0072	倶知安町北3東1	0136-23-3717
278	後志	倶知安町	サンモリッツクラブ	スイス国グラウビュンデン州サンモリッツ	044-0011	倶知安町南1東1	コーリン建設(株)内 0136-22-0304
279	後志	倶知安町	ペルー共和国と交流する倶知安の会	ペルー共和国タルマ市	044-0031	倶知安町南1西1	横関建設工業(株)内 0136-22-0138
280	後志	岩内町	岩内国際交流センター	全般	045-0023	岩内町字相生195	野澤様方 0135-62-7856
281	後志	岩内町	岩内・スラビヤンカ友好協会	ロシア	045-8555	岩内町字清住258	岩内町役場内 0135-62-1011
282	後志	岩内町	日本ユーラシア協会岩内地方支部	ロシア	045-8555	岩内町字清住258	岩内町役場内 0135-62-1011
283	後志	神恵内村	神恵内ニュージーランド協会	ニュージーランド	045-0301	神恵内村大字神恵内村81	神恵内村役場内 0135-76-5011
284	後志	古平町	古平国際交流協会	全般	040-0109	古平町字浜町679-12	浅野様方 0135-42-2570
285	後志	余市町	余市町国際交流推進協議会	イギリス	046-8546	余市町朝日町26	余市町役場内 0135-21-2142
286	後志	赤井川村	赤井川村国際交流推進委員会	全般	046-0501	赤井川村字赤井川72	赤井川小学校内 0135-34-6860
287	空知	夕張市	夕張・撫順友好都市市民協会	中国	068-0492	夕張市本町4丁目	夕張市役所内 01235-2-3131
288	空知	夕張市	夕張日中友好協会	中国	068-0492	夕張市本町4丁目	夕張市役所内 01235-2-2591
289	空知	岩見沢市	岩見沢国際交流市民の会	全般	068-0835	岩見沢市緑が丘3丁目191-30	笹嶋様方 0126-23-6396
290	空知	岩見沢市	岩見沢日中友好協会	中国	068-0813	岩見沢市美園3条1丁目1-9	前川様方 0126-22-4081
291	空知	岩見沢市	国際ソプロチミスト岩見沢	全般	068-0835	岩見沢市緑が丘2丁目79-8	佛田様方 0126-23-9735
292	空知	岩見沢市	姉妹都市岩見沢ボカテロ会	アメリカ	068-0024	岩見沢市4条西8丁目2	日浦金物内 0126-22-1709
293	空知	岩見沢市	日中農業技術交流岩見沢協議会	中国	068-8686	岩見沢市鳩が丘1-1-1	岩見沢市役所総務部市長室内 0126-23-4111
294	空知	岩見沢市	岩見沢伊春会	中国	068-0006	岩見沢市6条東14丁目	浦下様方 0126-24-0555
295	空知	岩見沢市	モーリタニア里親の会	モーリタニア	068-0832	岩見沢市ふじ町2条5丁目1-4	末岡様方 0126-23-3490
296	空知	美唄市	美唄市国際交流会	全般	072-0024	美唄市西1条南1丁目1-15	藤本様方 0126-63-4589
297	空知	芦別市	芦別市国際交流協会	カナダ	075-8711	芦別市北1条東1丁目3	芦別市役所内 01242-2-2111
298	空知	芦別市	芦別日中友好クラブ	中国	075-0002	芦別市北2条西1丁目	定田印刷所内 01242-2-2033
299	空知	赤平市	北海道赤平日中友好手をつなぐ会	中国	079-1111	赤平市若木町北7丁目13番地	0125-32-3627
300	空知	三笠市	三笠日中友好協会	中国	068-2158	三笠市堤町3-10	加後様方 01267-2-3428
301	空知	滝川市	(社)滝川国際交流協会	全般	073-8686	滝川市大町1丁目2-15	滝川市役所 0125-23-1234
302	空知	砂川市	砂川市国際交流ふれあい委員会	全般	073-0168	砂川市西8条北3丁目	砂川市教育委員会内 0125-54-2121
303	空知	深川市	国際ソプロチミスト深川	全般	074-0151	深川市納内町3丁目6-7	0164-24-2558
304	空知	深川市	深川国際交流協会	全般	074-8650	深川市2条17-17	深川市役所企画課内 0164-26-2215
305	空知	深川市	深川国際農業研究会	全般	074-8650	深川市2条17-17	深川市役所農政課内 0164-26-2255

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
306	空知	北村	北村国際交流協会	全般	068-1213	北村字赤川1593-1 北村役場内	0126-56-2001
307	空知	栗沢町	栗沢町国際交流協会	全般	068-0123	栗沢町東本町21 栗沢町役場内	0126-45-2411
308	空知	栗沢町	とさんこ海外保健協力会	全般	068-3178	栗沢町美流渡錦町92 美流渡診療所内	0126-46-2122
309	空知	南幌町	南幌町国際文芸交流協会	全般	069-0212	南幌町南12線西21 竹内様方	011-378-2438
310	空知	南幌町	北海道農民日中友好会議南幌支会	中国	069-0215	南幌町南15線西3 野崎様方	011-378-0227
311	空知	奈井江町	奈井江スオミクラブ	フィンランド	079-0392	奈井江町字奈井江11 奈井江町役場内	0125-65-2111
312	空知	上砂川町	上砂川・スパークウッド姉妹都市提携委員会	カナダ	073-0292	上砂川町中央北1条5丁目1-7 上砂川町企画産業課内	0125-62-2011
313	空知	由仁町	由仁ライオンズクラブ	オーストラリア	069-1206	由仁町本町271番地	01238-83-2355
314	空知	由仁町	由仁ロータリークラブ	オーストラリア	069-1203	由仁町東栄78番地	01238-83-2634
315	空知	長沼町	長沼ロータリークラブ	全般	069-1343	長沼町旭町南1丁目1番2号 株式会社・エスインターナショナル内	01238-8-0801
316	空知	栗山町	栗山町国際交流センター	全般	069-1597	栗山町松風3丁目254 栗山町役場(教育委員会)	01237-2-1117
317	空知	月形町	月形町国際交流協会	全般	069-0500	月形町1219 月形町役場内	0126-53-2321
318	空知	雨竜町	雨竜町国際交流センター	全般	078-2606	雨竜町字満寿33-94 雨竜町教育委員会内	0125-77-2321
319	空知	沼田町	沼田町国際交流協会	カナダ	078-2202	沼田町南1条3丁目6-53 沼田町役場内	0164-35-2111
320	空知	沼田町	沼田ボートハーディ交流協会	カナダ	078-2203	沼田町本通2丁目3番6号 沼田町商工会事務局内	0164-35-2231
321	上川	旭川市	旭川市国際交流委員会	全般	070-8525	旭川市6条通10丁目 市第3庁舎旭川市国際交流課内	0166-25-7491
322	上川	旭川市	旭川国際経済交流会	全般	070-8022	旭川市神居町台場 クラウン商事(株)内	0166-61-4566
323	上川	旭川市	北北海道国際交流センター	全般	070-0027	旭川市東7条1丁目 土肥様方	0166-23-0796
324	上川	旭川市	旭川スウェーデン協会	スウェーデン	070-0043	旭川市常盤通1丁目 道北経済センター(社)旭川観光協会内	0166-23-0090
325	上川	旭川市	旭川ドイツ交流協会	ドイツ	070-0037	旭川市7条通13丁目 株式会社北海道録画センター内	0166-25-2700
326	上川	旭川市	旭川デンマーク協会	デンマーク	070-8021	旭川市神居町忠和224 北海道東海大学内	0166-61-5111
327	上川	旭川市	旭川・日英協会	イギリス	070-0038	旭川市8条通6丁目 森山病院内	0166-22-4151
328	上川	旭川市	旭川日米協会	アメリカ	070-0031	旭川市1条通6丁目 増田クリニック内	0166-22-9600
329	上川	旭川市	旭川日口親善協会	ロシア	070-8348	旭川市東光8条8丁目6-11 渡辺様方	0166-31-1214
330	上川	旭川市	旭川日韓友好親善協会	韓国	070-8525	旭川市6条通9丁目 旭川市広報広報課内	0166-25-5370
331	上川	旭川市	旭川日本中国友好協会	中国	071-8144	旭川市春光台4条4丁目6-4 江口様方	0166-53-1152
332	上川	旭川市	旭川ハルビン友好協会	中国	070-8525	旭川市6条通10丁目 市第3庁舎旭川市国際交流課内	0166-25-7491
333	上川	旭川市	旭川・ブルーミントン・ノーマル姉妹都市委員会	アメリカ	070-8525	旭川市6条通10丁目 市第3庁舎旭川市国際交流課内	0166-25-7491
334	上川	旭川市	旭川北方圏懇話会	北欧・北米	070-8525	旭川市6条通10丁目 市第3庁舎旭川市国際交流課内	0166-25-7491
335	上川	旭川市	インターナショナル・ディ・イン旭川実行委員会	全般	070-0901	旭川市花咲町1丁目 梶間小動物病院内	0166-51-4330
336	上川	旭川市	北・北海道フィンランド協会	フィンランド	070-8001	旭川市神楽1条10丁目 上山建設(株)内	0166-61-3889
337	上川	旭川市	言語交流研究所旭川支部	全般	078-8237	旭川市豊岡7条4丁目4-17-601 川崎様方	0166-35-3066
338	上川	旭川市	日本朝鮮連帯旭川市民委員会	北朝鮮	070-8043	旭川市忠和3条5丁目 大河内様方	0166-62-0080
339	上川	旭川市	日本・ニュージーランド友好協会	ニュージーランド	071-8138	旭川市末広8条1丁目 旭川実業高校内	0166-51-1246
340	上川	旭川市	日本ベラルーシ市民友好協会	ベラルーシ	079-7414	旭川市永山4条20丁目 天寧寺様方	0166-48-1034
341	上川	旭川市	日本ユーラシア協会旭川支部	ヨーロッパ・アジア	078-8354	旭川市東光14条2丁目 成田様方	0166-32-7063
342	上川	旭川市	フィリピン耳の里親の会	フィリピン	070-0825	旭川市北門町19丁目2155-165 秋葉様方	0166-55-9654
343	上川	旭川市	北海道日中友好手をつなぐ会	中国	071-8131	旭川市末広1条6丁目6-16 秋葉様方	0166-53-5181
344	上川	士別市	士別国際交流協会	オーストラリア	095-0021	士別市西1条6丁目 阿部新聞店内 阿部様方	01652-3-1191
345	上川	士別市	士別北方圏交流協会	オーストラリア	095-0029	士別市大通西4丁目 岡田商店内 岡田様方	01652-3-3131
346	上川	士別市	ライオンズクラブ331-B地区キャビネット事務局	オーストラリア	095-0029	士別市大通西1丁目 士別プリンスホテル内	01652-3-1000
347	上川	士別市(旧朝日町)	朝日町国際交流会		095-0401	士別市朝日町字中央7335番地 穴田一男様方	016528-3253
348	上川	名寄市	イリマニの会	ボリビア	096-0013	名寄市西三条南4丁目 名寄カトリック幼稚園内	01654-9-4291
349	上川	名寄市	名寄・ドリンスク友好委員会		096-8686	名寄市大通南1丁目 名寄市役所内	01654-3-2111

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地		電話番号
350	上川	名寄市	名寄日韓友好親善協会	韓国	096-0011	名寄市西1南3	相澤吉雄様方	01654-3-3368
351	上川	名寄市	名寄・リンゼイ姉妹都市友好委員会		096-8686	名寄市大通南1丁目	名寄市役所内	01654-3-2111
352	上川	名寄市	日本日中友好協会名寄支部	中国	096-8686	名寄市大通南1丁目	名寄市役所内	01654-3-2111
353	上川	鷹栖町	鷹栖国際交流協会「鷹の翼」		071-1201	鷹栖町南1条3丁目5-1	鷹栖町役場内	0166-87-2111
354	上川	東神楽町	東神楽町青年婦人国際交流センター	全般	071-1593	東神楽町北1条東1丁目	東神楽町農業協同組合管理課内	0166-83-2321
355	上川	当麻町	当麻国際交流協会	全般	078-1393	当麻町3条東2丁目11-1	当麻町企画商工課内	0166-84-2111
356	上川	上川町	上川町姉妹友好協会	カナダ	078-1743	上川町花園町	上川町商工会内	01658-2-3111
357	上川	東川町	東川町国際文化交流協会		071-1425	東川町西町3丁目12-19		0166-82-3571
358	上川	美瑛町	美瑛町国際交流友好協会（BFA）	全般	071-0209	美瑛町寿町2丁目3-13	美瑛町教育委員会内	0166-92-4142
359	上川	和寒町	和寒町国際交流の会		098-0133	和寒町字北町61	和寒町教育委員会内	016532-2477
360	上川	剣淵町	剣淵町国際交流の会		098-0303	剣淵町第3区		016534-2126
361	上川	下川町	下川国際交流の会		098-1206	下川町共栄町239番地	日野昭雄様方	01655-4-2511
362	留萌	留萌市	日本ユーラシア協会留萌支部	ロシア	077-8601	留萌市幸町1-11	留萌市役所内	0164-42-1801
363	留萌	留萌市	留萌市国際交流協会	ロシア・サハリン州	077-8601	留萌市幸町1-11	留萌市役所内	0164-42-1801
364	留萌	留萌市	留萌日中友好協会	中国	077-0037	留萌市沖見町5丁目	野崎様方	0164-42-6231
365	留萌	苫前町	苫前国際交流サークル「ハートツウハート」	ロシア	078-3792	苫前町字旭37-1	苫前町役場内	01646-4-2211
366	留萌	遠別町	遠別・キャッスルガー国際交流協会	カナダ	098-3543	遠別町字本町3丁目	遠別町役場内	01632-7-2111
367	留萌	天塩町	天塩町姉妹都市交流促進協会	アメリカ	098-3398	天塩町新栄通8丁目	天塩町役場内	01632-2-1001
368	留萌	羽幌町	羽幌国際交流協会	韓国	078-4123	羽幌町栄町93	小川様方	01646-2-4461
369	宗谷	稚内市	稚内国際文化交流協議会	サハリン	097-8686	稚内市中央3丁目13-15	稚内市サハリン課内	0162-23-6161
370	宗谷	稚内市	稚内地区国際安全対策連絡協議会	全般	097-0005	稚内市大黒1丁目6-48	稚内警察署内	0162-24-0110
371	宗谷	稚内市	稚内日口経済交流協会	サハリン	097-0001	稚内市末広町3丁目4-5	稚内市日口友好会館内	0162-23-4913
372	宗谷	猿払村	猿払村国際交流協会	ロシア	098-6292	猿払村鬼志別西町172	猿払村役場総務課内	01635-2-3131
373	宗谷	猿払村	北斗国際交流事業協同組合	中国	098-6231	猿払村鬼志別東町1		01635-2-2350
374	宗谷	中頓別町	中頓別町国際交流協会	サハリン	098-5595	中頓別町字中頓別182	中頓別町役場総務課内	01634-6-1111
375	網走	北見市	(社)ガールスカウト日本連盟北海道支部第33団	全般	090-0803	北見市朝日町19-5	赤塚様方	0157-22-1839
376	網走	北見市	北見エリザベス会	アメリカ	090-0020	北見市大通東2丁目	山下金物店(株)内	0157-23-7731
377	網走	北見市	北見国際交流の集い実行委員会	全般	099-0878	北見市東相内町250	高屋敷様方	0157-36-3221
378	網走	北見市	北見市国際技術協力推進会議	全般	090-8501	北見市北5条東2丁目	北見市企画部内	0157-25-1103
379	網走	北見市	北見市国際親善交流委員会	全般	090-8501	北見市北5条東2丁目	北見市企画部内	0157-25-1103
380	網走	北見市	北見市青少年国際交流事業実施委員会	全般	090-0024	北見市北4条東4丁目	北見市役所青少年課内	0157-25-1124
381	網走	北見市	北見市ポロナイスク研究会	ロシア・サハリン州ポロナイスク市	090-0057	北見市若葉2丁目	白川様方	0157-36-6141
382	網走	北見市	北見商工会議所	全般	090-8501	北見市北3条東1丁目		0157-23-4111
383	網走	北見市	(社)北見青年会議所	全般	090-0065	北見市寿町3-1-19		0157-24-5368
384	網走	北見市	北見日独協会	ドイツ	090-0045	北見市北5条西7丁目	五十嵐建設(株)内	0157-24-5145
385	網走	北見市	北見日口親善協会	ロシア	090-0019	北見市三楽町103	金子様方	0157-24-5368
386	網走	北見市	北見日韓親善協会	韓国	090-0015	北見市公園町1-33	ドリーム橋梁内	0157-22-6288
387	網走	北見市	北見ヘルー友の会	ヘルー	090-0807	北見市川東314-16	瀬野様方	0157-25-2328
388	網走	北見市	北見ミント交流	全般	090-0063	北見市清見町16	菊池様方	0157-25-9010
389	網走	北見市	北見モンゴル友好協会	モンゴル	099-0878	北見市東相内町250	高屋敷様方	0157-36-3221
390	網走	北見市	北見ユネスコ協会	全般	090-0817	北見市常盤町2丁目3-27	益村様方	0157-25-2986
391	網走	北見市	北見ライオンズクラブ	全般	090-0024	北見市4条東4丁目	伊藤ビル 3階	0157-23-4798
392	網走	北見市	北見白樺ライオンズクラブ	全般	090-0833	北見市とん田東町634-52		0157-22-3445
393	網走	北見市	北見中央ライオンズクラブ	全般	090-0058	北見市高栄西町1丁目12-35		0157-22-3173

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
394	網走	北見市	北見ロータリークラブ	全般	090-0045	北見市北5条西2丁目 ナシオビル ロータリークラブ事務所内	0157-25-2824
395	網走	北見市	北見西ロータリークラブ	全般	090-0045	北見市北5条西2丁目 ナシオビル ロータリークラブ事務所内	0157-25-2824
396	網走	北見市	北見東ロータリークラブ	全般	090-0045	北見市北5条西2丁目 ナシオビル ロータリークラブ事務所内	0157-25-2824
397	網走	北見市	北見YMCA	全般	090-0045	北見市朝日町37	0157-24-6739
398	網走	北見市	北見ワイズメンクラブ	全般	090-0803	北見市朝日町37	北見YMCA 0157-24-6739
399	網走	北見市	北見草の根会	全般	090-0063	北見市清見町16	菊池様方 0157-25-9010
400	網走	北見市	北見日中友好協会	中国	090-0036	北見市幸町3丁目1番6号	島田様方 0157-24-1541
401	網走	北見市	多言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ北見	全般	090-0064	北見市美芳町6-3-1	石川様方 0157-25-0387
402	網走	北見市	国際ソープチミスト北見	全般	090-0833	北見市とん田東町484-1	辻様方 0157-25-6677
403	網走	北見市	国際ソープチミスト北見みんと	全般	090-0818	北見市北7条東4丁目1	後藤田様方 0157-24-3679
404	網走	北見市	青年海外協力隊北海道OB会 オホーツク支部	全般	090-0805	北見市清月町76-66	佐藤様方 0157-23-7031
405	網走	北見市	日本ボーイスカウト北見第2団	全般	090-0022	北見市北2条東7丁目	北見さくら幼稚園内 0157-23-5414
406	網走	北見市	北泰少数民族支援団	東南アジア	090-0015	北見市公園町1-33	ドリーム橋梁内 0157-22-6288
407	網走	北見市	ランタン基金の会	ネパール	099-0871	北見市相内101-40	西村様方 0157-37-2256
408	網走	北見市	助AFS日本協会オホーツク支部	全般	090-0061	北見市東陵町30-52	越膳様方 0157-24-2529
409	網走	網走市	網走市日中友好促進協議会	中国	093-0042	網走市潮見8丁目8-1	阿部様方 0152-43-4412
410	網走	網走市	網走・ポータルバーニ姉妹都市交流協会	カナダ	093-8555	網走市南6条東4丁目	網走市役所企画調整課内 0152-44-6111
411	網走	網走市	網走北方圏交流協会	フィンランド	093-0041	網走市桂町2丁目8-4	大矢様方 0152-44-7472
412	網走	網走市	網走国際交流協同組合	中国	099-3111	網走市字藻琴163	佐々木様方 0152-46-2447
413	網走	紋別市	紋別オホーツクライオンズクラブ	全般	094-0011	紋別市港町5丁目3-15	01582-3-7211
414	網走	紋別市	国際ソープチミスト紋別	全般	094-0005	紋別市幸町3丁目	河原様方 01582-4-5751
415	網走	紋別市	日本ユーラシア協会紋別支部	ロシア	094-0011	紋別市港町6丁目5-2	紋別漁業協同組合内 01582-4-2131
416	網走	紋別市	紋別市国際交流委員会	アメリカ・ロシア	094-0004	紋別市本町4丁目	紋別商工会議所内 01582-3-1711
417	網走	紋別市	紋別ライオンズクラブ	全般	094-0011	紋別市港町5丁目3-15	01582-4-7157
418	網走	紋別市	紋別ロータリークラブ	全般	094-0004	紋別市本町4丁目	紋別商工会議所内 01582-3-3128
419	網走	紋別市	紋別港ロータリークラブ	全般	094-0004	紋別市本町4丁目	紋別商工会議所内 01582-3-3128
420	網走	紋別市	北方圏国際シンポジウム実行委員会	全般	094-0023	紋別市海洋公園1番地	海洋交流館内 01582-6-2810
421	網走	女満別町	女満別町国際交流推進協議会	全般	099-2356	女満別町字昭和83	郷右近様方 01527-4-3991
422	網走	美幌町	国際ソープチミスト美幌	全般	092-0012	美幌町字栄町2丁目	浦部美千子会長様方 01527-3-2255
423	網走	美幌町	美幌国際交流推進委員会	全般	092-0051	美幌町字東1条北1丁目	タイセイ電器株内 01527-3-3216
424	網走	美幌町	美幌サハリン友好協会	ロシア	092-0031	美幌町字大通南1丁目	藤田様方 01527-3-3577
425	網走	美幌町	(社)美幌青年会議所	全般	092-0051	美幌町字東1条北3丁目	NTTビル内 01527-3-0969
426	網走	美幌町	美幌日中友好促進協議会	中国	092-0004	美幌町字仲町1丁目	前田様方 01527-3-3270
427	網走	美幌町	美幌ニュージーランド友好協会	ニュージーランド	092-0031	美幌町大通南1丁目	大西燃料店(有)内 01527-3-2509
428	網走	美幌町	美幌ライオンズクラブ	全般	092-0050	美幌町字大通北2丁目11-2	事務局 01527-2-3868
429	網走	美幌町	美幌ロータリークラブ	全般	092-0004	美幌町字仲町1丁目44	美幌経済センター内 01527-3-5101
430	網走	斜里町	斜里町国際交流協会	全般	099-4113	斜里町本町38-13	森元様方 01522-3-2602
431	網走	斜里町	斜里町日中友好親睦会	中国	099-4113	斜里町本町16-4	室本様方 01522-3-2554
432	網走	斜里町	斜里町ロシア極東地域との交流を進める会	ロシア	099-4113	斜里町本町12	斜里町役場内 01522-3-3131
433	網走	斜里町	チェルノブイリへのかけはし 斜里実行委員会	ウクライナ	099-4117	斜里町青葉町49-4	土田様方 01522-3-3821
434	網走	小清水町	小清水町国際交流協会	全般	099-3613	小清水町字神浦	馬淵様方 0152-62-4341
435	網走	清里町	清里町国際交流推進協議会	全般	099-4492	清里町羽衣町13	清里町役場内 01522-5-2131
436	網走	端野町	端野町国際交流広場	全般	099-2192	端野町字二区471-1	端野町役場内 0157-56-2111
437	網走	訓子府町	イリマニの会	ボリビア	099-1425	訓子府町若葉町101-1	0157-47-3382

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
438	網走	佐呂間町	国際民間援護協議会メコン基金	アジア	093-0423	佐呂間町字浜佐呂間418 メコン基金本部	01587-6-2425
439	網走	佐呂間町	佐呂間町姉妹都市国際交流委員会	アメリカ	093-0592	佐呂間町字永代3-1 佐呂間町役場内	01587-2-1214
440	網走	佐呂間町	SICEA (シセア)	全般	093-0506	佐呂間町字宮前町161-2	01587-2-2321
441	網走	常呂町	常呂町国際交流会 (休会中)	全般	093-0292	常呂町字常呂323 常呂町役場内	0152-54-2111
442	網走	遠軽町	遠軽町国際交流の会	全般	099-0414	遠軽町南町2丁目3-6 松橋様方	01584-2-6167
443	網走	遠軽町 (旧丸瀬布町)	オホーツク国際交流センター	全般	099-0203	遠軽町丸瀬布中町115-2 遠軽町丸瀬布総合支所内	01584-7-2211
444	網走	遠軽町 (旧丸瀬布町)	丸瀬布町国際交流実行委員会	全般	099-0203	遠軽町丸瀬布中町115-2 遠軽町丸瀬布総合支所内	01584-7-2211
445	網走	遠軽町 (旧白滝村)	白滝村国際交流後援会	全般	099-0111	遠軽町白滝138-1 遠軽町白滝総合支所内	01584-8-2211
446	網走	湧別町	湧別町国際交流センター	全般	099-6404	湧別町栄町 湧別町文化センター内	01586-5-3132
447	網走	湧別町	湧別町国際交流推進委員会	全般	099-6404	湧別町栄町112-1 湧別町役場内	01586-5-2211
448	網走	湧別町	ニュージーランドの会	ニュージーランド	099-6415	湧別町字川西 会長 友沢勇司様方	01586-5-3586
449	網走	上湧別町	ホワイトコートとの交流を支援する会	カナダ	099-6592	上湧別町字屯田市街地 上湧別町役場内	01586-2-2111
450	網走	興部町	興部町国際交流協会	カナダ	098-1692	興部町旭町 興部町役場内	01588-2-2131
451	胆振	室蘭市	室蘭国際交流センター	全般	050-0076	室蘭市知利別町3丁目16-13 宇佐見様方	0143-43-4314
452	胆振	室蘭市	室蘭市国際交流推進協議会	全般	050-0082	室蘭市寿町1丁目10-11 東サービスセンター2階	0143-43-9092
453	胆振	苫小牧市	国際ソープチミスト苫小牧	全般	053-0807	苫小牧市青葉町2丁目13-14 寺師様方	0144-73-9668
454	胆振	苫小牧市	苫小牧キリスト教船員奉仕会	全般	053-0045	苫小牧市双葉町2丁目10-12 シーフェアラーズセンター内	0144-34-8890
455	胆振	苫小牧市	とまこまい国際交流センター	全般	053-0811	苫小牧市光洋町1丁目5-17 和幸建設(株)内	0144-72-2641
456	胆振	苫小牧市	日本外交協会苫小牧支部	全般	053-0021	苫小牧市若草町4-1-1 岩倉博文事務所内	0144-35-5115
457	胆振	苫小牧市	苫小牧ユネスコ協会	全般	053-8722	苫小牧市旭町4丁目5-6 苫小牧市役所教育委員会内	0144-32-6111
458	胆振	苫小牧市	苫小牧日中友好促進協会	中国	053-0021	苫小牧市若草町3丁目1-8 苫小牧民報社内	0144-32-5311
459	胆振	苫小牧市	苫小牧ネパール協会	ネパール	053-0853	苫小牧市花園町3丁目3-1 (株)尾崎測量設計事務所内 尾崎様方	0144-72-5959
460	胆振	苫小牧市	苫小牧ニュージーランド協会	ニュージーランド	053-0022	苫小牧市表町1丁目1-13 経済センタービル 6階	0144-34-3627
461	胆振	苫小牧市	苫小牧ロータリークラブ	全般	053-0022	苫小牧市表町1丁目1-13 経済センタービル 6階	0144-36-2688
462	胆振	苫小牧市	苫小牧北ロータリークラブ	全般	053-0006	苫小牧市新中野町3丁目1-12 川端ビル 1階	0144-33-0112
463	胆振	苫小牧市	苫小牧東ロータリークラブ	全般	053-0006	苫小牧市新中野町3丁目1-12 川端ビル 1階	0144-35-3344
464	胆振	苫小牧市	日本ユーラシア協会北海道連合会 苫小牧支部	ユーラシア地域	053-0006	苫小牧市新中野町1丁目12-20 浦澤様方	0144-32-8676
465	胆振	登別市	のぼりべつ国際交流会	全般	059-0464	登別市登別東町2-19-2 山口様方	0143-83-1540
466	胆振	登別市	登別デンマーク協会	デンマーク	059-0012	登別市中央1丁目10-8 (株)山崎建設内	0143-85-5551
467	胆振	登別市	登別日本中国友好協会	中国	059-0016	登別市片倉町4丁目11-3 佐々木様方	0143-85-3146
468	胆振	伊達市	伊達国際交流協会	アメリカモンタ ナ州ミズーラ市	052-0025	伊達市網代町24 (社)伊達青年会議所内	0142-23-4053
469	胆振	虻田町	虻田町国際交流の会	全般	049-5603	虻田町字入江257-101 大久保様方	0142-76-3643
470	胆振	洞爺村	洞爺村国際交流協会	イギリス	049-5802	洞爺村字洞爺町132	0142-82-5221
471	胆振	大滝村	大滝国際フレンドシップ・クラブ	カナダ・ブリティッシュコ ンビア州レイカワチン町	052-0311	大滝村字本郷84-1 大滝村教育委員会内	0142-68-9333
472	胆振	壮瞥町	キーツクラブ	フィンランド	052-0101	壮瞥町字滝之町245 壮瞥町教育委員会内	0142-66-2131
473	胆振	白老町	白老町国際交流グループ 「SINCE'98」	カナダ	059-0906	白老町本町1丁目7-5 しらおい創造空間「蔵」内	0144-85-3101
474	胆振	白老町	白老町姉妹都市協会	カナダ	059-0906	白老町本町1丁目7-5 しらおい創造空間「蔵」内	0144-85-3101
475	胆振	白老町	NPO法人 しらおい創造空間「蔵」	カナダ	059-0906	白老町本町1丁目7-5	0144-85-3101
476	胆振	早来町	早来町地域間交流協会	全般	059-1502	早来町字北進102-4 早来町教育委員会事務局内	0145-22-3224
477	胆振	厚真町	厚真町国際交流協会	全般	059-1692	厚真町京町120 厚真町役場企画調整課内	0145-27-2321
478	胆振	鶴川町	鶴川町国際交流推進協会	全般	054-8660	鶴川町美幸町2丁目88 鶴川町役場内	01454-2-2411
479	胆振	追分町	追分町国際交流センター	全般	059-1971	追分町緑が丘200-2 追分町教育委員会事務局内	0145-25-2083
480	日高	静内町	静内インターナショナルクラブ	アメリカ	056-0144	静内町字田原666-4 新和牧場	01464-6-2121
481	日高	静内町	静内ライオンズクラブ	全般	056-0025	静内町木場町1-2-28	01464-2-0678

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地	電話番号
482	日高	静内町	静内ロータリークラブ	全般	056-0017	静内町御幸町2-1-9	01464-3-2481
483	日高	静内町	国際ソロプチミスト静内	全般	056-0027	静内町駒場6-35	パブリックマシーンイケダ 01464-2-2378
484	日高	浦河町	浦河国際交流クラブ	イギリス	057-8511	浦河町築地1丁目3-1	浦河町役場教育委員会内 01462-2-2311
485	十勝	帯広市	帯広市国際親善交流市民の会	全般	080-8670	帯広市西5条南7丁目	帯広市役所国際交流課内 0155-24-4111
486	十勝	帯広市	帯広市中国朝陽市農業交流協議会	中国	080-8670	帯広市西5条南7丁目1	帯広市役所国際交流課内 0155-24-4111
487	十勝	帯広市	(社)帯広青年会議所	全般	080-0013	帯広市西3条南9丁目	帯広経済センター内 0155-24-6255
488	十勝	帯広市	帯広ユネスコ協会	全般	080-0028	帯広市西18条南2丁目11-136	0155-33-3981
489	十勝	帯広市	帯広ラテンアメリカ協会	全般	080-0026	帯広市西16条南6丁目	ランチョエルパソ内 0155-34-3418
490	十勝	帯広市	帯広YMCA	全般	080-0847	帯広市公園東町4丁目4-3	0155-27-1703
491	十勝	帯広市	言語交流研究所 ヒップファミリー クラブ・帯広支部	全般	080-0855	帯広市南町東5条6丁目30番地	(有)熊切設備工業所内 熊切加代様方 0155-48-6677
492	十勝	帯広市	(独)国際協力機構 帯広国際センター	開発途上国 全般	080-2470	帯広市西20条南6丁目1-2	0155-35-1210
493	十勝	帯広市	国際ソロプチミスト帯広	全般	080-0802	帯広市東2条西4丁目8	板倉恵子様方 0155-23-7775
494	十勝	帯広市	国際ソロプチミスト帯広みどり	全般	080-0021	帯広市西11条南18丁目2-9	藤本様方 0155-23-8552
495	十勝	帯広市	青年海外協力隊北海道道東OB会	全般	080-0802	帯広市西20条南6丁目1-2	北海道国際センター(帯広)内 0155-35-1210
496	十勝	帯広市	十勝インターナショナル協会	全般	080-2470	帯広市西20条南6丁目1-2	森の交流館・十勝内 0155-34-0122
497	十勝	帯広市	十勝日中友好協会	中国	080-0010	帯広市大通南21丁目14-2	東様方鍼灸 0155-24-8111
498	十勝	帯広市	日本ユーラシア協会帯広支部	全般	080-0027	帯広市西17条南3丁目4	太田様方 0155-36-4460
499	十勝	音更町	日中友好協会帯広支部	中国	080-0134	音更町宝来西町南2丁目6	坂本様方 0155-31-6263
500	十勝	音更町	北海道日中友好協会帯広支部	中国	080-0134	音更町宝来西町南2丁目6	坂本様方 0155-31-6263
501	十勝	音更町	十勝国際ネットワーク研究会	全般	080-0316	音更町緑陽台北区10-12	横谷優一様方 0155-31-0639
502	十勝	上士幌町	海外研修ネットワーク「みらい」	全般	080-1408	上士幌町字上士幌東3線238	上士幌町役場内 01564-2-2111
503	十勝	上士幌町	スレイブレイク訪問団を歓迎する会	カナダ	080-1408	上士幌町字上士幌東3線238	上士幌町役場企画課内 01564-2-2111
504	十勝	鹿追町	鹿追町国際交流協会	全般	081-0223	鹿追町南町2丁目26	01566-6-2330
505	十勝	鹿追町	鹿追町国際交流協議会	カナダ	081-0292	鹿追町東町1丁目15-1	鹿追町役場内 01566-6-2311
506	十勝	清水町	清水町国際交流協会	アメリカ	089-0127	清水町南2条西6丁目16	岩崎様方 01566-2-4382
507	十勝	芽室町	芽室町国際交流協会	アメリカカリフォルニア州トレシー市	082-0060	芽室町本通南4丁目1番地9	会長 唯野義勝 0155-62-3392
508	十勝	広尾町	広尾町北方圏交流振興会	ノルウェー	089-2692	広尾町西4条7丁目1	広尾町役場水産観光課内 01558-2-0177
509	十勝	幕別町	幕別町国際交流協会	全般	089-0614	幕別町緑町10-33	菅様方 0155-54-3838
510	十勝	幕別町	NPO法人 国際パークゴルフ協会	全般	089-0616	幕別町宝町53-1	NPO法人 国際パークゴルフ協会 0155-54-2260
511	十勝	池田町	池田語学ボランティアの会	カナダ	083-8650	池田町西1条7丁目	池田町役場内(藤原知樹様方) 01557-2-3111
512	十勝	池田町	池田町国際交流協議会	カナダ	083-8650	池田町西1条7丁目	池田町役場内 01557-2-3111
513	十勝	池田町	池田町ペンディングトン会	カナダ	083-0021	池田町大通1丁目3-5	池田町商工会内 01557-2-2135
514	十勝	豊頃町	豊頃町交流協議会	カナダ サマーランド市	089-5312	豊頃町茂岩本町125	豊頃町役場内 01557-4-2211
515	十勝	本別町	本別町国際交流協会	オーストラリア	089-3392	本別町北2丁目4-1	本別町役場内 01562-2-2141
516	十勝	足寄町	足寄町国際交流友の会	カナダ	089-3797	足寄町北1条4丁目37	足寄町役場内 01562-5-2141
517	十勝	陸別町	陸別町国際交流市民の会	カナダ	089-4311	陸別町東1条3丁目1	陸別町役場総務課内 01562-7-2141
518	釧路	釧路市	釧路かささぎの会	韓国	085-0814	釧路市緑ヶ岡1-10-42	釧路短期大学内 0154-41-0131
519	釧路	釧路市	釧路カムチャッカ研究会	ロシア	085-0042	釧路市若草町3-1	藤田印刷(株)内 0154-22-1175
520	釧路	釧路市	釧路国際ウェットランドセンター	全般	085-8505	釧路市黒金町7-5	釧路市環境部環境政策課自然保護担当 0154-23-5151
521	釧路	釧路市	釧路国際交流協会	全般	085-0847	釧路市大町1-1-1	釧路青年会議所内 0154-42-1121
522	釧路	釧路市	釧路国際交流ボランティアの会	全般	085-0017	釧路市幸町3-3	釧路市観光国際交流センター 0154-31-4503
523	釧路	釧路市	釧路国民外交協会	全般	085-0024	釧路市浜町3-15	(株)矢崎トレーディング内 0154-23-5364
524	釧路	釧路市	釧路市日口親善協会	ロシア	085-0016	釧路市錦町2-4	釧路機船漁協内 0154-25-3411
525	釧路	釧路市	釧路ゾンタクラブ	全般	084-0906	釧路市鳥取大通5-2-5	佐藤様方 0154-51-5557

番号	支庁	市町村名	団体名	主な交流先	郵便番号	所在地		電話番号
526	釧路	釧路市	釧路日韓友好親善協会	韓国	085-0013	釧路市栄町4-1	民団釧路支部内	0154-25-4757
527	釧路	釧路市	釧路日中友好協会	中華人民共和国	085-0036	釧路市若竹町5-25	高橋様方	
528	釧路	釧路市	釧路ライオンズクラブ	全般	085-0017	釧路市幸町7-1	釧路プリンスホテル内	0154-31-1111
529	釧路	釧路町	釧路湿原ライオンズクラブ	全般	088-0626	釧路町桂1-4-1		0154-37-4166
530	釧路	釧路市	釧路丹頂ライオンズクラブ	全般	085-0013	釧路市栄町7-2	産光ビル2階	0154-31-0205
531	釧路	釧路市	釧路ぬさまいライオンズクラブ	全般	085-0013	釧路市栄町7-2	産光ビル2階	0154-24-3311
532	釧路	釧路市	釧路まりもライオンズクラブ	全般	085-0013	釧路市栄町7-2	産光ビル2階	0154-23-1906
533	釧路	釧路市	釧路みなとライオンズクラブ	全般	085-0013	釧路市栄町7-2	産光ビル2階	0154-31-3710
534	釧路	釧路市	釧路ロータリークラブ	全般	085-0013	釧路市栄町2-6	釧路パシフィックホテル内	0154-24-3811
535	釧路	釧路市	釧路北ロータリークラブ	全般	085-0046	釧路市新橋大通1-2-20	農協ビル2階	0154-23-6175
536	釧路	釧路市	釧路東ロータリークラブ	全般	085-0805	釧路市桜ヶ丘3-1	ヒルトップ内	0154-91-6852
537	釧路	釧路市	釧路南ロータリークラブ	全般	085-0046	釧路市新橋大通1-2-20		0154-23-6575
538	釧路	釧路市	国際ソープチミスト釧路	全般	085-0036	釧路市若竹町14-5	加勢内科医院内	0154-22-8281
539	釧路	釧路市	国際ソープチミスト釧路アミティ	全般	085-0842	釧路市米町3-2-10	福田様方	0154-41-3389
540	釧路	釧路市	在日本大韓国民団 北海道地方釧路支部	韓国	085-0013	釧路市栄町4-1		0154-25-4757
541	釧路	釧路市	在日本朝鮮人総連合釧路支部	韓国	085-0004	釧路市新富町9-13		0154-23-7264
542	釧路	釧路市	チェルノブイリ救援／釧路	ロシア	085-0832	釧路市千歳町10-36	渡辺様方	0154-41-8399
543	釧路	釧路市	日本・エストニア友好協会	エストニア	085-0046	釧路市新橋大通6-1-5	中村歯科内	0154-23-8036
544	釧路	釧路市	日本中国友好協会釧路支部	中華人民共和国	085-0806	釧路市武佐3-29-8	赤坂様方	
545	釧路	釧路市	日本ユーラシア協会・釧路支部	ロシア	085-0832	釧路市富士見2-1-35	釧路ハリスト正教会	0154-41-6857
546	釧路	釧路市	東北海道日口友好貿易協会	ロシア	085-0847	釧路市大町1-1-11	グリーンショップ内	0154-42-9677
547	釧路	釧路市	北海道教育大学釧路校 国際交流委員会	全般	085-0826	釧路市城山1-15		0154-44-3229
548	釧路	釧路市	ミャンマー臨床歯学協議会	ミャンマー	085-0016	釧路市錦町5-3三ツ輪ビル4F	想歯会武藤歯科診療室内	0154-22-3635
549	釧路	厚岸町	アイリス	オーストラリア	088-1118	厚岸町若竹町4-48	西村様方	0153-52-4364
550	釧路	厚岸町	ホストファミリーの会	オーストラリア	088-1118	厚岸町若竹町3-6		0153-52-2719
551	釧路	標茶町	塘路口琴研究会「あそう会」	ロシア	088-2261	標茶町塘路		01548-7-2332
552	釧路	標茶町	弥栄地域振興会	中華人民共和国	088-2300	標茶町弥栄		01548-5-1298
553	釧路	弟子屈町	川湯ライオンズクラブ	全般	088-3461	弟子屈町字跡左登原野68-87-5	宮崎様方	01548-3-2603
554	釧路	弟子屈町	国際ソープチミスト摩周	全般	088-3211	弟子屈町中央1-9-2	合田様方	01548-2-2202
555	釧路	弟子屈町	弟子屈ロータリークラブ	全般	088-3204	弟子屈町朝日1-5-2	小野様方	01548-2-2283
556	根室	根室市	根室市姉妹都市提携市民会議	全般	087-8711	根室市常盤町2-27	根室市総務課内	0153-23-6111
557	根室	根室市	根室市日口友好親善協会	ロシア	087-8711	根室市常盤町2-27	根室市役所北方領土対策室内	0153-23-6111
558	根室	根室市	根室日口親善協会	ロシア	087-0041	根室市常盤町2-24	連合北海道根室地域協議会内	0153-23-2702
559	根室	根室市	ブージェム・ドルウジャーミー	ロシア	087-0051	根室市緑町1-24	伊澤様方	0153-23-2409
560	根室	中標津町	日中友好協会中標津支部	中国	086-1055	中標津町東15条北4丁目	殿守様方	01537-2-1122
561	根室	中標津町	中標津ライオンズクラブ	全般	086-1122	中標津町西2条北3丁目	中標津町職業訓練センター内	01537-2-0846
562	根室	標津町	メイブルクラブ	カナダ	086-1600	標津町南1条西5丁目1-24	標津町生涯学習センター内	01538-2-2900
563	根室	羅臼町	羅臼日口友好協会	ロシア	086-1893	羅臼町船見町2番地13		01537-7-2131

北海道知事政策部知事室国際課調べ（北海道の国際化の現状（平成17年）参照）

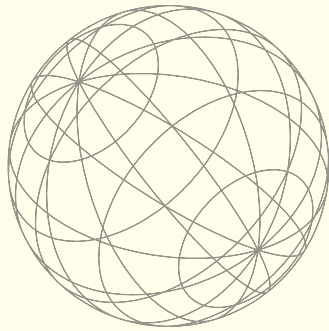
懸け橋　そして　未来へと

～北海道の国際交流・国際協力事例集～

2005年11月発行

発行・編集　**社団法人　北方圏センター**
〒060-0003　札幌市中央区北3条西7丁目（道庁別館12階）
TEL (011)221-7840　FAX (011)221-7845
<http://www.nrc.or.jp/>

印　刷　**岩橋印刷株式会社**



社団法人 北方圏センター